

踏み台だった野郎共の 後日談。

蒼井魚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

踏み台だった輝夫と武蔵。互いにヒロインを奪い合い、殺し合い、唾み合っていた二人だが、正統派オリ主の修一郎にヒロインの心をすべて奪われてから互いを許し合い、ルームシェアをする程の仲になり、温かい日常を育んでいた。そんな、踏み台だった野郎共がお送りする生暖かい日常である。

目次

12	11	10	09	08	07	06	05	04	03	02	01
：宴会	：釣り	：全滅	：後悔	：外出	：幸福	：対価	：家族	：日常	：お仕事	：麻雀	：友情
116	103	93	76	67	57	50	37	29	20	7	1

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
：好敵手	：遊技	：馬鹿	：急展開	：男色	：脱童貞	：監禁	：女子会	：誘拐	：お菓子	：砂遊び	：特典	：海
281	270	240	232	226	213	199	194	175	159	155	148	127

26	機動戦士	294
27	温泉	301
28	絶唱	315
29	マッスル	325
30	お姫様	331
31	優男	350
32	誕生日会	358
33	風邪	371
34	喫茶店	380
35	一日	387
36	ヤンデレ	399
37	G動物園	435
38	こたつ	443

39	絶対に笑ってはいけない(前編)	451
40	絶対に笑ってはいけない(中編)	476
2)		476
489	未定: リンフォース	499

01：友情

俺が負けを認めたのは目の前でダラダラとゲームをプレイしている奴より早かった。

今更、愛とか、恋心とかを高らかに語る気は一切しないが、まあ、悟るのが早かった。

自意識過剰という言葉が似合う行動ばかりしていたからな、後ろを振り返れば顔が真っ赤になるような出来事ばかりだ。自分の行いなんだけどね？

「あ、指先が滑った……」

「PS3のコントローラーは滑るからな、先端にガムテープを貼り付けると若干マシになるけど」

「てか、ダクソムズすぎ、心が碎けそうなんですけど」

「初心者はAC3から入れて言っただろ」

俺と武蔵の踏み台コンビは今日も一日ダラダラ過ごしている。

中学一年生になって、聖祥大附属から普通の市立の中学に入った。理由？ 私立の学校なんてかたっ苦しいだけじゃなか。

そして、ほとんど引き籠もりのテストの日くらいしか顔を出さない生活を楽しんでいる。もっぱら、やっていることはテレビゲームか麻雀、昔みたいに原作ヒロイン達とは

関わることはなく、一日一日を本当にダラダラと楽しんでいる。

「つか、このまま引き籠もり続けたら高校行けるのかね？」

「毎月三十万×2も金が入ってくるんだ、中卒でもいいだろ。死ぬまで振り込まれるわけだし」

「非課税だもんな」

「ああ、税金がかからないのはとても素晴らしい。税金なんて消え失せろってやつさ」

冷蔵庫から三本のアイスを取り出して二人に投げる。すると二人ともに綺麗にキヤツチし、袋を剥がしてペロペロとまだまだ糞寒い春先なのに冷たいアイスを食べ始める。

そんな俺も変人に片足突っ込んでるから普通にペロペロですわ！ ああ、暖房つけよっと……。

「つか、ヴィータ。おまえさあ、八神と喧嘩したからって俺達の家に転がり込むなよ」「いいだろ、美少女が隣りにいるだけで和むだろ」

「美少女は認めてやるけどさ、中学男子なんて性欲の塊だぞ？ 女の子が転がり込んでるのはどうかと思うよー犯罪の香りがするから」

エロ同人みたいに、エロ同人みたいに……これ、なんのネタだったっけ？

まあ、年頃の男女が同じ家にいるとかエロ同人展開ワクテカってやつだな、こいつに

興味は無いが！

「ああ、頭をかち割られるのが怖いんだな」

「一つ言うけどな、おまえなんて左腕一本で倒せるんだからな、男の子だから結構強いんだからな！」

「うっさい！　心が折れている人間の隣で喧嘩するなよ……頭が痛くなる……」

「そら、アイス食ってるからだろ」

三人で黙ってアイスを食っていると辛くも苦しい過去を思い出してしまふ。

愛、暴力、セックスを追い求めてこの世界に来た筈なのだが、手に入れたのは幼馴染のように馴れ馴れしい赤毛ロリとほんの数年前まで本気で殺し合っていたろくでなし。それ以外は霧になって消えてしまった。

まあ、俺としても現状は結構好ましい状況だと思う。二度目の人生、一度目とは違う生き方ってのも悪くない。俺と相棒は前世では結構働き者だったからさ？　今回は自堕落の極みを目指している。

「輝夫は頭が硬いんだよ、もうすこし頭を柔らかくして生きようぜ」

「固くもなるさ、ろくでなしと性格の悪い赤毛のアンを抱えてるのに……あ！　パチンコ大好きな『自称』超高性能ロボットも追加で」

「パチンコ大好き『自称』高性能ロボットはおまえが神様に頼んで入手したもんだらう

が」

「それは言わない約束だろうが、武蔵」

アイスの棒をゴミ箱に投げ捨て、ソファーに寝転がる。そして静かに精神を集中させる。

魔法の世界って便利だわ。だって着信拒否できない念話とかいう魔法があるんだぜ？ これでペットの躰もできるってもんだ。

「バル……早く帰ってこい……」

『スーパードラッグキー！ ヒヤッハー今日もファイバーでっせ!!』

「駄目だこりゃ」

「バルは今日もファイバーさせてるのか？ てか、あいつはよく勝てるよなー」

「中身が高性能だから、微妙な設定差だとか、釘の位置だとかを計算できるんだろ」

「パチンコってそんなに面白いのか？」

「ヴィータ、おまえはアイスだけを愛してくれ……あのバカロボットのようにならないでくれ……!」

ゲームに集中する武蔵、アイスをチビチビと食べているヴィータ、ソファーで疲れを癒やす俺。

なんか、物凄く充実しているような気がする。愛情だとか、恋愛だとかじゃなくて、友

情みたいな……温かいなにかがあるような気がするんだ……。

多分、疲れかな？ 体じゃなくて心の疲れ、気を張ってたつて自覚はある。

「あれ、なんで踏み台してたんだっけ？」

「輝夫、おまえは人間というものを重く考えすぎてるんだよ」

「重くって、どういう風に？」

武蔵はキャラクターを篝火に休ませて、語り始める。

その姿、まさしく古代ローマの哲学者！

「人間は二種類、男と女、亜種にオカマとオナベが存在する。だが、基本的には、まあ、

男と女だ」

「ああ」

「そして、その二つを見分ける方法は単純だ」

「どんな？」

武蔵は人差し指を見せつけて、

「指が入る穴が二つあったら男、三つあったら女。それが人間……それだけ……！」

「物凄く意味不明だが、物凄い説得力だ……」

「男と女は陰と陽、酸性とアルカリ性、水と油、対極であり磁石のように惹かれ合う存在。

だからこそ、求め合う。俺達は求め合いすぎたんだ。だからこそ！ こんな風にダラダ

ラと失恋を引き摺って……ほとんどニートのような生活を楽しんでいる……！　これが俺達が収まるべき鞘なんだ。鞘に入ったら安心しただろ？」

「物凄く意味不明だが、物凄く説得力だな……」

ヴィータまで武蔵の言葉を聞いて頷き始める。

まあ、確かに失恋を引きずってるのは確かだ。そして彼女達を傷つけた、そういう認識が頭の中にある。

「まあ、ルックスはそれなりなんだから、そのうち女が勝手に股を開いてくれるさ。まあ、金払えば開いてくれる女もいるけど」

「よし、デリヘル嬢を呼ぶか」

「二人呼ぼうか」

「おまえらさあ、一応はわたしは女なんだが……」

「……後日に我慢するか」

まあ、一度も呼んだこと無いんですけどね？

02：麻雀

オープニング

——今宵、戦ははじまる。

点棒を塗り合う凶悪な戦い。そして、敗者には信じられないくらいに無情な罰が待ち受けている。それを回避出来るのは神の加護を手に入れた人間のみ。さあ、法螺を吹け!!

「カン、もう一個カン、カン、カン、ツモ、四暗刻、四槓子、ダブル役満、四暗刻は単騎になつてるから、三倍役満やね!」

「残念だったな……その役満、待つただ——槍槓国士無双、役満だ」

「腐つたみかんは本当に容赦無いなく直撃に身を震わせる……」

「中二を発病するには、あと一歳たりないぜ……八神お嬢さん……!」

小狸はこの過酷な対局において最も危険な存在だ! 下手すると全員が吹き飛ばされる危険性がある……! だから、真つ先に潰す必要性がある。どんな手を使つても叩き潰す! この中身嶺上開花製造マシーンが!?

話は小一時間前に遡る。

朝七時目が覚めた。本来なら十時くらいに目が覚める筈なのだが、どうしてか今日に限ってこの時間に目覚めた。眠た眼を擦り、ベッドの外に出る。

カーテンを開いてみると酷く綺麗な青空が広がっていた。こんな天気の良い日は散歩をしようかな？　なんて、思えるくらい天気がよかった。

「さーて、ご主人はんが起きる前にホールに出発せんといけんなー、今日はCRとある少女の戦車道を打つでえ！　導入三日目やからまだまだ釘も甘々やろなあ〜」

リビングに降りるとルンルンとタブレット端末でパチンコ台の性能を吟味しているバルの姿があつた。

テーブルにはそれなりに膨れた財布も置かれている。こいつ……これで二ヶ月連続休み無しでパチンコ屋に通うつもりなのだろうか……。

「おい、バル、こんな朝っぱらから背広を着てどこに行くんだ？　今日は天下の日曜日だぞ」

「あれ？　ご主人はん……今日はえろろ早起きやね。健康的でよろしいな」

「財布を渡せ、その気色悪いアルゼブラ製の頭部パーツを破壊するぞ？」

「昆虫っぽいって人気なんやけど……」

バルは財布を胸に抱え、イヤイヤと身振り手振りで財布は渡さないぞと交戦の意志を

頭にする。

「おまえさあ、なんでそんなにパチンコ好きなの？ 君、機械でしょ、ロボットでしょ、アーマードコアでしょ、ネクストでしょ、なんでネクストがパチンコ打つのよ!!」

「ワイは傭兵や！ 命を賭け金にして戦い、報酬を得る職業……！ やから、毎日がギャンブル、カジノやったんや!! やけど、この世界に来てからは雑魚の小娘とご主人はんのお相手ばかり!? 全然楽しゅうない!!」

「おまえ、俺と戦って一度も勝ったことないだろ……」

「ある日、ワイは運命の出会いを果たすんや。暇で暇で堪らんかった昼下がり……ご主人はんは銀行からお金を下ろしてこいと言われた帰り道！ ワイはパチンコに出会うんや!!」

「つまり、悪戯半分でパチンコ屋に入ったんだな……」

「戦場に響いた銃声にも似た爆音が響き渡る店内、ワイは唾然としたんや！ そして、死の恐怖を感じながら——一台と運命の出会いを果たすんや!!」

「どの辺りに死の恐怖を感じるんですか？」

「川物語！ あの台があつたからこそ、ワイは傭兵の頃の緊張感と快楽を取り戻せんたんや!!」

「それさあ？ 死の緊張感じゃなくて、金が減るといふ緊張感だから。快楽は金が増え

るといふ射幸性だから。傭兵の緊張感と快楽とは別物だからね？ 相容れない存在だからね？」

バカロボットの演説を聞いていたら、ヴィータがダラダラとウサギの人形を抱きながらリビングに降りてきた。こいつは本当に居候だな……。

冷凍庫の中からアイスを一本とりだして、チロチロと小さな口で食べはじめた。妙にアイスの残弾が少ないと思ったら、こいつの仕業だったのか……早起きしてたんだな……。

意識朦朧なお目々が向けられて、

「あれ、なんで輝夫起きてるんだ？」

「珍しく目覚めが良いんだよ。あと、バルから財布を取り上げる必要がある」

「ワイの財布は絶対に渡さへんで!!」

「つか、バルは今日も懲りないでパチンコに行こうとしてるのかよ、大人として恥ずかしくないのか？ はやてが言ってたぞ、パチンコは人間をヒトモドキにする悪魔の機械だって」

「残念やけどな、ヴィータのお嬢ちゃん。ワイはロボットやからヒトモドキにはならへんで、だからパチンコをしてええんやで」

「すごい説得力だな、おい」

「同調するな、付け上がるだろ。この腐れネクストが……」

ジリジリとバルに接近し、財布を渡すように右手を差し出す。

「さあ、怖くない、怖くない、パチンコをしないことは怖くない」

「い、嫌や！　ワイはパチンコが無いと生きていけないのや!!」

「パチンコを絶対にするなどは言わん。だが、最低でも週三にしましょ?」

「週六！　休日に遊びでパチンコ!!」

「それを人は毎日パチンコに行くと言うんだよ!?　それにパチンコは仕事じゃない!!」

財布を奪おうと飛びかかろうとした瞬間にインターフォンの音が家の中に響いた。

チツ、こんな朝早くから宅配便とか……非常識だろ……。

「宅配便だろうな……どうせ武蔵がピンクグッズ買ったんだろ……」

「お客様なんやから！　はよ行かなアカンやろ?　さあ、はよ行きなはれ」

「逃げるなよ、逃げたらアセンをフラジールにするぞ」

「あのダサイ中華包丁みたいなコアは流石に無理やわ……」

バルを睨みつけて玄関の方向に向かう。

オープンザドア。扉を開けてみると狸、いや、小狸、あ、これも違って八神がどうも

と一つ声をかけてズカズカと家の中に入ってくる。

十中八九目的はヴィータだろう。

「ヴィータ、お家に帰るよ」

「え、嫌だよ。こつちの家の方が過ごしやすいし」

「それは自堕落な引き籠もりニート共と一緒にやからや。ニートは人間をダメにする。みかんは腐ったみかんを通じて腐っていくんよ？」

「おい、小狸、おまえ……酷くね……？」

金八先生も真つ青なレベルの暴言を吐きましたよ……！

この小狸が!? 普段温厚な俺でも腐ったミカンは流石にトサカにくるぞおい!!

この中身嶺上開花製造機! 槍槓してやろうか!?

「つか、バルはどこに消えたよ」

「あ、窓から逃げたぜ」

「フラジールになるよりパチンコかよ……」

溜息を吐き出して、ソファーに深々と座り込む。

自分のペットとは言えど毎日パチンコ三昧になってくるとノイローゼになってしま
いそうだ。

そのうち生ゴミ? いや、アイツは機械だから粗大ごみかね。性根が腐ってるから生
ゴミに分類されそうだが……。

「話が早くて助かる。女の子一人だけをむさ苦しい男二人の家に置くのはダメだから

な、連れて帰ってくれ」

「話が早い腐ったみかんやね♪」

「ヴィータ、おまえはうちの子だ。こんな小狸と一緒に居たら頭が固くなる。そうだ！

アイスを買いにスーパーまで散歩に出ようか」

「マジか!? ごめんはやて、わたしはこの家の子らしいんだ」

「はいはい、腐ったみかんの言うことを聞かない、聞かない」

「おまえさあ、なんで俺のことを腐ったみかんと称するの?」

「だって、ヴィータを腐らせる存在やから」

「……もうやだ、この子」

ヴィータは少し考えて、ピコリンと豆電球を頭上に光らせ、タタツと駆け足でどこかに向かつていった。

本当になんで他人の家の構造を知り尽くしているのですかね……?

「……お茶でもいかが?」

「わたしは紅茶、腐ったみかんはセンブリ茶やね」

「おまえさあ、その腐ったみかんってアダ名……絶対に気に入っただろ? 性格悪いな、

おい。てか、センブリ茶なんて置いてねえよ!」

仕方なく温かい紅茶と緑茶を用意する。ヴィータと武蔵は万年冷たい麦茶派だから、

起きたら渡せばいいか。

しばらく無言の早朝ティータイムを繰り広げていると麻雀牌を持ってきたヴィータがにこやかに戻ってくる。あとついでと言わんばかりにグツタリとした武蔵も絞首刑と表現できる姿で引きずられてきた。

「はやて、わたしは麻雀というゲームを覚えた」

「へーそうなんやー」

頬にもみじをこしらえた武蔵がソファアにぐでつと座る。

あと、何故か麻雀卓と麻雀牌が広げられた……何してるのこの子達……？

「はやて、単刀直入に言う！ わたしと麻雀で勝負だ!!」

「ええよ」

「もし、わたしが勝ったらもう少しこの家にいる」

「なら、わたしが勝ったら家に帰ってお尻ペンペンやね」

「いや、スゲー嫌な予感する……」

「ざわざわ……ざわざわ……」

俺と武蔵は小声で会議を開始する。

これは絶対に理不尽な暴力が雨あられするやつだよ……。

「おい、嶺上開花製造マシーンと闘牌とかこの咲ちゃんだよ……俺は和ちゃん推しだ」

「そうだよな、嶺上開花製造マシーンと闘牌とかどこの咲ちゃんだよな……あ！俺は優希ちゃん推しだ」

ヴィータと八神はもう卓に座って、四枚の字牌を中央に置いている。これ、俺達も参戦するパターンだわ。

「早く座れよ、あ、輝夫が負けたらハマグリのガソリン焼きな」

「北朝鮮名物かよ……」

「お姉ちゃんと違って影が薄い方の超弩級戦艦が負けたらセンブリ茶にデスソースをたんまりと」

「武蔵もけっこう活躍したんだぞ！ てか!? 超お苦えお茶に、超お辛えソースを入れてどうするんだよ……」

2

で、現在に至っている。

「武蔵、ルールは最初に三回ラスになった奴の負けだ。別にヴィータが帰ってしまったって構わんし、いても構わん。つまり、圧倒的に俺達に不利益なルールを提示されてしまった」

「それくらい馬鹿な俺だってわかるさ。なら、共闘するのが策、ヴィータと八神を全力で叩き潰すぞ」

言うなれば運命共同体。

互いに頼り、互いに底い合い、互いに助け合う。

一人が一人の為に、一人が一人の為に。

だからこそ戦場で生きられる。輝夫と武蔵はブラザー、輝夫と武蔵は家族。
嘘を言うなっ！

猜疑に歪んだ暗い瞳がせせら嗤う。

無能、怯懦、虚偽、杜撰、

どれ一つ取っても対局では命取りとなる。

それらを纏めて無謀で括る。

誰が仕組んだ地獄やら。

ブラザー家族が嗤わせる。

お前もっ！

お前もっ！

お前もっ！

だからこそ、

俺の為に死ねっ！

『すまないな、武蔵。俺はおまえがセンブリ茶&デスソースを飲み干す様を見たんだ

……』

『ハマグリのガソリン焼きってどんな味なんだろうか？ いや、絶対に食いたくない。だが、輝夫が食う姿は見たいな……』

さあ、全力の潰し合い、俺は武蔵の苦しむ姿をみるんだ！

「カン、もう一個カン、カン、カン、ツモ、四暗刻、四槓子、ダブル役満、四暗刻は単騎になつてるから、三倍役満やね！」

即座に山に仕込んだ国士無双を燕返しで作り出し、手配を倒す。

チッ！ どうにも西が無いと思つたら絶対的運命力で崩されたか!? こいつなんなんだよ!!

「残念だったな、その役満、待っただ——槍槓国士無双、役満だ」

「腐つたみかんは本当に容赦無いなく直撃に身を震わせろ……」

「中二を発病するには、あと一歳たりないぜ、八神お嬢さん」

武蔵と共に冷や汗を流す。こいつ、本物の嶺上開花製造マシンだ。信じられない。サイン貰おうかな？

つて!? ボケほ披露する場合じゃねえよ!! この状況は非常に悪い。天和よりヤバイ瞬間を間近で見せつけられたぞオイ!

「兄弟、こゝは共闘しよう。ハマグリのガソリン焼きはゴメンだ」

「センブリ茶&デスソースなんて、精神汚染してまうわ」

俺達は言葉通りに互いに互いを底い合い、助け合った。迫り来る八神はやての坎の連鎖、四槓子の恐怖、ドラ表示牌を捲る瞬間の息詰まる空気、もう二度と体験したくない！

そう、心の底から叫ばせる恐怖。俺達は震えた。

そして、死を覚悟した。

——だが、勝利した!!

「ロン……大車輪。八神、おまえの負けだな」

俺達は辛い勝利を手に入れた。

「ふう〜流石に毎日牌を握ってる人達には敵わないなあ〜」

「そ、そら、そうだろー俺達は麻雀の達人だからなー!」

「将来はプロ雀士として食っていくつもりだもんな!」

ざわざわ

ざわざわ

ざわざわ

「ガン牌やろ、燕返しやろ、カップ抜きやろ、爆弾に……あ! エレベーターもやつとつ

たな〜」

俺達は冷や汗を体中からダラダラと滝のように流す。

「しょ、証拠は？ 俺達がそんなことをやったっていう証拠はあるのかよ!」

「そうさ、サマなんてやってねえよ!」

「はい、写真」

携帯電話に写された俺達がエレベーターをしていた確固たる証拠、写真!

「あ、あの……俺の手って、もうちよつと綺麗な筈なんですけど？ これ、違う手だと思
うんですけど」

「俺の手はもう少しゴツゴツしてて、男らしい筈なんだがなあ」

「あ、デスソースあったぞ!」

「センブリ茶は流石にないなあ、しゃーない、物凄く濃い緑茶で代用やな」

その日、俺達は二度目の死を体験した。

だが、ゴキブリ並みの生命力が俺達の肉体を助けてくれた。

もうやだこの世界!?

03：お仕事

「犯人のテロリストの皆さん！ 田舎のお母さんとお父さん、または土地の神様が泣いてますよ？ 我々は一応は管理局の人間として派遣されてきましたが、正直、管理局はゴミクズとリア充が固まつてる組織だと理解しているので大いに暴れて欲しいのですが、一般人を巻き込むなど断言させてください。あ、テレビも来てるじゃん！ ねえねえ、これ俺の知り合いなんだけどもさあ、最近結婚して色々幅広くやつてる奴なんだけどもよお、義理の妹と出来てる説、小狸と出来てる説、実は親からの圧力からの結婚説が囁かれてるんだけど、俺はホモ説が一番確率高いと思うんよね。あ、嫁さん見てるう？ 早く離婚して新しい男探した方が良いよお！ それか他に優しい男と浮気しな、アレは一発の時間がそうとう短そうだから。それに連射も出来なさそうだし男としての性能が総じて低そうだから。多分、他の男に抱かれたら視界が広がるよ！ やったね！！ そして死ぬね！！ 俺がテロリストになりたいよ……」

新婚クロノ馬鹿野郎の写真、目の部分だけマーカーで塗って隠しているを報道陣のカメラに堂々と見せつけて社会的な地位を下げてやる。アイツは俺の貴重な平日（休日）を削った重大な罪があるからな。

「つか、俺達はこの写真のハーレム野郎の代わりに連れてこられたんだぜ？ 別に管理局で働いている魔導師というわけでもないのに、囑託でもないのに、何故か連れてこられてるんだぜ？ てか、この写真の男は現状、四人の少女を侍らせて性の限りを尽くしているド変態野郎だから、管理局の女性の魔導師さん！ こいつを見かけたら女の敵だと思つて睨んでください。俺達が全面的に許可します!! てか、リア充死ね!! ああ、俺もテロリストになつて幸せになりたい……」

武蔵が目の部分だけマーカーで塗り潰されたハーレム野郎と白い悪魔、パツキンの執務官、くぎゆううう！ 吸血鬼が集合してラブラブしている写真を報道陣に見せつける。流石にこれで奴の社会的な地位は低下するだろう。てか、なんで俺達はこんな奴の為に貴重な平日（休日）を削つたのやら……。

「えー、もうさ。どうでも良くなつてきました。あのテロリストの皆さん。リアル充実しているような気がするカップル以外は開放してください、そうしてくれたら我々は立ち去ります。てか、貴方達の目的は？ もう俺達がある程度は上の馬鹿野郎共に話すからさ、法案を可決させるからさ」

「……同性愛よ」

「はいっ」

190cmくらいの筋肉マッチョマンの男が窓から顔を出す。あ、でも顔は黒い覆面

を被っていて素顔は見えない。いや脱いだ!? 脱いだよあの人……あ、物凄く化粧して
る。むさ苦しい化粧している。あれオカマだよ、二つ指が入る穴が付いている女だよ。
漢女だよ。うわ仕事が終わったらハーレム野郎を本気で転がしに行くことを決意した。
殺してやる。金玉を潰してやる。

「私達は同性愛を許してほしいのよ!!」

「ああ、性別に關しての暴動なんですね。あのデバイス捨てるんで、交渉の席を用意して
もらっていいですか? おい、指揮系統はすべて俺と武蔵に任されてる。おまえ達みた
いな下っ端は帰れ、ああいう人達は暴力で解決したらダメだ。話し合いで解決するのが
一番。わかる? なら早く帰って娘の顔でも見てろ! 糞リア充野郎共が……」

双方共にデバイスを本当に捨てて立て籠もっている建物に裸の状態で入場する。す
ると香水臭い、だが見た目は男臭い連中が俺達のことを取り囲む。とりあえず両手を上
げて敵意が無いことを提示する。

「心配ならボディチェックをしても構わない」

「先輩! 私が二人ともやりたいです!!」

「ダメよ! 先輩!! わーたーし!!」

「こんな上玉に触れられるなんて……私も立候補するわよ!!」

「あの気色悪いんでやめてもらいます? そうだ、その見た目が一番女の子っぽい子

にボディーチェックをお願いします。この際なら男の娘の方がマシなんで……」

「ああ、オカマは全身蕁麻疹だが、男の娘なら局部的な蕁麻疹で済む」

「酷い！ 性差別よ!!」

「俺もお前も！ 同じもの付いてんだろうが!!」

「「はうんつ☆シ」」

オカマ野郎共の股間を一人一人軽く握り潰し近くに設置されていたソファアに腰掛ける。

「ああ、オスとしての快楽を久々に感じちゃったわ……」

「性別はオスだからな」

「見た目もオスだからな」

「「Sな少年いいわあくびクンビクンツ!!」」

白米を炊く道具達は罵声によって崩れ落ちた。こいつらがテロリストだと思えないわ、俺達は上司に無理矢理オカマバーに連れてこられたような気分だ。クロノ殺す。ハーレム野郎殺す。あと、仕事を拒否してパチンコ屋に向かったバルはスーツを切れなようにアリーヤにアセンを変える。

「で、でも、上の人に同性愛を禁止しないって話してくれるって本当なの!!」

「ああ、いいよ、携帯使っていい?」

「いいわよ、でも、変に使ったら私達全員を慰めてもらうんだから（ジュルリ）」

「窓の外見ろよ、隊員全員が隊長と隊長補佐ほっぽり出して自宅帰ってるぜ、てか、酷い奴に限ったらこの場所に家族呼んでるぜ……」

「うわあ……引くわーマジ引くわーリア充共ってダメだな、ミッドチルダ終わってるな」
「あーもしもし、管理局？ 一番偉い奴に繋げろ、そうじゃないと俺達がテロリストになるぞ……一応は戦力的に管理局を二人と一機で確実に崩壊させられる魔導師だよ。ああ、輝夫&武蔵。テレビ見てた？ ああ、サイン、いいよ、いつ会える？ 彼氏と一緒に 腐れアマが！ 黙って偉い奴に繋げろや!!」

「声はどないなもんだった……」

「けっこう若かった。ミッドチルダの性の事情はどうなってんのよ……壊した方がよくね？ いや、壊そうぜ……」

「不干渉に徹しようぜ、俺達は地球に住んでんだ。地球で死のうぜ」

「あー鬱だわあー、知ってるか？ クロノは嫁さんとイチャラブお仕事、修養郎は今日は高町とお買い物。これアレだわー鬱だわあー」

「鬱だわあー」

ドンと暗い雰囲気を漂わせて携帯電話に耳を傾ける。

「単刀直入に言うがこの人達は性的な弱者だ。このテロ事件は同性愛という文化を殺す

ミッドチルダの政府の責任だ。ああ、この人達には罪はない。拘束するにしても必要最低限、拘束時間は一週間程度にしろ！ わかったな!! そうじゃないと管理局が潰れると思え……」

管理局から配布された携帯電話を地面に投げつける。そして何度も踏みつけて破壊する。

「これだけの大事を起こして一週間程度の拘束で済むことは、まあ、ほとんど管理局の負けだ。おまえ達の行動はミッドチルダに住んでいる同性愛者の活力になる。もし、俺達の言葉を裏切ったら管理局を両面ともに殺すから安心してくれ。はい、解散の準備だよ。テロは逮捕されて出所するまでがテロです」

「つ、つまり、私達は勝ったの?」

「ああ、普通だったら終身刑が関の山。だが、それが一週間の拘束。強い尋問をさせないように手配する。そうだな、おまえ達は同性愛者の英雄だ。そしてこの事件が理由にデモやストライキが増える。そして政治家達はおまえ達の話聞くようになる。そうなれば勝ち、だが、それ以上を求めるなよ? 自分が求めていた物以上のことを願ったら……破滅の道しか見えなくなる……」

「流石は輝夫、頭が良いなあ、俺はそんなの考えられねえわ」

「英雄? 私達が英雄になれるの……」

「ああ、自暴自棄からはじまる英雄録もあるんでねえの？ ……おい、近付くな、触るな、蕁麻疹が…：…ああ、やめろ!! 死にたくない!! 死にたくない!!」

「あなた達は私達のアイドルよお〜!!」

むさ苦しい同性愛者共に全身に斑点が出るくらいに愛でられた。もう死にたい気分だった。

その後は気絶した俺達を後にし、テロリスト（同性愛者）共は降伏して人質は開放された。

2

「兄弟、俺達は復讐をせんとならん」

「ああ、わかってるよ兄弟」

百円ショップで購入した覆面を被って扉を蹴破る。中でキスまで後五センチの距離にある新婚夫婦の前に立ち旦那の方の股間を思い切り蹴り上げる。そして、女々しく泣き出すまで全力の蹴りを何十発も浴びせる。だが、俺達も最後まで非常になれないのか顔だけは狙わないでやった。

「さーて、ネットに拡散する用の写真を取るかな。おい、ズボンとパンツを脱がせるぞ」
「正直、こいつからは最近烏賊の香りがするから絶対に触れたくないが、今回だけは特別だ。脱がしてやる」

「や、やめろお……」

「おまえさあ、声変わりしてから全然萌えんわ、死ぬ、パイプカットしやがれ」

全裸に剥いて大量の哀れな姿を収める。

「さーて、仕上げに水溶き片栗粉を顔にドバっとかけて……はい！ ネコホモの出来上がり!!」

「うわーすげーホモだー」

「ほ、ホモじゃない……僕は……彼女一筋なんだ……」

「死ぬー！ リア充が!!」

その後、クロノ・ハラオウンの全裸の写真はフリー素材になったり、ホモの餌になったり、管理局で高価で売買されたり、彼の出世の障害になるものとなった。

3

「昨日の買物、楽しかったね！」

「あ、ああ」

「また行こうね！」

「あ、ああ」

「ギロリッ」

「……肩身が狭いです」

「あれ、なんだろ、これ」

「ん？ 俺の写真だ——なんだこれ!？」

それは修一郎のデートが終わった後の話だ。輝夫と武蔵は必死に修一郎の写真を加工し、大量の『ピー』を握らされている画像や男の人達の前で『ピー』をしているようなスケベな合成写真を計六枚作り上げた。そしてその写真を深夜、誰にも気付かれないように聖祥大附属中学校の掲示板に連ねさせ、彼の社会的な地位を確実にゴミクズに変えた。

「シユウくん……そんな趣味があつたの……」

「シユウ……気持ち悪い……」

「もう二度と喋りかけないでくださいね」

「なのは！ アリサ！ すずか！ ああ……オワタ、俺の人生オワタ……」

「……この気持ちはなんだろ」

フェイトは確実に何かに目覚めたらしい。

04：日常

「あー鳥みたいな敵が強すぎる……」

「そいつは突っ込んで来た後に硬直するから直射ミサイルを大量にぶち込めば即死するぜ」

「マジ？ そうするわ」

　　五分後

「うへえ、またこの鳥野郎が出てきた……」

「直射ミサイルは万能だからどうとでもなるさ」

「ああ、頑張る」

　　五分後

「このAC強すぎ、アドバイスよろしく」

「誘導ミサイルにバトルライフル。まあ、ミサイルがあれば武器は何でもいいよ」

「了解、誘導ミサイルな」

　　五分後

「クリアした」

「おめでどう」

「感想言つていい?」

「どうぞ」

「ミサイル強すぎ……」

「現代社会の戦術を思い知らされたろ」

「ミサイルで戦争は終わるらしいからな……」

2

流石に堪忍袋の緒が切れた。

バルの財布を取り上げ、その場に正座させる。

人差し指を重ね合わせてカワイイふりをしているが、おまえが一億人の人類を虐殺した事実を知っているから感情すら薄れてまうわ!

「バル、おまえのアセンを背広を着れないようにフラジールに変更する」

そうしないと俺の命の危機に駆けつけてこない。こいつを特典にした理由は低い能力をカバーする為なのに何一つカバーしないじゃないか!? それなら娯楽、快楽を奪い去つてやる! そして俺を守ることには生きがいを見出させてやるしかない……。

「嫌や! このアセンやないと背広が着れんのか!!」

駄々をこねる熟年夫婦の旦那かよ……おまえは……。

「わかった譲歩してやる。アリーヤにしてやる」

「それもダメや！ 背広が着れへん!!」

「なあ、これはお前に対してのお仕置きなんだ……わかるよな？」

「ワイが何をしたんですか!?!」

「わかつとらんのか……君は高性能だったじゃないですか……」。

「一昔前に流行ってた犬型ロボットのほうが賢いんじゃないか？ 機械でペットなんだから同類だろ！」

「帰ってこいと命じても命令無視。仕事に行くと言った一時間後にホールに並んでいた。俺が拉致された時に助けに来たのは従者であるお前ではなく武蔵だった。なあ、おまえが俺を助けた姿を最近見えていないのだが？」

「バルは生まれたての子鹿のようにブルブルと震えながらゆっくりと立ち上がる。」

「誰が立っていいって言ったよ！ お仕置き——」

「……死ぬ！」

「ご自慢のムーンライトを駆使して俺の首を狙う。だが、」

「甘い!!」

「体制を低くして攻撃を回避、立ち上がる瞬間にアッパーカットを繰り出しす。」

「ガハッ!!」

三メートル程度吹き飛んで、またブルブルと震える。

こいつを犬型ロボットに例えるのは流石に犬型ロボットが可愛そうだ。

「おまえなあ、そんなにパチンコが好きなの？ 俺より？」

「断言します。パチンコが好きです」

断言しましたよ、ご主人様よりパチンコが大好きですつて……。

確かに俺も前世ではそれなりに楽しんでたけどさ？ 過剰な仕事から現実逃避する

為だけの遊戯だったぞ、こいつは本気で楽しんでるぞ、この違いわかる？ 他人の幸福

は苦い味って昔から言われてんの！

「最後に言いたいことは？」

「ご主人はん……パチンコが打ちたいです……」

「アセンを変更しようねえ」

こいつに情けは必要ないということらしい。

3

携帯電話の着信音が響き渡る。確認するとヴィータからだった。

無視したら絶対に窓ガラス割られるから出ないとなあ……。

今年に入ってから何枚割られてんだよ俺の家え……被害届だすぞ？

「もちもち何だよ？」

「はやてと喧嘩したから迎えに来い」

また喧嘩したんですかこの子？ もう、週三ペースで俺の家に転がり込んでるぞ……。

というか、八神の躰が厳しすぎるんだろ。将来は教育ママになりそうな予感がムンムンですわ、それか結婚せずに認知症であぼくんしそう（笑）

「なんでお迎えに行く必要が？」

「はやてが女の子がこんな時間に一人で外に出たらいけないって、だから迎えに来いよ」

「一理あるが、それなら八神と仲直りした方が早いでねえの？」

「喧嘩した理由がアイスだから」

「さいですか……」

通話を終わらせ、武蔵の肩を叩く。

「お姫様からのお迎えのご命令か？」

「いや、性格の悪い赤毛のアンからのご命令だ」

財布と携帯をポケットに収納して八神宅にダラダラと向かう。

三十分程かけて八神宅に到着、インターフォンを鳴らして返答を待つ。

「ワガママなお姫様の回収に参りました〜帰っていいですか……」

「おう、行こうぜ」

「ヴィータを頼むよ」

「出来ればそっちで甘やかしてください……」

どうにも甘やかしてくれる気が見えない。

ヴィータの手を握ってスーパーでアイスの残弾を増やして帰った。なんとというか、性格の悪い赤毛のアンの手でも、温かいものですね……。

4

ミッドチルダの女性刑務所、そこで一人の女性と面会する。これは一ヶ月に一回の恒例行事となっている。その女性というのは、まあ、顔見知りと悪友の母親だ。

にしても、面会室って空気が綺麗だが雰囲気はドンヨリしてて嫌いだぜ……。

「よお、プレシア元気？ 自殺してない？」

「生きてるわよ……」

「そら結構、結構。フェイトは知らんがアリシアは元気だぞ」

細い声だ。吹けば今にも消えてしまいそうな細い炎のような、そんな儚さを感じさせる。

まあ、この人は愛ゆえに狂った人さ……でも、本当の愛は自分が授けるものじゃなくて、他人から与えられるものだって最近になって気がついたらしい。

——俺はイミフで困惑したんだが！ 輝夫に聞かされた時は本当に困惑したね!!

「そう……」

「会いたい？ 連れてこようか」

「いいえ……私に母親の資格は無いもの……」

「母親の資格はガキを孕んだ瞬間に国から発行されるんだ。資格はあるだろ母子手帳貰わなかった？」

「武蔵、貴方は本当に馬鹿ね……」

「自覚あるから痛くねえぞ」

「そう……」

プレシアは俺のことを睨みつける。だが、表情は非常に悲しそうで、鋭い瞳よりはその悲しそうな表情に視線が向いてしまう。

「なんでだろうね？ 人間って捨てた物や者が大切であればある程に後悔しちやいうのか……」

「……アリシアが会いたがってる。いや、厳密にはアリシアはアンタのことを話題に出せば絶対に会いたがる。でも、フェイトの方は口を閉ざす。だから俺達は二人をずっと連れて来なかった。会いたがってるアリシアすら、一度もな？」

「何が言いたいの？」

「ちよつち、仕事でフェイトと話す機会が出来たんだが、その時におまえの話題を出し

た。そしたら、執務官になれたことを褒めてもらいたいだってさ。まあ、褒める褒めな
いはどうでもいいとして、口を閉ざさなかつた。つまりプレシア？ 母親の面を見た
いってことさ」

「……ッ!？」

「アンタの了承なんて聞き受けない。俺は勝手に連れてくる。俺はバカで、横暴な男だ
からな——ほらよ、人にやさしくする本つてのを買ってきた」

「……ありがとう」

「そこは死ぬ！ 悪魔!! だろうが……」

面会室から出て行く。すると輝夫が足を組んで静かにソファーに腰掛けていた。

「終わったか？」

「ああ、言いたいことは全部言った」

「美人だったか？」

「熟女の趣味は無えよ!」

俺は馬鹿だから、親友と馬鹿やってる方が性に合うね。

まあ、バカの演技をしてるだろうって……相棒によく言われるがな……!」

05：家族

アリシアから連絡が入った。内容は彼氏が出来たから紹介したいという内容だった。俺達はナイフや違法法に入手した拳銃、おまけ程度のデバイスでドレスアップしてどの程度で彼氏を殺害するかを話し合う。

ん？ どうして殺さないといけないのかって……殺したいからに決まってるよね！
「どのラインから殺害する？」

「そらキスからだろ。手を繋ぐだとかは甘酸っぱい程度で妬ましくもないし、というか俺達も会った時や送る時には手を繋いでるからな？ 許してやらんことはない。でも、アリシアを傷物にしたなら——貴公の首は柱に吊るされるのがお似合いだ。をします」
「妥当なラインだな。でも傷物にしていたのなら……そいつの家系を根絶やしにしてやる……！」

正直、唯一の女友達であり、アイドルのような存在であるアリシアを手中に収めた男が妬ましい。殺してやりたい。いや、あまりにも突拍子のない奴だったら確実に殺す。だが、やんわりと彼女のことを大切にする男性だったら、考えないこともない。俺達二人も鬼ではない。鬼のように強いが！

互いに表に出る殺気を出来る限り押し留め、深呼吸を繰り返す。そして互いに最悪の場合を語る。

「もし、突拍子のない奴だったら——上半身と下半身、どっちを傷めつける？ 俺は下半身を潰したいんだが？」

「俺は上半身の苦しむ姿を楽しみながら痛めつけたいわ」

「流石は俺達、似た物同士だが趣味はあんまし合わないね」

「そうだよな、基本的に女の趣味も合わないし」

「だが、互いにそれなりのDSだってことは確かだな……」

互いにチャラチャラとした格好にサングラス、髪型はオールバックとリーゼント、これでは昭和のヤンキーではないかと思ってしまうが舐められたら最後だ。舐められない格好をするしかない。

チャラ男って本当に何処にでもいるのねえ、ゴキブリみたい！ 殺虫剤じゃ物足りないからもつと凄く殺し方しちゃうぞ〜！

「流石に素材が良いと奇抜な格好でも様になってるな」

「どこかの優男さんとは格が違うな」

最後に香りの強くない香水をつけて準備完了。歯も磨いた、顔も洗った、髪もキメた、服もバッチリ。あ、あと、殺害の方法も三百通りくらいは考えている。

だつてさ？ あの純粹無垢なアリシアが彼氏だけ！ 絶対にヤカラだわ！！

「なんか今日の輝夫と武蔵は殺気立ってるな……」

「パチンコ……あー……今日はイベントなのに……」

「バルの姿も変わつて調子狂うな……」

「俺達のアイドルであるアリシアたんの誑かした野郎の顔を拝みに行くんだ！ あたり

前田のクラッカーだろうが」

「わたしに彼氏が出来たら？」

「少し早いがご祝儀を渡してやるよ」

「帰つてきたら殺す！」

「おうおう、帰つてきてからな、帰つてから」

さて、最高にクールにキマった姿を鏡で確認して財布をポケットにねじ込んで待ち合わせのファミリーストラランに移動する。

なんだろう？ 今日はずい調子が良いぞ！ 殺意アシスト入ってるねえ！！

「どう殺す？ やっぱり海に沈めるのもアリだと思ふんだよね」

「おれはフグ毒とかアリだと思ふな」

「物凄くルンルンしてやがる。なんとというか、生きてるといふ実感を得ているような

？ そんな感じだな……アイス食べよ……」

「安西先生……バスケより、パチンコが打ちたいです……パチンコが……したい……」
縫り付くバルの頭を思い切り蹴り上げてゴートウーフアミレス!

「さて、彼氏さんが殺されない程度の関係じゃないことを祈ろうか」
本当は殺す気に満ち溢れている。

2

「流石に子供な舌だとコーヒーは苦げえな」

「そら舌がまだまだ敏感だからだろ、俺はある程度劣化してきたら普通に飲めるけど」

「実を言うとな、前世は重度のカフェイン中毒だったんだぜ? こう見えて」

「俺は覚醒剤中毒だったぜ」

「おまえ、頭良い割にワルだったんだな……」

「頭が良いから節操を守って使ってたんだ」

腕時計を確認してアリシアと生け贄が現れるのを静かに待つ。ああ、早く抹殺したい心を押さえつけ、まだか、まだかと殺意を押さえつける。

「輝夫! 武蔵!」

「アリシア、どの方が彼氏なんだい? そいつがメソメソと女々しく泣くまで殴るのを

……あれ? フェイト?

「おろろ、なんで彼氏連れてないわけ? 色々と拷問道具を持ってきたっつーのに……」

「輝夫、武蔵……その格好……」

「おう！ 彼氏さんをオドオドさせようとキメてきたんだ！ さあ、彼氏はどこだ!？」

「いないよ、そんなの」

「ズッコケー!」

俺達は新喜劇もびつくりのズッコケ姿を二人に見せつける。

「だって、普通に誘っても絶対に通るじゃん。だから彼氏が出来たからって嘘を付いたの。そうしたら確実に小奇麗な格好をして殺しに来ると思って……」

「俺の家に住み着いている座敷童子のような赤毛のアンよりも性格悪いぞ、それ……」
「グイータ、相変わらず入り浸ってるんだね……」

二人は俺と武蔵が座っている椅子の反対側の椅子に座りメニユー表を確認する。これではヤンキーに無理矢理連れてこられた美少女ではないか!?! 髪を下ろしたいのだからジェルを塗りすぎて風呂に入らないと髪型を崩せない。ああ、人の目線が痛い。

「つか、俺達、真に受けてナイフ、投げナイフ、ヤドクガエルの毒、チャカを持参したんだが?」

「……マジ?」

「はい、ヤドクガエルの毒」

鞆の中から小瓶を取り出してアリシアに見せつける。

太古の昔から狩猟用に使われてきた古の毒だ……死ねるぜえ……！！

「飲むか？ 確実に死ねるぞ」

「い、いいよ……痛い嫌いだし……」

「どちらかというとグラグラして死ぬぞ」

「アリシアは注射とか嫌いだしなあ」

「アレは人間がする行為じゃないよ！」

「マッドサイエンティストの母親を持つ人間の発言とは思えませんなあ」

「もお〜ブ〜ブ〜」

コーヒを一口飲み、二人で五人くらいを同時に殺せるくらいの道具を持つてきたことを後悔する。あ、いや、十人くらいなら素手で殺せるんだが！ 撲殺つて脳内麻薬が出て痛みが和らぐらしいのよね！ だから多少の出血もさせないとさ……。

二人はさっそくパフェやらケーキやらの甘いスイーツを注文しはじめた。

「で、俺達を呼びつけた理由は何だよ？ 生半可な理由だったら毎朝七時にスケベ電話をかけるぞ」

「平均起床時間が十時半なのによく言うわ」

「俺達を呼び出した理由なんなわけ？ まあ、基本的に土日は平日以上に暇してるから

いいけど」

「単刀直入に言っている？」

「どうぞどうぞで」

「管理局に入ってくれない？」

「はあ？」

アリシアとフェイトは酷く真剣な顔になる。

「お母さんを出所させるには、二人の力が必要な」

「嫌だよ、プレシアは自分の意志で務所に入ったんだ。その意思を尊重するするのは当たり前だろ？」

「でも！ 二人が管理局に入ったらお母さんは……！」

「彼女はそれを望んでるのか？ 俺達は一度チャンスを与えた。だが、それを断られた。チャンスは一度だけなんだ。それ以上のチャンスを与えたらいけない。わかるか？

救済の道は用意した。彼女はそれを捨てたんだ。どんなに願っても、もう、チャンスは与えない」

「ひ、酷い……！」

「酷くないしこれが現実。そして社会なんだ。最初が無料でそれ以降は金が必要になることと同じ。最初のチャンスは無料、それ以降は料金という名のアクションが必要なんだ。おまえ達に俺達を引き寄せる程度のアクションを見せられるか？」

「そうだ、俺達はプレシアの意見を尊重している。今現在の彼女の意見じゃなく、務所に入った時の意見を……」

薄情なことを言っているように聞こえるがこれが真実なのだ。最初のチャンスを掴み取った人間だけが、お天道様の加護を受けて真っ直ぐと歩くことが出来る。だが、彼女はチャンスを捨てて懺悔の道を選んだ。檻の中で悔やみ続けることを選んだ。それから開放するためには鍵が必要になる。だが、その鍵は貪欲な商人が所有していて、対価と引き換えに購入することを許される。

甘い言葉は一度だけ、その後は辛い現実を見せつける。これが人間の道だ。修羅道に近いな？

「まあ、おまえ達がお母さん大好き好き好きなのは知ってる。でも、俺達は所詮は友達の関係だ。家族でもなければ、仲間でもない。背中を守ってくれる訳でもなければ、俺達に安全なルートを示してくれるわけでもない。ただ、俺達に要求してくるだけの存在。非情に聞こえるかもしれないが、二人が俺達に何をしてきたかを考えてみる？ そしたらわかるさ、わかる筈さ」

「……何もしてない」

「……逆にいつも助けてもらった」

「そう、それが現実。おまえ達は俺と武蔵の与えたチャンスを一つ残らず掴み取って、甘

い蜜を舐めてただけだ」

「プレシアは違った。わかるか？ あいつはチャンスを捨てた。そして、もうチャンスを与えられない場所に連れて行かれた。だからチャンスを与えられない。与えたくても」

二人は暗い表情になる。

「一ヶ月に二回は面会出来るからそれを楽しみに待つんだな」

「……アクシヨンって、何をすればいいの」

フエイトが静かにプレシアを救うアクシヨンについて質問する。

女つて諦めが悪いよな、後ろ髪を引かれる気持ちはわからなくはないが……決断つての一瞬で決めないとタイムオーバーだ……。

考える暇すら与えない、即決しないと大損つてね！

「無い。だが、本当に助けたいならプレシアを脱獄させる方法を一緒に考える程度はしてやるよ」

「わたし達を犯罪者にする気!？」

「そらそうだろう、二人の母親は犯罪者なんだから。犯罪者を助けるためには、自分も犯罪に身を染める必要がある。ノーリスク・ハイリターンを願ってはいけない」

「なあ、考えてくれ。俺達はもう燃え尽きた人間なんだ。すべてを手に入れてやろうと

思っていた小さい頃とは違って、今は平穏な日常を謳歌する普通の一般人。そんな一般人が危険が伴う管理局という名の軍隊に喜んで入隊すると思っているのか？」

「…………ツ!？」

「それに、管理局の奴らは味を覚えている。数週間前のテロ事件も怪我人一人出さないで解決した。管理局が管理している世界で古代兵器が暴走した時も、俺達は無理矢理連れてこられ、死傷者を一人も出さないで事件を終わらせた。なら、もつと使い勝手がよくなつたらどうなると思う？」

「…………管理局の犬になる」

「正解だ。アリシアお姉ちゃんは賢いね」

「五月蠅い!」

アリシアはいきり立つ。これが普通だ。だが、俺達も普通の対応をしているだけ。もし、これを普通じゃないと思うのなら少し考えてみてくれ？ 俺達は二人の少女の幸せの為に管理局の犬になる。そして数多くの汚れ仕事に手を染めて、汚れ、穢れ、恨まれる。下手をすると暗殺されるかもしれない。それは対価に似合わない。五百万円の車を五百円で購入しようとするようなことだ。それくらい俺達という存在は高価なのだ。それを一回だけ投げ売ったことがある。だが、それを買わなかった人もいる。それだけだ。

「……何をしたら、いいの」

「だから、脱獄の手伝いくらいしか出来ない」

「……輝夫と武蔵はわたし達のが好きなんだよね」

「……まあ、嫌いじゃないぜ」

「……なら、わたしのことを好きにしてい。慰み者になってもいいよ。だから、母さ——」

フエイトの頬を思い切り叩いた。

一万円札を一枚テーブルに叩きつける。そして彼女を叩いた理由を告げる。

本当に……俺達の気持ちつてのを考えてくれないよな……!」

「……女の子が好きでもない男の慰み者になつていいわけないだろ？ たかが、たかが！ 母親を救い出す手段にすぎない俺達に体を売ろうとするな！ 所詮は俺達は手段でしかない。そんな手段に身を捧げる？ 馬鹿を言うな！ 俺達は薄情な奴にみえるかもしれない。だが、母親思いの女の子を慰み者にする程、下衆にはなれないんだ……。フエイト、おまえは……貴方を救う為に俺達の慰み者になりましたとプレシアに告げられるか？ ようやく、ようやく——自分を娘だと認めてくれた母親に……」

「ッ!?! めんなさい、めんなさい……」

フエイトは泣き始める。そらそうだ、俺の言葉の意味を理解出来る年齢なのだから。

「でも、母さんと一緒に買い物に行ったり、一緒に美味しいごはんを食べたりしたいよ……」

「それは真意か？」

「そうに決まってるでしょ！ 本当に……わたしだってお母さんと一緒に居たいよ……」

「どうする？ 武蔵……」

「俺に聞くなよ、俺は馬鹿だから大体の決断をおまえにまかせてるわけだし」

「はあ〜」

少し考えて席に戻る。そして二人に尋ねる。

「それはお願いか、それとも命令か？」

「……お願い」

「よかった。それなら俺達は管理局に入る必要はない」

「——!？」

「でも、だが、そうさ、可愛らしい女の子の為に尽力はするさ、少なからず——母親が娘と一緒に買い物と外食が出来る程度の、な」

「輝夫、武蔵……」

「すこし野暮用が出来た。男だから勘定は出しておく」

「ああ、すこし時間のかかる野暮用が出来た」

本当に、漢って生き物は苦勞が絶えないものだ。

世界が狭くて、窮屈で、それでいて……何にでも手助けしたいと思ってしまう……。

06：対価

地べたに這いつくばり、必死に生を掴み取ろうとする人間の姿は酷く滑稽で、浅ましく見えた。だからこそ、俺は侮蔑の表情しか作ることが出来なかったのだ。

酷く虚しい気分の中、俺と武蔵は一人の犯罪者を暗殺していた。いや、これは暗殺なんてものじゃない。ただただ甚振っているだけ。正義なんて生易しいものでは断じてない。だが、それがこの男がやってきたことの償いになる。楽には死なせるな、それが雇い主の了見だった。

「ゆ、許してくれ……死にたくない……」

「なあ、おまえがばら撒いた薬で何人の人間が廃人になったと思ってる？ 確かに薬は快樂を生じさせる便利な道具だ。でも使えば破滅の道を辿る。現に、おまえの腕には注射針が刺された形跡が見受けられない。なあ、薬の危険性を理解してたんだろ？ だからこそ薬を使わなかった。破滅しなくなかったから、だが、巨万の富を手に入れたかったから。ハイリスク・ハイリターンは俺も大好きだ。でもよお……見つかったら最後なんだぜ？」

「く、クソ！ 手下はどうしたんだ……」

「おーい、輝夫、全部片付けてきたぜえ〜」
「だつてさ」

下衆野郎の顔面を思い切り蹴り飛ばす。そして襟首を掴んで拳が鮮血で染まるまで何度も、何度も殴り続ける。前歯は完全に消失し、鼻もへし折れて人間とは思えない顔に変化している。だが、殴ることをやめない。やめられるはずがない。

「……………うあああ」

「おまえが一年にミッドチルダに持ち込む麻薬の総重量は端数を抜きにしても二百トンだ。その二百トンを毎年、特定されていない場所から入手している」

「……………わ、わかった。生産地を教えるから……………殺さないでくれ……………」

「残念だが生産地はもう特定している。管理局の頭の足りない奴らが向かつてるさ」
バルに元の姿に戻してやる。財布も返してやる。だから麻薬の生産地を探してこいと言ったら三時間で探し当ててきやがった。それも今現在、俺が始末している下衆野郎のケツ持ちの精製工場の間違えない。

真面目に働いてくれたら超絶高性能のにな……………。

「さて、おまえの罪を一つ一つ声に出して言つてやろう。未成年の売春の斡旋、管理局魔導師の殺害、テロリストへの資金提供、暗殺稼業、違法な質量兵器の製造と販売、誘拐、違法な臓器売買、そして麻薬の製造と販売。それ以外もある程度は手を出しているよう

だが、まあ、おまえ程度ドス黒い犯罪者をはじめて見る。誇れよ？ 俺もある程度の悪だと自覚しているが、おまえには一億年、いや、一兆年かかっても勝てないよ」

懐からS&W・M500を取り出し下衆野郎の額にピタリと銃口を付ける。

「こいつはスミス&ウエツソン社っていう銃火器メーカーが製造している。50口径の、500S&W弾という弾丸を発射する現状、俺が住んでいる世界の世界最強のハンドガンなんだ。もし、こいつが頭に炸裂したらどうなると思う？」

「ううう……うあああ……」

「俺も生身の額にこいつをブツパするのははじめてなんだ。嬉しいだろ？ 最強のハンドガンで殺されるなんて……」

「や、やめろ……死にたくない!! 死にたく——」

鮮血が辺りを真っ赤に染める。

漂うのは血生臭さ。

「はあー、女の子二人の願いを叶えるために人殺しになるのは嫌だね、本当に……これじゃあ、ただの暗殺者じゃないか……」

「でも、これでこの組織は完全に崩壊する。少しはミッドチルダが綺麗になるんじゃないか？」

「こういう組織は一つだけじゃない。大体、十数個は存在している。この組織が最大

手っただけだ。最大手が消えたら二番目がラインを広げて最大手に成長する。悪循環ってやつだ」

「正義の味方が沢山必要だな……」

「その正義の味方が美少女達とイチャイチャしてるんだ、どうすることも出来ないだろ」
余った四発の、500S&W弾を四脚に向けて発砲して達磨にする。すこしだけ、気分が良くなった。

「あー疲れた……何やってんだろうな、俺達……」

「正義の味方じゃないのか？」

「馬鹿を言うなよ、この世界の正義の味方は修一郎様であって俺達じゃない。俺達が出ることと言ったら——『正義の味方ごっこ』なんだよ……」

「……偽物には汚れ仕事がお似合いってやつか？」

「そういうことだ……腹が空いた。何か食って帰るか？」

「いいねえ、今日はお寿司な気分だ！」

「回るやつでお願いするぞ」

2

「なあプレシア。フェイトとアリシアは本当に母親思いの良い子ちゃんだよな」

「……ええ、真っ直ぐに成長したわ」

「ギクシヤクした会話、思い返してもニヤニヤが止まらないぜ」

「……そらそうよ。もう、何年も母親をやつてないんですもの」

プレシアは確実に母親の風格を手に入れていた。最初の頃とは違い、とても優しく、そして、とても強い意思を持っているように思えた。それが汚れてしまった、穢れてしまった両手を少しだけ浄化してくれるような気がした。まあ、所詮は気がしたの領域だ
が。

「金欠だから何も買つてこれなかった。すまないな、俺達の生活もカツカツなんだ」

「結構裕福してる筈でしょ、輝夫」

「まあ、金持ちでも手持ちが無くなることはあるものさ。その代わり、売れ残ったクリスマスケーキ程度の品物は用意したつもりだぜ。欲しいか？」

「……ええ、貰えるものなら、なんでも」

「よろしい！ なら——アンタは死ぬまでフェイトの保護観察を受ける。まあ、簡単な話し、シャバに出られる」

「——!？」

「結構苦労したんだぜ？ 管理局の汚れ仕事を引き受けて、そのすべてを終わらせた。そして、ようやくアンタ、アンタ達を家族にすることが出来た」

「……ッ！」

プレシアは信じられないという顔になる。そして涙を流すのだ。それそうだ、もう何年も母親をやっていない自分がようやく、二人の娘の母親になれると思えば涙腺崩壊ものだろう。

「どうして、私達にここまでしてくれるの……う？」

「二つは女の悲しむ涙が大嫌いだったこと、もう一つは——母親が娘の隣に居てやらないとどうするよ？ アンタが犯罪を犯した人間だとしても、親だ。二人の娘をこの世界に産み落とした親だ。その産み落とした娘が、アンタと一緒に笑顔で話したり、買い物をしたり、食事をしたいと言ってる。俺と武蔵はお節介な性格でね。自分がどんなに汚れようが、命を狙われようが、美しく咲き誇る花を汚したくないんだ……」

「……輝夫、武蔵」

「面会が終わったらフェイトが来るはずだ。その後は手続きをするだけ、そしたらアンタは親に戻る。今度は……母親をやめるなよ？」

静かに立ち上がり何も言わないで面会室を立ち去る。

「よお、どうだった？」

「やっぱり熟女は最高だぜ、おまえも目覚めてみないか」

「目、笑ってないぞ」

「おう、流石に親友には性癖がモロバレだったか……」

「おまえの趣味はロリ巨乳だからなー」

あーあ、こういう湿っぽい雰囲気は大嫌いなんだよね……。

でも、これで三人が笑って過ごせるなら、俺は人を殺してもいいと思ってしまった。これじゃあ、小さい頃と同じじゃないか。自分の利益の為だけに行動し他者の生死を問わない。

フツ、所詮は俺は踏み台だもんな……自分勝手な方が踏み台らしい……。

07：幸福

シャワーから流れる流水が体中を流れ落ち、温かさを行き渡らせる。

顔を手で拭うと鏡に血だらけの自分の姿が見えた気がした。溜息を一つ吐き出して、もう一度、鏡を直視すると水滴が流れ落ちる自分の姿、血液なんて見えない。流石に、数年も人を殺していなかったら心にくるものがある。それが、どんな極悪人だったとしても……。

「…… あんな屑を一人殺しただけで、フェイトとアリシアがプレシアと仲良く暮らせるんだ。それに、これからはじめてじゃない。俺は両手両足の指では数えられないくらいの人間を殺している。今更、罪悪感に襲われるはずがない。一時の気の迷いだ。すぐに元に戻る」

小さい頃が懐かしい、手段を選ばなかった、あの頃が恋しい。

…… いや、あの頃を忘れない。俺には、武蔵、ヴィータ、アリシアがいる。昔はそれすら居なかった。孤高の存在で、誰からでも疎まれた。今はどうだ？ それはない。俺には、友人で溢れている。小馬鹿に出来る馬鹿に、怒らせると怖いお姫様、すこし天然が入っている妹分。最高じゃないか、これ以上を求めてどうする？ 今が、今現在が

俺が真の意味で求めていた幸せなんだ。それを捨ててまで、殺人鬼になるつもりはない。俺は、お天道様の加護を受けて、静かに人生を謳歌するつもりだ。

「…… 幸せ者だな、俺」

振り返れば、笑っている仲間がいる。それだけで満足できる。そう、それが幸せなんだ。

不殺の誓いをするわけじゃないが、理由もなく人を殺したことは一度だってない。俺も、所詮は人の子だってことだ。

もう、自分の手を鮮血に汚したくはないものだ……。

「武蔵、風呂」

「ああ、ゲームが一段落したら入るよ。にしても、フロムのゲームは難易度が高くて困るわ」

「それがフロムのいいところだろ、フロムから難易度を取り上げたら、ただの訳がわからないゲームになってしまう」

「信者なのに辛い評価ですな」

「信者はフロムの悪いところも、いいところも理解しているんだよ」

「なるへそ、意味わからん」

武蔵は篝火でキャラクターを休憩させて風呂場に向かう。

テーブルに投げ捨てられた新聞を手にとって、社会情勢を確認してみる。すると、ソマリヤ沖で日本の船が襲われたらしい、今更、海賊が横行するとは、大航海時代の幕開けですか、とか、思ったりした。

「にしても、雨、止まないな……」

「そら、梅雨なんだから止むわけないだろ」

アイスを食べていたヴィータが無表情でそう告げる。こいつには風流も糞もなにもないらしい。

「てか、まだ帰らないのか？ 正直、八神が突然現れると心臓に悪いから自発的に帰ってくれよ」

「そう言うなよ、ここはわたしの第二の我が家なんだからさ」

「人はそれを居候つて言うんだよ…… 八神の場合は管理局で働いてもらつて家賃的なものを払っているだろうが、俺達にとつてみたら、普通にタダ飯食らいの居候としか思えないんですけど」

本当、八神は扉を開けたら大阪のおばちゃんか!? つてくらいの勢いで入つて来てヴィータを連れて帰るから心臓に悪い。ヴィータが駄々をこねたら嶺上開花製造マシーンになって、俺達をイジメにイジメて帰るから尚更心臓に悪い。あ、でも、ハマグリのガソリン焼きはある程度食べれた。美味くはなかつたが……。

「でもさあくはやては厳しいんだよ。わたしだつてダラダラと輝夫と武蔵みたいに自墮落に暮らしたいんだよ」

「まあ、俺達が自墮落なのは認めるけどさ、それになろうとするのはどうかと思うよ？ 他者から見たら確実に俺達はダメ人間な訳で、見本にはいけない人間の典型だと思うんだけど」

「でも、偶に仕事してるじゃん」

「アレは管理局から無理矢理押し付けられてるの、自発的に仕事をしたことは両手の指にも満たないぜ。それに、どうしても場合は管理局がギリギリ払える限界の額で働いてるし」

「へえ〜一回の出撃でどれくらい貰ってたんだ？」

「あ、まあ、二人合わせて三億円くらいがラインだな、最近は日本円が枯渇しているらしく、ミッドチルダの銀行に日本円に換算して十二億円くらいは入ってるぜ」

「すげえーボツタクってるな……」

「馬鹿言うなよ、俺達は二人で管理局の精鋭が出動しなければならぬ程度のテロ事件を精鋭の十分の一の時間と労力で終わらせるんだ、多少高額でも使うに決まっているだろ。あちらさんもエリート魔導師を失いたくないだろうからな」

火照る体を冷却するために冷凍庫から棒アイスを一本取り出して、包装を破り捨てて

口の中に突っ込む。火照ったからだだがスーツと冷却される。これぞ、アイスが一番美味しい方だ。

ヴィータもハムハムと小さな口でカップアイスを食べている。物を食べている時は普通に美少女なのだが、一度口を開くと毒しか吐かないから困ったものだ。これは絶対に八神の躰が悪いのだ。あいつは人材を育てるのに向いていない。教師になったら一年で辞めさせられるな。

アイスを食べていたらヴィータの携帯電話が鳴り響いた。

「もしもし、あ、はやて？ ん、輝夫？ ああ、目の前にいるけど、ああ、わかった」

ヴィータは無言で携帯電話を俺の方に向ける。可能性は二つ、叩き割ってください、か、電話に出ろということなのだろう。

「もちもち、輝夫ちゃんです」

「なあ、くしゃみが出たんやけど、わたしの悪口を言わなかった？」

「いや、口に出してはいない。だが、心の中で物凄く罵倒したのは確かだ…… って、おまえはエスパークか!？」

「明日は土曜日…… 遊びに行くわ……」

「おまえってさあ、武蔵は普通より酷いくらいだけど、俺には極悪超人も吃驚なくらいの態度取るよね？ 残虐ファイトは趣味じゃないんだよ」

「だって、腐ったみかんはわたしにとってヨシヒコやん」

「腐ったみかんでオランダ出身の地獄の墓掘り人形、って……泣いていいですか？」

「オランダ・バッドアスの異名もあるで」

「やつぱり、本名：坂井 ヨシヒコさんのことでしたか……」

八神さんは本当に博識でツツコミに困りますよ……。

てか、中学一年生がなんでヨシヒコ知ってんだよ、超マイナーだけど、超有名なレスラーだよ、ヨシヒコはすぐに対戦相手に合わせちゃうからな、とても紳士だ。でも、脳みそが出ようが、腕がもげようが、足が変な方向に曲がろうが、絶対にギブアップをしない不屈の闘志を持っている。超軽量級なのに重さは超重量級、もう、ヨシヒコだけでいいんじゃないか？

つか、ピチピチの女子中学生とプロレスラーを名乗るダッチワイフの話で花を咲かせるのはどうだろうか？ 普通の女子中学生ならヨシヒコとか絶対に知らないよ、知ったら凄いいよ……まあ、八神だから、博識だからわからなくもねえけど。

「で、いつまで腐ったみかんと呼ぶわけ？ 俺、性格は腐ってるけど、行動まで腐ってませんよ」

「脳みそは腐ってるよ」

「おまえなあ…… おまえが男だったらハッテン場に投げ込んでやってるよ……」

「あ、借りパクしてたヤマジユン・パーフェクト返した方がええ？」

「無いと思つたら、おまえが借りパクしてたのかよ……」

「最高のギャグ漫画やったわあ〜」

「あれはギャグ漫画、薔薇漫画ではありません」

まあ、下手な同人誌を読ませるよりは教育に悪くない、と、思う。

「で、土曜日に本当に来るわけ？　もう麻雀卓と牌は押入れに収納したから打たんぞ、ト

ラウマを植え付けられるからな」

「え〜新しい罰ゲーム思いついたのに〜」

「おまえは絶対に幸せな死に方はせんぞ……」

「出来れば、可愛い孫に看取られて死にたいんだけど」

「見える、私には見える、おまえがキャリアアにしがみつき婚期を逃して、気がつけば七十

代、老人ホームに入つて、介護師に見苦しい死に様を見せて死ぬ姿が見える」

「土曜日は首を洗つて待つといてな……　楽には殺さへんから……」

「へつ、魔導師適正A+の俺に勝てない魔導師適正Sーさんが吠えますねえ〜」

「キィイ！　絶対に殺すんやからな!!」

プツリと通話が終わる。

「ああ、八神をおちよくるのは楽しいな。ペースを乱したらこつちの勝ちだ」

「でも、はやては怒らせると怖いぞ？」

「大丈夫、もしもの時は逃げるからさ。こう見えて逃げ足だけは早いんだ」

「まあ、頑張れよ」

変わらない日常、そう、これが俺が望んでいる生活。

管理局の犬になって戦場で死ぬのは御免だ。俺は、生温い、だけど、温かい、この生活謳歌するんだ。

「ふう〜久しぶりに長風呂したら気怠いわ〜」

「慣れないことしないことさね」

「うい〜」

武蔵も俺と同じように冷凍庫からアイスを取り出して包装を破り、口に加える。

日常という名の幸せ、ダラダラとした、でも、温かい幸せ。そう、これが俺の求めていた温かい何か。

「フハハハ！ 今日大量でっせ!!」

玄関から聞こえる奇声に近いバルの声。

「体が元に戻ったからってパチンコ屋に毎日通いやがって、またアリーヤにしたろうか？」

「ご主人はん……ワイはパチンコが無いと死ぬんどす。そんなけつたいなことせん

といてえな……」

「一週間パチンコしないで生きてただろうが」

「もう、ご主人はんの馬鹿！ 着信拒否にしたるんやから!!」

「おまえと俺は基本的に念話で話してらるだろうが……」

バルはコンビニから買ったのだろうか、パチンコ攻略雑誌を床に座って読みはじめる。こいつのパチンコ中毒は将来的に、俺の命を奪うと思う……。

「つたく、このパチンカスネクストが……」

一人と一機で暮らしていた家が、二人と一機、そして、三人で一機になった。会話が絶えない、明るい生活。退屈しないし、退屈をさせない。互いに互いのことを深く理解していて、わかりあい、わかちあえる。誰も俺のことを気にしない。何故なら、すべてを知っているからだ。だから、俺も三人のことを気にしない。気にする前に助けてしま

う。

言つてしまえば——家族、なんだろうな……。

幸福、そう、幸福。こんな風に仲間と一緒に馬鹿やって、アイス食べて、時々喧嘩して、仲直りして、笑って、飯を食いに行つて、美味しやら、不味いやら、会話を花を咲かせる。これが、これが幸福じゃないと言うのであれば、何と云うのだろうか？

少なからず、両手に血の臭い染み付いた俺でも、この、幸福を味わう権利くらいはあ

る筈だ。

「だからこそ、言わせてくれ……………」
「…………… 幸せだな、俺」

08：外出

どうしようもないくらいに暇な日というものは、まあ、あるものだよな。そういう日は基本的に俺達はゲームセンターやら、シヨッピングモールなんかに出かける事が多い。毎月三十万円も貰えるのだ、それを贅沢に浪費しても罰は一つも当たらないと思う。金を使って経済回せよ、とはよく言ったものだ。

「二百円でガンシューティングゲームクリアして店を泣かそうぜ」

「ああ、いいな、今日こそは記録更新したる」

今日は男臭い野郎二人で近所のゲームセンターに来ていた。最初に手を付けるゲームは大抵、高難易度を誇るガンシューティングゲームが多い。まあ、高難易度と言っても、俺達二人は基本的にそれ以上の難易度を誇る事件やらをぼったくり料金で解決しているのだ、生易しいにも程がある。

二百円をゲーム機に投入して左側に俺、右側に武蔵が立ち、静かに呼吸を整える。

「さて、ゲームをはじめるか……」

ワラワラと現われる敵に最低でも四発の弾丸を撃ち込み、弾切れと同時にリロード、無駄のない動きで敵を翻弄する。目に見えてスコアは向上していき、武蔵との連携も高

まっけていく。十分が経過、後ろにワラワラと人だかりが出来はじめる時間帯だ。だが、後ろを振り返ることなく、敵を機械的に屠っていく。

「このゲーム糞長いからな、指が疲れんだよ」

「まあ、リコイルがあるからある程度は疲れが取れるだろ、我慢しな」

後半の敵は動きが速くて対応に困ることも多いが、それ以上に早い敵と対等したことがあるので、まあ、偏差射撃でどうとでもなる。

黙々と的を屠っていったらエンディングに到達して、まあ、ハッピーエンドだった。

「今回も記録更新ならず、ニュータイプの道のりは遠いな」

「まあ、今でも十分にニュータイプだと思うがな」

シューティングゲームを約三十分で終わらせて、自販機で好みのドリンクを購入して休憩する。

「ガンシューは精神力を擦り減らすから疲れるなあ〜」

「まあ、それ以上に人質を盾にしている犯罪者の方がもつと性質が悪いからなんとも言えんが」

「それはおまえが狙撃銃で脳天の風通しをよくすりゃいいだけだろ、簡単な仕事じゃないか」

「ミッドチルダに銃火器持ち込むと管理局にギャーギャー言われるから嫌いなんだが

な」

まあ、そんなのお構いなしにブツパしますけど、ぶち殺しますけど。

「次はどの島に移る？ 格闘ゲームかキャトル・ミューティレーション装置（UFO キャッチャー）、それとも女子小学生とキャツキャウフフするためにオシヤレ魔女ラブ & ベリーでもやるか」

「圧倒的に後者ですわ。女子小学生と意味深な仲になりたいですわ」

互いに女子小学生という言葉聞いた瞬間に目が血走る。何故なら、俺達がこの世界に存在している最初の理由、それは、原作ヒロイン（小学生）と意味深な関係になることなのだから。まあ、わかるだろ？ ああ、そう、俺達はロリコンなの、ロリータ・コンプレックスなの！

リュックサックの中からラブベリーカードがビツシリと収納されたカードフォルダーを取り出す。

「じゃあ、キャラクターの衣装を考えましてよ、このドレスとかアリじやありません？」

「正直、もうすこし露出を増やしたいですわ」

「ですが、あまりにも露出を増やすとお下品になりましたよ」

「殿方はお下品な方がお好みでは？」

「オーホホホ！ 大好物ですわ!!」

「なら、この短パンとTシャツ、靴はスニーカー、現代的なファッションでよろしくて?」
「ダメですわ! ここは短パンではなく、パツシヨンなカラーのミニスカートを装備!
絶対領域を強調しましてよ!!」

「その考えはありませんでしたわ! わたくしもその案に賛成しましてよ!!」

「オーホホホ!!」

「アンタ達…… 気色悪いわよ……」

「ああ?」

パツキンセミロングの美少女様と紫髪的美少女様が俺達のことを蔑みの瞳で見つめている。

「おまえ達はお嬢様なんだからさあ、こんなお下劣なゲームセンターに来るなよ、品性を疑われるぜ? 正直、俺はおまえ達が援交少女なら十二万払つてるところだが、この場所に足を踏み入れた時点で三万に減ったわ、ねえ、お姉ちゃん達、三万でどう?」

「女の子に援交という単語を平然と使っているアンタに言われたくない言葉のオンパレードね。それに、わたし達だって普通の女子中学生なんだから、ゲームセンターにプリクラの一つや二つ撮りにくるわよ……」

「つか、俺達、そんなにキショイ? 正直、ミジンコ程度のキショさだと思ってるんだけど」

「なんとも表現しにくい生物に例えないでよ……」

「ええ、ミジンコ有名だよねえ、メダカの餌だよねえ」

「わたしいくミジンコの大ファンなのお、似てるって言われるなんて嬉しいよお」

「死ね！」

「ゴホツ?!」

アリサ・バニングスのバーニングフックが俺達の頬を鋭く抉る、その場にぐったりと倒れ込み、流石はバーニング・アリサは格が違うぜ、と、心の底から思った。

「というか、アリシアから聞いたけど不登校してるんですって？ アンタ達には将来の夢とか無いの……」

「正直、毎日デリヘル嬢を呼んでパーティーナイトを過ごせるくらいの蓄えあるから将来とかどうでもいいです。まあ、ヴィータが入り浸ってるからそれは出来んが」

「ヴィータちゃん、やっぱり入り浸ってるんだね……」

「変なことしないでしようね？」

「あ、いや、全然。偶に過去の記憶がフラッシュバックして俺の寢床に潜り込んでくるんだけどさあ、アイツに限っては俺のライトセイバーも反応しないのよ、もしかしたらインポかもしれない。それかあ、フォースが足らんのかもかもしれない」

「え!? 俺の布団には潜り込んでこんぞ!!」

「好感度を上げて出直してこい!!」

「しーましえん!？」

「…… 本当にアンタ達は馬鹿ね」

「馬鹿つて言う方が馬鹿なんですよ〜！ 小学校の先生に教わらなかった？」

「ぷぷぷ！ お嬢様のくせに許容が低いですわねえ〜」

「チエストー!!」

バーニングアツパーが俺達の顎を抉る。脳が揺さぶられて立ち上がることが出来ない。

「見える、私には見える、アリサ・バニングスが結婚して旦那を虐めに虐める未来が見える」

「殺されたいの?」

「いや、全然、逆に生きたいです。俺達、いつ死ぬかわからん存在だし」

「この場で死になさいよ」

「嫌だよ、女子小学生と意味深な仲になるまで死ぬことは出来ん。さあ、中学生に成長した貴様達は立ち去れ、我々は女子小学生を求めておる!」

「アンタ達ねえ〜…… 自分から犯罪者になってどうするのよ?」

バニングスの言葉、犯罪者という一言を聞いた瞬間に俺と武蔵は顔を逸らした。

「…… 犯罪者には、もうなってる。罪に問われないだけだ」

「…… いつ死ぬかわからない存在だったのも確かだ。俺達は体のいい傭兵としかみなされていいない」

「…… ごめんなさい」

「…… 輝夫くん、武蔵くん」

「いいさ、俺達は自身のやっていると誰よりも深く理解している。それを理解しろ、なんて、馬鹿げたこと言わないさ。ただ、俺達は自分勝手に生きて、理不尽に死ぬのを望んでいる」

月村が一步前に出て、俺と武蔵の頬を叩く。

「二人がやっていることで助かっている人がいるんだよ」

「月村、確かにそうだ。俺達が行う行為によって、救われる人間は多い。そして、それは肯定され、受け入れられる。なあ、高町か、フェイト、それか八神から話くらいは聞いているだろ？ ——二人の活躍は凄い、ってね」

「…… そう、だよ」

「それが間違いなんだ。俺達は多かれ少なかれ、悪人という存在を消している。禁忌に触れているんだ」

「…… 輝夫、それ以上、それ以上話すな。俺達は二人に説教と冷たい現実を突き付け

るためにこの場所に来たんじゃない。ゲームを楽しみに来たんだ。わかるだろ？」

「…… ああ、すまない！ ギャグキャラがシリアスしたらあかんわあくよし！ 最近
は八神嶺上開花製造機のせいで麻雀が打てない状態だったから、麻雀を打ちますか！」
産まれたての子鹿のように足を震わせながら、ゆつくりと立ち上がり、麻雀ゲームの
方向に足を運ばせる。だが、月村に手を掴まれる。

「お詫び、させて……二人の頬、叩いちやったから……」

「…… なら、プリクラでも撮ろうか？ あれ、どうやって撮るのか、男子だからわか
らんのさね」

「男子禁制の領域だしなあ」

「女子小学生と意味深な関係になるためにオシヤレ魔女ラブ&ベリー をプレイしよう
としていた奴らが言わなそうな言葉の上位に入るわよ、それ」

「うるせえ、女子小学生との出会いはカードゲームって決まってるんだよ」

まあ、こういう休日も悪くない。

犬猿の仲だった二人とも、まあ、こういう風にすこしギクシヤクしているが、話せる
ようになったんだ。

2

「てか、最近修一郎様の姿を見んのだが、アイツどうしてるの？ 一応は管理局で働いて

るって聞いてるけど」

「ん、シウは仕事が多くて最近アンタ達と同じになってるのよね……」

「なるへそ、でも、修一郎さんは俺達より糞弱いから怪我とかしてないか？ アイツ、剣型のデバイス使ってる割には、すぐに懐に入られるわけだし」

「シウくんが出撃する時は大体の場合はなのはちやんと一緒らしいから、大きな怪我はしてないみたいだよ」

「アンタ達が桁違いに強いってだけでしょ。シウもたいして弱いわけじゃないらしいし」

「まあ、君達の思い人が深い傷を負わないことを祈ってるよ」

「本心？」

「ああ、俺達は基本的に無害な存在だからな。ただ、女の子のお願いには、滅法弱い」

「それが男の本能ですからね」

「男って、不自由な生き物なのね」

「いいや、女より男の方がずっと、自由さ、ただ、世界が狭く見えるだけ……」

「男として生を受けて、よかったと思ってますよ、お姫様方」

「…… 馬鹿」

「言われ慣れてるよ……」

09：後悔

すべてが鮮血に染まった室内は、それは、それは、何と表現したらいいのだろうか、言うならば、この世界に存在してはいけなれないと思わせる程に、禍々しく、そして、穢れていた。俺は少しだけの後ろめたさを心に抱きながら、ゆつくりと前進する。それに追従するバルの姿も、何時もの脳天気なものではなく、命を奪いなれた傭兵と表現するに値するものとなっていた。

血生臭さが吐き気を助長させる。それを飲み込んで、ゆつくりと前進する。

決意は既に心の中に存在している。その決意の意味は——この景色を創りだした存在を殺める。

「ご主人はん、ワイはどうしたらいいでつか？」

「……俺一人で殺す。無理だったら——骨は拾ってくれ」

「それは無いと思います。この程度の殺人鬼、シリアル・キラーだったら、まあ、ご主人はん一人で殺せます。やけど、ご主人はんはその決意があるかどうか、まあ、それを見させてください」

「決意はもう、意中の中にあるさ——それを行動出来るか、それがわからないだけだ」

扉を開くと血生臭さではなく、古くなった遺体が放つ異臭、それが脳を揺さぶる。そして、吐き気を高める。だが、決意がそれを押し留め、そして、意思を強く持たせる。異臭漂う室内の空気を深く吸い込み、そして、殺すべき存在の元へ歩みを進める。

「貴方がわたしの新しい玩具？」

目の前に存在しているのは、十の年にも満たないであろう、少女。そして、その懐には、管理局の魔導師であろう男性の生首が静かに目を閉じている。だが、その表情は酷く歪んでおり、酷い痛みに耐え切れずに死んでしまったようにも見受けられる。

無言でデバイスを構える。手が震えている。それは、大多数の死者を見たためか、それとも、自分の死を感じ、恐怖しているからか、いや、そのすべてが否。俺は、輝夫という存在は、目の前に存在している楽しそうに、そして、不気味な笑みを浮かべている少女に畏怖の心を持ってしまっているのだ。

少女は小さな体を起こし、生首を強く投げつける。生首は内容物を撒き散らし、この世のものとは思えない物体に変化する。臆する気持ちが増えていく。

「ねえ、君はどんな死に方をしたい？」

「腹上死だよ、それも、絶世の美女のな」

「腹上死って何？」

「快樂に溺れて死ぬことだ——おまえがやっている殺しの対極に位置しているんじゃないな

いのかな？」

「そう？ わたしは人を殺すと楽しいと思うよ、だって、死ぬ時の叫び声って、凄く綺麗な音なんだよ。それに、人によって違うし、直ぐに殺すのとジワジワと殺すの、それも違う。貴方の叫び声はどんな音？」

少女は酷く歪んだ曲刀を鞘から抜いて、片手で構える。俺も気を引き締めて、デバイスを静かに構える。

狂気と畏怖が拮抗する室内、そこは戦場と表現するには、あまりにも禍々し過ぎて。殺人現場と表現するには、あまりにも後悔の念が少な過ぎて。例えるなら、屠殺場、生き物を殺す現場と表現することしか出来ないでいた。そして、そこで殺されるのが、俺なのか、それとも、彼女なのか、神のみぞ知る世界だった。

鋭い攻撃が腹部めがけて飛んでくる。それを紙一重のバックステップで回避して、ある一定の間合いをとる。

理解した。何故、彼女がここまでの人数を意味ありげに、そして、意味なく屠ることが出来たのか。それは、この限定的な閉鎖空間ゆえに生じる範囲の狭さによるものだ。管理局のエリート魔導師というものは、大抵がミッドチルダ式の空戦主体の戦闘を主にする。だからこそ、この閉鎖空間が彼らを殺した。少女はただ、実った果実を収穫したに過ぎない。

現状、俺は危ない領域に立たされていた。膠着状態が続いているが、閉鎖空間というアドバンテージと戦い慣れているという部分がハイインドになっている。だからこそ、少女は狂気を含ませた笑みを絶やすことなく、そして、恐怖を与え続けることが出来るのだ。この勝負、猫と鼠が戦うのと同じだ。勝敗は確実に見えている。

「すごいすごい！ あんなに速く切つたのに避けるなんて!! 君、弱い魔導師さん達とは違うんだね!」

「……怖いな、本当に怖いよ、なんで、そんな風に躊躇いなく人を攻撃できるんだ」「何言ってるの? そうしないと——わたしが殺されちゃうじゃん!!」

「……そう、だな」

決意が定まらない。扉の前で俺は心を落ち着かせて、そして、この少女を殺害することを決意したはず。それなのに、それなのに、俺は恐怖している。震え上がっている。狂気を含んだ殺気にひよっている。だからこそ、足が後退の一手に向かうのだ。逃れようとする。それは恐怖からか、それとも、狂気からか、それとも……その両方からか。

連鎖する攻撃を紙一重で避けつつ、決意を、そして、行動を実行する何かを掴もうとする。だが、それを掴むのは、とても難しく、目の前に存在している狂気が少女だということも理由して、霧のように、完全に目視出来ているのに、掴むことが出来ない。存

在している何か、だが、掴み取ることの出来ない何か、一秒、二秒、三秒、それだけ短い時間の中でも、恐怖が増していく。俺は、少女という、幼く、そして、儂い、刹那的な存在を手に掛けたくないと思っってしまった。

「ねえ、どうして攻撃しないの？」

「……怖いからだよ」

「そんなに怖いのか？」

「……ああ、逃げ出したいくらいに」

「他の魔導師さん達は逃げないで戦ったよ？」

「……そいつらは、命知らずなんだよ」

「君は？」

「……臆病者なんだ」

少女はつまらないという表情をして、部屋の隅に存在している椅子に腰掛けた。そして、にこやかに俺のことを、いや、俺の目を見てこう言い放つ。

「君が命知らずになるまで待つてあげる！ そしたら、綺麗な音が聞けそうだから……」

「……綺麗な音ね。どんな音がするんだ？ 俺も少し気になる」

「そうだねえ、すぐに殺す時はザヴァー！！ とか、グチャ！！ 少しずつ殺す時は痛い！！」

助けて!! ママ!! 死にたくない!! とかが多いかなあ? あ、君はどんな音を奏でたい?」

気味の悪い音だな、と、心の底から思った。そして、少しだけ虚しい気持ちになる。

「……残念だが、俺が奏でられる楽器はリコーダーと太鼓の達人のふつう程度なんだよ」

「太鼓の達人? 何それ?」

「……まあ、暇人がやるゲームさ」

「ふうくん、どんな音が出るの?」

「……音楽さ、明るい曲から、暗い曲、同人の曲、色々な音楽を自分で奏でる。君が語る一個か多くて三個程度の音じゃなくて、色々な楽器が重なって奏でられる音楽、それを演奏するんだ」

少女はまた、つまらないという表情をした。

「音楽は楽しくないよ、全部同じ音に聞こえるもん」

「でも、曲は違う」

「曲が違っても、楽器は同じ。でも、人間は違うよ! それぞれに違う声があつて、そして、違う音を出してくれる。わたしは人間が死ぬ時の音が大好き、沢山人間は居るし、人それぞれ音も違う、こういうのって、何て言うのかな?」

「十人十色だよ、みんな違って、みんないい」

「へえ、そういう表現があるんだあ」

少女は少しにこやかになった。

少し気を緩めて、バルの方へ視線を向けるとトリガーに指をかけている、死にかけたら助太刀に入るつもりはあるらしい。だが、この事件は俺が、俺自身が解決する必要がある。この場に立ち会った責任があれば、ひよつて殺す覚悟を持ち合わせていない自分への戒めにもなる。だが、一步踏み出せない。一步、あと、あと、あと、あと一步なんだ、その一步で目の前の少女の狂気を終わらせることが出来る。こんな幼気な少女にこんな膨大な狂気を背負わせることは、酷で、無慈悲としか思えなかった。終止符を打つ、打つ人間が必要だ。それが俺とは確信出来ないが、それでも、やらないといけない。そういう使命感がある。だが、恐怖感も存在している。俺は、二つの志を彷徨っていた。

「ねえ、君の名前はなんて言うの?」

「西風輝夫」

「ニシカゼ? テルヲ? 不思議な名前だねえ」

「まあ、西風は珍しい名字だと思うよ」

「わたしはアビゲイル・ベイカー! アビーって呼ばれてたよ……」

「呼んでた人は?」

「来る途中で死んでた人達！」

「ああ、そうか、そうだよな、ここ、孤児院だもんな……」

首のない子供の死体やら、教師のような清楚な格好の女性が胸を貫かれていたり、一人の老婆に至っては、両手両足を切断され、出血多量で死亡していた。そうか、彼らが彼女のことをアビーと呼び、育てていた人達なのだ。だが、そんな風に親しく接していたのに、何故、彼女はこうも狂気に取り憑かれてしまったのだろうか？ 恐怖の中に疑問が溶けこむ。

狂気と恐怖が溶けこむ室内はとても静かで、そして、冷たいものだった。

「ニシカゼくん、少し隅に移動してくれる。そうしないと——君も道連れだよ？」

「——ッ!？」

急いで部屋の隅に飛び退いた瞬間に管理局の魔導師が轟音を響かせる砲撃魔法を放って突入してきた。俺のことなど気にもとめないで、ただ、目の前に存在している少女、アビゲイル・ベイカーを殺傷するだけのために、殺すただけに編成された部隊。それが、俺とアビゲイルの前に立ち塞がった。いや、俺の前には立ち塞がっていない。逆に、彼らは仲間だ。だが、理解してしまった、彼らの末路を、そして、彼らが奏でるであろう音を……。

悲鳴すら響かない、ただ、肉と骨が切り裂かれる表現しがたい鈍らな音が響いたのは

確かだ。そして、それを奏でたのは目の前に存在しているアビゲイルという少女で間違いない。「間違えない」と「間違いない」では意味が異なります」

動きは見きれた。でも、それを防ぐ手段を持ち合わせていなかった。だから、目の前で部隊は無惨にも斬り殺された。それを、俺は当たり前のように受け入れることも出来ていた。ただ、現状、同じ年くらいの少女が人を殺している姿は、とても、残酷に見えるのは確かだ。

「…… ねえ、綺麗な音でしょ？」

「…… ああ、綺麗で、汚い音だな」

「綺麗で汚い？ 不思議な言い方をするね」

「そうかな、率直にそう思った、だから、そう表現した。気に障ったなら、謝るよ」
「ねえ、どの辺りが汚かった？」

「骨が切れる音」

「わたしは好きなのにい〜ぶう〜」

アビゲイルは鮮血の滴る曲刀を振るい、鮮血を俺に飛ばす。

「あはは！ 殺人鬼みたい!!」

「…… 鏡が無いから見えないや」

「見せてあげたいな、ニシカゼくんの怖くて、そして、カッコイイ姿！ でも、もう駄

目……あれだけの戦力を投じたなら、この建物を壊してでもわたしを殺すはず。ニシカゼくんを生け贄に捧げてでも」

「……そう、だな」

静かに曲刀を構えて、ゆっくりと間合いを詰めてくる。俺は、デバイスをようやく構えることが出来た。そして、決意も纏まった。俺は、彼女を倒す。殺すじゃない、倒す。それは苦肉の策でしかない。彼女の死期を先延ばすだけの愚かな行為。だが、それでも、名前を名乗りあつた仲の人間を殺したいとは思えなかつた。

少女らしからぬ素早い移動、それを紙一重で回避する。だが、彼女は限りある空間を利用して接近、攻撃を仕掛ける。間合いと空間把握能力こそ彼女が上だが、才能は俺の方が上。技量を力量でカバーする。そして、彼女を自分を汚さないやり方で殺す。それが、俺に与えられた任務だとうやく理解することが出来た。

デバイスを魔力で強化して、曲刀と火花を散らす鏢迫り合いを繰り返す。やはり、技量は彼女の方が上のようなだが、力量、腕力などの細部は俺の方が優っている。それを利用して、一撃必殺のカウンターさええどうにかしたら、俺は彼女を倒せる——！

それは一瞬の慢心だったのかもしれない。それか、必然的に起こりえた偶然なのかもしれない。だが、一つだけ言えることがある。彼女、アビゲイル、愛称はアビーは進化していた。それは腕力や技量じゃない、知恵という部分で俺より勝つた。

ガギッ！ そう、鈍く響いた物が壊れる時の音、両手で握りしめていたデバイスが綺麗に真つ二つに切り裂かれ、浅いが、胸から腹部まで綺麗に体を切り裂かれていた。

「ようやく斬れたあく昔ね！ 石を高いところから落としたらどのくらいの威力になるのか実験してみたの！ そしたらね——普通に落とした時より、ずっと地面にのめり込んなんだ……」

重力の利用、それが、彼女に欠けていた腕力を補い、攻撃と防御の手段を俺から奪い去った。

「……君はどんな音を出すの」

「……ご主人はん」

「バル、こいつは俺が止める。俺が死んでも、絶対に手を出すな……」

「……ご命令のままに」

バルはトリガーから指を放して、ただ、俺とアビゲイルの攻防を観戦する存在になった。こういうところだけは忠実な奴でよかったと思っっているよ……。

痛みを堪えるために握りしめていた切り裂かれた杖を地面に投げ捨てると、カラリ
ンツと、小綺麗な音を奏でた。

「……聞こえた気がする、アビーが聞いてた音が」

「本当!!? どんな音だった!!」

「とても、悲しい音だったよ……」

一瞬で間合いを詰めて、彼女が握りしめている曲刀を弾き落とそうとするが、流石に大振りな動きだったからか、バックステップで回避され、カウンターを受けそうになった。それを紙一重で回避して、体制を低く、そして、一瞬で武器を弾けるように集中力を研ぎ澄ませる。

「ニシカゼくん、もしかして、武器が無い方が強い？」

「それは無いよ、人間は武器を手にして生きてきた。誕生した瞬間から、今現在まで。武器を構えた人間より、素手の人間の方が強いことは稀だ——圧倒的な力量差が無い限り……」

「…… そう、そうだね」

アビゲイルは鋭い狂気を放ち、俺の行動を、次に出す行動を鈍らせる。それくらい、彼女の狂気と殺気は身に感じられるものであり、精神力を酷く削られる。致命傷とは言えないが、傷を負っている現状なら、尚更だ。

——だが、止める。俺は、絶対に止める。この狂気を、そして、悲しい音の連鎖を、終わらせる必要がある。

「死んじゃえ!!」

「馬鹿野郎!!」

激しい攻防、一見、武器を握るアビゲイルの方に勝機があると思われる。だが、なのは気力と根性でどうにか出来るラインだ。俺の使命感は酷く燃えている。彼女を、裁くという正義感と一緒に。俺は、俺は、俺は、戦う意志を持ち合わせた。

完璧な攻撃と防御の連鎖、二人は殺意や狂気、そんなものでは推し量れない何かを感じながら命という対価を賭け金にして、攻防を繰り返す。そう、言うなれば、それは——歡喜、自分と同じ力量の境地に達した者だけが感じあえる何か、だからこそ、今の彼女は、アビゲイル・ベイカーは、アビーは殺気も狂気も持ち合わせていない。ただの少女、武を身に着けている少女として俺と一戦交えている。だからこそ、俺は、彼女を殺そうとは思えなかった。

グツタリとその場に跪くアビゲイルは静かに笑っていた。

「あーあ、体が持たなかった……」

「知ってるか？ 男と女は体の構造が違う。そして、男の方がずっと女より強いんだ」
「そんなの初耳だよ」

「そうかもな、いや、そうだろうさ……」

アビゲイルは曲刀をその場に突き刺して、俺の瞳を覗き込む。

「ねえ、わたしを殺して」

「嫌だよ」

「お願い、そうじゃないとわたし、報われないよ」

「どうして」

「わたしはね、貴方に殺されたいの。管理局の知らない魔導師じゃなくて、ニシカゼ・テルヲ、わたしを倒した初めての人」

「…… どうして、俺に殺されたいんだ？」

アビゲイルは高らかに笑った。そして、ただ一つ、正論であり、間違いでもある答えを告げる。

「わたしが殺した人を全部見たのは貴方だけだもの」

「……」

「貴方がわたしが犯した罪をすべて知っている。だからこそ、貴方に終わりを与えて欲しい。罪を償わせて欲しい。多分、わたし、貴方以外に殺されたら、成仏出来ないから……」

「…… どうして、俺なんだ！」

「貴方が、わたしを倒したから。それ以外に無いよ。もし、わたしをそこで倒れてる魔導師が倒していたなら、それはそれでよかった——でもね、これは運命だと思うの。貴方がわたしを倒して、そして、殺す。わたしが殺した人間の無念をはらすために、ね！」

俺は、彼女から逃れることが出来なかった。

「ねえ、殺して、わたしの罪を貴方が裁いて……」

静かに細い首に手をかける。

「わたしの音、どんなのだろうね……」

彼女は、アビゲイルは声を上げることなく、ただ、瞳を閉じて死を待つ存在になった。そして、彼女は静かに、深い眠りにつくように、この世界から消えた。

「——ッ!? 駄目だ!!」

俺は彼女が死んだ瞬間に首から手を放し、すぐに心臓マツサージと人工呼吸を繰り返す。だが、彼女は息を吹き返さない。何時間も、何時間も俺は蘇生を続けた。だが、彼女の生命の息吹は途切れたままだった。それでも、俺は続けた。管理局の魔導師が俺の肩に手を添えるまで、ずっと、ずっと……。

鼓動は、聞こえなかった。音は、聞けなかった。

2

一つだけよかった点は、彼女の体は首以外はすべて綺麗な状態であった。

名も知らぬ花々に飾られた少女の姿はとても、とても、とても、華やかで、花嫁のようだった。

俺は、事件を解決した後、囑託魔導師として働く予定をすべて拒絶して、事件解決の報酬をすべて、アビーを吊う費用に当てた。彼女の墓はとても豪勢で、まるで、王族が

眠る墓のようだ。だが、そんな墓を建てたとしても、彼女は蘇るはずがない。そして、あの時、あの場所で手に掛けていなくても、彼女は殺されていた。だからこそ、俺は、どうすることも出来なかった。出来たことと言えば、この、無駄に大きく、そして、悲しい墓を彼女に送ることくらいだった。

流れたのは、熱く、そして、悲しい雫だけだった。

俺はその後、管理局の汚れ仕事に手を出した。別に好きでやったわけじゃない。最初の汚れ仕事はどうしてアビーが狂気を含んだのか、それは、あの曲刀が持った負の魔力によるものだった。

二度目はその曲刀の破壊をするためにまた、自分の手を汚した。

三度目はアビーが預けられていた孤児院を建て直すための資金の為。

四度目は自己満足と金の世界だった。

ただ、俺はアビーに感謝している。彼女を手に掛けたからこそ、今の自分が存在している、そして、人を躊躇いなく殺せるのだ。多分、彼女以上に時間をかけて、命を賭けて、人を殺すことはもう二度と無いだろう……。

——残ったのは、後悔だった。

『ニシカゼくん……ありがとう……』

「ハッ!? はあ…… はあ……」

「うあ? どうしたんだよ…… こんな時間に……」

「あ、ああ、すまない…… ただ、昔のことを思い出しただけだ」

何時の間にかヴィータが俺の寢床に潜り込んでいた。だが、俺の叫び声で目を覚ましてしまったらしい。

「夏なのに、よく潜り込んでくるよな」

「夏だから不安な気持ちが増えるんだよ」

「そうか…… なあ、お願いしていいか?」

「なんだよ?」

「少しだけ、抱きしめてもいいか……」

「…… いいよ、好きなだけ抱きしめろよ」

「…… ありがとう、お礼は何でもするよ」

ヴィータの胸を借りて、安心することが出来た。

あの時、消えてしまった鼓動は、取り戻せない。でも、今ある鼓動は守れる。

——俺は、家族を守るためなら、鮮血に汚れても構わない。それが、俺が汚れる理由だ……。

10：全滅

それは、とても辛い出来事だったと表現したらいいのだろうか、それとも、良い経験と表現したらいいのだろうか、だが、あの事件が無ければ、俺は輝夫と真の意味でわかりあえなかつただろうし、人間という存在の脆さを理解することも出来ていなかっただろう。だからこそ、今の自分が存在している。

2

公園のベンチ、そこに並んで座っている少年、西風輝夫の表情は酷く虚ろで、人間の表情と表現するよりは、死人と表現した方がマシだと思える。でも、彼がこういう表情をしている理由を理解しているので、俺自身も、たいして良い顔はしていないだろう。

「……… どんな気持ちだった？」

「……… 殺すのは怖くない。殺した後が怖い」

西風の表現は的確で、それでいて、人を殺した人間の風格のようなものを感じさせた。だが、それを誇ることは一切なく、逆に、自分を責めているようにも感じられる。

「……… アリシアみたいに生き返らせれば」

「彼女は、アビーは犯罪者だ。生き返らせたとしても……… わかるだろう？」

「…… すまない」

西風は溜息を吐き出して、また、虚ろな表情を見せる。それくらい、人を殺すということは人間の心にダメージを与えるものなのだろうか？ ゲームやアニメでは、平然と人が死んでいる。それを傍観して何とも思わない。だが、それを経験したら？ 俺も、こいつのようになるのだろうか……。

「でも、俺達が入隊しないと、プレシアは外の世界に出られない。西風、おまえはどうするんだ？」

「…… プレシアに任せる。まだ、プレシアの見解を聞いていない。もし、彼女が外を望むなら、俺は、犠牲になるだけ。内を望むなら、俺は、ただの一般市民に成り下がるだけさ……」

「…… 覚悟は出来てるんだな」

「ああ、覚悟は最初からしてる…… 逆に、付き合わせて悪い」

「いいさ、俺達は一応は仲間だ。互いに同じ利益を手に入れようとした、な？」

「…… 俺のことは輝夫って呼んでくれ」

「…… じゃあ、俺のことは武蔵でいい」

「死ぬなよ」

互いに死ぬなよ、と、一声かけて、各々の向かう場所へ移動する。

鋭い音が響き渡る室内、この場合は管理局が所有しているヘリの中、そして、その中にはテロリストを鎮圧するために編成された精鋭の魔導師達が静かに鎮座している。キョロキョロと辺りを見渡していると、隣に座っている魔導師に珍しいか、ヘリコプターが？ と、言われた。

「いや、仮契約の囑託魔導師がここまでの作戦に連れて来られるとは思わなくて……」
「…… お偉いさんの考えることはわからんな。まあ、新人は後ろで俺達のバックアップをしてくれ。流石に囑託魔導師を最前線で使う気にはならない」

「にしても、囑託魔導師が連れて来られるとは、偉い人は俺達をバカにしてるのだろうか？」

「それは無いだろ、一応は対テロ部隊として編成された組織なんだ。そうだな、囑託に実戦の惨さを知らしめるために連れてきたんじゃないのか？ 俺は入隊当初は実戦部隊のバックアップしてたから」

「僕も同じく」

魔導師達は自分の実力を理解しているのか、けっして俺のことを悪く言うことはない。それは慢心からか、実力からか、それは想像しえないものだ。

「新人、ベルトを外せ」

「へっ?」

「ああ、隊長、このへり落ちるんですね? わかりました」

魔導師達は一齐に自分を拘束していたベルトを取り外し、デバイスをゆつくりと手に持った。

俺も、それに合わせて一通りの行動を一緒にすると、ガタン、と、へりが揺れた。

「ああー落ちた」

「こら、質量兵器を使われてパイロットがお釈迦になったな」

「降りるぞ、あと、新人…… この世界に地獄が存在していると思うか?」

「……?」

「外は地獄だ——まあ、楽しくない鬼ごっこだと思つて、身に刻め」

魔導師達は扉を開いて一齐に外に飛び出す。俺も追従した。

地獄と表現するに値する風景が目を抉る。

「…… 地獄、か、こりや、地獄より地獄だ」

「だろ? 俺は大好きだ。生き延びた後の酒が美味いからな……」

魔導師達は重力に任せて高速で地上まで素早く移動する。

地上には見せしめだろうか、首を切られた死体が大量に転がり、中には妊婦、子供…… 赤子も転がっている。

敵は俺達のことを見つけたのか、大量の魔導弾が飛んでくる。だが、シールドを張ればどうともなる程度のものだ。全員がシールドだけを張って落下する。

「多分、テロリストは廃城を根城にしてる。親分を殺せば手下の大半は動きを止める。それ以外は適当に倒すか、殺すかすればいい」

「どっちが犯罪者なのかわからんな」

「それが対テロ部隊だろ」

「……俺は、何を？」

「僕が地上で雑魚の相手をするから、それに追従してくれ」

「了解」

魔導師の一人に付いていき、素早く地上に着地する。

「まあ、あっちの三人に任せれば城内はどうともなる。さて、あんまり綺麗な仕事じゃないけど、雑魚を殺すよ」

「……はい」

「覚悟が出来てないなら、まあ、非殺傷にしてもいいけど——僕がやるから、たいした意味は無いよ」

「……大丈夫。決意は、心の中に」

デバイスを構えて、ゆっくりと敵の位置を計算する。そして、魔力弾を一発、二発、三

発と放った。基本的に自分の魔力を乱暴に使った攻撃を得意とする俺だが、今回ばかりは精密射撃に頼る必要がある。実を言うと、俺は大量の攻撃を放つとクールタイムが必要になる。まあ、その前に敵を殲滅すればいいだけの話なのだが、今回は敵人数が不特定多数であり、計算できない状態。そんな状態でクールタイムに入れば、まあ、死ぬのは免れない。だから、苦手意識を持ち合わせている精密な攻撃を連鎖させる。それが、現状、一番取らなければならない戦術だと理解している。

「……輝夫なら、どう戦ってるかな」

ワラワラと溢れるように湧いて出てくる敵達を慈悲も無しに撃ち殺す。

ゲームやアニメと変わらない。ただ、目の前で人が生き死にしているだけの空間。

——怖いのは、自分が死ぬことだけだ。

「流石に数が多いね……」

「ええ……」

少しずつ死体が増え、そして、時間が深く経過していく。

「お、城から炸裂音が、こりゃ、隊長がやったかな?」

「終わり、ですか——なんだよ、あれは……」

城から溢れ出るドスグロイ何か、それは、とても禍々しく、そして、気味の悪い蛇のようだった。

「…… 僕達以外の生命反応が消えた」

「…… 敵が、全員死んでる」

溢れ出るように湧いていた敵達がゴロリと地面にすべて伏せていた。外傷なんて一つもない、だが、生命を感じさせる何かは感じられなかった。

「本部に連絡を入れる、流石に二人では、まあ、対処出来そうにないからね」

「…… 突入した人達は？」

「…… それを考えるのは、すべてが終わった後だ」

飛行魔法を使用してその場から逃げようとするが、魔法が使えない。

「…… 魔法が使えない？」

「…… まさか、奴は魔法封じの獣だというのか？」

「魔法封じの獣？」

「ああ、百年くらい前に管理世界から外された世界に存在した伝説の魔物。たしか、魔法を完全に封印して、攻撃手段をすべて失うとか、なんとか……」

魔導師は少し考えて、その場から離れることを提案した。少なからず、魔法が使えない状態で戦闘の持続は困難であり、本部で対応を協議する必要があると理解したからだ。

「足を使つての退避行動は習っていないけど、まあ、逃げられるところまで逃げるしかない

ね」

「はい……………」

俺は一目散に走り、そして、安全な場所を探した。

だが、そんな場所、ありはしない。

魔導師は突然に苦しみ、もがく、そして、胸に手を当てて、死んだ。

「…………… どう、なって」

辺りを見渡して、突破口を見つけようとする。そして、不思議と自分の胸が痛くなつたことを感じる。

「まさか、魔力が吸い取られて、リンカーコアが壊れた？」

冷や汗がダラダラと流れて落ちる。

「…………… 死ぬのか？ 俺」

その場に跪き、考える。すると、輝夫の顔が浮かんだ。

「——死ねない。アイツを本当の意味で慰めるまで、死ねないな」

俺も、アイツの気持ち、輝夫の気持ちがわかったから……………。

自分に与えられた魔力、それは、神から授かった物。神の力を越える獣なんて存在しない。なら、俺は、奴を越える力を持っている——筈。

吸い取られる魔力を自らの魔力で補って、空を飛ぶ。

俺は、最強の力を持つてる。だから、おまえ程度に負ける筈がないんだ!!
「死ね! 気色悪い蛇野郎が!!」

自分の出せる最大の破壊力の砲撃魔法。それも、殺傷設定のものだ。

「……………崩壊の嵐!!」

4

対テロ部隊の隊員の死体を一人一人探し、そして、ドッグタグを回収して歩く。

「隊長の名前、アダムって言うんだな、それと、ロイドとジャック。俺と一緒に戦ってたのがトム。エリートなのに、名前は普通なんだよな……………俺の枚方武蔵っていう名前の方が絶対珍しいな、これ」

トムが持っていた通信機を使って本部に連絡を入れる。

「全部終わった。でも、四人が死亡しました。はい、俺以外は全滅です……………」

5

「正直、俺さあ、プレシアが務所に入ってくれて嬉しかったわ」

「どうしてだ?」

「まあ、正直に言っちゃおうと、おまえは殺しても死ななそうだし。守ることとか考える必要ないじゃん。俺、守るの苦手だし、もう、仲間に死なれるのはこりこりだぜ」

「多分、俺の方が寿命短そうだがな」

「その時は、まあ、豪勢な墓を建ててやるよ——親友」
「出来れば、アビーの近くに埋めてくれ——親友」

11：釣り

互いに種類の違う竿を出し、川に向かつて仕掛けを投げる。俺の仕掛けは延べ竿に玉ウキにサルカン、道糸は三号、ハリスは一号、それと軽めのガン玉、針は小物も狙えるように少し小さめなものとなっている。武蔵の方は、バスロッドとホッパ―と呼ばれる水面をポコポコさせて魚の食い気上げるルアーを付けていた。

「なあ、スズキ目サンフィッシュ科オオクチバス属ノーザン・ラージマウスバスを釣りに来ているのに、おまえは何故、そんなにシンプルで、小学生でも簡単に作ることが出来るような簡単な仕掛けを選んでいるんだあ〜うん？」

「別に、この仕掛けにミミズを付けていたら鯉だろうが、ブルーギルだろうが、ブラックバスだろうが、雷魚だろうが、テイラピアだろうが、まあ、基本的に何でも釣れるからいいんだよ。まあ、ミミズを掘るのはめんどくさいが」

「えらく外来生物が多いな……だが、一応はバスを釣りに来たんだし、なあ、もう少しクールに釣りをしようぜ」

「なあ、俺は基本的に海釣りの人なんだぜ？ 海釣りの人は餌で魚を釣るんだ。正直、バスフィッシングは微塵も興味が無い領域なんです。はい」

俺達は帽子を深くかぶって、俺は静かに、武蔵は動きながら釣りをはじめた。

「釣れるかね」

「まあ、ルアーだからわからんな」

「ルアーの方が釣れた時の嬉しさが倍なんだよ」

「釣れない確率も倍だがな」

互いに皮肉を言い合って、まあ、普通に釣りを繰り広げる。小さいアタリが連発しているのだが、春に生まれた何かしらの魚の稚魚だろうか、針が大き過ぎてかからない。まあ、それだけ小さければ釣れても意味ないだろうが。

武蔵の方はルアーフィッシングの少ない利点、エサ取りを気にしないでいいということを利用して、果敢にバスか何かが潜んでいるであろう場所にルアーを飛ばす。

さて、今更だが、何故、我々がフィッシングに出掛けているかというところ、まあ、うちの我儘プリンセスの御命令で魚、厳密には、特定外来生物を釣りに来ている。理由は、簡単に説明すると特定外来生物の行方、とかいう特番を見たヴィータが最後の方の特定外来生物を使用した料理枠を見てしまい、まあ、それに触発されて俺達は半ば強制的に釣りに来ている。

「つか、お姫様は何故にあんなゲテモノが食いたいのだろうか？ まあ、普通に食べるけどさあ、食ったことあるけどさあ」

「俺は寿司屋でティラピア食ったけど、普通に美味かった。でも、何故にあんなゲテモノなんだろうな」

なんか、琵琶湖の近くの寿司屋が調理したバス料理だったか？ それを食いたいだとか、バスつて、どんな味するんだ？ つて、油污れのようにしつこく聞いてくるから、海でシーバス釣つてくるって言ったんだが、わたしはブラックバスが食いたいだ！ 特定外来生物の味を知りたいんだ!! と叫ばれて、まあ、なんというか、うん、はい。釣つて来ます。的な感じになった。

「ねえ、なんで巨悪の根源は来ないのかな？」

「あれだろ、魚は食えるが、魚を触れないタイプの人間なんだろう。まあ、生臭いからな、俺もサバをやる時は血だらけになるから嫌いだ」

「俺は基本的に川の人だったから、その気持ちわからんわ。でも、リリース禁止の条例が出来てから、バスとギルをめて殺す時に溢れる血液は心が痛かったわあ」

「ねえ、俺達の趣味って渋くない？ てか、おまえ前世では何歳だったわけ？ ああ？ 二十六歳でアニメ、釣りと麻雀が好きで、あとは自動車と単車を乗り回してたナイスガイだよ……」

互いに共通点の多さに恐怖が生まれる。

「……前世の苗字は何だった？ 俺は平村だった」

「よかつた。流石に同じ人格の持ち主というわけじゃないか、俺は野村だった」

互いに安堵の溜息を吐き出して、まあ、釣りを再開させる。

「お、大きいのが食った」

「まあ、餌だから妥当だな」

「うるせえ……ほらアワセ！」

普通にアワセて針にかける。だが、引きが異様に重いので、多分、バスではなく鯉が釣れた。

「鯉ですね、ハリス大丈夫かな？ 見抜かれないように一号にしたわけだけど」

「鯉ってお乳の出をよくするらしいぜ？ プレシアに鯉こくを作つて食わせようぜ」

「あれは羊水腐つてるだろ」

「いや、まだ現役だろ」

竿の柔らかさを利用してゆっくりと釣れた鯉をゆっくりと陸に引き寄せる。するとよく肥えた八十センチくらい鯉だった。たもを使つて魚影を確実に陸に引き上げて、二人でどうするかを検討する。

「なあ、マジでプレシアに鯉こく食わせようぜ、もしかしたらお乳が出るかもしれん」

「いや、アリシアかフェイトの乳を大きくするために鯉こく作るならわかるけどさあ、ねえ、何故にプレシア？ 最近目覚めた？」

「いや、全然。でも、授乳プレイはそこはかとなく好き」
「はい、アウトー」

武蔵が熟女に軽く目覚めた。まあ、鯉こくは作れるからこいつはメておかずになりますか。

鯉のエラの部分にナイフを入れて、脳の方向に向けて突き刺す。すると鯉は死亡する。もう片方も同じように刺して、尻尾の部分に切り込みを入れて血抜きと神経締めが完了する。その後は携帯まな板を使って鯉の内臓を苦玉を傷つけないように取り出して、食材にする。その後は氷水の入ったクーラーの中にダイブさせて、まあ、食材になりました。

「さて、メインのブラックバスを釣るぞ」

「ああ、あ、釣れた」

武蔵の竿にアタリが出た。静かにたもを用意して魚が上がってくるのを待つ。

「ウグイだ」

「ああ、あの美味いやつか」

「スプーンに変えたから釣れたんだろうな」

「三十センチちよつと、これは良い塩焼きサイズだな」

早速、血抜き、このサイズなら神経締めはいらないだろう。後は内臓を取り出して、

クーラーボックスにシユート。

「なんとというか、在来生物ばかり釣れるな」

「ああ、まあ、バスはいるだろうから普通に釣ろうぜ」

「うん、何か、若干このまま在来生物しか釣れないような気がしただけさ」

「それは無いだろ、外来生物の方が頭が悪いわけだし」

鯉のパワーで草臥れたハリスと針を交換して、ミミズを付けて川に仕掛けを投げる。

「お、何か釣れた…… あ、ナマズだ」

「また在来生物だな」

「こいつはウナギに味が近いから蒲焼きにしてみるか」

ヌルヌルとしてメにくいが、まあ、メて内臓を取り出さないのでそのままクーラーに投げる。

「唐突だが、おっばいの話をしよう」

「ああ、別にいいが」

好きだし、おっばい。

「おまえはデカイのが好きか？」

「大は小に無いものを持ち合わせています。はい、論破」

「だが、小には感度があるぞ」

「えらく貧乳を肯定するな？ まさか、貴様はヒンヌー教か!」

「いや、聖巨乳教団に魂を預けている。だが、俺は思うのだ、ヒンヌーもアリだと」

「まあ、小さいのはステータスらしいからな、何も言わんが」

「でも、やつぱり巨乳が一番」

「だろ、やつぱり大きいのが一番です」

結局は男の子ですから、巨乳が好きです。はい。

「だが、やはり、男は女を平等に愛する必要があると思うのさ」

「いや、それは無いだろ。不細工な女とか、百歳の婆さんとか、伊勢物語じゃないんだぜ？」

「まあ、それは、そうだな……」

おっぱいの話が終息したと同時に二人の針に何か引っかかった。

「なんじやろな…… 鮒だ……」

「この川、結構綺麗だからニジマスも生息してるんだな……」

そんなこんなで五時間の釣りの末、釣果はこんなものになった。

「えっと、ウグイ二匹、ナマズ一匹、ニジマス二匹、鯉一匹、鮒二匹、オイカワ十五匹……」

見事に在来生物です。はい」

「お姫様がキレるな、これ……」

「三人じゃあ、食いきれない量だし、まあ、誰か呼ぶか」

「そうしよう」

テスタロツサ一家と八神一家を家を誘ってパーティーをすることにしたが、まあ、それは見事にお姫様は怒っていた。

【おまけ】

「さて、むさ苦料理のお時間がやってきました。まあ、中身は普通の料理枠なんですけどね」

「で、今日の料理はなんですか?」

「ああ、今日はテスタロツサ一家と八神一家と我々輝夫と愉快的仲間達の宴会の席ですので、発泡酒を大量購入して、まあ、パーティーの席を用意しました。メインの料理は川魚のフルコース。今日、釣りに出かけた川の水質を考えると、まあ、そこはかとなく生食は厳しい、でも、種類が豊富なので結構なレパートリーに期待できます」

重たいクーラーボックスの中を見てみると今日釣り上げた在来生物の姿が見られた。

「じゃあ、一番面倒な鯉を捌きます。最初は普通に鱗を取り、調理の障害になるヒレをそぎ落とします」

「鯉は泥抜きをしないと食えないと聞くが、その点どうよう?」

「血抜きとその場で内臓取り出してるから大丈夫だと思う。それに、鱗が取れたら帰り

に巻ってきたヨモギを腹に仕込んで、ある程度の臭み抜きをするから、大丈夫だとは思
う。味は保証できないが」

「へー、流石は我が家の料理人」

「おまえとお姫様はレトルトしか作れないからな」

内容物はあらかじめ取り除いているので、流水で洗い流し、これも臭みを取るために
塩を全体に塗って、捌いた腹の部分に綺麗に洗って、切り刻んだヨモギを入れて他の料
理に取りかかると。

「さて、次は比較的捌きやすい鮎ですね」

「コイ科の生物ばかりですね」

「それを言ってしまうえば、マスとナマズ以外は全部コイ科だぞ?」

鮎も鯉と同じように内臓を取られているため、鯉と同じ手順を踏んで下準備は完成。

「三匹は若干疲れる。それに、鯉と鮎は鱗が大きいからな」

「鮎って、どんな料理が美味しいの?」

「生姜をたっぷり使った煮つけが一番だな。時間が無いから圧力鍋を駆使して素早く作

るよ」

「というか、海釣り専門の輝夫さんは何故、川魚の調理に詳しくて?」

「前世の実家が佐賀だったんだ。佐賀は結構、川魚を食うからな。まあ、俺の実家の周辺

だけかもしれないが。それなりに料理のやりかたは知ってる」

「なるへそ」

圧力鍋の中に水と醤油、みりんと調理酒、チューブ生姜と刻み生姜、砂糖を少し多めに、長ネギも入れて、最後に二匹の鮒を投入、これで火を通すだけだ。

「何故にチューブ生姜と刻み生姜を？」

「チューブは味を付ける為、刻み生姜は盛り付けのためだ」

「なるほど、味だけではなく、見た目も重視する。これは料理人の鑑ですね」

煮つけが出来上がるまでにニジマスの下ごしらえをする。

「ニジマスは鱗が小さくて詰まってるから、まあ、塩で擦る程度で十分だ。一匹は小さいから天ぷら、もう一匹は大きいから、ムニエル。マスは癖が無くて美味いからな」

「まさか、ニジマスが釣れるとは思わなかった。ニジマス釣れるのに、あの川は人気少なかったよな？」

「これだけ都会だと、フィッシングする意欲もわかんのだろう。若者の釣り離れってやつ？」

下準備を終わらせて、二匹は来客がくるまで冷蔵庫で寝かせる。

「残りはナマスとウグイ、オイカワだけだな」

「（こいつらはどう料理する？）」

「ナマズは蒲焼き、外で七輪で一回焼いて、みんなが来たらもう一回タレを付けて焼くわ」

「ほうほう」

「ウグイは若干癖があるから、臭みを取る香草をまぶして香草焼きにする」

「それは美味しそうだ」

「オイカワは一口サイズが大量だから天ぶらだな、小さいからペティーで捌くわ」

ナマズに大量の塩を塗り、ヌメリを完全に取除いて背開きで内臓を取り出して、下準備を終わらせる。

その後はオイカワも同じように背開きでキツチリと捌いて塩を少しだけ振る。

ウグイは三枚に下ろして、肋骨をすき取り、小骨をピンセットで抜いて香草をまぶして冷蔵庫で少し寝かせる。

「はい、一連の作業が終わりました、流石に川魚は捌くと臭いわ。お、煮つけは出来上がったようだ」

「おおー、結構良い香りするな」

「まあ、作り方は普通に煮つけですから。まあ、鮎なんかより、あらかぶかメバルの方が煮つけにすると美味いんだが」

煮つけを他の鍋に移して、ラップをして冷蔵庫にシユート、味を染み込ませるためだ。

「次は鯉こくだな、作れる？」

「普通に作れるぞ」

「流石は佐賀県民！」

「おまえは佐賀県民を何だと思ってるんですかね？」

それなりに臭みが取れた鯉のカシラを切り落とし、胴体の部分を適度な大きさにぶつ切りにして、鍋に水、砂糖、大量の日本酒を投入して、煮立ったら鯉を投入する。

「そして、身に少し火が通ったら濃ゆい赤味噌を投入、じっくり弱火で煮込んだら鯉こくの完成だ」

「なんか、普通に美味そうだから困るわ」

「そうか？ 俺は嫌いだったな」

蓋をかぶせて小一時間程煮る。

「さて、久方ぶりの七輪さんの登場ですね」

「七輪に練炭自殺以外の使い道があるとは思いませんでした」

「ありますよ、普通に」

ナマズを鉄の串に刺して、二回の土用の丑の日で使用できなかったタレをボウルに用意。

「さて、外に出て調理しましょう」

「熱いけど我慢するか」

七輪を用いてナマズの蒲焼きの完成、みんなが来たらもう一度タレを付けて焼いてうな丼ならぬ、ナマズ丼を提供しよう。ひつまぶし風に食べるもオツかもしれないな。

「さて、後は皆が来てから、だな」

インターフォンの音が鳴り響いた。武蔵に出迎えに行かせるとテストタロツサ一家と八神一家、それに付き添ってだろうか、バニングスと月村も着いてきている。

「よお、どうしてバニングスと月村も来てるんだ？」

「はやてちゃんの家遊びに行ってたんだけど、パーティーをするって聞いて」

「わたし、お祭り事は大好きなのよねえ」

「料理足りるか？」

「まあ、足りなくなったらどうにかするさ」

To be continued

12：宴会

「さて、むさ苦料理のお時間がまたやってきました。今回のアシスタントも武蔵くんでお送りします」

「じゃあ、残りの料理に取り掛かりましょうか」

「まあ、後は天ぷらとムニエル、香草焼きだけだから、三十分と少しでどうにかなる」

冷蔵庫から背開きで若干の下味をつけたオイカワ、四等分にしたニジマスを取り出して、事前に作った衣に付けて、一定の温度のでカラッと揚げる。

「天ぷらとかどこで覚えたの？」

「俺、実を言う料亭で働いてただけだし、自分で作るまかないがクソ不味くてさあ、出来る限りの努力を重ねたら知らないうちに大将の右腕って言われてた」

「おまえさあ、死ななかつたらそれなりに良い人生を送れたんじゃない？」

「わからん、でも、大将に自分で店を持った方が稼げるぞ？　って言われたのは確かだけだよ」

五匹揚げたら直ぐに武蔵に持って行かせる。揚げたてが美味しいのだ、天ぷらという料理は。

「これがオイカワっていう魚なの？」

「ああ、今日釣れた新鮮で美味しいオイカワです」

「見た目は普通に天ぷらやね」

「ダシとお塩で食べてくれ、だつてさ」

「じゃあ、わたしは通にお塩でいただくわ」

アリサはオイカワの天ぷらを食べた瞬間に信じられないという顔になる。そして、一口、また一口と天ぷらを口の中に頬張るのだ。

それに釣られて他の奴らも天ぷらを口の中に入れる。すると同じようなリアクションを見せる。

「絶妙なサクサク感、素材を最大限生かした下味、川魚特有の淡泊な味わいを最大限に引き出しているわ！」

「ダシは少し濃くして、温かさを消さないために熱湯で割ってる。ダシを濃くしたのは正解やね、食材の淡泊さを和らげて、ホクホクとした食感を楽しませてくれる。それにしても、衣はダシにつけてもサクサクやね〜」

「そのまま食べても美味しい！ 衣のサクサク感と下味と衣の塩気、絶妙だよ!!」

「流石は武蔵、毛嫌いされがちな川魚の持つポテンシャルをここまで生かすとは。淡泊さを味わえる人なら塩、それが少し苦手な人ならダシを使って調整する。これはワザマ

エー！」

揚がったオイカワとニジマスは即座に姿を消してしまった。

じゃあ、次はニジマスのムニエルとウグイの香草焼きを作るか。

「さて、次の料理は何ですか？」

「ニジマスのムニエルとウグイの香草焼き」

「どっちも食いたいな、俺、あっちの方で座ってていい？」

「いいぞ、この料理が終わったら基本的に暇になるから」

香草をまぶしたウグイをに粉のようにきめ細かくした塩を一定量ふりかけて、アルミホイルにバターと一緒に包んでオーブンにシユートする。もちろん、味わい深くするために超低温でじっくりと、だ。

「さて、ムニエルはウイスキームニエルにするか」

ニジマスの切り身をウイスキーの入ったボウルの中に入れて、取りだしたら、そのまま塩と胡椒を適量ふりかけて、小麦粉を付ける。後は大量のバターをフライパンに溶かして、溶けたバターをスプーンですくっては上にかけて、すくっては上にかけて、バターの風味を染み込ませる。

「うーん、バターとウイスキーの香しい香りが堪らないぜ」

仕上げに乾燥パセリをふりかけて、完成。

「ムニエルと香草焼き完成」

「おー、これは美味そうだ」

「運んでくれ」

「了解！」

テーブルの上に並べられる香草焼きとウイスキームニエル。

「ニジマスのムニエルとウグイの香草焼きです」

「これは美味そうだな、はやてが天ぶらをガツガツ食べるから」

「ごめんごめん、久しぶりに美味しい天ぶらを食べたから」

「俺も食わせてもらうぜ、正直、ニジマスのムニエルは一皿は絶対に俺のだからな」

「何だよ!？」

「俺が釣ったんです! 一皿は俺にください!!」

各々がウイスキームニエルと香草焼きに手を付ける。

「——!? 美味しい…… このムニエル、衣を多く纏わせる為に洋酒、そうだな、ウイスキーを付けてある。その風味が塩と胡椒、そして、バターの風味を底上げしている。それに付け加えて、マス科の魚独特の風味を消すことなく、完全に焼き上がっている。こんな美味しいムニエルは初めてだ……」

「香草焼きはウグイの臭みを完全に消してるね。それに、塩加減が絶妙、少しの量で塩気

を感じられるように、粉にした塩を使ってる。でも、香草と塩だけじゃあ、少し味気ないから、バターを一切れ入れて食材のコクを高くしているよお〜」

こちらの料理も受けが良いようだ。

「お米が欲しくなった」

「お米はナマズ丼の分とこいつの分しか焚いてないからな」

「次の料理は……あれ？ それは!？」

「寿司だよ」

「あー、スーパーでネタ買ってきたからな」

「まあ、鮪とタコ、カンパチとブリ、サーモンくらいしか無かったが」

「つか、寿司も握れるの？」

「ああ、普通に握れる。というか、前世では調理師免許持ってたし、フグも捌けた」

少し冷ました酢飯を素早く一定量取り、空気を含ませるように握り、ネタを乗せる。

久々に作ったのだが、慣れというものは恐ろしい限りだ。

「はい、正直、輝夫さんのポテンシャルに驚きはじめていますが、寿司を握られました」
「腐ったミカンはお寿司も握れるんか……信じられん料理スキルやな……」

「まあ、寿司は手の温度が高い女が握ったらダメという暗黙の了解があるから、落ち込むなよ」

八神が鮪の握りを口に入れた瞬間に涙を流した。

「…………… わたし達が食べてきた回転寿司は偽物やったんや」

「ど、どうしたのはやてちゃん?」

「…………… 久しぶりにこれだけのお寿司を食べたわ。これ、有名な寿司屋の大将が握るレベルのお寿司よ。ネタはスーパードで買ってきたものだどわかるけど、シャリは本物、口に入れた瞬間に解ける。そして、ネタの風味とシャリの甘味があゝあゝ」

「あ、アリサちゃんまで…………… んツ?! んうんゝ♪」

「すげえ、食通だろうお嬢様二人まで魅了する料理を作るとは…………… うん、マジで美味しい」

「あー疲れた、俺も混ぜてくれ。腹減った」

流石に料理を作るのも飽きてきたので、自分も宴会の席に混ざる。

「どこでこんな料理を覚えたの?」

プレシアが不思議そうにそう尋ねてくる。

「いや、まあ、色々とやってたからな」

「それにしても、スーパードの切り身で売られているネタの筈なのに、すごく美味しいのよね…………… 不思議だわ……………」

「ああ、それはカッターナイフで捌いたからだ」

「カッターナイフ!？」

「ああ、刺身や寿司ネタは切った包丁の種類によって味が変わる。鋭利な方が味がいい。だから、研いで元々鋭利なカッターナイフを更に鋭利にした物を使って捌いた。これは家に住んでる連中なら知ってる事実だ」

「ああ、知ってた」

「うん、カッターナイフで切られた刺身は美味いんだよな」

「し、知らなかった……わたしも試してみようかな?」

しれつとキンキンに冷えた発泡酒を取り出して、武蔵と一緒に乾杯する。

「ふう〜やっぱり料理の後はこの一杯だな、これが無いと生きていけない」

「ああ、美味しい料理に美味しい酒、これ、幸せだと思います」

「あ、私にも一缶いただけませんかしら」

「ああ、キンキンに冷えたの持ってくる」

「私もいただこう……」

「ザッフィーも一本ね」

「じゃあ、私にも」

「私もお願いするわ」

「シグナムの姉御とシャマルの姉御も一本ね」

四本の発泡酒を冷蔵庫から取り出して、注文した四人に届ける。
未成年組は寿司に呻いている。

「つまみが欲しいな、煮つけと鯉こくを出すか」

「弱火で煮込んでたつけ？」

「ああ、酔ったら美味くなるだろ」

皿に鯉こくと煮つけをよそって、テーブルに並べる。甘くて懐かしい香りが漂う。

「鯉こくってどう食べるんだつけ？」

「基本的に汁を楽しむ食い物なんだが、酒が入れば身も食えないことはない」

「なるへそ、じゃあ、いただきます」

鯉こくに口を付ける。鯉の出汁のよく出た濃厚な味噌汁と言えはいいのだろうか？

即座に血抜きと内臓を取り出したから臭みが少なく仕上がっている。まあ、食えないものではない。

「煮つけも完璧に出来上がってる。なんと表現したらいいのだろうか？　そう、魚の旨

味がジワリジワリと酒のペースを早くしてしまう……」

「魔性の料理ね……嫌いじゃないわ……」

三本目を開けたところで、流星に未成年の俺達が発泡酒の缶を握っていることを怪しむ奴が現われる。

「ねえ、なんでアンタ達はビール飲んでるの？」

「ビールじゃない。発泡酒だ。ビールは高いからな」

「み、未成年だよな？」

「酔わなければ大丈夫だ。それに、酔っても俺達は黙り下戸だし」

「ああ、輝夫と武蔵は酒が入るとすげえー静かになるんだよな」

「まあ、宴会の席だから無礼講よ」

「輝夫と武蔵らしいね……」

寿司がなくなつたと同時にナマズ丼を作り始める。

「武蔵、団扇で仰いでくれ」

「了解、了解、ナマズも輝夫が捌けばウナギだな」

「味は脂っこくないウナギらしいぞ」

武蔵に手伝ってもらつて七輪でもう一度、ナマズを香ばしく焼いて、綺麗な色になつたら白米の入つたお櫃にシユート、後は香味と出し汁と煎茶を用意して、ナマズのひつまぶしの完成です。

「うおー、完全にウナギだわ、これ」

「多分、今日の料理で一番の完成度だわ、これ」

お茶碗によそつて、そのまま食べてみるとあつさりとしたウナギ、ナマズと言われな

ければウナギと錯覚してしまうだろう。

「お茶漬け風に食べると美味しいな」

「普通に食べられるから驚きだわ、これ。ああ、酒が進む」

「輝夫と武蔵の家にわたしも住もうかな？　こんな美味しい料理を毎日食べられるなら」

「お姉ちゃん、お母さんが泣いてるよ……」

「……ダメな母親ね、私は」

ダラダラと酒とひつまぶしを食べていたら、あつという間につまみが消えた。

「……つまみが消えた。そうだ、魚屋で買ったフグがあるんだ。捌いてもらって熟成させたのが」

「おお、フグまで用意してたのか」

「ああ、今日の晩酌のつまみにする予定だったんだ。まあ、ある程度の量があるから捌いてくるよ」

キッチンペーパーの中で昆布と一緒に熟成させたフグのブロック。捌く免許は持っていたのだが、今現在は所持していないので、魚屋で売られていた物を使って薄く皿に盛りつける。

「薄く切るのが面倒くさいんだよな……まあ、そこはかとなく薄く切れたわ」

「おおー、まるで白い薔薇のような完成度、これ、お高いんでしょ？」

「ん？ 一匹四千円だったから妥当な領域じゃないんですかね」

「技術を合わせたら八千円くらいかな、まあ、美味そうだから食おうぜ」

ビールを嗜みながら、ゆつくりとフグを食べる。そして、夜が更けて。

「ご主人はん！ 今日はずいぶりに負けてもうた!! お金を恵んで……あれ？ 今日は宴会やつたんですか？」

「ああ、まあ、宴会だった。ほら、三万でいいか？」

「およ……ご主人はん酔ってますね？ まあ、酔ったご主人はんは優しいからええけど」

「バルが帰ってきたってことは、もうお開きの時間だな」

「そうやね、じゃあ、みんな帰ろうか」

「俺が月村とバニングスを送る。武蔵はテストタロッサ一家を頼む」

「頼まれた」

こうして、今宵の宴会は終わりを告げた。

こういう風に人を呼んで宴を開くのも悪くない。

13：海

ああ、今年も夏が来た。それをひどく実感させるのは、髪を染めた爆乳ギャル達がキヤツキヤウフフに楽しんでる姿だ。多分、大学生達が男を漁りに来たのだろう。そうだな、漁らせてやるよ、見た目は幼いが、最高級の美少年だからな！

「さて、夏に向けて鍛えに鍛えた腹筋を見せつけてやる」

「ああ、女子大生に筆おろし、前世でもそうだった」

「マジ？ 俺は高三の夏に幼馴染とやったわ。まあ、イケメンに寝取られたけど」

「それはS A N値がガツツリと減りそうなイベントですな、俺の場合はビツチだったからダメージゼロに近かったが」

互いに鍛えぬかれた筋肉を見せつけて、静かに獲物が現れるのを待つ。そして、俺の上腕二頭筋に人の手の感覚が、よし、釣れた！ よし！ 一夏の思い出を手に入れました。アザース！

「流石は輝夫と武蔵、結構鍛えてるね……」

「筋肉量は武蔵の方が多いいみただけど、そうだねえ、武蔵は力重視、輝夫は持久力重視に鍛えてるんだね」

「オイ、俺達は自慢の筋肉で女子大生を釣ってるんだ。女子中学生のお前達は海でクラゲと遊べよ……」

視線を筋肉を触っている女の子の方に向けると、見知った姉妹が俺と武蔵の筋肉を触っていた。あ、水着はどちらも青のビキニ、アリシアが水色に近い青で、フェイトが普通の青だ。

女子大生をハントしているのに、この姉妹はなぜだか俺達の邪魔をしてくる。クソアマガ、俺達は大人な女子大生をヒーヒー言わせるんだ。君達は獲物じゃない。自慢の筋肉に触れないでくれるか？

「さて、女子大生フィッシングを再開しよう」

「アンタ達は煩惱の塊なの？」

お嬢様二人が蔑みの表情で俺達のことを見ている。

水着はこいつらもビキニ、バニングスが赤、月村が紫、自分のイメージカラーを理解しています。

「塊なんですよ、お嬢様の二方。俺達は女子大生のタワワに実った果実を貪りたいタイプの人間なんです」

「アンタ達なら中学生でも口説けるんじゃないの？」

「法律で未成年の人達と性的な関係になるとそこはかとなくヤバイですよね、それに、

中学生つて物凄く中途半端で食いたくない学年なんですよ。俺達、本物のつるぺたかグラマーにしか興味ありませんので」

女性陣達の蔑みの目を背にして、どうにか女子大生を食うだけのフェロモンを漂わせる。さあ、俺達の魅力に引き寄せられる女子大生達よ！我々に股を開け!!

そして、ようやく俺達に注目が集まる。そらそうだ、俺達の顔面偏差値は好みによっては百点満点、つまり、物凄くイケメンなのだ。そんなイケメンに魅了されない女は存在しない。さあ、俺に股を開きたいメス共よ！我に飛びつけ!!

「君達、お暇？」

「キャッ！ 声掛けちゃった!？」

そこそこの顔面偏差値と肉体をお持ちの完全に女子大生が俺達の筋肉と笑顔に釣られた。

「お二方、逆に貴方達はお暇ですか？ お暇なら、遊びませんか？ 勿論、こいつも用意してますよ」

コンドームを口に加えて、一発どうですか？ と、尋ねてみる。すると小恥ずかしそうにオッケーサインを頂きました！

「さあ、近くのホテルに行き——グヘッ!？」

「輝夫、浮気よくない」

「武蔵、そういうのは好きな人とした方がいいよ？」

「金髪姉妹！ 貴様達は俺達の一夏の思い出をタバコの火のように揉み消すつもりか!? 消えろ!! 俺は女子大生と一発やるんだ！ 彼女達が許せば二発、三発ま——ゴホツ!!」

「はーい、さかった犬は去勢しような」

「本当に、見た目だけだな……」

二十年前のアニメよろしく、頭に大きなタンコブを作って熱せられた砂の中にのめり込む。

砂を力強く握りしめて、ゆっくりと立ち上がる。そして、口に含んでいたコンドームを吐き捨てて、静かに海の方向に歩みをすすめる。正直、このクソアマ共に邪魔をされるなら、海を満喫する他ない。

「さて、海で泳ごうか、出来れば沖の方でサメに食われて死のうぜ……」

「ああ、あのクソアマ共に童貞卒業を邪魔されて生きるくらいなら、死んだ方がましだな……」

俺がクロール、武蔵がバタフライで沖の方向に体一つで移動する。死ぬなら、魚の餌になりたいと思って……。

「ネット張られてるのかよ…… 沖に出られないな……」

「あーあ、バタフライで泳いできたのに……………」

「……………戻る」

「た、助けて!?!」

「——アリスア!?!」

溺れているアリスアの姿が見える。即座にクロールとバタフライで駆けつけて、二人でアリスアに肩を貸して岸に運ぶ。

「どうしたんだ?」

「あ、足が攣って……………」

「ああ、お決まりの展開ですね、わかります。腫れてはいないから少し伸ばして安静にしてたら治るよ」

アリスアをお姫様抱っこして荷物置き場まで移動する。なぜだか、アリスアの顔は赤くなっている。

荷物置き場に到着したら静かに降ろして、足の状態を見てみる。

「あー、目立った外傷は見られない。多分、急激に冷たい海に入ったからだ。女の子は体温が低いんだから、あんまり無理なことはするなよ? 足だけでも軽い準備運動をしない。お兄さんとお約束ですよ?」

「実際はわたしの方が年上……………」

「いや、多分、おまえよりふた回りくらい年上だぞ……」

二十六歳で死に、今現在、十三歳、こいつの実年齢がナンボかわからんが、まあ、ふた回りは確実に年上です。はい。今現在の年齢をプラスすると三十九歳、アラフォーですわ、子孫繁栄をしたくなる年齢ですね。ああ、女子大生をヒーヒー言わせたい……。「つか、修一郎様はどこぞに？ 岩場で高町と一発してんのか……。コンドーム持つてるのか……。避妊は大切だぞ、一応は十三歳なわけだし」

「一応は女の子の前なんですけどー」

「ああ、すまん。俺はおまえのことを例えるなら、ハムスターとか、ハリネズミとかにしか見えないんだ」

「小動物!?!」

さて、今更だが、今回の成り立ちを説明しよう。

2

今日もダラダラ、夏休みに入っても俺達は基本的にダラダラとエロ本を読んだり、修一郎様の合成写真を精製したり、肉体を維持する程度の筋肉トレーニングをしたり、まあ、当たり前の日常を謳歌していました。はい。

「なんか、はやてが海に行くらしいんだ」

「へー、いつてら」

「俺達は基本的にインドアな人だから勝手にどうぞ」

「いや、女の子だけで行くのはダメだろ？」

「修一郎様とザツファイヤーは？」

「優男は優男、ザファイヤーは犬だろ？」

「おまえ、ヒデエーな？ 修一郎様は優男じゃなくて、主人公系優男だろ、これ、テストに出ますよ」

テレビのリモコンを駆使してチャンネルを右往左往する。この時間帯のテレビはくだらないものばかりだ。

「行くなら武蔵を連れて行けよ、俺は家でゴロゴロするから」

「オイオイ、輝夫&武蔵は基本的に二人で一つだろうが、二人で来いよ」

「いや、俺達は親友というだけで、それ以外は普通の関係だから、一心同体じゃないから」

「そこまで嫌がる理由は？」

「……特別には無いが、なんか嫌な予感がする」

「普通に海に行くだけだ。後は好き勝手にすりゃいいだろ」

「好き勝手に、ねえ……」

3

こんな感じで連れてこられて、好き勝手に女子大生と意味深な仲になろうとしていた

ら、好き勝手に出来ないという嫌な予感の中しているのである。

「……物凄く渋い顔してるけど、大丈夫？」

「ああ、基本的に俺達は嫌なことがあると渋い顔しかしないからな」

今回の参加メンバーはこのような面子になっています。

八神一家、テスタロツサ姉妹、お嬢様二人、優男、高町さん、はい、この面子。うん、ある意味、男は俺と武蔵だけだね、ザッフィーは犬だし、修一郎様はキングオブ優男だし、ヴィータの言葉をよく理解できましたわ、これ。

「すこしはマシになったか？」

「うん、もう大丈夫！」

「海に入るなら準備運動を怠るなよ」

「そうだね、海に入るのは、すこし休んでからにする」

「なら、タオルですこし足を温めておいた方が良いな」

タオルをアリシアの足に巻いて、隣りに座る。

「俺も疲れたからすこし休むかな」

「武蔵は何してるのかな？」

「アレは日焼けしてるな、日頃はインドアでメラニン色素不足だから一年分の色素を手してるんだろ」

「痛くない？」

「それが快感なんだよ、一夏の思い出みたいな？」

「M？」

「さあ、でも、男が日焼け止めを塗るのは格好悪いから」

ダラダラと荷物置き場でゴロゴロしていたら、アリシアの胸に視線が向いてしまった。

「えらく育ちましたね、正直、君には期待していませんでしたが」

「わたしだってお母さんの血を引いてるんだよ？」

「いや、でも、基本的に姉は妹より育たないという暗黙の了解があると思うのですよね、愛宕姉妹とか」

「大は小を兼ねます。はい、論破」

「そうですね、はい」

「普通、女の子の胸を見る時はもう少し煩惱にまみれているものじゃない？」

「いや、だって、アリシアは俺にとつたらやっぱり小動物の位置に存在しているわけで、ねえ、なんというか、そういう嫌らしい瞳で見れないんだ。多分、ヴィータと同じ位置づけだよ、君」

アリシア酷くどんよりとした表情になった。あれ、好きでもない男にでも、ヴィータ

と同じ位置づけと言われたら傷つくものなのだろうか？ でも、ヴィータの位置づけは美味しいと思うぞ、何故なら、最強の輝夫&武蔵に酷く甘やかしてもらえるわけだし。

「ねえ、触ってみる？」

「いや、アリシアちゃんのお胸より女子大生のお胸を触りたいです。いいえ、貪りたいです」

「馬鹿！」

左頬に楯が咲きました。はい。秋が訪れるのは早いですね。

「それにしても、修一郎様の姿を最近見ないな、こうも姿を見ないと合成写真を作る意欲も湧かんわ」

「…… あそこに思いっきりいるけど？」

「ああ、あの…… え？ なんか高町が物凄く他人行儀だな、あれ、どうしたの？」

「合成写真事件で三人からの評価がダダ下がりです、なのはちゃんも一緒に行動する相棒としか見られないようになったらしいよ。通称、ホモ一郎事件？」

「なるへそ、まあ、修一郎様はホモっぼいからお似合いだね！」

「直接の原因がよく言いますね」

「てへぺろ♪」

流石に合成写真とは言えど、なんというか、生理的に受け付けなくなったのだろう。

すこし悪いことしたかな？ いや、あの仕事を引き受けた対価にしたら安すぎるか！

「すこし泳ごうかな」

「おう、すこしは体操して泳げよ」

「了解！ じゃあ、頑張ってくるね」

さて、静かになったところでグデグデしますかね、俺は基本的にインドアなんです。はい。

……胸騒ぎがする。そうだな、この面子だったら、うん、お嬢様二人だな、顔立ちが整っていますから。それに、バニングス譲は欧米系で成長が早いし、月村は悩殺ボディを幼いながら持ち合わせていますからね。

立ち上がってお嬢様二人が向かったであろう場所に歩いて行くと見事に胸騒ぎは的中していた。

「ねえ、お嬢さん達、俺達と一緒に遊ばない？」

「いいです、結構です」

「そう言わないで、俺達、男二人で来て寂しいの！」

「……アリサちゃん、行こう」

「ちよ、待てよ！」

「あーん、わたしは安い男じゃないのよ！ 厚い胸板なんて触って！ 変態さんねえ」

嫌いじゃないわ!」

月村の方に向かっていた腕を掴み自分の胸板に誘う。

「な、なんだよ! 放せよ!」

「それにしても、中学生に欲情するとは、最近のナンパ師はロリコンになってきているな…… おい、男なら女子大生を捕まえろよ! 女子大生が一番食いやすいんだぞ!」

俺は女子大生を食いたい! こんな小便臭い小娘より女子大生の『ピー』を『ピー』して、また『ピー』してやりたい! ああ、男二人で来たらよかった…… そしたら二箱買ってきたコンドームの使い道があったのに…… ほら、コンドーム一箱あげるから、帰りなさい、そして、女子大生を見つけないさい」

「…… はい」

「ナンパ師にしては、なんとというか、素直でしたね」

「誰が小便臭いですって?」

「え、なんで俺にブチギレているわけ? ねえ?」

「流石に女の子に小便臭いは禁句だと思っただけど……」

「だって、俺からしたら小便臭いわけだし…… ゴホッ!」

あれれ、真夏なのに権の数が増えていつてるねえくなんでだろく

「やっぱり来ない方が良かったわ……」

「どうしたの、輝夫？」

「ああ、フェイトか、真夏なのに秋の気分を味わってただけだ」

「ほつぺたに手形が……」

「樫みたいだろ？ 真夏の紅葉狩りでもどうですか」

「すこし少ないかな？」

「真の風情は三枚でも感じられるんだよ、侘び寂びだよ、フェイトさん」

「そ、そうなんだ……」

ああ、なんというか、困ってるフェイトさんはいいわあくお姉さんよりずっといいわあく

「何か食うか？ ラーメンとか、チャーハンとか、まあ、海の家だから糞不味いと思うけど」

「いいの？」

「ああ、俺は法外な料金を管理局に請求することで有名な輝夫&武蔵の輝夫の方ですよ？ 多分、君の一生分のお給料を既に稼いでいます」

「あはは……じゃあ、お言葉に甘えて」

荷物置き場で財布を入手して海の家に入ってみるとザツフィーとシグナムの姉御が必死にラーメンに食らいついていた。

因みに、水着はザツフィーが迷彩柄のズボンタイプ、シグナムの姉御は何故だかウエットスーツで、体のラインがよく見えてエロさを感じられた。

「……何やってんの貴方達」

「今は神聖な勝負の最中だ。だから喋りかけてくるな」

「ああ、今は真剣勝負の最中なのだ……」

神聖な勝負がラーメンの早食いなのか？ まあ、騎士達の思い立つことは俺の脳内回路では想像することが出来ない。そうさ、こいつらは古代ベルカの騎士なのだ。そう、そう、騎士の脳内はバツタとか、カプトムシとかで出来てんだろ、多分。

「麻婆丼をください」

「じゃあ、ラーメンを一つ」

「麻婆とラーメンね、千二百円になります」

「二千円から、あ、お釣りいりません」

席でザツフィーとシグナムの姉御の姿を見てみると、三杯目のラーメンに手を付けていた。なんといいですか、俺も中身はアラフォーなのだが、大人の競争って醜い限りです、ね、と、思いました。

「そう言えば、プレシアファーストママは来てないの？」

「ファースト…… ああ、リンデイさんがセカンド…… 母さんは、この年齢になつて

水着が着れるわけないでしょ！　って言ってたよ」

「まあ、歳を弁えている辺り、好感が持てますわ」

「ひ、酷いね……………」

「基本的に毒舌で有名ですからね、西風輝夫ちゃんは」

「久しぶりに苗字を聞いたような気がする」

「まあ、基本的に西風と呼ぶ奴は少ないからな、あのお嬢様二人も俺達のこととは名前呼びだし、俺と武蔵のことを苗字で呼ぶのは……………高町と修一郎しやまくらいじゃないの？」

よく考えると俺と武蔵は基本的に名前で呼ばれているよな、逆に西風と呼ばれるのは慣れてないし、西風って言いにくいよな、セイフウなら言いやすいが、ニシカゼは若干言いにくい。

ボーっと二人の接戦を眺めていたら、五杯目に突入、そして、若干だが、ザツフィーの方が速く完食した。

「ふつ、この程度か……………」

「くつ……………不覚……………」

「大人の競争って醜い限りですね」

「そ、そうかな？」

シグナムの姉貴がフルフルと震えながら、俺の方に歩いてくる。そして、彼女から一生聞くことの出来ないであろう言葉を浴びせられる。

「すまない、輝夫……金を恵んでくれないか？」

「いくら？」

「六千円程……」

「……もしかして、負けた方が全額払う約束だったわけ？　　というか、お前達さあ、そ

ここの給料を貰ってるだろ？」

「主に管理されている……」

「そう……小狸に付けとくからな」

一万円札を無言で取り出してシグナムに渡す。すると、かたじけないと情けない声が聞けた。なんとというか、それだけで満足です。はい。

「お兄ちゃんとお嬢ちゃん、出来たよ」

「はいはい、おお、美味そうだ」

「綺麗な彼女さんだね、どこで引っ掛けたの？」

「お友達の妹さんだよ、彼女じゃない。俺は女子大生が好みなんだ」

「中学生くらいなのに良い趣味してるなあ」

麻婆丼とラーメンを持って席に戻る。

「海の家のお父さんが綺麗な彼女さんって言ってたぞ、いつそのこと付き合うか？」

「そ、そんなことしたらお姉ちゃんに怒られちゃうよ……」

顔を真っ赤にして恥じらう乙女らしき、これ、お姫様にも少しは見習ってほしいです。
はい。

「おー、結構美味しいな。まあ、麻婆が食べたかったのもあるが」

「で、でも、お姉ちゃんもちゃんと話したら…… あーううー……」

「おい、ラーメン伸びるぞ？」

「ひゃ!? …… そ、そうだね！」

外の風景を眺めていたら武蔵が女子大生を引つ掛けようとしている姿が見えた、俺も食事が終わったら引つ掛けに行こうかな？ そして、ラブホテルで一発、いや、三発。最近溜まってるんだ。

「食事中に考えることじゃないな……」

4

空が赤く染まり、哀愁を漂わせている時間帯。俺は輝夫と一緒に女子大生を食べようと尽力したのだが、大抵がテストタロツサ姉妹と八神とお姫様による妨害工作によって終わってしまった。なんというか、物凄く悔しい。

「計、四人の女子大生を食べなかった……」

「俺達は何のために男に生まれたのだろうか……」

「男として生まれたから、生まれたんやろ」

「小狸、シグナムが俺に一万円程借りたんだが、いつ返してもらったらいい？」

「私服を肥やして行くせに一万円くらいで女々しいな、やから腐ったミカンって言われるんよ」

「まあ、一万円は目を瞑つたとしても、後者の腐ったミカン認定は君の独断と偏見だと思うんですけど……」

輝夫の方もそこはかとなく苛立ちを隠せないようだ。

「よく考えると、スイカが余つてたな…… 割るのは面倒だから、修一郎さん、お願い」

「え？ なに？」

「適当に切り裂いて、ご自慢のデバイスで」

「俺のデバイスは包丁じゃないんだから……」

「まあ、普通に包丁はあると思うけど…… やっぱ刃物のスペシャリストは修一郎様でしょ。俺、修一郎様の刃物の腕に感銘を受けました。正直、貴方ならこれだけの大物でも大丈夫だと思っています。貴方は刃物を統べる王、そして、刃物が身を捧げる王。例えるなら、貴方の体は剣で出来ている！ そう、貴方は無限の剣を従え、統べることの出来る伝説の王！ その人なのですか!? さあ、その腕をスイカで試してください」

「なんか、物凄く皮肉っぽく聞こえるんだけど……」

「ああ、これだから優男はダメなんだ。輝夫、普通に切れよ」

「優男!?! 俺のこと?!?」

「ハイハイ…… あ、包丁持ってきてねえわ…… カッターで切るか」

輝夫は基本的に筆箱を持参している。何故なら、何時でも、何処でも、悪質な悪戯と女の子のメアドか電話番号を入手するためである。その中には、もちろん、大振りのカッターナイフも収納されている。

スイカを滑らせるように切り裂いていく。

「このスイカ、何かツプくらいだ?」

「Hくらいじゃね?」

「それは夢が膨らむ大きさですね、はい」

デコピンした瞬間に花を咲かせるように俺と輝夫、ザッフィーと修一郎さんのを引いた数のスイカが切り分けられる。

「流石は我が家の料理人、常人の域を軽く通り越していますね」

「正直、包丁を握らせたなら優男の異名を持つ修一郎様にも絶対に負けません。今日はカッターナイフでしたけど」

「あれ、これ、数が足らへんよ?」

「男組は女の子達からわけてもらおう設定にしたんだわ。さあ、修一郎様！ 優男の力を存分に見せてください!!」

俺と輝夫はニマニマと修一郎さんの姿を見る。最近のホモ一郎事件で殆どの女性陣がまあ、生理的に無理になってる。この状況でどれだけの女友達、もしくは、ハーレムの一員がスイカをわけてくれるだろうか？ これは見ものだ。

「武蔵、このスイカ少し大きいから少し上げる」

「おう、じゃあ、甘くない端っこを貰うわ」

「輝夫、少し食べる？」

「ああ、じゃあ、俺も端っこを貰うよ」

カッターナイフを借りてスイカの端の部分を少しだけ刈り取って口に運ぶ。輝夫の方も同じように端を切って口に運ぶ。まあ、テスタロッサ姉妹のどちらかがスイカをくれるのはわかっていた。

ハムスターのように少しずつムシャムシャとスイカを食べ進めていると高町に動きが見える。

「可哀想だから…… 少しでもあげる……」

「な、なのは！」

「流星はメインヒロイン、修一郎さんにスイカをわけてあげた！」

「まあ、これは想定している。重要なのは、お嬢様二人なわけで…… あ、普通にムシヤムシヤ無表情でスイカ食ってますよ、やっぱり生理的に受け付けられないのですね」

「なんか、やっぱり悪いことしたかな？」

「した、かも、な」

こうして、一夏の思い出はなんとというか、うん、普通に終わった。そして、筆おろしは少し先のことになりそうだ。

家に帰ったら風呂を沸かしたんだが、こういう日に限ってお嬢様が上がらないのだ。俺と輝夫は激おこぶんぶん丸でお姫様を八神亭に連れて帰った。風呂の恨みは重い。そして、海の後の風呂は気持ちがいい。

14：特典

毎日が夏休み、冬休み、春休み、それに加えて秋休みまで付属している俺達は、まあ、なんというか、夏休みだろうが、何だろうが、普通の日常を謳歌していた。

「なあ、親友」

「どうしたんだよ、親友」

「おまえの特典ってバルじゃん、どうしてバルを選んだわけ？」

「ああ、絶賛。パチンコ屋でパチンコを打っているであろうバルバロイのことか」

武蔵が質問してきたバルのこと、正直、バルのことについては何一つ話していなかった。正直、武蔵もバルは俺の特典で、一緒に住んでいて、ここ数年でパチンコ依存症になった頭の悪い、だが、高性能なロボットとしか思っていなかったのだろう。

「そうだな、バルを特典に選んだ理由は……死ぬ数日前にアーマードコアf aしてたから。そして、後ろ盾が欲しかったんだよ」

「後ろ盾？」

「ああ、だって、基本的に暴力で事件を解決する世界だし、どんなに極悪な手を使ってでもヒロインと意味深な関係になろうとしていたから、自分の背中を守ってくれる存在が

一人欲しかった。容姿とかは、お願いしたら改変してくれたわけだし」

「そうか、輝夫は後ろ盾を手に入れて大暴れする為にバルを選んだのか」

武蔵は長年の疑問が消えてなくなった、という表情になる。

だが、こういう話をされてしまうと、やはり、武蔵の特典のことも気になってしまう。

「武蔵の特典のデバイスって、どのくらい高性能なの？」

「ん？ そうだな……まあ、そこはかとなく強いし、魔法も沢山入ってるし、ミッド

チルダとベルカのガツチャンコ式だし、うん、普通に強いよ。うん」

「貰った理由とかは？」

「リリカルなのはの世界なら、デバイスがあれば、まあ、生き残れるだろうと思って。あと、踏み台行動に至ったのは、魔力量が信じられないくらい多かったから、なんというか、愛、暴力、セックスを手に入れようとして」

「本当に、俺達って似てるよな」

「女の趣味以外は基本的に似通ってるな」

似通った二人、だからこそ、こんな風に鞆に収まったのだろう。

だが、最初の頃は結構、殺し合ってたよな。一秒でも早く息の根を止めようと必死だった。

今更だが、俺の実力の五割を作ったのは武蔵と言っても過言ではないレベルだ。

「そう言えばさあ、俺達ってどの辺りから仲良くなったのかね？」

「そら、プレシア・テスタロッサ事件で、ある程度の交友は持ったからな。正直、修一郎様を頼るよりは、殺し合ってた武蔵に頼った方が確実かな、と、思ってたし」

「でもさあ、アリシアを生き返らせるのに、俺、必要だった？」

「いや、実際のところはアリシアを生き返らせるのに俺とバル以外の力は不要だった。でも、プレシアの罪を無くす、という観点から見ると、ロストログアを持つてる少年だけではアピール不足。だが、魔力量SSSの怪物魔導師がいたらどうなる？ インパクトを考えると、まあ、妥当なラインだった」

「俺って、餌だったの？」

「酷く言えばそうだが、良く言うとおまえ以外に代わりは存在しなかった」

正直、管理局に切れるカードがあまりにも少な過ぎて、どうにか協力者を掻き集めていた段階だったんだ。協力者は、まあ、フェイトの姉と母親を助けるというカードを切れば、それなりに集まったと思うが、プレシアの罪を掻き消す。彼女が犯した罪を裁かないでどうにかするという、大義名分のない何かを手に入れるとなると、協力者は激減する。だが、その大義名分のない何かを積極的に肯定してくれる存在が一人だけ存在した。それが枚方武蔵。そして、彼一人でも十分に切り札、ジョーカーになりえた。

正直、アリシアとフェイトがプレシアを出してくれとお願ひしてきた時は、若干戸

感った。一応は彼女のことを犯罪者だと理解してただろうに、助けてくださいとお願ひされた。最初こそ突っぱねたが、まだまだ幼い子供が親の顔を一ヶ月に二回しか見に行けない。そして、母親は犯罪者、そういう立場でいる状態を哀れに思った。まあ、正直、一番の理由は姉妹の涙とプレシアの母親の顔を見たから。それに付け加えて、管理局からの御命令は下衆野郎を殺すことと、そいつが売りさばっている麻薬の出所を発見すること、これは俺と武蔵にとってはとてもイージーな仕事でしかなかった。

「で、事件が終わって俺達は鞆に収まったわけだな」

「ああ、その後は基本不干涉気味に騎士達と関わって、何故だかお姫様に懐かれたもんな」

「まあ、俺達が小狸を助けるためならリンカーコアの魔力を抜き取っていいって言ったからな。それを境に騎士達とはある程度の交友関係が作られた。でも、主の方は友達知らない友達に若干の不信感、妹分のヴィータが異様に懐いている。あんまり良い顔は出来なかつたんだろ。俺は腐ったミカン、武蔵は影が薄い超弩級戦艦となっています」

「妥当なラインだと言えば、妥当だな」

「俺達も八神のことを小狸とか呼んでるし、まあ、妥当だろ」

その後はヒロインを諦めてダラダラと生活してたらアリスアに慕われて、俺達が聖祥大付属に残れと言っても無理やって市立の中学に入ったり、色々あった。

昔のことを振り返っていると、なんと言いますか、うん、そこはかたなく壮絶だな。

「今では管理局に法外な料金を提示して仕事を引き受ける傭兵」

「任務達成率は100%」

「なんとというか、結構壮大だな」

「そうだよな」

最初の任務はアビーを殺害する任務だった。武蔵の方はテロリストの殲滅。

その後は互いにコンビを組んで任務に出陣した。

「二回目の活動は…… そうそう、反管理局派に寝返った魔導師の暗殺だったよな？」

「慎重な奴で、手下からも慕われてたのか、情報が少なかったよな。でも、見つけて殺した」

「ああ、やっぱり発信機は万能だ。ミッドチルダの方がGPSがよく発展してたのが決め手だったよな。手下もバカだから発信機付けられたこと理解してなかったもん」

「その魔導師はどつちが殺したんだっけ？」

「基本的に下っ端を武蔵に頼んでたから、確か俺が殺したような気がする」

「管理局もエグイ仕事を十数歳のガキに頼んだもんだな」

三回目の出陣は…… そうそう、管理世界のどこかの砂漠に現われた魔獣の討伐だった。

特徴は魔法が効かなくて、動きが速くて、見た目は像のように大きい狼だった。管理局でのコードネームはフェンリルだったか？ 俺達は殺すまでワンワンと勝手に呼んでいたが。

「三回目の出撃は金がかかった。ヤクザから大量の銃火器を購入して、一億円くらい使ったからな」

「ああ、多分、あの日以上にヘビーマシニングを乱射する日は来ないと思う」

報酬が前払いだったのが幸いだった。金がなければナイフとか、棍棒で戦うことになっていたかもしれないし。

「四回目以降は基本的にテロリストの殲滅だったな、二人で一つのテロ組織を壊滅させたこともある」

「最近は、テロリスト多過ぎ!?! 管理局の恨まれかたが半端ないな、とか、思ってます」
「俺も思ってた」

それなりの数をこなして、今現在に至っている。

「……なあ、俺達の特典って、あんまり意味を成してないな」

「……そうだな、俺のデバイスも殆ど支給品のデバイスと同じくらいの魔法しか使わないし」

「うん、選択肢をミスったかも」

今日も輝夫と武蔵は元気です。

15：砂遊び

「うーい！ 公園だああああ!!」

どうも皆様輝夫です。今日はどうしようもなく童心に帰りたいと思つて公園の砂場に来ています。よく幼稚園児がもつてる砂遊びセットも100円ショップで購入しました。え？ 童心に帰るにしても幼児に戻り過ぎじゃないかって？ バブー

「むさしきゆん！ ぼっくんは大きなお山を作つてトンネルつくるお！」

「ぼっくんはお城つくつちやうもんね！ 二条城つくつちやうもんね！」

「日本式かーい！」

とりあえず十三歳の男二人が公園の砂場で砂をこねくり回すという警察出勤案件ですが私は元氣です。

というわけで今日はツツコミ不在のチキンレースを思う存分に楽しめる比較的珍しい日だ。俺はね、俺様はね、昔から言つてると思うけどボケ担当なんですよ。ボケないと死ぬわけですよ。ちゃんとボケにボケで返事してくれる相棒がいるのになぜだかキツパリと捨てた女達が妙にねちっこくツツコミ入れてくるんですよ、未練がましいですわね。

「むさしきゅん！ ぼっくんのお山どう？」

「うーん……Dカップ!!」

「うわーばれたかー!!」

超ハイテンションでとりあえず思う存分に砂遊びをしているとふと自分は何をしているのだろうかと思ってしまった。その瞬間に武蔵の顔を見ると同じように自分は何をしているのだろうかという真顔に戻って作り上げた山々を凝視する。

「……高町（現在十三歳）の乳はこのくらいか」

「……いや、最近みてないからもう少し成長してるかもしれない」

「……そうだな、じゃあ、もう少し盛ろう」

俺と武蔵はとりあえずCカップ程度の山を作って知ってる女の胸の大きさを構築していく。

その時、その時だ……頭に電流が走る！

「これ、砂でもおっぱいなんじゃないか？」

「おまえ天才かよ……」

とりあえず転がっていた石ころを乳首に見立ててとりあえず知ってる女達の胸（砂）を遠くから眺める。そして俺は指を指した。

「俺はフェイトたんにする兄弟」

「……悩ましいが俺はシグナムの姉御に決めたぜ兄弟」

同時に生睡を飲み込んで選択したおっぱい（砂）に手を伸ばす。そう、これは砂だが美少女&美女の乳、女の子の乳なのだ。そう、これはおっぱいなのだ!!

だが、だが、足りない……圧倒的に足りないのだ……!

「兄弟、兄弟はもう気がついていると思う」

「わかってるぜ兄弟。これは完璧な砂のおっぱいじゃない……」

「……作り上げなければならぬ。完璧な女体を作らなければおっぱいじゃない」

「でも、頑張って作ったからいただき——ゴボガア!」

口の中に砂が大量に入っていく感覚と後頭部に響き渡る鈍痛、これは確実に知り合いに発見されてこういうことをしていると事実を認知されたパターンですわわかります。

「うえーん! ぼっくんのフェイトたんおっぱいが無に帰っちゃったよー」

「シグツパイがグツバイしちゃったよー」

「誰だ……心当たりが多すぎて困るわ……」

はいはい、わかってますよ、俺と武蔵に暴力振るう組み合わせはこの人達しかいません。
ん。

テストタロツサ姉妹があらわれた。

お嬢様コンビがあらわれた。

子狸があらわれた。

はい、お約束。

「……どうして、どうして神様はぼっくん達の遊びをこの子達に報告するの」

「……そうだよね輝夫きゅん、ぼっくん達だっておバカな遊びをエンジョイしたいよね」

「……いや、まて、ある、まだある!?!」

片隅に作り上げたプレシアおっぱい（砂）が残されている。正直なところ作るだけで終わらせたかったがもうこの際になったら背に腹は変えられない。もう突貫するしかない。一秒でもタイミングがズレたら確実にプレパは崩される。だから二人で同時に行くんだ。もう時間はない!

「燃えろ！ 俺の右手!! プレシアのおっぱいに届け!!!!!!」

「お母さんはやめて!」

フェイトたんがバルディッシュでプレシアおっぱい!!（砂）を粉碎した。

「……………」

俺と武蔵はその場に座り込んで考えた。

「流石にプレシアは無いな」

集団リンチされたの言うまでもない。

16：お菓子

両手両足をロープで縛り付けられている。正直な話しをするとここがSM風俗だったら余裕で受け入れられるわけなのだが実を言うと、いや、言わなくてもわかるだろうが自分の家で特別親しくもない子狸に拘束されている。え、なんで？ ヴィータにドロップキックくらつて一瞬で拘束されたからいまいちわかってない。

「あの、えっと……何なんですかねこれ……」

「わたしは思ったんや……」

「え、何がですか？」

「あんたに勝ちたい」

え、この子なに言ってるんですかね？

「わたしの得意分野に無理やり引きずり込んで勝つよ……」

「やだ、この子こわい……」

「というわけで審査員はこの四人！」

ゾロゾロとお嬢様コンビとヴィータ、なぜだか顔が腫れ上がっている武蔵（手錠付き）が入ってくる。これは確実に自分の策で自滅するパターンですね。もうね、わかりきっ

てるんですよ、このパターンは戦を仕掛けた方が確実に負けるんです。

「今日はお菓子作りで腐ったみかんをギャフンと言わせてやるんや」

「ほう？ お菓子作りとな……いいいぜ、小娘風情にあーしのクツキング技術で翻弄してやる」

「輝夫、ちゃんと手を洗って作りなさいよね」

「流星はバニングスの姉御！ 言葉がキツイ!!」

とりあえずロープを解いてくれたのでお菓子作りの材料を揃えに出かけようとするが子狸に足を引つ掛けられる。そして見事に顔面ダイブで鼻血ダラダラなのである。痛いのである。

「なにすんじあい!?!」

「わたしはもう素材そろえたんやけど?」

「え、俺に素材を買いに行く猶予を与えないとのことですか……」

「うん!」

うっわ、満開スマイルで言い切りましたよこの子……。

それにしてもお菓子作りで材料の差をつけられたら結構やばいな、凝った菓子類は大量の材料を使用するわけだし家の中にあるような素材で手頃で美味しい甘い物は難しいよな……。

「じゃあキッチン借りるね♪」

「……畜生、金持ちになったから最高級のキッチン装備を整えたせいで結構無理ゲーかも」

高性能オーブんだとか泡立ての機だとか、もうね、フレンチレストランの厨房並の装備が整ってるから確実にケーキ類を作られたら負ける。どうすりゃいいんだよ……。

冷蔵庫を開いたと同時に八神は買い物袋から大量の材料を並べ始めた。いちごのシヨートケーキだな。

「……甘い材料はあんこくらいか」

「残念やったね、昨日二人とあんみつを食べに行つたんや」

「つまり和風は少し不利か……」

「フツフツ」

和風はあつさりした味わいだと思われるが実は結構甘い。とくにあんこは最高級品と廉価品の味の開きが少ない。確かに最高級のアんこはコクだとか旨味だとかで廉価品よりは確実に上なのだがあんこという食材が毎日食べたいと思う程の中毒性があるわけじゃないから差は少ない。

まあ、使える食材がこれだけならこれを使うしかないよな……。

「よっし……腹をくくるか！」

とりあえず棚からお茶つ葉を二種類取り出す。ほうじ茶と緑茶だ。今回の課題はあんこという食材をどうあつさりと思わせかというのが課題になる。そうなると香ばしいほうじ茶とほろ苦い緑茶の選択肢は大切だ。

「……緑茶にするか」

奇をてらつてほうじ茶で攻めるのも悪くないがほうじ茶は冷やして飲むと少しだけクドさが入るわけだから、冷たい緑茶の方が和風デザートだと確実に一歩上だ。

お茶の選択肢ができたところで八神の方を見ると鼻歌を歌いながらスポンジの生地をかき混ぜている。うっわ、美少女のお菓子作りとか萌え要素満載なのに萌えねえ……。

「失礼なこと言わんかった？」

「滅相もございません」

とりあえずあんこを使用した王道はぼた餅だろう。これは俺の得意料理、婆ちゃん……婆ちゃんの秘伝を使わせてもらうぜ……。

もち米とうるち米を用意して慎重にもち米とうるち米を配合する。もち米の柔らかさとうるち米の甘みを強調させる配合、これは前世の婆ちゃんの直伝だ。

「とりあえずケーキは時間がかかるわけだしじっくり行きますか」

配合した米をミネラルウォーターに浸して20分放置、急速炊飯で10分、とりあえ

ず八神が生クリームを塗る頃には確実に炊きあがるだろう。

2

「あのーぼつくんはどうして未だに拘束されてるんですかね？」

手錠をガチャガチャしてお姫様に懇願するが鍵を無くしたとか言つて放置プレイに徹してくれています。正直ね、正直な話しをするとね、なんで自分の家で拘束プレイされるんですかね!?

「あーあ、どうしてぼつくんとてるをきゆんは面倒くさいことに巻き込まれるんですかね」

「昔ほど面倒くさくなくなったからじゃない」

「バニングス様、一つだけ言いますけどぼつくんとてるをきゆんは君達を嫁だとか言つて追いかけて回してたんですよ、もう少し嫌っていただけですかね……」

女心は秋の空とは言いますが流石にここまでフレンドリーにされると困惑するんですわ。

そういえば……輝夫が負けたら何されるんだろ……？

「輝夫が負けたら俺達どうなるわけ？」

「うーん、いつもみたいにセンブリ茶のデスソースじゃないか」

「……うわーん、もう辛い飲みたくないよおー」

正直、料理の対決で輝夫が負けるとは絶対に思わないけど何か理由をつけて確実に罰ゲームを仕掛けてくる子狸とお姫様には抵抗できないんだよ、だから輝夫は押入れに入ってドラえもんを懇願して俺はタイムマシーンを召喚するために机の引き出しを必死になつて探すんだよ。

「うえーい、今日は台が一台も空いてなかったんで帰りましたわあ……」

「あ、バルくん久しぶり」

「おお、月村とパニングスのお嬢はん久しぶりやなあ！ あれ、ご主人はんは？」

「今ね、はやてちゃんとお菓子対決してるの」

「ほへえ……また面倒くさいことに巻き込まれてますなあ」

バルは手錠で拘束されている俺のことをチラリと見て指を四本立てた。こいつ……俺に金を露骨にセビリやがったぞ……。

「まあ、武蔵はんがいいって言うならワイは構わんですかね」

「てめえ……本当に輝夫のペットか……？」

「武蔵はん……金は命より重いんですわあ……」

「……払う！ 払うから!!」

バルはどこからか針金を取り出して手錠の鍵穴をほじる。すると二分で両手の手錠は外れた。これで輝夫を生贄に逃げるができる。ああよかった、今日は親友が泣く

だけで終わるんだ。俺への被害はゼロになるんだ。

両手に冷たい手錠の感覚が戻る。

「なんか逃げ出しそうだから付けとくぞ」

「……うわぁーん!!!」

3

さて十分に水を吸った配合米は完璧だ。

一方、八神の方はスポンジの様子を体育座りしながら眺めている。

とりあえず妨害工作は見られなかったから一応は正々堂々と料理対決はしてくれろみたいだ。

「……よし、行つて来い」

炊飯を開始して後は祈るだけだ。

「子狸さあ、もう少しぼつくん達の扱いに気をかけていただけませんか？ 俺と武蔵は君達と仲良くなりたいたいわけじゃないんですよの。どちらかという顔見知り程度の関係になりたいのにどうして君達はぼつくん達に絡んでくるわけ」

「サンドバッグって結構高いし置き場所に困るんよ」

「……ぼつくん達は生きてるサンドバッグですか」

どうしてだろうか、三年くらい前だったらご褒美ですワン！ とか言いそうだけど事

今に至っては全然うれしくないワン！　なんでこの子達は高町みたいに俺達のこと嫌いになってくれないのよさ……。

「それに……憎めないバカっておるやん……」

憎めないバカねえ……正直なところ全力全開フルパワーで憎んで欲しいところなのですが……。

でも、今のヒロイン達にとつて俺と武蔵つてのは親しい男友達つて位置づけなのかね？　好きだけどLoveじゃなくてLikeの方、嫌味なく付き合える男友達つて感じなのか？

これつて良好な関係かもしれないけど俺達みたいに冷めてないと生殺しなんじゃないですかね？

「もし、俺と武蔵が今の生活に嫌気が差して県外の誰も知らないところに逃げたらどうするよ」

「——それは駄目!!」

「……らしくねえな」

「……友達がおらんくなるのはもう嫌やなんよ」

友達、友達ねえ……。

よし！　日頃の恨みを晴らすためにそのうち一週間くらい誰にも報告入れないで旅

行に行こう!!

「……今、確実に誰にも言わないで一週間くらい旅行に行つて驚かしてやろうとか考えたやろ」

「なんでわかるの?」

「……最低」

炊飯完了の音が鳴り響いたと同時に炊飯器から中身のもち米を取り出してボールに移して団扇で熱を冷ましていく。粗方の熱がとれたら小さいすり鉢に塩を適量入れて塩をできる限り粉末にする。

塩つて砂糖と同じくらい重要な素材でね、色んな料理の味を整えるわけなんだけどと甘い物に限つては甘さを強くする効果があるのさ、そしてあんことお塩の相性は◎で完璧。

「ほいほい」

八神の方もスポンジが完成して最後の仕上げに入っている。

俺もビニール手袋をつけてこしあんともち米をなじませてぼた餅を構築していく。

「完成!」

「とりあえず品は完成てるかね」

「じゃあ、先行はわたしがもらうね」

「どうぞどうぞ」

まあ、負けてもどうせセンブリ茶&デスソースだしいつものことか。

3

「はーい、みんなおまたせ」

綺麗に切り分けられたいちごのショートケーキ四個、流石は八神一家の厨房を仕切っている女だけあって料理の腕は素晴らしいの一言に尽きる。武蔵の方を見ると八万円は高いよなどか言いながら放心状態に入っている。

「ご主人はん小遣いください」

「死ね」

金をせびるバルに暴言を吐き捨ててとりあえずは八神のケーキの採点を見守ろう。

「はやてちゃんの手がけすごいね」

「悔しいけど家より器具が揃ってたから綺麗に作れたんよ」

「うーん、見た目は完璧ね」

「……八万円のケーキ」

「美味い！」

ヴィータはもう口の中に放り込んでいるが三人は点数を考えるために少しずつ口の中にケーキを入れていく。

ああ、受け入れよう。もう逃れられない。

でも、一応は勝負つてことだし自分も作った料理を提供しなければ。

「じゃあ、とりあえず俺のぼた餅です」

「ぼた餅久しぶりに食べるかな？」

「綺麗に作ってるわね」

「食っていいか？」

「ちよつと待つてくれ、こいつの最高に美味しい食べ方を教えてやる」

かち割り氷の入った湯呑に濃い緑茶を注いで一人ひとりに手渡す。

「濃いから少し苦いけどこれを飲むからこのぼた餅が最高に美味く感じるんだ」

「……いただきます」

警戒しながらも濃ゆく煮出したお茶を一口飲んでからぼた餅を口に入れるバニングス。そしてその味に一瞬で目を見開く。当たり前だ……これは婆ちゃん直伝の伝説のぼた餅なんだから……。

「濃ゆいお茶の苦味を完璧に消し去る奥深いあんこの甘さ、でも舌に残るピリツとした塩気、そしてもち米のふんわりとした風味……」

「滑らかなこしあんの上に少しだけ乗ってる粉末状のお塩が甘みを引き立てて苦かったお茶がすごく美味しく感じるよ……」

「うまい！ もう一個!!」

とりあえず守備は上々だが武蔵の出した10点は確実に取り返せないよなあ……。
四人は吟味した上で静かに点数を書き記した。

アリサ「8点」

すずか「8点」

武蔵「7点」

ヴィータ「8点」

「日本の柔らかい美味しさを感じられたわ」

「すごく美味しかったよ輝夫くん」

「まあ、輝夫の料理に不味いはないからな」

「もう無いのかよ……余分に作っておけよな……」

ああ、敗北したなあ、またセンブリ茶とデスソースかよ……。

えーっと、 $6 + 7 + 10 + 8$ で31、俺が $8 + 8 + 7 + 8$ で……31？

「……同点？」

ああ、婆ちゃんありがとう……俺は罰ゲームを回避することができました……。

「じゃあ、両方ともに罰ゲームね！」

「え？」

「だって同点なら罰ゲームしないと」

「ええ……」

ああ、逃れられないのか、俺はアレをまた飲まなくてはならないのか……。

「じゃあ、罰ゲームは……好きな人に愛の告白電話で！」

バニングスが唐突に罰ゲームを提案してきた。愛の告白電話？ そんなのでいいの
!?

俺は速攻で携帯電話を取り出して電話帳の中から一人を選択する。

「愛の告白をしたらいいんだな！ それでセンブリ茶&デスソースを回避できるんだよな!？」

「なんで愛の告白でよろこんでるん!？」

「だって、だって……センブリ茶&デスソースより愛の告白の方が体に負担が無いもん……」

「……お先にどうぞ」

俺の世界で一番愛している人……そんなの決まっている……。

俺のことを世界で一番無下に扱って嫌ってくれて……。

いつもいつも気持ち悪い奴みたいな目で見てくれて……。

心の底から俺のことをゾクゾクさせてくれる最愛の人……。

——それは！

「修一郎しゃま！ ぼつくん君のことがラブアローシユート！ 大好きすぎてドキがムネムネ！！ ムラムラハートでドッキング準備完了！！ ああ、修一郎しゃま大好きだお！！！！」
 ツーツーツと響き渡る携帯電話、俺は素晴らしくいい気分になった。

ああ、今日は素晴らしい一日になり……ゴハッ？

くの字になって吹き飛ばされる。そしてバニングスとヴィータが蔑みの表情で何度も何度も俺のことを踏みつける。どうしてだろう……俺がこの世界で一番愛してる人に愛の告白しろって言われたからこの世界で一番愛してる人にイタ電かけただけなのに……。

「あんたね……もう少しまともな脳みそにしなさいよ……」

「だって私が愛してるのは修一郎様なの！ この心に嘘はつけないの！！」

「俺との関係は嘘だったのか!? アレだけ愛してるって言ったのに……」

「むさしきゆん!!? だって……だって……! むさしきゆん最近つめ——ゴバガッ!!」

「死ね」

とりあえず体中が青アザになるくらい蹴られたところで八神が顔を真赤にしながらか電話を耳に当てた。すると俺の携帯電話もほぼ同時に鳴り響く。

「……いつも馬鹿にしてるけど、あなたのことは嫌いじゃありません」

「……………」

「……逆に、いつも友達がお世話になってて」

「……………」

「……少しだけ羨ましいと思ってます」

「……………」

「そ、それじゃあ！ き、きるね!!」

……………。

「ええ!? 修一郎様もぼっくんのことがしゅきなお?? ぼっくんも大好きだお!!

じゅつと隠してたんだね!! でも、これで相思相愛のラブラブ関係だお!」

「「死ね!!」」

死にたい。

17：誘拐

「むさしきゆん！ 今日が絶対に見つからないように遊ぼうね！」

「うん！ ぼつくんてるをたんと遊ぶのだいしゆき！」

どうも、輝夫です。

最近考えたんですが、外にお出かけた方がヒロイン達に殴られないのではないかな？
そう思っただけですが、外に出かけた方がヒロイン達に殴られないのではないかな？
ありませんが殴られるよりは退屈に散歩していた方がマシに感じる自分があります。

「てるをたん！ ガリガリ君たべよ!!」

「むさしきゆんナイスアイデア！ コンビニ探そ!!」

「あ、輝夫くんと武蔵くん」

どうしてだろうか、どうしてぼつくん達は原作ヒロインとの遭遇率がこうも高いのか？
お散歩に出かけた後のヒロイン遭遇率が九割超えてるんですけど？ 十回に九回
遭遇とかエンカウント率の調整がファミコンのクソゲーよりヤバイよ……。

いや、さて？ 今日月村一人のエンカウントじゃないか……パニングスがセット
だったら必然的に会話しないと殺されるわけだけど月村一人なら？ よし、無視しよう

!

「むさしきゆん！ この辺りにコンビニあったけ？」

「うーん、この辺り歩かないからわからないかなあ〜」

「えつと、輝夫くん？ 武蔵くん？」

「いつそ喫茶店でパフェ食べよっか！」

「ええ!!? いいの！ ストロベリーパフェ食べちゃうぞお!!」

とりあえず月村単独エンカウントは無視が通用するということが確認できたので僕は喫茶店でパフェを食べます。もうね、もうね！ ヒロインに気を使うのは疲れるんですわあ……。

「うう……どうして……」

「……………」

「どうして……無視するの……」

「…………ごめんなさい、許してください」

月村を泣かしてしまいました。これは確実にリンチされます。正直な話しをさせてもらおうと月村とフェイトたんは俺と武蔵に一切暴力を振るわない。実に無害な存在なのだ。それを無視した俺達は最低だ。シンジくんがアスカのおっぱいでオナニーして抜いちゃった時の感情が体中に押し寄せてくるぜ……。

とりあえず俺と武蔵は財布を焼けたアスファルトに置いて誠心誠意の土下座をくりだす。

「……お願いします。バニングスに言わないでください」

「……お願いします。八神に言わないでください」

「……わざと無視したの？」

「はい、わざとです」

月村は笑顔で言うね！　と言ってくれました。俺と武蔵は自販機に体を擦り付ける。

「なあ、この自販機絶対にタイムマシン仕込んでるだろ……」

「ああ、俺もこの自販機見た時に絶対タイムマシン搭載してると思ってたんだ」

とりあえずタイムマシンを探し出さないと確実にバニングスと八神が俺達のことを笑顔でリンチにくる。早くタイムマシンを発動させるボタンを探し出さなければ！

タイムマシンを見つけろ！　未来を変えるんだ!!

2

どうも輝夫です。

とりあえずタイムマシンが見つかったかどうかを言わないといけませんね？　簡単に説明すると見つかるわけ無いでしょ……。

どうにか月村の機嫌を取り持ったために喫茶店でパフェを奢ってやっている。食べて

いる姿を見ると本当に美少女だね、可愛いね、フェイトたんと同じくらい可愛いわ……。「てるをたん……これで許してくれるかな……?」

「わからないよむさしきゆん……でも、希望は必要だよ……」

俺達もストロベリーパフェを食いながら二三日後に殴られないことを願う。最近の目標が自堕落に生活するよりヒロイン達に暴力を受けないということに昇華しているような気がする。もうそろそろフェイトたんも俺達に暴力を振りかざしそうで怖いだよ、最後の希望なのに……。

「女の子は男の子が思ってるより繊細なんだからね」

「ぼっくん達も結構な繊細だぜ、つまり……女の子?」

「てるをたん……ぼっくん達って女の子だったの……?」

「……どうしようかな」

「許してください! 僕達は痛いの大嫌いなんです!! ソフトSなんです!」

生クリームを口の中に入れて気を紛らす。というかなんで俺達はサンドバッグにされてるのだろうか? もうそろそろゴールしていいよね……この街から逃げ出していいよね……。

まあ、そんなことしたら確実に八神と性格の悪い赤毛のアンが首根っこ掴んで連れ戻しそうな気がするが。

パフェ食べてると月村の携帯電話が鳴り響いた。

「もしもしアリサちゃん？」

月村が不思議そうな顔でバニングスからの電話を取った。そして不思議そうな顔からどんどんと暗い表情に変化していく。こうなってくるとバニングスが確実に何かしらに巻き込まれたと見るしかないだろう。原作の原作ではバニングスはレイプされて最終的に殺されてるわけだし……。

「……………」

「どうしたよ？」

「……………行かなくちゃ」

「……………そう、じゃあ行きますか」

とりあえずレジの上に伝票と一万円札置いて外に出る。すると月村は全速力で走り出そうとするが襟首を掴んでタクシーを拾うのだ。正直、全力疾走も青春で悪くないが確実にタクシーの方が早い。

「……………わたしのせいだ」

「何が起こってるのかわからんがどうにかなるでしょ」

とりあえず励ますとまでは言わないがどうにかなると言わないとこいつ自殺しそうだしなあ。

タクシーの助手席に座っている武蔵を見ると仕事の時の目になっていた。鏡がないとわからないが俺も多分、同じ目もなっているだろう。これが職業病というやつなのだろうか？

目的地は案外近い場所でタクシーの運転手は武蔵の顔を見て怯えている。とりあえず一万円札を置いて外に出るとそれなりにデカイ廃墟が目の前にあった。

「……武蔵、血液禁止」

「……了解」

スタスタと廃墟の中に入っていくと大柄な男達が俺達にサブレッサーの付いた拳銃を向けた。この現代日本でサブレッサーの付いた銃を何個も用意できることはヤバイ奴らに狙われたってことだろう。どうでもいいのだが。

「こいつらは誰だ……一人で来いと言っただろう……」

「……月村、三十秒目瞑れ」

「……うん」

月村が目をつ瞑った瞬間に一人の男の鳩尾を思い切り殴りつけ他の男が照準を合わせた瞬間に殴った男が持っていた拳銃を合わせた男の顔に投げつけた。武蔵の方は無表情に上段蹴りで一人を吹き飛ばして打たれる寸前に屈んで足払い、そして倒れた男の顔を思い切り踏みつけて気絶させる。

「前歯四本か……奥歯もやりたいところだけど時間がもつたない……」
「もう……いい……?」

「いいぜ、早く行こう」

男達のうめき声を後目に廃墟の中に入っていく。すると武装した奴らがゾロゾロと
なだれ込んでくる。これが心得てる奴らと一緒に普通に殺しているところだが……
お嬢様に血は見せられないよな……。

とりあえず最上階に到着した時には二人合わせて二十人くらいを転がした。それも
全員が拳銃で武装していて作戦の規模の大きさがわかった。

「アリサちゃん!」

バニングスは両手両足を拘束されて涙を流している。月村はそれに駆け寄った。

「動くな」

隅に隠れていた男と同時に動くなという言葉が発する。

懐から使い慣れた拳銃を取り出して男の胴体に照準を合わせる。

「……俺は躊躇わないぞ」

「一つだけ言うが……俺はこの娘達になんの思い入れもない。躊躇わず引き金を引ける
のはどっちだ?」

トリガーを発砲する限界まで引いている。こちらの方はトリガーに指すらかけてい

ない。二人がいなかったら同じように指をかけていただろうが……二人の前で血を見せるのは駄目だからな……。

今回の勝負は俺の負け、銃を地面に置いて両手を上げる。

「こつちに来い……」

「……………」

とりあえず男の指示に従って移動する。

そしてバニングスと月村の前で屈む。

「お嬢様からピーチ姫とデイジー姫に昇格だな、攫われてるわけだし」

とりあえずバニングスの口に付けられたガムテープを取る。

「処女膜大丈夫？ レイプで処女膜奪われるとかエロ漫画じゃないんだからさ」

「……………」

「……おまえ、この子にナニカしたか？」

「何もしていない。変な気を起こすな」

よしよし、バニングスの貞操は将来の旦那様に残ってるなら問題ない。後は血液が飛び散らないように相手を無力化するだけだ。

——乾いた発砲音が響き渡る。

「輝夫!？」

「大丈夫だ……このくらい……」

腹部から流れ出る大量の鮮血、そして表現しにくい熱さ……それでも、女の子二人を守るためならこの程度の傷は覚悟している。

「うぐっ……うう……」

手首をへし折られて悶絶している男を蹴り上げた。本当だったら撃ち殺している。撃ち殺したいという衝動で頭がいっぱいになっている。でも、できない。

「警察は？ いる、いない」

「そんなことより怪我でしょ!? 輝夫……武蔵！ 早く救急車を!!」

「……どうしよう」

「……吸血鬼よりヤバイのがいるのかよ」

「ツ?!?!」

気絶してなかったか、手首折って脳震盪起こるくらい蹴り上げたんだがな……。

「……ナイフ借りるぜ」

とりあえず痛みで動けない男が持っていたナイフを奪い取って腹部を切り裂く。そして指で弾丸を抜き取って地面に投げる。その後は下手くそな回復魔法を使って出血を止める。魔法って本当に便利だよな、痛みは消えないけど。

「救急車はいらない。警察を呼ぶかどうかを聞いてるんだ。どっち?」

「……呼べない」

「そう、じゃあ」

バニングスを縛っている縄を切り裂いてナイフを捨てる。腰が抜けているバニングスに肩を貸してそのまま廃墟から出ていく。

「……どうしたら」

「ハイ！ タクシー」

狭い場所なのに運良く通りかかったタクシーを呼び止めてバニングスと月村を押し込む。

「とりあえず家に帰れ。今回の件は知らないことにしておくから」

「……どうして」

「なんとなく。おっちゃん、早く出してくれ、場所は走ったら教えてくれるだろうから」

武蔵が気を利かせて財布から三万を取り出してタクシーのおっちゃんに渡した。

俺と武蔵は二人を見送ってから自分の家の方角を向いた。

「……今からでも遅くない、殺してもいいんじゃないか？」

武蔵の目は未だに仕事モードになっている。それもその筈だ。俺の腹には風穴が空いたのだからな。

「サクツと人を殺せるようになったら終わりだ。家に帰ってロキソニン飲まない」と

「……了解」

武蔵はいつものバカっぽい顔に戻った。

3

「あのお……最近は何でグングル巻の刑が多すぎてマンネリ気味なんですけお……」

「そうだそうだ！ ロープと手錠は飽きました!!」

俺と武蔵はいつものようにロープで拘束されている。特段珍しいことは一切ないのだが、強いて珍しいところは月村の家で拘束されていることだろうか？ 昨日のことを謝りたいとか電話で言うからホイホイやってきたらバニングスに手錠かけられるし……。

「貴方達がすずかのお友達……?」

「うっわ、月村の姉ちゃんすっぱー美人じゃん!? なんで紹介してくれなかったの? ぼっくんすっぱータイプ」

「抜け駆けよくない! 月村のお姉さんぼっくんと付き合ってください!」

「……………」

月村の姉ちゃんの目が赤く光ったように感じる。どうしようか、これはバカっぽく演

じるか。

「ぼつくくんは西風輝夫なのら！ 十三歳なのら!!」

「あへへく今日はカレーが食べたいなあ〜」

「……効いてない」

チツ！ 俺と武蔵の渾身の演技が見破られるだ?! どうしてだ？ 俺と武蔵がこういうバカを演じる性格だと理解してなければ確実に見破れないと思うんだが……。

「月村、お姉さんに俺達がバカだってこと言ってるの？」

「……………」

「言ったのかよ!? ああ……月村のお姉さんは落とせねえな……」

「悔しいよお……大人のお姉さんとイチャイチャしたいよお……」

月村が静かにロープを解いてTシャツを捲った。

「……傷が残ってる」

「いやあん！ 見ないでえ……」

「輝夫きゆんを裸にするのはぼつくくんの特権なんだからね！ やめなさいよ!!」

月村は俺を抱きしめて何度もごめんなさいと言って泣いている。これはどうしたらいいのでしょうか？ あれ、バニングスも俺のこと抱きしめたよ、やっべ、武蔵の顔が見れねえ……いや！ 見ちやう!!

「——武蔵、何がいる？」

「高町の兄ちゃん」

「ああ」

「心配消してたから気づかなかったけど高町のお兄ちゃんいるじゃありませんか。それも俺のことを人間捨てた目で見てるし……。」

「武蔵はもう縄抜け完了させてるからいつでも対処できますって顔してますし。」

「どうするのすずか？」

「……うん」

「えーっと、帰って良いですか？ ドラマの再放送があるんで」

「……輝夫くん、わたしと結婚を前提にお付き合いをしてもらえませんか」

「絶対に嫌だ！ 結婚なんてしたくないよ!!!」

俺は速攻で窓に向かって駆け出した。俺は恋多き男、そんな男に結婚なんてできるわけがない！ そうさ、俺は結婚なんて絶対にしない！ 俺は自分の幸せのためだけに生きるのだあ!!

一筋の殺気を読み取って攻撃を受け止める。

「やつぱりむさしきゆんが一番！ だってぼっくんのことを守ってくれるもん！」
「てるをたんの命を守るのはぼっくんの定めだもんねえ！」

小太刀を持った両腕を互いの右手で受け止めている。斬られる寸前だが絶対に斬られない間合いだ。

「というわけで……高町の兄さん、それ収めてくれますか？ バカっぽくなってる武蔵ですけど……目は本気になってるんで……」

「……わかった」

武蔵の目はお仕事モードです。これは確実に来てますね、来てます来てます。

とりあえずさつきまで拘束されていた椅子に座り直す。武蔵の方は高町の兄ちゃんのことをお仕事モードの目ですつと見ているから本気でキレています。

「……どうして、すずかの告白を断ったの？」

「1つ目に！ 俺は結婚が大嫌いです!! 墓場に入りたくありません!」

月村のお姉さんは大口を開けて呆れている。

「2つ目に！ 月村は絶対に付き合ったら浮気させてくれません!! 絶対に束縛するタイプです!」

月村は浮気はいけないことと大声で叫んだ。

「3つ目に！ 当たり前のことをして付き合うとか論外」

バカで勢いに任せていた口調からツンと冷たい口調に戻した瞬間に場が凍る。

「俺は月村とバニングスのことを友達だと思ってる。小さい頃は色々と迷惑をかけたけど今はよく喋るし電話すると一時間くらい普通に喋る。買い物だって偶に行くし、おすすめの本を誕生日プレゼントとして貰ったこともある」

「……輝夫くん」

「笑った顔が可愛くて、バニングスと一緒にいる時の優しい顔が可愛くて、悩んでる時のしょんぼりしてる顔が可愛くて、もうね、俺の知ってるお淑やかな美少女No. 1ですわ」

月村の顔が真っ赤なりんごのようになる。

「でも、Loveまではいけない。俺は小さい頃にこの子を追いかけ回して嫌な思いをさせた。でも、彼女は俺のことを友達だと思ってくれていて、俺も大切な友達の一人として見てる。だから恋愛感情は抱けないかなあ？」

「……輝夫くん」

「それに、俺は友達として当たり前のことをしただけなんだ。友達っていう存在は案外儂いようにも見えるけど長くいると硬くなるのよね」

深呼吸をして天井を見上げる。

「もし、月村が助けてと言った時、俺なら手伝うよと絶対に言う。それは俺が月村にやれることだからだ。もし、バニングスの両親が経営に失敗して多額の借金を背負ってしまったとしよう、俺はその借金を現金一括で支払うよ、それは友達としてできることだからだ」

「どうして……助けてくれるの……」

「それは、俺と武蔵はそれが出来るからだ。友達という関係性は出来る出来ないの関係性で、互いに甘えられる、そんな関係なのさ……」

俺は深呼吸を何度も繰り返す。

「昨日のバニングス誘拐。その時に俺は助けられるか、それとも無理かということから考える。そして助けられるという根拠があつて俺達は月村と一緒にバニングスを助けに行つた」

「でも、でも……一生涯残る傷が……」

「月村、バニングス……こつちに来なさい」

俺は月村とバニングスの頭を優しく撫でた。

「お嬢様達、俺はね、友達つていうのは対価だとか、報酬だとかの必要のない関係だと思つているんだ。友達が危険に晒されている。自分にはそれをしてどうにかする力がある。そうなつた時に俺は絶対に助けるよ。自分が傷だらけになつても絶対に助ける。助けることが出来るのに助けないなんて絶対にしない。これが友情なんだ」

「輝夫……」

「これはさ、友達が悩んでいたら自分も一緒に悩んであげるとか、友達が悲しんでいたら自分も悲しいだとか、友達が喜んでいたら自分も嬉しいみたいなものなんだ。友達にやつてあげられることは全部やつてあげたい。これが強い友情つてやつなのかな？」

武蔵の方を見ると仕事モードの目をやめて優しい表情になっている。

「だから、だからこそ、俺は二人が危険なら怪我してもいいと思ってる。二人の綺麗な女の子に怪我なんてさせられるか、男は——女を守る生き物なんだよ」

女を守るのは男の役目、それは当たり前だ。女の子を守れない、逆に傷つける奴は男なんかじゃない。ただのゴミだよ、この世界で一番のゴミ、そんなゴミになりたいなんて一切思いませぬのさ。

「……でも、友達関係に終止符つてのも悪くないかな」

「……えっ」

「月村のお姉さん、俺と武蔵の持っている月村とバニングスとの記憶を消してくれ」

「……どうして」

「俺達は友達として当たり前のことをしたわけだが、二人はそうとは思わないだろう。なら、二人との思い出を消して俺達と二人は知らぬ存ぜずの関係に戻った方がいい。このまま友達でいいじゃないみたいないないことを考えていると二人は必ず友達以上の関係を俺と武蔵に求めてくる。絶対に」

俺は嫌だね、俺達みたいな奴を好きになる女の子なんて作っちゃいけない。

俺達は……この子達の思っているよりずっと極悪人だ……。

「というわけで、もう少しで友達関係が終わる二人に言います。俺と武蔵以上に好きに

なれる人を探しなさい！ 以上!!」

俺は月村のお姉さんの目を見た。だが、一向に何かをする気配はない。

「すずか、アリサちゃん頑張りなさい」

月村のお姉さんは高町のお兄さんを連れて部屋から出ていった。

あれれ？ これ最悪の事態じゃない……!?

いや、いや、いや……まだセーフだ！ いけるいけるやれるって!!

「え、あ、ん？ ここはどこだ……」

「はい、下手くそな演技はやめなさいよね」

「頑張って友達以上になるから……」

……人生の墓場怖いよお！

18：女子会

わたし、高町なのはは最近どうも『アノ人達』と仲良くなった友達とお泊り会をしています。来ているのはフェイトちゃん和阿リシアちゃん、すずかちゃんにアリサちゃん、はやてちゃんも来ています。お仕事の都合で友達と仲良くお泊り会をするのは久しぶりで少しだけ照れてます。

「そういえばなのはちゃんとやさ……修一郎くんの関係はどうなったん？」

「はやてちゃん……シユウくんのことを露骨に優男って言おうとしなかった……？」
「いつてへんよ!」

正直な話しをしてしまうとわたし以外の全員がどうにもアノ人達に毒されているように感じます。お仕事で一緒になってもアノ二人のことばかり話して少しでも心が痛いんです。最近では一緒に嫌っていたアリサちゃんとすずかちゃんまで二人のことばかり話します……。

「シユウくん最近は一人でお仕事することが多くなったかな？ わたしを守れる男になりたくないなんて……えへへ……!」

「……ちよつと気持ち悪い!」

「え？」

はやてちゃんとアリサちゃんが心の底から気持ち悪そうな顔をしました。え、なんで？

「なんというか、やさ……修一郎くんって自意識高いところあるよね……」

「わかる。自分は周りに気を使ってますよオーラすごいもん。数ヶ月前は優しくくてカッコイイって思ってたけど今振り返ると女の子に優しくすることだけ必死になってるみたいを感じるのよね……」

「わかる！ すっごいわかる!!」

「むう！ じゃあアノ二人はどうだっていうの!？」

はやてちゃんとアリサちゃんは少し考えて、

「だって、バカにされたら殴ってええもん」

「うんうん、あの二人に限っては殴り潰しても良心が一切傷まなくていいのよね」

「ええ……」

わたしは友達の急変に頭がついていけません。

「わたしね、輝夫を何もしてないのに引つ叩くの大好きなんよ！ 大きな声でなんで殴るの!?! って言う時の顔が堪らないんよ……」

「武蔵は思い切り足を踏みつけてやると良い声だすのよ！ 一通り痛がった後になん

踏む必要があるんですかね？　って涙目になりながら訴えるのは最高よ……」

【輝夫&武蔵ハウス】

「やべえ……なんかスゲー悪寒が……」

「俺もブルブルなんか来たぞ……」

【戻る】

わたしは悟りました。この二人は確実にいけない領域に踏み込んでしまったと……。

とりあえず二人はアノ人達にしてきた暴力話しに夢中になっているのです。ずかちゃんとうとアリシアちゃんの方に行くことに決めました。

「輝夫くんはほっぺたツンツンするとすぐに顔を真赤にするんだよ」

「ほんとう？　じゃあ、輝夫が首筋弱い知ってる」

「え、そうなの？　今度やってみようかな♪」

【輝夫&武蔵ハウス】

「なんで、なんでほっぺたがくすぐったいの……」

「どうしたんだよ輝夫!？」

「ああ!?!　首筋だめえ!!」

「輝夫!?!」

【戻る】

この二人も確実に毒されています。でも、でも！ わたしには、なのはにはフェイトちゃんがいいます！ フェイトちゃんは絶対にアノ人達になんか負けていません！

「ん？ どうしたのなのは」

「フェイトちゃんはアノ人達のことどう思ってるの？」

「アノ人達……輝夫と武蔵？」

「そうそうその人！ フェイトちゃんは二人のことはあんまり好きじゃないよね？」

フェイトちゃんは少し考えて顔を真赤にして倒れました。これは完璧に頭の中で色々なことを考えたのでしよう。

【フェイトの妄想の世界】

「輝夫……俺はもう我慢できない……」

「わかってるさ、さあ、来な！」

裸で抱き合う二人の姿を食い入るように眺める。二人は秘密の薔薇園へ足を踏み入れている。

だが、輝夫が彼女のことを見つけた。

「……フェイト、イケナイ子だな、俺と武蔵の愛の営みを覗き見るなんてさ」

「あの、えつと……ごめんなさい……」

「謝っても許さない……こっちに来な……」

「きゃ!?!」

二人の男と一人の少女……。

【輝夫&武蔵ハウス】

「気持ち悪いよお……なんかすっげー気持ち悪いよお……」

「誰!?! 俺の肖像権侵害してるの誰!?!?」

【戻る】

わたしは思い知りました。悪い男に引つかかると女の子はこうなってしまうということに……。

とりあえず友達を守るために人を呪い殺す方法を調べないといけないと思いました。

19・監禁

今日という日はとても素晴らしい一日になると期待している。なぜなら古代遺跡にピクニックに行きましようというお誘いを受けたのだ。だって！俺がこの世界で一番愛している修一郎様からのお誘いなんて蹴れるわけないでしょ！！

というわけで大型のリュックサックに最低でも五日は遭難しても大丈夫なだけの携帯食料と飲料水を用意して最悪の事態に備えてもいる。ただ、一番危惧しなければならぬのは相棒である武蔵が季節外れのインフルエンザに感染してとりあえず入院していることだろうか……。

「なんで腐ったみかんがいるん？」

「えつと……護衛かな？」

憧れの方（修一郎様）の友達達は友達という謎理論で顔見知り程度のユーノくんが子狸に答えた。まあ、俺も相棒が居なくて暇すぎて修一郎様に浮気してるんですけどね。それ以外の理由なんて脳みその中に存在しません。相棒を弄れないなら優男を弄ればいいじゃない！

「で、修一郎様あこの遺跡にはどんなのがあるの？ピクニックしに来たわけだけど」

「ユーノ説明よろしく」

修一郎様は説明を放棄してユーノくんに一任した。

「えっと、ここは人類以外の知的生命体が存在していたって言えるものが発見されて発掘家の間では凄いいブームが起こってるんだよね」

「ほへえ……所謂ところの宇宙人、それも頭のいい生命体がい場所かあ……」

高町の方を見るとピイツと顔を逸らした。なんでだろうか、お嬢様二人はメル友なのに高町だけはどうしても仲良くなりたくないみたいだな、まあ、仲良くなりたくないと思ってる奴と仲良くなる必要もないか。

「腐ったみかん……変なことしたら殺すからな……」

「なに貞操の心配してんだよ……脳みそワイテンノカ？」

「正直、ここの全員でも腐ったみかんに勝てんと思うからな……」

「ぼっくんはよわよわだお！」

一時間かな、高町と狸強いし。

子狸の口撃をあしらいながら遺跡を歩いていると発掘品が並ぶ場所に到着した。布の上には剣みたいなものからお玉まで、金属製のものが多く並べられていた。確かに人間並の知性をもった存在がいたみたいだ。

「ん？ あれはなんだ……」

「ああ、あれは出土したんだけどなんなのかまだわかってないんだ」
妙にメカニカルなキューブ型の何か、結構大きくてプレハブ小屋くらいの大きさがあ
る。

「これ何だろな……ユーノくんもわからないって言ってるし……」

「腐ったみかんの頭じゃわかるわけないやん」

「おうやるかおら！」

「今日もけちよんけちよんにしてやるわ！」

ギイイという扉が開くような甲高い音が響いて、

「へ？」

「え？」

吸い込まれた。

2

現状を報告しよう。俺と八神は謎のキューブの中に吸い込まれた。

キューブの中は天井に照明がついており、それ以外にはベッドとトイレ、そして水が出るのだろうか洗面台がある。

率直に説明させてもらおうと窓の無いプレハブ住宅と言ったところだろうか？

「な、なんなんや……」

よくわからないが八神が絶望しているので洗面台の蛇口を確認する。水が流れたら最高だったのだが古代の遺物なわけで水が流れることはなかった。トイレの方も水が捌けている。これは長い時間閉じ込められたらリュックの飲料水は2日で飲み干すか……。

「なのはちゃん！ 修一郎くん！ 助けて!!」

八神の声が響くが反響が少ない。壁の素材は防音仕様か……。

吸気用の穴は空いているから窒息死することはない。

「どうなってるんや!!」

リュックサックの中の食料と飲料水を確認する。とりあえず登山用のリュックサックに腐りにくい携帯食料と飲料水をできる限り詰め込んだが二人で2日だ。

「なんでそんなに冷静なんや!？」

ようやく俺の存在に気がついたのか八神が涙目になりながらも睨みつけた。

「だって……冷静にならないと疲れるし……」

「もしかして冷静にわたしを襲う計画を!？」

「おまえは餓死しろよな……」

食料の入ったリュックサックを抱きしめて蔑みの目で八神を見つめる。ぐぬぬという悔しそうな顔でごめんなさいと謝った。これは素晴らしい……これがメスガキ屈服

というやつなのだろうか……!

さーて、食料の主導権は俺が握っているわけだからいつもより優位な立場で立ち回ることが出来る。ああ、八神を嘲笑うのは何ヶ月ぶりだろうか……。

「さあ、食料を懇願し——ゴボアツ!」

「アンタに主導権握られるのは癪に障るんや……」

鋭いキックが顔を抉って三途の川の手前の花畑に誘導しやがった……。

握りしめていたリュックサックを奪い取られる感覚があるのだが奪い返す力が出ない。

「……腐ったみかんはどうしてこうも用意周到なんやろうか」

「俺の水を飲まないでいただけますか?」

「おまえの物は俺の物! 俺の物は俺の物!!」

「唐突なジャイアニズム!」

とりあえず食料の主導権は完璧に八神に奪われたわけだが俺くらいの人間になると三日間くらい飲まず食わずでも生きられる訓練をされている。なんなら一週間寝なくても正常な判断だってできる。

よし、部屋の片隅で寝るか。

「……懇願せんの?」

「……………」

「……無視すんな！」

「……………」

俺は空気、この世界に存在しない存在。これが夢想転生の境地、体を天に返しこの世界に存在する。あらゆる欲を捨て去れ……。

肩に軽い何かが乗る感覚がする。なんで俺に寄りかかっているんですかね……。

「……無視せんでよ」

「……………」

「……ヴィータとアリサちゃんを呼んでぐちゃぐちゃにするんやからな」

「……………」

「……うう……なんで……」

なんか一人寂しくなってるみたいだけど俺は寂しくないからオールOK、あんまり脳みそ使ったりするとお腹空いてしまうからな。

隣からシウルシウルという服を脱ぐ音がする。

「……何してんの？」

「……輝夫はスケベやから服を脱いだら起きると思って」

「服を着なさい。喋ってあげるから……」

八神は俺の右手を引っ張って胸に押し当てる。これはどういう状況なのだろうか？
即落ち2コマ並みの超展開で困惑しますわ。

顔が真っ赤で耳まで真っ赤、流石は生娘ですわあ……。

「……好きにしたらええよ」

「露骨に目を瞑ってキスを求めるな。早く服を着ろ」

なんで飽きないでキス顔を続けるわけ？ 俺は君とチスなんて絶対しねえよ、輝夫たんの輝夫たんは一切反応してませんよ……。

とりあえず動かないから胸の押し当てられている右手を解いて服を着せる。そして抱き上げてから人形代わりに抱っこして頭に顎を乗せる。

「おまえさあ、俺みたいな奴に体を委ねようとかとんだビツチだな……」

「……臆病者」

「へいへい」

とりあえず瞑想して空腹を飛ばすことは八神がいる限り無理だということを理解した。なんで女の子って面倒くさいんでしょうね？ なんていい匂いするんですかね……。

3

左手の腕時計を確認すると五時間経って夕飯時と言ったところだろうか？ 本来

だったらユーノきゆんの一族が風土料理作ってくれるみたいな感じだったんだろうが俺と八神は携帯食料くらいしか食うことが出来ないみたいだ。

「……おトイレ」

即座にジャケットを脱ぎ捨てて顔に巻きつけて耳を塞いでやる。このくらいしないと絶対に殴られるかエロ漫画みたいな展開に巻き込まれるパターンだし……。

耳を塞いでいてもわかるくらいの大声で自分の小水の音をかき消している。そして紙がないと叫んだ。

「……リュックサックの小さいポケットにティッシュが入ってる」

肩を叩かれるので顔に巻いたジャケットを解いて壁にもたれかかる。これが何日続くのでしょうか？

「……死にたい」

「……そう」

「男がいる部屋でおトイレなんて……」

「……そう」

互いに凄まじく気まずい雰囲気が続く。

なんか俺にも尿意が……。

「……すいませんが明後日の方向見えてもらえませんか？」

「……………うん」

八神が後ろを向いてくれたので自分も尿意を解消した。出し切った後に安堵の溜息を吐き出してチャックを締めて八神の方を見てみると顔を隠しているように見えるが確実に指の間からトイレしているところを見ていましたねこれは……………。

「明後日の方向を見てくださいよ……………」

「こつちの方角が明後日やつたんや……………」

「さつきまで後ろ向いてくれてたじゃないですか!？」

この子狸のことはわからない……………。

八神に多少の不安感を覚えたので反対側の壁に寄り掛かる。するとムツとした顔をした八神が俺の隣に来た。

「恥ずかしかったん?」

「……………無視しますね」

「また脱いでええん?」

「女の子がはしたないですわよ……………」

ああ、もう……………なんで武蔵いないのよ!? インフルエンザくらい気合でどうにかせえい!!

よし、こんな時は修一郎様を数えよう……………修一郎様が一人……………。

「修一郎様は一人しかいねえ……」

「何考えてるんや……」

「冷静になるために修一郎様を羊みたいに数えようと思ったら彼は一人しか居ないって……」

「心の病気やね」

とりあえず食料と水をケケケチしていたら気が狂いそうなのでリュックサックから携帯食料とペットボトル二本を取り出して分配する。八神も空腹を感じていたのだから何も言わないで受け取った。

俺の用意周到な性格を今日程に喜んだことはない。俺という存在はどうしてこうも要領がいいのだろうか？ 俺が女の子になったら世界中の男に同時告白されるだろうなあ……。

「……もう寝る。おまえはそのベッド使え」

「……一緒は？」

「絶対に駄目、生娘が男に体を委ねると言ってるだろうが」

八神は頬を膨らませ、もう知らないと言ってベッドの中に入った。とりあえず俺も寝よう。寝ないと空腹になってしまう。

目が覚めると何故が唇まで五センチくらいの距離に八神の顔があった。

とりあえずまだ夢の中にいるのだろうかと思つて頬をペシペシと叩いてみると痛みを感じる。これは夢の中でも痛みを感じる心の病気なのだろうか？

「八神……黄色い救急車を手配してくれ……」

八神は顔を真赤にしてその場に座り込んで顔を隠した。とりあえず昨日の食事の時に飲んでいた水の残りを飲もうと思つたら飲み干されている。寝ぼけて飲んでしまつたのだろうか？ いや、そんなことは絶対にないだろう……。

「……俺の水を飲まないでよ」

「うるさいー！」

「ええ……」

とりあえず時間を確認すると八時くらいだ。朝食を食べなくなる時刻だが、あと何日でこの部屋から助け出してもらえるかわからない状況だからな……。

八神は体育座りでブツブツ何かを唱えている。俺を殺すためにザラキでも唱えているのだろうか？ それともパルプンテで奇跡を……。

「もう駄目や……こうなつたら……」

「大丈夫だ。食料はまだある……」

「そうじゃないん……」

「何が？」

八神は俺のことを押し倒した。

5

「ようやくわかったよ！」

「で、このキューブは何の装置なんだ？」

「このキューブは……」

6

「やめろ！ 俺はおまえとそういう関係にはなりたくない!!」

「うるさい！ このまま何日も一緒に居たら絶対に小さいのじゃなくて大きいのもしてしまうんや……」

「大丈夫だ！ ニオイ消しにマウスウオツシユ使うから!? 便器に振りかけるから!!」

八神が壊れてしまいました。小水はまだ許せるが大きい方は無理だということだ。だが、俺とただれた関係になればどうにか耐えられるという謎理論を繰り広げて逆レイプをしようとしている。

「まずいですよ!?!」

「あばれんなよ、あばれんなよ……」

「うもぅ!?!」

「おまえのことが好きだったんだよ!!」ズキユウウウン

唇を重ねた瞬間に金属の扉が開く鈍い音が響く。

「もう我慢しない……心の奥底に隠してた全部ぶちまけるんやから……」

「ちよつと、ちよつとちよつと……」

「女の子やったらわたしが名前つけるけど、男の子やったら輝夫が付けてええよ」

「見られてる! 見られてるから!」

「なに言つて……わたし達二人だけやん……」

八神はようやく気がついた。死んだ目をしたフェイトさんとヴィータが俺達の営みを眺めていることに……。

俺はどうしたらいいんだ……。

「……………」

「輝夫……今日は本気で殺す……」

「……ヴィータ、手伝つていい?」

「やめて! お願いだからフェイトさんは俺のことを殴らないでえ!!」

ヴィータとフェイトさんが鈍い足取りで歩み寄ってくる。

「むさしきゅん! むさしきゅん!! 助けえてえ!!」

死にました。

!!!!!!!!!!!!!!

【おまけ】

あのキューブ型の物は古代に生きていた知的生物が生殖活動を隠れてするものだった。その知的生物が口づけ、つまりは接吻によつて生殖活動をしていたということが出土した書物から確認された。

どういふ条件であのキューブに入ることが出来るかはわからないが、今回、八神はやと西風輝夫がキューブに引き込まれて約十二時間程度で出てきた。出てくる条件は古代の知的生物の生殖活動と同じ接吻だったようだ。

今回、兩名が閉じ込められた後に彼らの救出の為に多くの友人の魔導師達が駆けつけたが、扉が開いた時には二名の魔導師が西風輝夫のことを殺す勢いで暴行を加えた。

被害者の西風輝夫は医師の診察で軽度の女性恐怖症という診断が出た。

『ユーノ・スクライア』

20：脱童貞

久しぶりになりますね、武蔵です。

季節外れの風邪はまだわかるのですが、季節外れのインフルエンザって都市伝説だと思っていました。インフルエンザって家で寝ていたら数週間で完治するという話を聞いたことがあるのですが、薬を取りに行くのが面倒くさいので輝夫の優しさで病院で治してきました。

そして輝夫の手料理を楽しみに帰ってみると輝夫がゾンビになっていました。

「……うああああ」

「やっべ、CAPCOMに著作権侵害で訴えられそう」

顔色が悪い輝夫は口を開けたまま放心状態になっている。何が起こったのかわからないが俺がインフルと格闘している間にラクーンシティに観光に行ったのだろう。黒幕はウエスカーなんですけどね初見さん。

何度か声をかけても返事を返してくれないことはない。

「俺は警察だ。世の中の不逞な輩を見逃すわけにはいかねえんだ」

「——ゴボガア!？」

とりあえず正義の鉄槌でバツを下した。すると輝夫はさっきまでのゾンビ状態から開放されて俺のことを涙目で見つめる。あれ、輝夫ってこんなに可愛いのか……。

「むさしきゆん……」

「てるをたん……」

「「久しぶり！ 痩せた？」」

正常な状態に戻った輝夫の姿に安堵して反対側のソファーに腰掛ける。

輝夫の表情は気だるさを漂わせている。これはゾンビに噛まれて一時間経過と言ったところだろうか？ もし本当にゾンビになったら撃ち殺して燃やさないとイケないな。

「俺はラクーンシティに行つてねえぞ」

「なんでわかるんですかね？」

「ブラザーの考えてることはお見通しだ」

「そうなると自分がゾンビみたいな顔色してるのには気付いているんですね」

輝夫はため息を吐き出して少しの間を開ける。

そして起こる筈がないことを口に出した。

「フェイトたんが……俺に暴力を振るつたんだ……」

「冗談はよせよ。俺達のアイドルであるフェイトたんは暴力を使わないタイプの美少女

「だろ？」

「いや、フェイトたんが俺のことを殴ったんだ……パーじゃなくてグーで……」

「……マジ？」

「マジ」

俺達は互いに長い空白の時間を作りながら一つの答えに辿り着く。

「……うああああ」

ゾンビになって現実逃避することだ。

2

どうも、軽い女性恐怖症を発症した輝夫です。

とりあえず今日という一日は部屋に引きこもって寝ます。今日は絶対に女と喋らないぞ、俺は絶対に原作ヒロインと関わらないぞ、絶対に！

「よし、買い溜めたエロ本を読んで女性恐怖症を治そう」

最近はコンビニのエロ本コーナーが縮小（現在は完全撤去）されて困るんだよね、可愛いコンビニ店員に年齢聞かれるのが大好きなのにね。

今日は巨乳OLモノを楽しもうかなあ！

「……おつきいね」

「……うん、母さんと同じくらいかな？」

「……………」

後ろを振り返るとテストタロツサ姉妹が食い入るように読んでいたエロ本を眺めている。どうしてだろうか、どうして、どうして……。

俺はエロ本をゴミ箱に投げ捨てて勉強機の引き出しに顔を突っ込む。

「どらえもん!! タイムマシン使わせようオラ!？」

「フエイト、アレが輝夫の現実逃避第一段階だよ。タイムマシン探し出すの」

「そ、そうなんだ……」

「ドラえもんを殺して俺も死ぬ……」

冷静になれ、冷静にならないと二人の流れに飲み込まれてしまう。俺は踏み台なのだ。修一郎様の引き立て役である俺がヒロイン達に負けてなるものか!？」

「ねえ、どこから侵入したの?」

「窓」

「せめて玄関から入ってきなよ……」

「居留守を使われると思って」

「むさしきゆんが退院してるからしねえよ……」

二階の窓から侵入する女の子とか萌え要素満載だけど現実に起こると不信感が半端ない。唯一の希望がテストタロツサ姉妹という比較的暴力的じゃないヒロインという

ところだろうか？ いや、フエイトたんは俺に暴力を……。

「ああ、どうして俺はこうも不幸なのだろうか……」

「女の子二人に囲まれてどこが不幸なの？」

「そーですなー」

両肩に二人の頭が乗る。最近では修一郎様というヒロインを縛り付ける機械が故障して暴走してんだよ……どうにか修一郎様にもう一度だけでも、せめて子狸くらいは縛り付けてもらいたいところなのだが……。

ピロピロリンと携帯電話からメールの音が響く、開いて確認してみると武蔵からだつた。

内容は少し出かけてくるというもので下の方には入院したときにお世話になったナースさんと書かれた写真が貼り付けられている。

「綺麗な看護師さんだね……」

「武蔵の野郎……俺にもインフルエンザを分けるよオラ……」

「その時の看護は任せてね♪」

「やっぱいいです……」

確実に病気をしたら酷いことになる。絶対になる。

あら、まだ写真があるじゃねえか？ 二人目のナースさんかな……うえ……？

武蔵の陰部をしゃぶるさっきのナースさんの写真が……。

「……………ふ、不潔です！」

「……………あの野郎!!?!!」

即座に武蔵に連絡を入れる。

『どうしたんだよ輝夫?』

「てめえ……………俺との約束忘れたのか……………」

『ああ、アレね』

「『我ら二人、姓は違えども兄弟の契りを結びしからは、心を同じくして助け合い、困窮する者たちを救わん。上は国家に報い、下は民を安んずることを誓う。同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に童貞を捨てることを』」

「覚えてるじゃねえか!!」

『栗園の誓いなんてゴミ箱に捨てたわ! 童貞輝夫のばーかばーか!!』

プツツと通話が切られる音が響き渡る。

俺は……………ピエロだな……………。

大親友は原作ヒロイン達のことを俺にすべて押し付けて性春を謳歌しやがった……………。

「……………すいません、泣きたいので帰ってもらっていいですか?」

「……………輝夫だったらいよいよ」

「……すいません、服を脱がないで帰ってもらっていいですか？」

「お姉ちゃんが最初だからね！」

「……帰れって言ってるだろうがオラ!？」

おもむろに服を脱ぎだすテスタロツサ姉妹、この娘達は本当にわかっている！俺が泣きたいのは武蔵が童貞を捨てたからじゃないんだ。武蔵が原作ヒロイン達を完璧に捨て去って自分勝手にこの世界を満喫しているのが許せないんだ！俺だって原作ヒロインとか無視して女を食べまくりたいんだよ!!

だが、このままだと確実に二人は俺のことを捕食しにくる。武蔵はラブコメムーブから足を洗っている状態だから確実に原作ヒロイン達のアタックの対象から外れる。つまり、俺が二人に食べられたら他の子達が俺のことを殺しに来る。連帯責任だった武蔵が消えて負担は二倍になるのだ。

「逃げる！ 逃げるんだよお!!」

窓から飛び降りようとした瞬間に久しぶりの感覚が蘇る。これはこの世界でのお決まり魔法であるバインドという類の魔法だ。武蔵と殺し合ってる頃は小手先のテクニク重視の俺はよく使ってたなあ……。

「……意地悪しないでよ」

「意地悪してるのは輝夫なんだからね」

二人は顔を真赤にしなから俺の服を奪い取っていく。

バインドに拘束されるのが数年ぶりだから解き方が思い出せない。自分の魔力で打ち消すんだっけかな？

二人がTシャツを脱がし終わったと同時に赤かった顔が暗い顔に変わる。

「……………」この傷、なのはの砲撃魔法から庇ってくれた時の」

「ああ、一番最初の傷だな」

高町とフェイトがまだ敵対してた頃だったか？ フェイトを庇って吹き飛ばされて木の枝が肩に刺さったんだよね、すげえ痛かった。

「……………」これは？」

「これは最初の汚れ仕事で出来たやつ」

胸から腹部まで届く傷痕、アビーに切られたやつだね。

それ以外にも新しいのはお嬢様コンビ救出の銃痕や仕事でしくじった時の刺し傷などなど、十三歳の体には似合わない傷痕が大量だ。

「よっしゃー！ バインドが解けたぞ!!」

バインドを破壊できたので逃げ出そうとするが二人が俺のことを抱きしめて離さない。
い。

……………これはバインドより固そうだ。

「どうして……輝夫は怪我ばかりするの……」

「人間だから」

「わたしよりずっと強くて……優しいのに……」

「強くて優しくても敵が同情してくれるわけないだろうが」

仕方がないから二人の頭を撫でる作業に入る。テストアロツサ姉妹は実を言うと甘え下手なのだ。フェイトはもちろんのことアリシアも明るく振る舞い過ぎて甘えることに苦手意識を持っている。これを優男が受け止めてくれたら完璧なのだが、あの優男は男の深みみたいなものが欠如しているから受け止められない。

「どうしておまえ達は俺に甘えるのかねえ？ 俺より甘えて優しくしてくれる男なんていっぱいいるだろうに」

「輝夫の優しいところ輝夫より知ってるから」

「……そう」

よし、二人が抱きつくことをやめた。

「セーフティ解除！ この瞬間を——ッ!？」

「んっ」

フェイトが唇を重ねてきた……あ、舌まで入れてきましたよこの子……。

本気のキスで気絶させてやってもよかったんだが、流石に中学一年生に本気出してど

うするよと思ったので背中をポンポン叩いて降参を宣言する。

「……………もう一回していい?」

「ダメ、絶対にダメ、輝夫さんは身持ちがカチカチな——ツ!?」

「んっ」

アリシア……………おまえもか……………。

この姉妹はムツツリスケベだと思っていたがガツツリスケベになりそうで怖いわ、姉の方も妹に負けじと舌突っ込んでくるし……………。

「えへへ……………しちゃった……………」

「……………てるおたんはねう!」

ベッドの下に潜り込んで二人の誘惑から逃れる。これ以上のことをしたら精神が持たない。

ベッドの下のスペースは本当に素晴らしい。誰にも邪魔されず一人でゆっくりと幸福でもないが、孤独でもない優しいなにか……………ああ、これがお母さんのお腹の中というやつなんですわ……………。

腕が引つ張られる。

「やめていただけますか? 私は信心な『空を飛ぶスパゲッティ・モンスター教』なんです。姦淫の罪を犯すとスパゲッティを一週間禁止されるんですよ」

「女の子を生殺しにしていると思ってるの？」

「……責任、とって」

「無罪の人間を有罪にしようとかエゴの塊じゃねえか……」

大丈夫、この姉妹は意外と根性がない！ このまま時間経過で確実に姉妹を撒くぞ!!
あれ、なんで二人してじゃんけんしてるんですかね？

「じゃんけんぽん！」

「お姉ちゃんの勝ちだね！」

「……残念」

「じゃあ、失礼して」

「お願いだから俺の絶対領域に入ってこないでえ……もう！ 出てくるからあ……」

流石にベッドの下に二人潜り込むとかストレスがマツハなので大人しく安息の地から出る。そして即座に部屋の片隅で体育座りです。

「どうして……どうしてアグレッシブな女の子が多いのよ……」

「輝夫……もう一回……」

「ええい、やめい!？」

姉妹が本気モードです。

このスケベ共が、俺は絶対に女の子になんか負けないもん！ 輝夫たんは負けないも

ん!!

フェイトが俺の顔を両手で掴んで唇を奪った瞬間に聞き慣れた炸裂音が響き渡る。

「腐ったみかん、遊びに来た……」

「どうしたんだよはやて? 輝夫はリビングに居ねえから絶対部屋だと……」

「んっ」

フェイトさんに唇を奪われて返事が出来ないけど生命の危機です。

「……はあはあ」

「輝夫……どんな死に方したい……?」

「毎回言ってるだろうが、絶世の美女に腹上死つてなあ……」

「ほう? じゃあ、選べよ。四人いるぞ」

ヴィータはとりあえずの情けを見せてくださいました。俺はフェイトさんの許しをもらって立ち上がる。そして八神のことを指差す。

「え、えっ!」

「「……………」」

「「……嘘だよーん!」」

八神を選んだら確実に全員が固まる! この瞬間を待っていたんだ!!

「あばよ!」

「「待てーい!!」」

窓から飛び降りて逃げ出しました。

自宅に自由は無いということを理解しました。

21：男色

どうも皆さん輝夫です。

今日は生命の危機を出来る限り回避できる場所に逃げてきました。確実に俺が居ないとヒロイン達に思われるであろう場所です。ここはとても素晴らしいです。ああ、俺はここに住むべきなのだ。

「輝夫くん、わたしが作ったプリン美味しい？」

「はい、美味し過ぎて奥さんを食べたいです……えへへ……」

「もう、お上手ね♪」

「……西風なんているの!？」

修一郎様のお母さんが作ったプリンを食べていると修一郎様本人が凄い剣幕で俺にツツコミを入れた。何を言っているのだろうか？俺と修一郎様は相思相愛、武蔵が俺のことを裏切ったからには修一郎様が俺の相棒になることは決定事項なのだ。

「だって修一郎様が俺に愛の告白したじゃん」

「いつ！ いつ告白したの!？」

「夜中に俺に告白したじゃん！俺の夢の中で!!」

「それはおまえの妄想だろうが!」

「いやん! 修一郎様のいけずう」

ああ、これが本来の俺の姿だわあ、ツツコミ役とか絶対にしたくないんだわあ、やっぱり修一郎様のツツコミは……最高やな!

修一郎様のお母さんも俺のことを気に入ってくれてるし半年くらいはこの家を拠点に静かに生きよう。そして原作ヒロイン達に彼氏が出来たら家に帰って掃除をする。絶対に武蔵とヴィータが暮らしたらゴミ屋敷になるからな、俺は知ってるよ。

「もう夏休みも三日しか残ってないんだからさあ……」

「毎日が誕生日で夏休み、なんなら春、秋、冬休みもある俺に死角はねえ!」

「君が不登校ってだけでしょ!」

未来のお義母様が入れてくれた紅茶を楽しんでお茶菓子代わりに修一郎様の顔を眺める。ああ、俺の目ん玉の中に絶対ハート入ってるだろ、修一郎様スコスコ。

修一郎様は俺が絶対に帰らないことを悟って崩れ落ちた。どうして修一郎様は俺のことを愛してくれないだろうか? 俺はこんなに修一郎様を愛しているぞ、多分、高町の114514倍は愛しているぞ。

「シュウくん、こんな素敵なお友達にそんなこと言っちゃダメでしょ?」

「母さん……でも……」

「でもじゃありません！ 輝夫くんは素敵な子よ。だって……こんなに撫でるのが上手いんですもの……」

「なに母さんのお尻触ってるんだよ!？」

「だって、大きなお尻って触りたくなるじゃん……」

修一郎様が土下座しながら母さんを女にするのをやめてくださいと懇願してくるので渋々だが、修一郎様のお母さんに手を出すことをやめた。最近は大人の女性だったら熟女でもよくなってきた自分が怖いね。

「修一郎様あ！ あーそぼ！」

「遊ぼって……俺とおまえって遊ぶ仲だったか……?」

「今日から遊ぶ仲になりやいだろ！ 上等だろうが!!」

「なんで上から目線なんですかね!？」

修一郎様を無理矢理抱えて部屋に移動する。今日から修一郎様と毎日を生活するのだから俺もご奉仕しなければならぬからな！ 俺だって男の子だしムラムラしちゃうんだぞお☆

とりあえずやさ……修一郎様をベッドに投げ捨てる。

「ああ、その表情ゾクゾクするよお……」

「おまえは何を考えてるんだよ……」

「SEX!」

「ええ……」

俺は速攻で服を脱いだ。まさか男同士でスケベするとは思っていなかっただろう修一郎様は顔を恐怖で歪ませている。俺も本当は修一郎様とズッコンバッコンは高町に遠慮してやりたくなかったのだが、今日から一緒に生活するのだから報酬を支払わないと追い出されてしまうかもしれない。

だから、だからこそ！ 修一郎様にエロいことをするのだ!!

「俺の金玉を見てくれ……こいつをどう思う……?」

「まだパンツ履いてるじゃんか!? てか、脱ぐなあ!!」

「もう我慢できねえ！ 俺は修一郎様一筋だぜえ!!」

修一郎様にルパンダイブして彼を裸にする。

程よく鍛えてて、綺麗な体してるじゃねえか……赤ちゃんみたい……。

よしよし、この小さくて可愛らしい乳首を弄つたる!

「や、あ!?! やめて……うっ……!」

「乳首弱いんだ……もつと気持ちよくしてあげる♡」

「俺は……男はむくり〜」

「大丈夫、絶対に男の子も受け入れられるから」

修一郎様って……いい尻してますよねえ……。

おっ、勃起してんじやん!? 気持ち悪っ! アハハ!!

「どうして欲しいか言ってみな……」

「もうやめて……お願いだから……」

「それは心の奥底からの言葉なのか? もっと自分に素直になれよ」

「ダメ、いじめないで……」

「女の子みたい、かわいい……」

修一郎様は果てそうな声で女の子じゃないよおと情けない声を出している。落ちたな（確信）。

とりあえず乳首攻めを終わらせて耳たぶをハムハムする。すると女の子より女の子みたいな声で叫んだ。おお、耳たぶも性感帯だったのか、これは攻め概があるぜえ!!

「一緒に気持ちよくなる……君は今日から俺の性奴隷なんだからさ……」

「せい……どれい……?」

「そう。『何が嫌いかより何が好きかで自分を語れよ』」

「……てるをくんが好きです」

「よく出来ました」

とりあえず手コキで二発くらい暴発させてやろう。きもちわりーけど!

「シュウくん！ クッキー作ってきたん……」

「もう一回言ってみな、輝夫くんの性奴隷だって……」

「おれは……てるを様のせいどれいです……♡」

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ
!?!?!?!?!」

高町がヒロイン達に報告して修一郎様の家に住めませんでした。

22：急展開

安息の場所が見つからない輝夫です。

今はお嬢様二人に捕まってバニングスのお家でお茶会に強制参加させられています。

バニングスのお家も月村のお家と同じくらいの豪邸で俺と武蔵の家の三倍くらい大ききで大金持ちって凄いなあ、なんて思いました（貯金三十五億）。

「それにしても、ラブホテルの近くにある豪邸がバニングスの家だったのか、気付かなかった」

「ぶち殺していい？」

「だってラブホテルが近くにあるのは事実じゃん！」

「チェストー!!」

「あべし!?!」

バニングスのバーニングフックが炸裂してHPが66くらい減らされました。

月村は俺の殴られている姿を見てクスクスと笑っています。この子は確実に手を出さないDSです。自分から手を汚すことは絶対にしないけど他人が殴られている姿は大好物というタイプの変態さんです。

「アンタって……本当にデリカシーがないわよね……」

「デリカシーはお父さんの精子だった頃に捨てましたあゝ」

「露骨な下ネタやめい！」

用意された紅茶を飲み干して一息つく。

武蔵が童貞を捨てたせいで家に帰りにくい雰囲気がありましたね、適当にブラブラする生活がこれから始まると思うと『ホームレス中学生』という本を思い出すのです。

まあ、現金とキヤッシュカードがあるからダンボールを食すことは無いと思うが。

「でも、輝夫くんがわたし達のお誘いを受けてくれるとは思わなかったよ」

「正直ね、八神やテストタロツサ姉妹より君達の方がマシだと気がついたんだよ」

「来なかったらロープで縛ろうと思ってたけどね」

「前言撤回」

まあ、他のヒロインに比べて害が少ないのは事実だ。他の奴らだったら確実に俺の唇を奪いに来てるだろう。テストタロツサ姉妹だったら……考えたくない……。

「カップが空ね」

「お嬢様、輝夫様の好物のお茶を用意しました」

「おお、すげえダンディなおジサマじゃん。バニングスの彼氏？」

「執事の鮫島よ……」

最近は年の差恋愛が流行してるじゃない？ 男としての魅力は歳を重ねるごとに確実に上になっていくわけだからね。俺も四十代くらいになるとこういうダンディになりてえなあ。

鮫島さんが淹れてくれたお茶を口に含んだ瞬間に口中に知ってる味が蘇る。

「にげえ……センブリ茶じゃねえか……」

「プププツ！ 好物じゃないのグフフ!?」

「テメエ……好物じゃねえよ……」

紅茶的なものだと思っただけで一気に口の中がやべえことになってるう……。

とりあえず深呼吸をしてゆっくりと心を落ち着かせる。絶対に復讐してやらねえといけないよな……。

ふふつ、俺がどれだけの女を食ってきたか……その恐ろしさを教えてやるぜ……。

「バニングスって可愛いよな……」

「な、何言ってるのよ……」

「翡翠色の目が綺麗だと思っただんだよ……」

「ば、ばかにしてるんでしょ……」

「俺は本気だぜ……」

「っ!?!」

パシヤリと携帯電話で顔を真赤にしているバニングスの顔を撮影する。すると真つ赤だった顔のバニングスが般若の表情になって襲いかかる。

頭を押さえつけて嘲笑する。

が、後ろから月村が抱きついて手が外れて顔に鋭いストレートが突き刺さる。

「ぐっ……足にきたぜ……」

「輝夫くん……わたしには……?」

「月村さん、あれは馬鹿にしただけだから、本気じゃないから」

「して……」

「エロい声で言うなよ……」

ため息を一つついて席に座ろうとした時にバニングスが俺の顔を両手で掴んで唇を奪った。

「……苦い」

「……センブリ茶飲んだからな」

バニングス……おまえもか……。

最近キス魔が多すぎて辛いです。

ああ、これでキスしてないのは月村とヴィータだけだな。もう吹っ切れた方がいいのだろうか？

「輝夫くん……」

「はあ、もういいよ、唇は減らないからな」

角砂糖入れから一つ拝借して口の中に入れる。そして月村の唇を奪った。

「んっ」

可愛らしい声を小さく出して顔を真赤にしている。そして口の中に入れていた角砂糖を舌を使って奪い取って女の子座りで崩れる。

バニングスの方を見るとムツとした表情になっており、角砂糖を口の中に入れてからもう一度、俺と唇を重ねた。

そして舌を侵入させ、含んでいた角砂糖を俺の口の中にねじ込んで二つの舌で溶かしていく。もしかしてバニングスって……言ったら殺されそうだからやめよう……。

「女つたらし……」

「お褒めに預かり光栄至言」

「キス、キス！ キス!? しちやった……えへへ……」

女の子ってさあ、もう少し独占欲があると思っていたんだけどこの子達は違うのね。

ティーカップのセンブリ茶を口に入れるとなぜだか甘く感じた。

「あーあ、もう後に引き返せない領域ってやつなんですかねえ……」

「責任とつてくれるの?」

「キスはセーフ、妊娠は全力で責任取る。これが俺の流儀……服を脱がないでいただけます？」

二人のスイッチが完璧に入りましたわこれは……。

あーあ、手頃で逃げ出しやすそうな窓は——嫌な予感がする……。

俺は服を脱ぎだす二人を後目に携帯電話で武蔵に連絡を入れる。するとワンコールで武蔵が電話に出た。

『グッドタイミング。一秒でも惜しいから早く帰ってこい』

「何があった？」

『高町、フェイト、八神が拉致されてる。修一郎が向かってるがあいつじゃ無理だ』

「……あの三人が拉致？ 守護騎士達は……」

無言は危ないと同じということか……。

「……二人とも、高町達の大ピンチだ」

「「え？」」

二人は俺が最初に高町という名前を出したから即座に理解する。まず、俺が高町の名前を出すことはない。それなのに俺が高町の名前を出したということは確実に仕事でのトラブルということが容易に想像がつくのだ。

あの三人が戦えない状態まで持っていていかれるということは相手は本物、修一郎がどう

「こうできるレベルじゃない。俺と武蔵がいかないと……。」

「友達を助けてくる。埋め合わせは絶対にする……。」

「……危険なんだね」

「ああ、今回は別格みたいだ」

「二人は苦笑いを見せた。」

「輝夫のそういう顔、初めてみる」

「輝夫くん、絶対に帰ってきてね」

「……約束はしないぞ」

「二人は俺の頬にキスをした。」

「死ねない理由ってのも怖いねえ……」

2

一旦自宅に帰ると背広を脱ぎ捨てたバルが左腕に月光、右腕にカラサワを構えている。肩には誘導式のミサイル、これは本気になっている証拠だ。

「ご主人はん、お給料は弾んでもらいませ」

「了解」

押入れの中から札の大量に付けられた木箱を取り出して中身を確認する。こいつはアビーを狂わせた曲刀。結局のところは壊せないで形見として残してしまっていたの

だ。

「輝夫、今回は一人残らず殺していいよな……」

武蔵の瞳は怒りと殺意の炎が燃えたぎっている。静かに頷いた。

曲刀を持ち上げると強い殺意が体中を駆け巡る。だが、それを押さえつけて強引に待機状態に移行させる。

「ほれ、弾は装填済みだ」

武蔵が愛用している『S & W M 6 8 6』とホルスター、大量のスピードローダーをテーブルの上に置いてくれた。

「……行くぞ」

「了解」

23：馬鹿

俺は神様から多くのものを、大切なものを貰った。

最初の頃はそれが自分という存在を高みに到達させるだけの道具としか見れなかった。

でも、歳を重ねるごとに自分という存在は所詮は人間という小さい者から抜け出せないということを知った。どんなに足掻こうが自分という存在は人間でしかない。人間という器から抜け出すことはできない。求めていたのは神様と呼ばれるような存在だったのだろう。

自分を人間として認識してからは周りのことを認めてくれた。

だからこそ、人間という存在であることを人一倍、いや二倍、俺は認めた。

人は喜怒哀楽という豊かな感情を持っていて、それを括って人間性と呼ぶ。人間性があるからこそ、友が出来、絆が生まれる。その絆は絶対に断ち切ってはならない。絆は——人生なのだから。

2

二人と一機は重々しい足取りで次元航行艦アースラの中を歩く。

そして、知り合いの執務官クロノ・ハラウンが鋭い瞳で二人と一機を見た。

彼は言葉一つ発することなく歩きだした。二人と一機はそれに追従し、医務室と書かれた場所の中に入る。すると包帯が大量に巻かれている八神はやての守護騎士達が寝かされている。

「……守護騎士が……まで」

「……………」

静かに眠っているヴィータの頬を撫でた。

人一倍わがままで、人一倍感情豊かで、人一倍……優しい奴だからな……。

涙が流れ落ちる冷たい感覚が冷たい殺意を膨らませる。

「……傷が残らないといいが」

ヴィータの額に巻かれた包帯を見てそう呟いた。

おまえは俺のことを救ってくれた一人だ。荒んでいた俺のことを救ってくれたんだ。武蔵とヴィータ、おまえ達が居なかつたら……今の自分は存在していない。だからこそ、俺は大切な人を傷つけた奴を絶対に許さない。生かさない。

「ヴィータ……人を殺しても俺のことを嫌わなくてくれ……」

返事なんていらぬ。

扉の前で張り詰めている武蔵の表情は人間と表現するには悍ましますぎで、化け物と表

現するには冷たすぎる。多分、俺もこれに等しい表情をしているだろう。

医務室から出るとクロノが俺達のことを見つめた。

「敵はロストロギア所持者」

「手下の数は」

「使い魔だと思しき存在が四名」

クロノはそれ以上の言葉は語らずに転送装置が設置されている場所へ案内した。

呪われた曲刀を展開し、溢れ出る瘴気を纏わせる。

「……生死は問わない。君達が好きなようにしてくれ」

「ああ、殺すなど言われても絶対に殺す」

武蔵も久しぶりにデバイスを展開させる。久しぶりに見るメカニカルな剣は幼い頃を思い出させる。

互いにバリアジャケットなんてものは無く、体に魔力を纏わせるだけ。お洒落をするような年齢でもない。得物さえあれば十分だ。

「……三人を頼む」

「わかってるよ」

転送装置に乗り込んで身を任せる。

一秒でも早く……助ける……。

言うならば地獄、多数の魔導師の亡骸が散乱し血液が乾いた生臭さが事の大きさを示す。見慣れた景色だが、いつもより人間味のある殺し方をしているようにも見えた。暴走した兵器などなら亡骸はグチャグチャになって散らばるものだが、魔導師のほぼ全てが首を切り裂かれ出血多量で死亡している。

とりあえず、修一郎がこの場所で戦闘を行っている筈、そして、そこには最初の一匹がいる。まず最初の獲物を探さなくてはならない。

「バル、サーチ」

「了解」

バルが周辺をサーチして生体反応を確認する。

曲刀が強い瘴気を漂わせる。血肉を求める呪いの性質だろうか、こうも人の亡骸が多ければ高ぶるのが呪いと言ったところだろうか？

「二キロ先で戦闘を確認。優男はんが殺されかけてますわ」

「了解——武蔵……？」

一キロという言葉聞いた瞬間に武蔵は駆け出した。

出来ればボスの場所を吐かせてから殺したいところだったのだが、仕事モードの武蔵は一秒でも迅速に殺したいタイプだからな、ボスはもう一度バルに頼むしかなさそう

だ。

俺達も駆け抜けた。

「少しは骨があると思っただけど疲れが出てきたかい？」

「はあはあ……まだ、戦える……」

「へえ、根性は人一倍あるみたいだ。じゃあ、苦しんで死のう——」

俺とバルが到着した時には最初の敵は武蔵のデバイスによって首を跳ね飛ばされて
いた。

武蔵は無表情で転がり落ちた生首を踏み潰した。

「修一郎……後は俺達に任せて寝てろ……」

「……まだ」

「邪魔だつて言ってるんだ！ 生き物殺す度胸もない奴が、人形の生き物を殺せるわけ
ないだろ……」

修一郎は武蔵の狂気を含んだ瞳に屈服した。当たり前だ。生易しい戦いを何度も
行つても心が壊れるような戦いを重ねた奴の言葉の重みに耐えられない。綺麗事を並
べて優越感に浸れる程、戦いというのは綺麗じゃない。綺麗な戦い、騎士道みたいなも
のはこういう——無差別殺人の場所では命を差し出すようなものだ。

「バル、もう一回サーチ」

「了解」

バルがサーチしてくれている間に倒れ込んでいる修一郎の傷の具合を確認する。体中に切り傷が大量発生していてこのまま放置していたら出血多量で死んでしまうかもしれない。とりあえず下手くそだが回復魔法が使えるのは俺だけ、対処が出来るのも俺だけだ。

「武蔵、魔力貸してくれ」

「ああ、その傷だと出血多量になるからな」

武蔵が俺の背中に手を当てた。そして流れてくる大量の魔力、下手くそな回復魔法でもこれだけの量があれば完全回復とまではいかないが、これ以上の出血は食い止められるだろう。

淡い光に包まれて傷口が塞がっていく。

修一郎は静かに立ち上がった。

「……まだ、戦える」

立ち上がった修一郎は同行する強い意志を見せるが、肩を押した瞬間に受け身も取れずに倒れた。

しゃがんで修一郎の手を握る。

「おまえはよく戦った。それだけで十分だ」

「……………」

「こういう時の場数は俺達の方が上だ。信じろ……」

修一郎は呼吸を整えて目を閉じた。

結局のところ、おまえも俺の大切な友達の一人なんだよ。おまえに死なれたら歯止めが効かなくなる。だから、ゆっくり眠っていてくれ。起きた頃には確実に終わってるからさ……。

空を見上げると太陽が眩しく輝いている。

「生体反応確認、少し先の遺跡のようですわ」

「行きましようか」

友達が多いと本当に辛い。一人として失いたくないと思ってしまう。

3

「四号がやられたか。君達以上の魔導師が管理局にいるんだね」

身長の高い痩せた男が三人の少女のことを眺める。その瞳には狂気を漂わせていて、既に人間として大切な何かを捨てているようにも見えた。

はやては落ち着いた表情でやっと来てくれた。そう小さく眩いた。フェイトも静かに頷く。

「君達の知り合いかい？　だが、君達の知り合いの魔導師の情報は出来る限り集めた筈

なのだが……？」

「そうやな、未来の旦那様……つてところかな……」

「未来の旦那様？　笑わせる。いかに現れた魔導師が強くても僕に勝てるはずがない。賢者の石を手に入れた僕にね……」

男の右手の中で輝く赤い宝石、それはこの世界の魔導師達が探し求める最強の知識、手に入れた者は世界を手に入れるとまで言われる一品だ。それを手にした彼は自分が世界の王になると確信している。

付け加えて、管理局で五本の指に入る魔導師である彼女達を無傷で倒したのだ。この世界のどんな魔導師が現れようと負けるはずがない。

「では、君達の大切なお友達が死ぬ姿を見せてあげないとね……」

投影ディスプレイに映し出される二人と一機。

男は狂喜する。この少女達の絶望する姿を見ることが出来ると……。

4

遺跡の前に到着すると大剣を持った大男が待ち構えていた。

武蔵は無表情で男の前に歩み寄り、大ぶりの太刀をくわえた。

武蔵の一撃は男が持った大剣によって阻まれてカウンター攻撃が発生する。筈だった。

男の肘から突き出る二本の骨、それは武蔵の一太刀の威力によって腕が耐えきれなかった証拠だ。

「もう少し腕を鍛えろよ……」

デバイスは大男の胸に突き刺さる。

武蔵の表情は薄ら笑い。昔からそうだ。武蔵は許されることがあると何でもする。本当なら人間を殺すことは過度なストレスが生じるものだ、それなのに事戦闘に關しては相手を人間だと思わない。サイコパスとまでは言えないが、スッパリと割り切って戦っているのだろう。俺には無理だね……。

「武蔵……歯止めの準備はしておけよ……」

「あと二匹……」

「これは駄目なパターンですね」

押さえつけられたバトルジャンキーって感じだろうか？ こいつは本当は管理局みたいな場所で日々を戦いに捧げていた方がよかったのかもしれない。俺が押さえつけている……そう感じてしまう。

でも、人間は人間を殺さない方がいいんだ。一部を除いて話せばわかる筈なのだから。

「——俺も言えないか」

握りしめた曲刀が瘴気を溢れさせる。

遺跡の扉を蹴破ると中は広い。中央に移動するとギリシアを感じさせるコロシウムのような場所があり、そこに仮面をかぶった小柄な男二人が双剣を構えて待っている。

——刹那、武蔵は男二人が待つコロシウムに飛び込んだ。

「……バル、一匹担当してやれ」

「了解です。あ、その扉の先に生体反応が四つあるんで片付けてきてください」

「ありがとう」

バルはスラスターを吹かしてコロシウムに降りていく。

俺はボスを軽くないなしてお姫様を助けに行きますか。

5

男は使い魔達を鼻で笑った。自分が得た強大な力で大幅に強化した傀儡達は所詮は傀儡、真打ちは自分自身だと思ひ込んで少女達が拘束されている部屋から出た。自分が世界の王になるために。

6

「にしても、この場所は埃が俵っているから鼻がムズムズするぜ」

曲刀を肩に担いでダラダラと移動していると白衣を着込んだ細身の男が薄ら笑いを見せながら現れた。こいつがボスで間違えないだろう。

さて、一瞬でぶち殺すのも悪くはないが、言い分と命乞いを聞く時間も無くはない。

「命乞いを三十秒やるよ、言い分によつては殺さないでやる」

「何を言っているのだから……理解に苦しむね……」

目の前に男の顔が現れてキスを求めているのかと勘違いしてしまった。

腹部に刺さるような打撃の痛みが響く。

曲刀を地面に刺してブレーキをかけて体制を立て直す。

「所詮は君も人間の域を出ていないようだね……」

「それ、左腕を見てから言えよ」

男は何を言っているのだろうかという顔で自分の左腕を確認する。きつぱりと肘の部分から切り落とされている。どうして切り落とされたか、それは血の滴る曲刀を見ればわかる話だ。

男は尻もちをついて失くなった左腕を眺めている。

「命乞いの必要性を感じただろ……早くしろ……」

「……へへっ、この程度、想定内だ！」

左腕から伸びるドス黒い触手、魔法少女と触手はワンセットと言うが空白期に触手使う相手を出しても駄目だろ、小学生の状態でやってくれや……おかずにならないでしようが……。

とりあえず警戒して曲刀ではなく拳銃で牽制を入れてみるが触手を盾にしてガードしてくる。拳銃の球を無効にするとか格ゲーの世界じゃあるまいし……。

「こちらから行くよ!!」

「ノリノリだねえ」

迫りくる触手を曲刀で切り裂いて断面を確認する。

・ 357マグナム弾を打ち込んで貫通約30センチ程度、大型の肉食動物の筋肉と同等の強度と言ったところだろうか？ 体内から触手が湧き出てくるということとは肉体の強度もこれと同じくらいと考えるに鉄砲は基本的に無効、対物ライフルを使ったら余裕で貫通かね。長距離狙撃も考慮してバレットM82持つてくればよかったわ……。

「……君、普通とは違うね」

「触手を生やしてる奴が普通というお言葉をお使いにならないでいただけますか？」

「違うんだよ、君は顔じゃなくて首を狙ってる。普通の人間なら目線を見るんだ」

「ああ、わかります？ とりあえず切りやすそうな首を狙ってるんですよ」

首狙いは悟られてますね……。

心臓、肺、食道辺りも付け加えたバリエーションで攻めないと悟られてパターン読まれそうだな、長期戦は若干の不利……いや、武蔵とバルが来たらいけるか？

『バル、そっちの戦況はどうだよ?』

『武蔵はんが砂かけで命中力低下中ですわ』

『ポケモンかよ……十五分以内にどうにかできる?』

『うーん、三十分ください。スピードが速すぎて対処に手こずってますわ』

『マジか……』

援護は期待できず。一人で対処するしか方法はないようです。

さて、こうなると相手の弱点を一撃で刈り取るより戦意喪失まで持つていく方が簡単なのではないかと思いはじめてくる。相手は化け物みたいな見た目をしているが感情は残っている。そうなると圧倒的な実力差を見せつけて戦意喪失までのシナリオは通りやすい。

よし、ズタズタに引き裂いてギブアップ路線で！

迫りくる触手を連撃でズタズタに切り裂いて左足を狙ってみる。すると普通に攻撃を受けて体勢を崩す。

「インフアイト苦手? 左の手足全部切られてるけど」

「はは、痛みは賢者の石がカットしてくれているんだ……」

「てか、さつきから賢者の石とか言ってるけどそれなに? 等価交換と言いながら弟の

体を奪う石?」

「簡単に説明すると神が僕に与えた祝福さ……」

「ポエミーな人は嫌いじゃないけど、ヒリついてる時にポエム言う人は嫌いなんだよね」
 よくわからないけど触手を伸ばしてるのは賢者の石とかいうロストロギアで、体のどこかに仕込んでいると言ったところだろうか？ 左足からも触手を伸ばしているということは手足に仕込んでいる可能性は低い。顔面に異物は見られない。つまりは心臓の周辺がビンゴ。

「痛みシャットダウンなら戦意喪失は六時間くらいかかりそうだからやめた」
 伸ばされた触手の上に乗って駆け抜ける。

器用に左足からも触手を伸ばして攻撃してくるが武蔵との死闘を何年も繰り広げてきた俺には遅すぎる。敵としても味方にしても強すぎる奴は切磋琢磨できて最高ですわ。

「心臓はどうでしょう？」

曲刀で左肩から心臓に向けて思い切り刺してみる。人体を貫く表現しにくいグニャリとした感覚は確かに感じるが確実性は無かった。心臓だと思っていたがハズレだったらしい。

「君の負けだ!!」

「あつぶえ!!」

触手がUターンしてきて顔面に向かって飛んでくる。曲刀を手放して回避する。

「ははー！ 君の武器は僕のものだ……」

「ねえ、それどうやるの？」

曲刀は吸収されて右手を貫いて装備される。使える武器は拳銃一丁とナイフが二本、武蔵とバルの合流を待つのも悪くないわけだが……触手を防ぐ手段が無いのは流石に無理だわ。いや？ よく考えると使える武器は縛られてるお姫様達が持つてるんじゃない……！

「よっし、味方が来るまで休戦結ばね？ 俺も結構無理ゲー……」

「命乞いをする立場になったかい……でも、僕は君に左の手足を切られたんだ！」

触手が思い切り腹部にぶつかり壁が破壊されるくらいの衝撃……計画通り……！！

「はーい……元氣……？」

口からダラダラと血液を流している俺の顔を見て顔を歪めている三人娘、直感が当たって人質の部屋へ侵入成功と言ったところだろう。この部屋に到達できたらやることは一つ、それは室内での戦闘がそこはかとなくやりやすいバルディッシュを借りることだ。

触手を腕力で引き剥がして一番近くにいた高町のロープを切り裂く。

「二人はおまえが頼む……フェイト、バルディッシュ借りるぜ」

「え？」

「武器の量を完璧に間違えた。秘蔵を持つてきたつもりだったが……単純すぎて負けそう……」

曲刀は見た目と切れ味以外の取り柄無かった。アビーつて凄いな。

木のテーブルに置かれているバルディッシュを拾い上げて展開してみる。するとフェイトがいつも持つているバルディッシュくんが素直に展開されてくれたので準備は完璧！ サーチ・アンド・デストロイタイムだぜ……あれ？

「どうしたんだよ？ 解いてやれよ高町」

「……手足が」

「……麻酔を注射されたか」

思いの外、用意周到な性格らしい。

そうなると戦力の増加は期待できない。バルディッシュと高町、八神の援護射撃で撃破を考えていたのだが、それが出来ないなら二本と一冊を借りたほうが確実だよな。

「レイジングハートと夜天の書借りていい？」

「わたしはええよ、でも室内で使える魔法すくないよ」

「回復魔法をスパッと使うためだから大丈夫」

「……いいよ」

「壊さないでね、輝夫」

「よっし、三個のデバイス確保！　いつてきまーす」

夜天の書は浮遊させ、右手にバルディツシュ、左手にレイジングハートという原作最強武装が揃い踏みでチート主人公も真っ青な状態です。これで負けたら末代までの恥になるね、子孫残してないけど！

壊された壁から飛び出してレイジングハートで牽制を入れてみる。普通に触手で防がれるが。

「あら、まだ生きていたのかい……」

「うっわ、両手両足切断とか度胸あるね……」

奪った曲刀で切断したのか四脚は地面に転がっており、両手両足からは触手がウネウネで魔法少女の敵という完璧な姿になっている。俺が美少女だったら確実に処女膜ぶち破られてるね！

さーて、三つの最強装備を使ってスパツと倒してしましましょうか……。

「バルディツシュ……行こうか……」

流暢な英語？　ドイツ語？　どっちでもいいけど受け答えしてくれたのでザンバーフォームに移行する。すると緑色の大剣が出来上がった。スタンダードに黄色だと思ったら使用者の魔力の色に変化するんだね、コジマ粒子の大剣みたいで格好いいじゃねえか……。

「よし、レイジングハートちゃんは現状のアクセルモードを維持」

こっちも返答してアクセルモードで待機。

「夜天の書は回復魔法のページ開いて……準備完了！」

手探りにデイバインシューターだったか？ 高町の射撃魔法で牽制射撃を行う、が、触手は魔法攻撃に耐性があるのかダメージは見られない。射撃は目くらまし程度に考えた方が得策だろう。

「よし、バルディッシュ……おまえが頼りだぜ……」

『OK』

迫りくる触手をレイジングハートでいなしてザンバーフォームのバルディッシュで切り裂いて人間の部分が残っている場所に直射魔法を連射する。ダメージは少しだけ通ったのか服が焼け焦げて穴が空いている。

やっぱり原作武器はいいね、でも……相手が相手だし殺す気でいかないとな。

「……おまえ達、殺傷モードねえの？」

『……………』

「取っ払ってるのあいつら?!」

うっわ、使えない武器を借りちゃったパターン？ 相手は確実に俺の命持っていこう

としてるのにこっちは温情で殺さない設定とか笑い話じゃないんだからさ……ロツク

解除できねえかな？ でも、フェイトに壊すなつて言われたからなあ……。

うーん、こうなると武蔵とバルが来るまでの持久戦が楽かな。

「バルディツシユ……ザンバーフォーム解除、普通の長斧になれ……」

格好良くザンバーフォームで殺してやろうと考えていた俺だが、殺すことが出来ないのなら疲れるだけだし使える棒になった方がいい。

「援護が来るまでの二十分くらいを楽しみましょうか……」

「今度こそ殺してあげるよ！」

迫りくる触手達に突っ込んでバルディツシユで切り裂く。そして気分転換にしかないがレイジングハートで奴の顔面に直射魔法、すると顔を歪ませて触手で顔を隠す。

……あの表情、顔？ 頭？ そこにロストロギアを仕込んでるのだろうか。

「うーん、こいつらは殺せねえし……」

ズーンと重い雰囲気を漂わせるレイジングハートとバルディツシユ、夜天の書は古いデバイスだから殺せる魔法を仕込んでいるかもしれないが、砲撃魔法とかを室内でブツパするのは落石とかで面倒くさいよな……。

「むさしきゅん！ 早く来いや……」

武蔵の救援までダラダラと倒せないボスと戦闘とか心が折れるぜ……。

「よっしや……来いや……」
だるい……。

7

「ヤバい!? ご主人はん!!」

三十分もダラダラと戦闘してたからご主人はんの生体反応が弱くなってしまつとる。これは一撃重たいのを喰らいましたな、早く片付けないと……ワイも死んでパチンコが打てなくなる!? 【使い魔は飼い主が死ぬと死ぬ】

「EXAMシステムスタンバイ……」

「おい、おまえはACなのにどうしてEXAM搭載してんだよ……」

「すいまへん……邪魔なんで退いててもらえますか……」

「うっわ、おまえもマジギレ出来るんだ……」

武蔵はんは一步引いてくれて本気で二匹を殺すことが出来ますわ。

オーバードブーストで一瞬で距離を詰めて一匹目の首を吹き飛ばす。その後はクイックブースト連打で二匹目も撃破。

ご主人はんならボスは30秒だと思つとつたワイがバカやったわ……。

「……まあいいや、輝夫の援護に行こう」

ご主人はん……死なんといってくださいよ……。

「輝夫ーボスマだ倒せて……ッ!？」

輝夫が適当にぶつ殺してると思っていたボス部屋には血だらけで倒れている輝夫と触手人間がいた。

——自分の理性が切れた音がする。

「……ガアアアアア」

「これは、人間というよりは獣ですね」

昔から思ってた。自分より強い奴は誰よりも優しく、誰よりも死なない奴だつて……。

それなのに、触手人間程度に負けるんじゃないやねえよダボ……。

おまえに死なれたら俺は死ぬようなバカに連敗してたゴミじゃねえか……!!

「ッ!？」

「ウアアアアア!!」

「この男の子よりやるようですね……」

いつもいつも……俺のことを兄弟だとか親友って言って笑ってたおまえは最強じゃないのか？ この世界で最強の踏み台じゃねえのか？ 死んだら絶対に許さねえ……

おまえの背中を守るのは俺で、俺の背中を守るのはおまえなんだよ——!!

「ツ!？」

「ヤガアアアアアア!!」

ほら、触手人間の首を取ったぞ……目を開けろよ……。

「……てるを——ツ!？」

「フフツ、賢者の石がある僕は最強なんだ」

残った体から飛び出る無数の触手、回避が間に合わない……。

「させまへんよ……」

バルの牽制で攻撃はすべてへし折られる。だが、この触手人間はどこを攻撃したら死ぬんだよ。

「みーえた……」

血だらけの輝夫が立ち上がる。

両手に握りしめていたレイジングハートとバルディッシュを手放して懐から拳銃を取り出して切り取った生首に向けて放った。

触手は粒子となって消えていく。

「輝夫!？」

「ああ、珍しく敵に怪我させられちゃった……」

「よかった……おまえが生きて……」

「すまんすまん。弱点が奥歯に隠されてるなんて誰にもわからんだろうて」

輝夫が生きていることに胸をなでおろす。

「武蔵……ありがとよ……」

「言われ慣れてるよ……」

「輝夫！ 武蔵!!」

生まれたての子鹿のように力なく歩みを進める管理局三人娘、事態は収拾と言ったところだろうか？

「あーあ、血だらけの俺とか見られたくないんですけどー」

「おまえが攻撃されるから悪いんだろうが」

「言うなよ——ッ!？」

「てる……を……?」

輝夫の腹部に突き刺さる曲刀、それを握りしめていたのは首を刈り取った筈の触手人間だった。

「賢者の石は壊されたが……僕は世界の王になるんだ……」

「言い残すのはそれだけか……」

輝夫は曲刀を抜き取り振り返る。その瞬間にすべては終わった。

もがき苦しむ男の首の骨が折れる音がした。

崩れ落ちる。

「…………やべえ、これは死ぬわ」

「「輝夫!?!」」

「あーあ、もう少し長生きしたかったわ……」

輝夫の両目から流れ落ちる涙。

「バル…………すまねえ…………」

「…………いいですよ」

輝夫の両目が閉じる。

バルの方を見ると機能停止。

死んだ。

死んでしまった。

俺の相棒は、兄弟は…………死んだ…………。

「輝夫! 死ぬんやない…………お願いやから…………」

「あ、ああ…………」

俺は輝夫の亡骸に縋り付く二人を引き剥がして抱き上げた。

「武蔵! 輝夫をどうするんや!?!」

「…………おまえ達のせいで死んだんだ」

「……てるを」

「おまえ達が殺したんだよ！ おまえ達がこいつを殺せてたら生きてたんだよ!!」
両目から溢れる涙は血だらけの輝夫に落ちていく。

「もう、俺と輝夫に関わるな……」

9

とある王国に王子様がいました。

王子様は自由奔放で民達に慕われ人望に厚い好青年でした。

王子様は恋をしました。隣国のお姫様に恋をしました。

彼はお姫様の心を射止めようと多くの財宝や手紙を送って自分と結婚しようと何度もお願いをしました。

ですが、お姫様は彼のヘラヘラとした表情が嫌いと言って求婚を断りました。

王子様は落ち込みました。

ですが、王子様の周りには多くの友がいて、王子様は元の優しい性格に戻っていきま
す。

王子様はまた、恋をしました。

その恋の相手は村娘、偉くもなんともない村娘、父である王はそれをダメだと言いま
した。

王子様は父親に言いました。

「自分は嘘が大嫌い、自分自身につく嘘も大嫌いなんだ」

王子様は村娘と結婚する為に王族であることをやめました。

元王子様は村娘に結婚してくれとお願ひしました。

村娘は元王子様の求婚を断りました。自分には将来を誓いあつた存在がいると。

彼は落ち込みました。そして自分はこれからどう生きていこうかと考えます。

元王子様は居酒屋で働くことを決めました。

彼は明るい性格から男女問わずに好かれ、城では作れない多くの友ができました。

「もつと自分が好きになれる人を探さないといけないな」

元王子様は休みの日に散歩に出かけました。

すると気の弱そうな少女が木陰で本を読んでいた。

彼は少女に声をかけて彼女の本を読ませてもらいました。

彼は少女に惹かれていき、彼女も彼のことを好きになつていきました。

そして、一年後に少女に結婚してくれと言いました。

ですが、少女は無理だと言いました。

元王子様はどうしてか、そう尋ねると少女は貴族の娘で許嫁がいると説明しました。

彼は家と俺、どちらが大切か？ 聞いてみると自分の家より大きい貴族の家、どんな

に自分を愛しても未来の家の為に好きな人とは結婚できないと泣きました。

「じゃあ、俺は王子様になるよ」

元王子様は城に向かいました。三年ぶりの城の前には仲良くしていた衛兵達が待つていました。

元王子様は挨拶をして城の中に入っていきます。

誰も彼のことを止めません。

彼の姿を見て笑みを溢す人しかいません。

「ただいま、もう一度、もう一度だけ息子にしてください」

王は彼を王子に戻しました。

そして、彼は王子に戻り貴族の少女と結婚しました。

【優しい恋多き王子様の物語】

10

フェイト・テスタロッサは自分の部屋で泣いています。最愛の人が死んで一日、学校にも職場にも行かないで部屋で泣くだけの生活。自分の無力さで最愛の人を殺した自分は生きてはいけけないという感情が駆け巡り、そして、涙だけが溢れる。

「フェイト？ どうして泣いているの」

「姉さん……輝夫が……」

「輝夫がどうしたの？」

「輝夫が……死んだ……」

姉であるアリシア・テスタロッサはキョトンとした表情でフェイトのことを見つめる。フェイトはそんな表情をしている姉を現実を理解していないだけだと思いました。

でも、アリシアはどうして輝夫が死んでいるのと語りかけます。

「だって、輝夫はあの任務で殺されて……バルも……」

「え、バルなら今朝パチンコ屋さんに並んでたよ」

「へ？」

「アリサちゃんと一緒に見たから絶対だと思うけど」

鳴り響く携帯電話を取って耳に当てると八神はやての冷静で冷たい声が聞こえる。

『ちよつと、人殺しにいかん？』

「……うん！」

「え？ ええ……」

11

「にしても、おまえの迫真の演技すごかったわあ」

「馬鹿野郎！ 俺は本当におまえが死んだと思って……」

眉間にシワを寄せている武蔵を笑い飛ばしてやる。

俺くらいの魔導師があ程度の雑魚に殺されるわけないじゃん！ 後ろから殺意がムンムン感じてたし、いっそのこと死んだふりして原作ヒロイン達を絶望させ、優男に心を許す展開を用意しただけさ。体中は打撲と切り傷で消毒液臭いが日常生活になんの影響もない！

「でも、なんで刺されたのに傷が無いんだよ……」

「脇腹に血糊袋入れてたんだー！」

血糊と書かれた袋を見せると武蔵は溜息を吐き出した。

でも、これで俺のことを殴る蹴るしていたヒロイン達は死んだものだと思つてこの家には近寄らないだろう。そして、俺と武蔵だけになればデリヘルが呼び放題……！ あ

あ、天国!!

「デリヘル奢つてやるから機嫌治せよお〜」

「……わーっつたよ！ 早く呼ぼうぜ!!」

「ノリノリい！」

ガラスが割れる炸裂音、そして土足で踏み入ってくるフェイトと八神。

あれ？ なんでこの子達がいるの……。

「武蔵、俺が幽霊だつてことを適当に風聴してくれねえか？ 今度こそ絶対に殺される

……」

「わ、わかった……」

「武蔵、輝夫を置いて行ってくれたら消えていいよ……」

「じゃあな、親友」

「まてーい!？」

武蔵は何食わぬ顔で玄関に向かつて歩みを進めている。

どうしてだろうなあ……なんで生きてるってバレたんだろうなあ……。

バルには念話で死んだふりした時は機能停止してくれって頼んだんだけど……。

まて？ アイツ……今日もパチンコ行ってたよな……。

「ああ、バルが見つかったんだ……」

「死のうか」

優しい恋多き王子様の物語には続きがあつて、王子様は浮気をして奥さんに殺されたんだ。因果応報だよな！ この世界!!

24：遊技

ワイの名前はバルバロイ、昔は荒廃した世界をACで駆け巡っておったやり手の傭兵やった。やけど、強化人間化手術の影響で三十九歳で死んでもうて、一億人も人間を殺したんやから普通に地獄でルシファー先輩と同列の扱いでペシペシされとったんや……。

やけど、そんなワイを拾い上げてくれたのは名前も知らない微妙に乳の小さい女神様やったんよ。その女神様が言うには一億人殺した貴方を所望してる転生者？　ようわからんけど飼い主になりたいと言っとる馬鹿がおったわけやから地獄から現世に復帰！　首輪付きの頃と同じように大暴れ出来ると思っとたんやけど……蓋を開けたら二百年前くらいのライトノベルに書かれているような平和な世界……。

ご主人はんは一応はワイの闘争本能を理解してくれていて、何回かモンスター討伐とかに行つてたんやけど、それはCAPCOMでこっちはフロム・ソフトウェアなんよつてツツコミ入れたらその日からモンスター退治はやらんごとなつた。

そんな暇を持て余したワイはご主人はんはんに銀行からデリヘル代を降ろしてこいと言われてフラっとパチンコ屋に足を踏み入れて現在に至つてるんや。

「お、バルの兄さん今日はここですか？」

「おう、スロ丸！ 平日なのになんで並んでんねん」

「有給休暇義務化のアオリイカで暇なんすわ」

「妻子持ちの癖にゴミヤのおく」

こいつはスロ丸、綺麗な奥さんと運が良く奥さんに似た娘さんを持つとるゴミヤ。なんや地元の大地主で土地転がしの副業でえろう儲けてるらしいからパチ屋に行くのは誰も止めんらしいけど、こういう平日は奥さんに家族サービスした方がええと思うんやけど……二人目作る資金力あるやろうに……。

スロ丸と他愛もない世間話をしてしていると見知った顔がもう一人やってくる。

「あらあら、プレシアはんも打ちにですか」

「ええ……家に居にくくて……」

「何しはったんですか？」

「それは……」

【回想】

「偶には娘達に出来るお母さんだということを見せつけないと」

娘達の部屋に入ると綺麗に整理整頓されていて埃一つ俵っていない。それに付け加えてい最近買い替えたという空気清浄機が彼女のことを睨みつける。この部屋のハウ

スダストは俺がすべて食らい付くしてやるわ！ そんな風にドヤっている。

プレシアはハンディータイプの掃除機を握りしめて震えている。

「じゃあ、お洗濯を……」

思春期の子供達なら洗濯物を自分でも忘れた場所に洗濯物を置いてしまっていることがある筈！ 娘達のベッドの脇や下を漁ってみると男性用の伸縮性のあるボクサー型のついでいうんですかね、ちよつとスパツ…ツに近い感じの下着が隠されるように置かれていた。

「……洗った方がいいわよね？」

『姉妹帰宅』

「（お） 母さん……隠してたパンツは……」

「え？ ああ、洗ってあるわよ」

綺麗にたたんだ男性用のパンツを渡そうとすると二人は大声で泣きはじめた。

「これが……最後の一つだったのに……」

「輝夫のパンツが……」

「え、え？」

「（お） 母さんの馬鹿！ もう二度とお小遣いあげないから!!」

二人の娘との会話は一週間ありませんでした。

【回想終了】

ワイも昔は母親の腹の中で育ったけどここまで親にしたくない人間ってはじめてみましたわあ……。

それにしても、熟女と呼ばれる年齢なのに十三歳の娘に小遣いって……。

「私だって働きたいわ……でも、この世界の科学とあっちの世界の科学は……」

「それにしても、娘にいくらお小遣いもらってるんですか？」

「……十二万円」

「ゴミクス!？」

十三歳の娘に十二万円も遊ぶお金をもたらるとかマ？ ご主人はんのペットであるワイでも毎月八万十出来高なのにニートで十二万!？ これは親やない……パラサイトや……。

それに娘から貰った大切な小遣いでパチ屋に行くとかゴミやなあ……ワイもパチンカスの猿ロボットやおもつとつたけど、上には上ということわざは実在するんやなあ……。

「掃除洗濯はしないんですか？」

「掃除洗濯はフェイトが綺麗好きだから……」

「料理とかは？」

「アリシアが調理が好きだから……」

「プレシアはんの存在理由は？」

「……言わせないで」

せつかくご主人はんの尽力でシャバに出られたというのにやってるのがニートとか……。

ワイも前世から人間の屑やと思つとつたけど、女の人のゴミクズって見るとAV落ちしそうで怖いですわ、この人は娘に捨てられたら確実に熟れた体を映像作品に残しちゃうわあ……。

「プレシアはん……言いたくないんやけど、ワイとアンタは同類やで……」

「——ッ!？」

よほどのショックやったのか唇を噛み締めている。やけど、これは事実であつて目を逸らしてはいけない事実なんや、プレシアはんは完璧にダメ人間になってしもうとるんや……。

「プレシアはん……割り切らないと心が死にまつせ……」

「そうね、そうよ、そうだわ。どうせ、二人は大金持ちの輝夫と結婚するんだからお金のことを心配していちやいけないわね……」

「そうです！ あの二人がご主人はんと結婚したら一生使い切れないくらいの大金が入

るんやから割り切ろうじやありまへんか!!」

プレシアはんの目に光が戻った。ご主人はんはもうフェイトはんの一生分のお給料十数回分の金額を銀行に入れていゝる。やから結婚したら死ぬまで悠々自適な生活が確定するんや、ワイもペットとしてダラダラ生活できる! 将来の不安なんてないんや!!

——ゴミやな、ワイ。

「お、抽選がはじまりますわ」

「十数人しか並んでないのに抽選する意味あるのかしら……」

「まあ、お決まりやから仕方ないですわ」

パチ屋の店先に数字を出す機械が置かれてそれを押すと番号が表示される。十一番、この列びで番号なんて不問なんやけど……。

うーん、スロットもええんやけど三ヶ月ずつとスロットやからな……。

「バル、貴方は何を打つの?」

「三ヶ月連続でスロット打ってるから今日はCR北斗無双にしますわ」

「北斗無双? ああ、あのケンシロウと兄弟がヒヤッハーする台ね」

「そうそう。通常時はゴミなんやけど確変は面白いんよ」

店の中に入るとガラガラの北斗無双コーナーの角台に座って一万円札を突っ込む。

「せーらば諭吉!」

「隣失礼するわね」

プレシアはんはワイの隣の北斗無双に座って一万円札を突っ込んだ。

プレシアはんも初っ端から北斗無双を打つなんて度胸ありますなあ、こいつはボード甘々の319規制最後の希望であるのは確かなんやけど、通常時は葬式のお経よりくたくて激アツも平然に外すゴミなのになあ……。

「これ……何待ち……？」

「金保留でスタートラインですわ」

「金ね……あっ!？」

「お、スタートラインおめでとうございます」

プレシアはんの台に金保留が出現。成り上がりじゃない金保留は鉄板レベルのゲロ熱やから当たってくれたらええんやけど。この台はホンマモンのゴミやから外れる時は普通に外れるからのお……。

三回目の玉貸しボタンを押してぼーっと台を眺める。

「運命の女？」

「北斗無双の通常時に期待を持っていたら死にますよ」

「わ、わかったわ……」

プレシアはんの台は期待を裏切ることなく金保留で当選してそのまま確変直行。ワ

イの台もボーダーラインギリギリで打てなくはないんやけどなあ……。

「……このサウザーって輝夫に似てるわね」

「確かに似てますわ……」

「ご主人はんはサウザーで武蔵はんがアインと言ったところでしょうか？　ワイは確変はリン一択やから使ったことありまへんがね。

『ばる……へるぶみー……』

『現在この念話は使われておりまへん』

『三十万あげるから……』

『前の仕事のお小遣いで一年は楽しめそうやからええですわ』

面倒くさいご主人はんからの救援信号を無視して液晶を眺める。北斗無双は八万円突っ込んで八万円もどってくる台やからなあ……。

「輝夫強いわね……ケンシロウに勝ったわよ……」

「ご主人はんが優男はんには勝つのは当たり前じゃありませんか」

プレシアはんがサウザー（ご主人はん）を駆使して猛者達を大量に屠っている時に最初の福沢諭吉が消え去った。パチンコはゆつくりとダラダラ打たないといけないんや……金はあるんやから……。

あれから三時間、ワイは五枚目の諭吉をサンドの中に突っ込んだ。回転数は800を超えており生身の状態やったら眠気で死んでるやろうな……。

パチンコは貴族の遊びとはよく言ったもので貴族待遇のワイじゃないと死んでますわ……。

「本当に輝夫（サウザー）強いわね……」

「今日のサウザーはご主人はんが乗り移ってますわ……」

プレシアはんは座ってからずっと右打ちでサウザー（ご主人はん）の戦いを眺めている。ワイも嫁のリンちゃんでラオウを討伐したいのに緑保留から先が見れない。やっぱりアクロスを技術介入でぶっ壊した方がよかったやろうか……。

「煙草いいかしら？」

「ええですよ、ワイには嗅覚ないんで」

プレシアはんが煙草を取り出して高級そうなライターで火を付ける。煙草の銘柄はピアニツシモのゴールド、似合うと言えばすごく似合う。

「ねえ、一万円で輝夫のパンツ売ってくれない……」

「嫌ですよ、ご主人はんのパンツとかお金払われても触りたくありませんわ」

「娘達の好感度がバク上がりするのよ……」

「自分で交渉してくださいな」

本当にテストアロツサ姉妹はんはご主人はんはんにゾツコンなんやね、ワイは男やからご主人はんの良さが一切わからんわ……多少金払いがいいくらいしか取り柄ないですよ……。

プレシアはんのサウザーは本当にご主人はんが憑依しているのではないかというくらい強さで今の今まで確変を継続させている。北斗無双の継続率は約80%の筈なんやけど……。

「……当たるまでやりまっせ」

ここからが地獄だった。

3

「輝夫が強かったわ……」

「ワイのリンちゃんが高町の嬢ちゃんくらい弱かったですわ……」

近所の公園でプレシアはんとベンチに腰掛けている。ワイも一日で五回は当たりを取れて三回は確変だったのだが、最高連チャン数が三という悲惨を通り越して絶望を感じさせる。北斗無双なんぞに諭吉を捧げるくらいだったらシンフォギアをダラダラ打ってたほうが勝ってたかもしれへんわ……。

「ねえ、三万円で輝夫の下着を……」

「何枚ですか？」

「二枚……」

プレシアはんから六万円を貰って自宅に走った。

あ、最後に言わんといけんわ……。

【パチンコは適度に楽しむ遊びです by全日本遊技事業協同組合連合会】

25：好敵手

どうも輝夫です。

今日という日はアースラとかいうお船にやってきました。この船は宇宙戦艦ヤマトと基礎設計が同じらしいですよ（大嘘）。そんな宇宙戦艦ヤマト改・アースラの模擬戦闘室という場所を一日借りることが出来たので武蔵と小学生以来の殺し合いをしようと思っています。まあ、非殺傷設定なんですけどね。

武蔵の方を見ると愛用の剣型デバイス、名前は『メカニカル・ソード』というらしいです。直訳すると機械的な剣という非常に安直な名前になっております。ネーミングセンスというのは何歳頃に開花するのでしょうか？

俺の方は鉄砲は許されないので管理局の汎用デバイスをチューンして近距離戦闘用と中距離戦闘用の二本を持参してきました。実を言うとこの二本は九歳の頃からの付き合いでブラジャーより付き合いが長いです。まあ、男なのでブラジャーなんてしていませんが！……偶にしていること言いふらさないでね？

「いやーこうやって二人で殺し合うの久々だわ……」

「そうだよなあ〜小学三年生の頃は腐るくらいに殺し合ってたのになあ……」

「無視すんなー！」

バリアジャケットを展開している八神がムツとした表情で俺と武蔵のことを睨んでいる。実を言うところの殺し合いには第三勢力という設定が追加されている。その第三勢力というのが高町、フェイト、八神、修一郎様だ。二回戦になると守護騎士達に交代するような形になっている。言うならばヤバイ魔導師が喧嘩してるから管理局の勢力で制圧するみたいな感じらしい。

「おまえが童貞を捨てたこと根に持つてるからな……今回も俺が勝ちを掻つ攫うからな……」

「おチンチンを女の中に入れてただけだろ？ 恨むなよ（笑）」

「中出し？」

「………黙秘で」

「中出ししたのかよ！ 殺傷設定にしている!?!」

童貞卒業＋中出し卒業とか最高の筆おろしじゃねえか!? この野郎……俺は絶対に貴様を許さねえからな……。

両手に握りしめたデバイスが軋む音が聞こえる。

戦闘開始のブザーが鳴り響いた。

「死ねや兄弟!!」

「童貞がほざくな!!」

右手の近接戦用デバイス「ブラスト・スタンダード」で拡散弾を放射してやるが武蔵は綺麗に避けてカウンターの突きを放ってくる。それをもう一本の中距離戦用デバイス「ストレート・スタンダード」で弾いて突っ込んでくる体に蹴りを入れてやる。

「おいおい、腕が鈍ってるんじゃないの?」

「その二本使うの何年ぶりだよ、もう少し鈍れよ……」

「過度なストレスで戦い方を思い出したぜ……」

——刹那の瞬間だ。二人して思い一撃を受け止める。

俺の方はフェイトがバルディッシュを振り下ろし、武蔵の方は修一郎様が剣を振り下ろしている。第三勢力さんも超一級の魔導師だから武蔵を瞬殺するのは厳しいんだよなあ……。

「ラグナロク……」

「スターライト……」

「ブレイカー!!」

武蔵と背中合わせになってシールドを展開する。そしてシールド以外に割く魔力を抜いて滑り落ちるように下に向かう。すると二つの砲撃魔法が対消滅してくれた。その後はわかるよな?

火花散る鏝迫り合い。

「くっそ、対処が鈍って二本でガードしてしまったぜ……」

「足癖が悪いこつて……」

互いの右膝は腹部へと向かって進んでいるがぶつかりあってダメージは0、本当に相棒は強すぎて時間かかるから嫌いだわあ！

間合いを話して拡散弾を放射するがそれをヒラヒラと交わしてインファイトに持ち込んでくる。こいつも射撃魔法の一つや二つ持つてるはずなんですがね？ ああ、俺にカウンター入れられるのが嫌で近接に縛ってんのか……よくわかってるじゃねえか……。

「この二人は化け物かよ……」

「シユウ……二人は化け物じゃなくて怪物だよ……」

「せや、この二人は規格外なんや……」

武蔵の攻撃のパターンが変化してる、これはイメージトレーニングで戦い方のパターンを色々と模索してたな!? 俺のことを攻略しようとかゲーマーかよ……。

今まで通りの中距離の戦い方は三十回くらいやってるからパターン構築されてるかもしれないからな、よし、俺も近接戦に乗ってやるぜ！

「おっと、近接特化の俺に近接戦？ 負けたいんですかねえ」

「てるをたんはROUND1は遊ぶって知らないの」

右手のブラスト・スタンダードで武蔵の攻撃を弾いては蹴りを入れる。が、その蹴りは想定していたと言わんばかりに肘で思い切り強打される。これは痛え……。

でも、不思議と懐かしいよな……これが俺達二人の始まりなんだから……。

「忘れてもらつたら困るよ……」

「輝夫……こつちを見て……」

ブラスト・スタンダードとメカニカル・ソードが交差して割り込んでくるフェイトと修一郎様の攻撃を防ぐ。

俺は修一郎様にストレート・スタンダードの直射弾を放ち、

武蔵はフェイトのマントを掴んで放り投げる。

この場所に邪魔者なんていない。ただ、小うるさいコバエが飛んでるだけさ……。

「そう言えば、俺って何回負けてるんだっけか？」

「126戦全敗じゃねえの」

「うっわ、どうしてこうなった……」

「今から127敗になるんだから気を落とすなよ！」

「ほざけ!!」

武蔵のラッシュ攻撃を二本の杖で華麗に捌いて、タイミングを見計らっている高町に

直射弾を三発提供してやる。あいつはバインドの類が大得意だからな、俺と武蔵の気持ちのいい殺し合いにバインドなんていうお下品な魔法は必要ないんだよ!!

「輝夫が見てくれない……」

「あの二人はどうしてこうも強いんやろうか……」

武蔵が急に距離をとりはじめた。インファイトは疲れるからミドルファイトに切り替えましたか。でも、そこは俺の十八番だつてことわかつてねえの？

「ティロ・ファイナー!!」

「おつま! 崩壊の嵐っていう名前じゃなかったか!」

「日本語って格好悪いんだよ!!」

リリカルなのはの世界でティロ・ファイナーレを使いはじめた相棒は気が狂ってるね! シールドを展開してそのシールドを蹴って極太の砲撃魔法を回避する。回避した瞬間には俺が展開したシールドは粉々になって通り過ぎる砲撃の威力に冷や汗が流れる。これを俺の直射魔法くらい頻度で撃ち出せるんだからやべーよな!

「ロツソ・ファンタズマ!!」

「おまえの魔法の名前! 全部他作品じゃねえか!」

六人に分裂する武蔵、この中に一人だけが本物、正解率は六分の一……わかんね!!
じゃあ、奥の手を使いますかね! 二つの杖を重ね合わせる。

こいつは武蔵対策の本気魔法……そそるぜ……。

「超拡散弾!!」

「オボエツ!!」

二つの杖を媒体にプラスト・スタンダードの拡散弾の範囲を十倍にして周辺の敵を一掃する。三日前に作った俺のオリジナルだ!

ロツソ・ファンタズマが増えていた武蔵は一人になって直撃した腹部を擦って痛みを和らげている。

「ちよつとさあ……超拡散弾ってなに? すっげー格好悪い名前なんですけど……」

「使えれば名前なんていらねえだろうが」

「美意識足りてませんよ。オシャンティーさの欠片もありませんね」

「まどマギの魔法の名前使ってるパクリ野郎に言われたくねえよ!!」

互いに若干のクールタイムに突入する。このまま管理局勢を完全無視で永遠にバトルを続けてもヒリついて楽しいは楽しいのだが、無視し続けると後が怖いのだ。武蔵はそこまでの影響は無いかもしれないが、こと俺に至ってはフェイトと八神にリンチの可能性が高い。そうなる……パツと倒してしまいますか!

「兄弟、俺の尻を追っかけな!」

「へえ、いいぜ」

最初の標的は近距離戦が苦手な……高町！ 君にきーめた!!

武蔵の方に気を取られていると錯覚していた高町に突っ込む。すると対処の遅れからか何発かの攻撃を撃ってくるが、お得意の砲撃魔法が打てない領域に突入される。得意ではない近距離戦を強いられる表情は苦虫を噛み潰すと表現できるものだ。

ブラスト・スタンダードを高町の腹部に押し当て拡散弾を射撃する。

近距離での拡散弾は砲撃魔法と同じくらいの威力があるんですよ……。

「なのは!!」

「だいじょうぶ……このく——ッうう」

「おいおい、俺が魔法だけで戦う馬鹿だと思ってるんですかね?」

体勢を崩した高町の背後を取って首を絞め落とす。近距離での戦闘は絞め技が一番強い。こんなのは中国が三千年前に開発してるんですよ!。

力が抜けたのを確認して思い切り修一郎様の方向に投げ捨てる。

「一匹目終了、次は誰にしようかなあ〜」

「俺のこと忘れてない? じゃあ、死のうか!」

「忘れてねえよ!」

上空から一番槍を狙う足軽のように突進してくる武蔵、それを闘牛士のように回避する。

ブラスト・スタンダードを待機状態に移行させ次の突撃兵を見て構える。

突っ込んでくるフェイトのバルディッシュ、深く言えば持ち手の部分を受け止める。長物最大の弱点って何だと思う？ 先端に武器が付いていることさ……。

「フェイトたん……俺に勝てると思ってる？」

フェイトの顔が青ざめる。

ストレート・スタンダードも待機状態にしてバルディッシュを両手で握って西遊記の如意棒のようにブンブンとぶん回す。フェイトは攻撃もできず、バルディッシュを手放すことも出来ないで空間を何十回も振り回されて方向感覚が狂う。こうなると三分くらいは正常な動作が出来ず受け身も取れない。

フェイトを放り投げてストレート・スタンダードを展開して笑顔で撃ち放つ。

「ストレート・ブレイカー」

高町と八神の砲撃魔法には劣るが極太の砲撃魔法がフェイトを包む。シールドも展開できてなかっただろうから確実にダウン取れただろう。ああ、自分の才能が怖いですわあ……。

ブラスト・ブレイカーを展開して武蔵の攻撃を受け止める。

「うっわ、容赦ねえの……後で殺されるぜ？」

「だって実戦だったらこのくらい普通にしちゃうのがてるをたんじゃん！ 許してくれ

るって!!」

「それにしても、五分で一期の主人公二人を戦闘不能とか強すぎワロス」

「じゃあ、二回戦の守護騎士はおまえが全員倒せよ。俺がここのメンバー全員倒してやるから」

笑顔を修一郎様と八神に向けると両手を上げた。

根性という言葉が似合わない奴らだわあ……。

2

「ハラオウンくん?! あの魔導師は……」

視察に来ていた管理局の偉い人が二人の戦いを見て驚愕している。管理局の精鋭中の精鋭の四人が短時間で殲滅される。それも二人の魔導師の戦いに割って入っているという状況なのにそれを顔の周囲を飛び回る羽虫程度にしか思っていない表情、それは魔導師と言うよりは兵器に近いなにかを感じさせる。

「アレが本物の怪物ですよ……」

クロノ・ハラオウンは溜息を吐き出した。

「あの二人を管理局に!」

「これを見たらわかりますよ、彼らが僕達の陣営にいないことが……」

タブレット端末を高官に手渡すと顔が青ざめていく。管理局の人間では知らない人

間の方が少ない西風輝夫と枚方武蔵、どんな無理難題も金銭のやり取りだけで終わらせる生きる伝説。俗に言う傭兵という稼業の存在だ。

「……二人は、彼らの友人なのではないか？ 取り入る方法は」

高官が二人を引き抜く為に悪い顔をした瞬間に砲撃魔法が観覧席に飛んでくる。バリアが張られていて貫通することはないが虚仮威し程度の効果はある。

映し出される輝夫の顔は無機質で氷のように冷たい。

「彼らは正義という言葉が大嫌い……権力という言葉をや殺そうとしてる人間ですよ……」

「あ、ああ……」

「多分、彼らの知り合いに害を加えた瞬間に親兄弟、妻子供、友人すべてが死にます。だから、絶対に彼らを道具にしようとしないうでくださいね……」

腰を抜かしている高官を無視して観覧席から出ていく。

3

「にしても、二試合連続で第三勢力が降参とかどうなってるんだろ」

「ザッファイなんて自慢の肉弾戦で負けたショックかふて寝してるぜ」

アースラの休憩室のところでオレンジジュースを飲んでる俺達。守護騎士達とも戦ったのだが、武蔵が十分くらいで四人を殲滅したのでそのままドロ、結局のここ

ろの童貞の恨みは晴らせないままとなった。

「おまえも強くなったよな、結構ヤバイ時あったもん」

「だろおく研究してたんだ〜」

「俺の不敗伝説も短そうだなあ」

不意に高町とフェイトの方を見ると体育座りでガタガタと震えている。それを八神と修一郎様がなだめている最中だ。よくよく考えるとマジで戦ったことなかったもんな、普段はレディに攻撃しないジエントルマンスタイルで対応してるから【怪物】の恐ろしさがわからないと言ったところだろうか？

「フェイトちゃん……わたしが仇をとったるよ……」

「はやて?」

スタスタと俺の方に歩み寄ってくる八神。また手錠かロープで拘束して袋叩きをすののだろうか? まあ、袋叩きは慣れてるからどうでもいいのだ——ッ!?

「んっ」

脳みその回転が追いつかないが八神が俺の唇に唇を重ねる。所謂ところのキツスというやつですね、マウスストウマウス……。

この女……ハカリヤガツタナ……。

「てーるーをー……」

「じゃあ、頑張つて死んで」

八神の元氣ハツラツスマイルが死神の笑顔に見えたのは俺だけだろうか？

バルディツシユとグラーフアイゼンを展開するフェイトとヴィータ。

「むさしきゆん……たすけてくえうよね……う？」

「ガンバ！」

「ひどでなし!!!」

最近、相棒は俺のことを助けてくれないのではないかと思っっている今日此頃でございます。

26：機動戦士

どうも、輝夫です。

今日は暇つぶしに最愛の人の家に来ています。和解した相棒であるむさしきゆんも一緒です。

何というのでしょうか？　こういう感情ははじめてなのですが転生者である三人がヒロイン一人いない状態で集合するというのはこの作品（メタ発言）では珍しいことだと思います。

「なんで俺の家に集まるんだよ……」

「だって、俺の家だとヒロイン達が釘バットで襲いかかりそうだし……」

「誰かに決めろよ、そして楽になれ」

「修一郎様わかってないねえ、こういう世界の女は一人を選んだら確実に夜も眠れないCDみたいなヤンデレーションしちゃうの、だから一人を選んだら確実に俺の臓物が……」

修一郎様も俺の言ってることを理解してくれたように入れ込みが凄いらな、なんてヒロイン請負人だった奴だとは思えない発言を言い出しましたよ！　はっ倒していい

ですか!?

むさしきゆんは最近知り合った女子大生のミカちゃんとのメールのやり取りに忙しくて携帯電話をポチポチと弄っている。ここ最近まで俺と同じようにヒロインにはつ倒されていた人間だとは思えない女食いの早さ、俺じゃないと見逃しちゃうね……。

「偶には静かにダラダラという自堕落な一日というのを楽しみたいのよ。だから三時間くらいこの場所に居させてくれや……」

「疲れてるんだな……」

「やめろ、キュンキュンしちゃうだろうが♡」

「やめろよ!! また俺を食べようとするなよ!!」

修一郎様はB.Lがお気に召さないようでお尻を両手で隠した。おまえの尻の穴なんて一生使うかボケ!

でも、修一郎様の家なら高町が来る可能性が少しあるくらいで安全度が非常に高い。休日の自宅なんて原作ヒロイン達の巣窟な魔窟になっていて俺の命が猫と同じくらいあっても足りないくらいだ。

「そうだ! 修一郎様にお土産を持ってきたんだ」

「……変な物じゃないよな?」

「少なからず爆発物ではない」

「ふーん」

カバンの中からRGストライクフリーダムガンダムのプラモデルを取り出して修一郎様に手渡す。ガンプラを作るのが前世からの趣味なのだが、どうしてもヒロイン達に手間を取らされて夜中にチマチマ作っていても積みプラというのが出てくる。だから、修一郎様に一番似合いそうなストライクフリーダムガンダムを持ってきてみた。

「おお、ストフリ……ありがとう……」

「デステイニーと非常に悩んだが修一郎様はフリーダムだと思って」

「……また優男つてことですかね？」

キラ・ヤマトつてムカつくよね！ 戦争してるのに不殺とかワロスワロス!!

修一郎様はゆつくりと作るけど素組みしか出来ないぞ、なんて言っただけで自分はプラマージャーじゃないことをはつきりと告げて後々の予防線を張ってくる。別に俺も素組み勢だからそんなこと言わないって……。

「そういえば、修一郎様つてガンダム作品はどれが一番好きなの？」

「うーん、MSが一番好きなのはSEEDだけど、ストーリーはユニコーンが好き、今まで考察だけで済まされてきた連邦とジオンの関係がパツと花咲いたような気がして」

「俺はZガンダムが一番かなあ……MSも初代から少しずつ進化して逆襲のシャアに繋

がっていく感じが強くなってるし」

修一郎様と握手を交わした。こいつは出来るガノタだと！

まず最初にMSのデザインだけはSEEDを認めているところは素晴らしい。SEEDのMSは本当に完成度が高くて初代の系譜を忠実に再現しつつもどこか宇宙世紀にはないテストを含んでいるスタイリッシュなMS達が多くある。だが、ストーリーは並で作画はゴミだ。

ユニコーンガンダムが好きというのも好感が持てる。ハッキリしないだとか、前置きが長過ぎるだとかの不評はあるユニコーンだが、アナハイムエレクトロニクス社が一年戦争やグリプス戦役なんかでどういう立ち回りをしていったのかというのを一気に教えてくれ、最終的にはユニコーンがカツコイイ！

「ガンダムは鉄血のオルフェンズが好き！特に二期のオルガが死ぬところ!!」

「それはネタとしてだろ……」

武蔵がガンダム話しに侵入しようとしてくるが鉄血のオルフェンズの二期なんて映像作品とは呼べない酷い出来になっている。確かに少年兵、宇宙ネズミと呼ばれているような単純労働力が自分達の力で何かを手に入れようとする物語は評価されていたが、こと二期に至っては鉄華団はマクギリスの遊びの玩具にされている。それを面白いというのは遺憾である。

「一年戦争は連邦派？ ジオン派？」

「ジオン派に決まってるだろ！」

「わかってるねえ！」

修一郎様は饒舌に連邦軍の質と量に勝るMSをジオンのエースパイロット達が倒してきた歴史を語りはじめた。俺も相槌を打って話を聞いていく。そして行き着く先はジオンが一年戦争に勝つ為にはどういう戦略を取るべきだったのか？ 『ギレンの野望』をベースに考えていく。

「まず最初にコロニー落としは悪手だよな、スペースノイドなのにスペースノイドの居住地を落としても他のコロニーの評判は悪くなるわけだし」

「俺もそう思う。それにプラスして核攻撃も連邦側からやられてからって方が周辺のコロニーの賛同が得られると思うんだ」

ジオンのコロニー落としは悪手、最初は地固めをして連邦軍の戦力分析や多く取られる陣形、指揮官が搭乗している艦艇の識別なんかをして出来る限りの情報を集めてからの開戦が望ましいだろう。

そして、ガノタの一年戦争話しになって出てくるのが【地球に降りるかどうか論争】である。

「修一郎様は地球に降りた方がいいと思う派？」

「うーん、あくまでもジオン公国が連邦軍に完全勝利するというシナリオで考えてみると地球に降りるのは絶対だけど、独立を勝ち取るという観点から見ると降りるのは無理だな、それなら月を占拠したい」

「でも、月からのマスドライバー発射し続けてもルナツーや圧倒的な物量で独立することは無理だと思うぜ、ものの数ヶ月でジオンより優れたモビルスーツを作る連邦だし」「そうか……月を占拠しても地球から打撃群が押し寄せて再占拠されたら……」

短期間にガンダムやジムと言った傑作量産機を作り出す連邦軍に勝てるわけないだろう!? 本当にジオンサイドから見たら連邦軍って凄いやね、なんであんなに強いんだろ? ああ、コロニーから搾取してるからか! でも、Zガンダムの体たらくは……ジオンに勝ったからって内輪揉めって……。

「やっぱり地球に降りた方が勝ちやすいのかな?」

「でも、数ヶ月間の地上戦をしないとグフやドムみたいな陸戦型の機体が作れないから厳しいところあるんじゃないか。ジオンの兵士は宇宙での戦いに特化してたわけだし」「水泳部はアツガイ以外は捨てるにしても、ドムは作らないと重力戦線はねえ……」

二人のガノタが導き出した答えは一つ、もっと詳しいガノタの説明をネットで見た方が早いというものだった。

「やっぱり一年戦争は奥深いなあ……」

「富野監督は偉大ですわ」

「Zは子供ウケ悪かったけどね」

修一郎様とすごく仲良くなれた気がした。

27：温泉

どうも、輝夫です。

今日は珍しく朝早く目が覚めました。

カーテンを開いて日光を感じると素晴らしく気分がハツラツで窓を開けると新鮮な朝の空気が肺いっぱいに入ってきて冷ややかながら心地がよきよき。時刻を確認してみると六時半と書かれています。自分も朝型のライフサイクルになろうかな、なんて思いはじめています。あれ？

「……日曜日だ」

心地の良い感情が即座に不安な気持ちになってしまいました。夏休みが終了してヒロイン達の絨毯爆撃の頻度が物凄く減ったのはいいのですが、こと土日に限っては溜まっていくストレス的なものを発散するべく家に押しかけては俺にスケベをしようとしてきます。私はね、アレなんですよ……十八歳からがスタートラインなんですよ……。

「修一郎様の家に頻繁に出入りしたら感づかれるよな……」

最優秀な避難先、修一郎様のお家に押しかけることも考えたのだが、毎週毎週休みの

日になると修一郎様の家に通い詰めると高町に遭遇してヒロイン達に伝令が伝わる。そうなるかと安息の地を危険地帯にしてしまう。それは絶対にいけない……。

なら、この朝早い時間からフラリと逃げ出し、九時頃に帰ってきたら安全安心な月曜日がやってくるという寸法だ。

「よし、武蔵も巻き込んで温泉にでも行くか」

部屋の扉を開いて武蔵の部屋に移動する。

部屋の扉を開くと武蔵と大学生くらいの女性が恋人繋ぎをしながら眠っている。床には大量の使用済みコンドームが散乱しており、昨日の夜は激しかったですね、なんていう声に出したくない日本語が頭の中を通り過ぎるのだ。例えるならニコニコ動画のコメントのような感じで……。

「むさしくん……だいきだよ……」

「おれもさ……みかちゃん……」

「……死にたい」

この男、完璧にこの世界を満喫してやがる……！俺がどういう因果関係か知らないが嫌われていた筈のヒロイン達に追いかけて回されてる影で、こいつは美人率が高いこの世界を縦横無尽に股間のマンモス奮い立たせて暴れん坊將軍してやがるぞゴラ!?

なんででしょうね、目から汗が出てきやがる……いい出汁でるわ……。

「この世界は腐ってる。俺は逃避行に走るぞ……」

歯を磨き、顔を洗い、髪を整えて、自室に戻って服装を整える。

この世界の片隅でヒロインに怯える俺は踏み台なのでしょうか？

2

みさきーめぐりのーばすはーはしるー

昭和の名曲、岬めぐりを鼻歌しながら適当に乗り込んだバスの行く先は温泉街の近く、長期休暇ではない限り知り合いは絶対にやってこないであろう場所です。どうせ管理局三人娘は仕事があるからとか言つて神様もお休みになられる日曜日に働いてるんでしょね、罰当たりですね、キリスト教になりなさい。

「今日は自由を手に入れる」

「おまえ、言ってること支離滅裂じゃねえか？」

隣に座っているヴィータの頭を撫でていたらバカにしているのかという顔で睨まれた。

温泉に行く準備をしている時に目が覚めたのか俺のプチ温泉旅行に同伴しているヴィータ、八神に連絡を入れないという条件付きで連れて行っている。正直、ヴィータは言動と行動以外は比較的には良識的なので約束は守ってくれるとは思う。

「それにはやては生疼痛で今日は家で休養中だぞ」

「男の子に女の子の日のことを教えちゃ駄目でしょ……」

「わたしも生理痛は酷い方だからわかるんだよ……シグナムとシャマルは軽いみたいだけど……」

「体が小さいと生理痛が重いつて聞いたことあるけど……男の俺が言っちゃだめだな……」

よくよく考えると女の子って辛いよな、生理やら化粧やら男より時間がかかることが多い。男尊女卑と言われたくはないが、男は女性より率先して色々なことをしないとイケないと思うのだよ。男は女にくらべてどんな時でも行動できるんだから……。

「家のロキソニンは好きに飲んでいいんだから……」

「うん」

バスを降りると温泉の香りが漂う。

一度も来たことのない温泉街なのでどの温泉宿がいいのかわからない。とりあえず一番デカイ建物に入って万札を叩きつけたら温泉くらい入れるだろう。

ヴィータとダラダラと温泉街を歩いていると雰囲気の良い温泉宿を発見する。

「ここにするか……」

「予約とかしてるのか？」

「風呂に入るだけだったら予約とかいらんだろ」

こういう温泉街の温泉なんぞ数千円出せば入れるものだ。長期滞在するつもりも無いわけだし風呂に入ってブラブラしてたら一日なんてすぐに終わる。俺は日曜日を完全に過ごしたいのだ。

温泉宿に入ると背筋が凍った。

「あら、輝夫も温泉に？」

「……俺は来てはいけない場所に来たのかもしれない」

浴衣姿のプレシア・テスタロッサ、つまりはテスタロッサ姉妹のママンがいる。このことから結論が出る。あのパツキン姉妹もこの温泉街にいる！あの姉妹は俺のことをヒロインズ達の中で一番際どい目線で狙っているのだ。だから、だからこそ……他の温泉旅館に行かなくては……。

「輝夫くん」

「輝夫」

「……あ、わかった。俺の携帯電話にGPS付けられてるな!」

ポケットの中に収められていた携帯電話のカバーを外してみると小型の機械が取り付けられており、これは確実にGPSの類だ。そしてこんなものを取り付けて監視出来るのはお嬢様コンビの一人……月村すずかその人しかいない……。

お嬢様コンビはニンマリ笑顔で俺に詰め寄ってくる。

「俺には人権はないんですかね？」

「ないよ」

「ああアあんまりだアアアア」

バニングス様の燃える右手が突き刺さり一瞬でダウンを取られる。そのまま何発もの蹴りが飛んでくるのだ。俺は泣きました。ええ、泣き叫びましたよ！ 基本的人権という言葉は所詮は言葉でしかないということとを完全に理解しました。行動の自由は監視されたら意味をなさないのですよ!!

これから、携帯電話は裸で携帯しよう……。

「なんでヴィータちゃんは誘ったの……？」

「だって……ヴィータは本当に怒らないと殴らないから……」

「4の字固め！」

「いだだだだ!! ギブ！ ギブアップだから!!」

バニングスが4の字固めで俺の足を破壊しようとしている。俺を旧八神スタイル、つまりは車椅子スタイルにしたいのかこいつらは!! 俺はね、自由に走り回る自由人なのになんでロックされないといけないんだよ!!

「謝れるよね……？」

「俺は悪くない！ 冤罪だ!! 逆に裁判起こしてやるぞ!!」

「アリスちゃん！ あれもやって」

「エビ固め！」

「ギャアアア!!」 背骨があああああ!!」

非常に虚しい気分です。女の子にプロレス技をかけられて悶絶する超絶美少年って何なんでしょうね？ ぼつくんは君達に嫌われていた存在の筈なのにどうして好かれてるんですかね？ ぼつくんはね、ぼつくんは！ 君達に囲まれるより女子大生だとかOLだとかと4Pとかしたいんですよ!!

「アリス……そのくらいに……」

「フェイトたん……ぼつくんに情けをかけてくれるんだね……」

「手錠持ってきてるから」

「情けという言葉を辞書で引いてこいボケ!」

懐かしくもない嬉しくもない冷たい手錠の感覚が両手に……。

バニングスはわたしも用意してきたのよ！ そんな風なハイテンションで大型犬用の首輪を無理やり装着さしてリードを思い切り引っ張って転ばせる。

「このバカ犬！ わたしを差し置いて他の子に色目使うなんて……しんじられない……!!」

「あーしはバニングスの犬になった覚えはありませんことよ……」

どこのゼロの使い魔のご主人様ですかとツツコミを入れたくなる気分になるが、俺はこいつの使い魔でもなければ恋仲でもない。なんでこんな仕打ちを天下の日曜日にするんですかね……神様もお休みになる日曜日なんですよ……。

「あ、輝夫ー！」

「アリシアお姉さま……助けて……」

「家族風呂が借りられたから一緒に入ろ♡」

「お願いだからぼつくんをリンチするのやめていただけますか？」

ヴィータは売店でソフトクリームを買ったのかペロペロしながら俺の惨状を眺めている。あ、今笑ったね!? その心笑ってるね!!

マグロの一本釣りのごとくバニングスに引つ張られて呼吸困難で酸欠ながら家族風呂の方向に引き寄せられる。これは人生最大のピンチ、確実にてるをたんのてるをたんがぼつくんちよされてしまう……。

「だびじよぎつぎぶ……はがどどぼが……（大丈夫、まだどうにかなる）」

逆レイプなんて絶対にさせない！俺はこんな逆境を何度も回避してきた歴戦の猛者！ガンダムで例えるとゲルググに乗ってる頃くらいのシャア・アズナブルだ!!

「ラリア……私を導いてくれ……」

「……うう、お腹痛い」

久しぶりに見る剣がリードと手錠を切り裂いてくれた。何度か咳き込んで剣の主を見るとシグナムだった。俺は思ったね、これはシグナムの姉御が俺の童貞を貰ってくれる！ それなら胸に飛び込んでいいんだね!!

「……わたしが居ないとこで輝夫を食べちゃあかんって言ってたやろ」

「なんだ。八神が助けてくれたのか……シグナムの姉御が自発的にやってくれてたら今晚OKだと思ったのに……」

「不潔なことを考えるな……」

そういうのに耐性のないのか顔を赤くするシグナムの姉御、これはア●ルが弱いタイプですなあ！

でも、生理中の八神が来たことよって事態は収束する。生理中にSEXは出来ない。つまりは八神が俺に性的な何かをすることは出来ない。それに付け加えて前言で言った自分が俺のことを食えないタイミングで抜け駆けは許さないという発言、これは今日一日のアタックが弱くなる！ 俺の勝ちだ!!

「八神……いや、はやて……ありがとう」

「——ツ!?!」

「おまえが居てくれなきゃ酷いことになってたぜ……」

「……ええんよ」

八神の額にキスをしてやると生理の貧血と興奮の混乱で顔を真赤にして倒れる。これでテトリスの四角くらしいの障害も消えた。ゆっくりと男湯に入ってその後はMGSチツクに逃げ出せば終了だろう。俺は生きてこの場所から生還する！

「「……………」」

「そんな不服そうな顔するなよ……八神が俺のことを助けてくれたのは事実なんだし……………」

ムスツとしている四人を後に男湯に向かう。打撲に効く温泉だったかな？

3

どうも、輝夫です。

男湯に入っているのですが体中の傷のせいで筋者の人間と勘違いされて一番気持ちがいいところを占拠しちゃっています。やっぱ温泉はいいですね、荒んだ心が浄化されているような気がします。

え、男湯の尺これだけ？

4

「フェイトちゃんもおっぱい大きくなってきたね」

「すずかには負けるよ……」

中学一年生の少女達の成長は著しく女湯の中で一際目立つ美少女達。

なお、八神はやては生理中の為に借りている部屋で痛み止めを服用して休憩中である。

「うーん、わたしが一番小さいかも……」

自分の胸を確かめるアリサの表情は少しだけ寂しさのようなものを含んでいる。だが、彼女も中学一年生とは思えないくらいに発育スピードだ。

「ブラジャーがすぐに使えなくなるのって辛いよね」

「二人は大変そうよねえ」

アリサの視線の先には爆乳と呼べる程の山、プレシアの胸に視線がある。この胸が遺伝するとするならテストタロツサ姉妹はこれから何回ブラジャーを買い換えることになるのかと思ってしまう。

「輝夫はおっぱいが小さい方が好きなのかな……」

「「え？」」

「だって、今日はヴィータだけ誘ったし……」

「「……………」」

少女達は自分の胸を見てどうしようという困惑の表情を見せる。もし、輝夫が貧乳好きだった場合は自分達は恋愛対象に選ばれないということになる。そうなると大好きな彼は絶対に振り向かない。

フエイトとアリシアは涙を流して母親に抱きついた。

「どうしておっぱい大きくなるように生んだの!？」

「え、ええ？」

「お母さんが貧乳だったらわたし達は……」

「ど、どうしたのよ……」

プレシアは困惑の色を隠せない。胸が大きいのはステータスだと思っていた彼女だが、自分の娘二人に胸が小さい方がいいなどと言われたら困惑もする。確かに胸が大きいと肩がこるが肩こり程度で女性の魅力を捨てるなんてもつての外だ。

「……大丈夫よ、輝夫は絶対に巨乳が好きだから」

「……本当？」

「ええ、嫌いだとしても巨乳の良さを教えてあげればいいのよ」

この母親、娘達に意味不明なことを吹き込んでいる。

だが、娘達は納得したようでお母さん大好きと抱きついた。よくわからない。

「あ、輝夫ならバリバリの巨乳好きだぞ。エロ本も巨乳しか買わないし」

ヴィータの一言で全員が胸を撫で下ろしたのは言うまでもない。巨乳だけに！

5

「……暇やわ」

「じゃあ、話し相手になってやるよ」

「ツ!? ……輝夫」

八神が借りている部屋に無断侵入すると優しい笑顔で迎え入れてくれた。

とりあえず八神が腰掛けている反対側の椅子に座って足を組む。彼女は不思議そうに真つ先に自分の部屋にくるとは思わなかったと言った。

「助けてくれたわけだし、お礼くらいは言わないといけないと思ってな……痛み止めは飲んだか?」

「うん、飲んだよ……」

「そうか、なら話し相手になるから好きな話題出せよ」

八神の他愛もない世間話に相槌をうって適度に返事を返す。その繰り返し、女という生き物は話しを聞いてくれる優しい男性が好きだとプレイボーイだった先輩から教わったことだ。

八神の表情が少しだけ渋くなる。

「なんで……なんで輝夫は好きな人をつくらんの?」

「……八神、俺はおまえ達が思っているより綺麗な人間じゃないんだ」

「それでも!」

「八神、俺はさあ……人の命を何度も奪って罪悪感一つ感じないような極悪人なんだ。」

そんな極悪人が愛する人を作ったらどうなると思う？ 弱肉強食の世界は弱い、つまりは狙いやすい奴から標的にするんだ」

俺が原作ヒロイン達と付き合わない理由は二つある。一つ目は守備範囲が十八歳（高校卒業済み）から二十九歳までってことと……。

二つ目は今まで殺してきた奴らの残党が愛している人を標的にするかもしれないという可能性に怯えているからだ。俺みたいな極悪人が愛されるのは嬉しい限りだが、選んでしまったら獲物にされる。それが一番怖いのだ。怖いんだ……。

「それでも——わたし、八神はやては西風輝夫を愛しています！」
「……もう少し大人になったら考えてやるよ」

唇を重ねた。

激しくない、ただ、唇と唇が触れ合うだけの優しいキス。

「でも、俺よりいい男はこの世界、この宇宙にいっぱいいるからそつちを見つけた方が早いぜ……」

部屋から出て他のヒロイン達に見つかからないように帰った。

28 : 絶唱

ワイの名前はバルバロイ、この海鳴では有名なコスプレパチンカーや！

今日も今日とてホールに並ぶ。今日はイベント規制される前の旧イベントと呼ばれる日なんや、やから駅前前のホールには百人近い行列が出来とる。

「……今日は多いわね」

「なんでプレシアはんがいるんでつか……」

「また、やっちゃったのよ……」

【回想】

プレシアはいつものようにテレビを死んだ顔で眺めている。娘達は輝夫の写真を賭けにトランプ遊び、オイチヨカブとかいうものをやっている。彼女は思った、この子達は真つ当な人間から外れはじめているのではないかと……。

「ブタ……フェイト？ お願いだからその写真だけは……！」

「姉さん……これは勝負なんだよ……」

秘蔵のメガネ着用輝夫写真を奪い取るフェイト、その写真を奪われて涙目になるアリシア、この光景は他人から見たら異質としか言いようがない。プレシアは冷ややかな目

でそれを眺めていた。

「お母さん！ フェイトがわたしの写真とったー!!」

「ち、ちがうよ！ 姉さんが写真を賭けて勝負しようって言ったから!!」

「あなた達……お母さん少し悲しい気分だわ……」

確かに育児放棄していた期間が長い自分だが、ここまで自分の娘二人が一人の男に入れ込むなんて思ってもいなかった。確かに輝夫は超優良物件、大金持ちで容姿端麗、腕っぷしも強くて頼りになる男だが、自分の守備範囲外の女の子には一切の興味を示さない。黙って二十歳になるまで待てばいいとも思っている。

「お母さん！ もう一回バルからパンツ買ってきて!!」

「え、ええ……」

「フェイトも輝夫のパンツと交換だったら返してくれるよね!」

「……パンツならいいよ」

プレシアの瞳から雫が一粒ながれた。

「……駄目よ、女の子が男の子のパンツなんて」

「お小遣い……いらぬの……?」

「お小遣いがないと遊べないよね?」

「……わかりました」

【回想終了】

「娘から小間使いにされるとか母親としてどうなんですかね……」

「母親としての尊厳を剥奪された気がするわ……」

プレシアはんはすっごいグロッキーな顔でワイのことを見つめる。これはパンツを買わせてくれという意思表示やろうか？ でも、あの北斗無双事件以来はディスクアツプを打って収支がプラス域に達したのでご主人はんのパンツなんぞ触るつもりはない。

「お願いよ……今回は一枚でいいから……」

「嫌や！ ワイはご主人はんのパンツなんぞさわりとうない!!」

「お願いだから……」

「どうして娘はん達に主導権とられてんでっか……」

プレシアはんがご主人はんが見てるアニメの「アクア」とかいふ女神のように縋り付いて揺らしてくる。そこまでして人間としてどうだろうかと思うのだが、ここでマズイことが起る。

「お客さん……喧嘩はおやめください……」

「喧嘩じゃありまへんがな」

「お願いだからパンツを!!」

「え、その人変質者ですか……？ 警察を」

「え、ええ、違いますんで！ もう行きますわ……」

せつかくのイベント日なのにプレシアはんの言動のせいでワイは抽選を受けることが出来なくなつた。

2

場所は移つてホールの近くにある公園、そのベンチに腰掛けている。

イベント日の列の中間と言うたら良い番号が引ける場所やのに……この紫髪ババアに邪魔されてもうた……。

「プレシアはん……お願いやからワイの趣味の邪魔をしないでくださいな……」

「だって、パンツを手に入れないとお小遣いが……」

「フアミレスとかで働けばええでしょうが……」

「私、ミッドチルダの名門大学を主席で卒業した超エリートなのよ……？」

この人、元犯罪者なのにプライドだけは一丁前やな……娘から貰える小遣いで遊び回つてるちゅーのに……。

ワイは席を立てて近所のマ●ハンに向かつて足をすすめる。あそこは釘も設定もウンチなゴミやけど、駅前ホールはだいたい打たれてるやろうしマ●ハンかダ●ナムくらいいしか打てる場所があらへん。

「……パンツを」

「じゃあ、ワイと出玉勝負しまへんか？　ワイに出玉で勝つたらパンツを売ってあげましよう」

「本当!?　早く行きましよう!!」

「どうしてパンツなんか……」

ワイとプレシアはんはポツタクリ店へと続く地獄の道を歩みはじめた。

3

タクシーを拾って郊外の大型ポツタクリ店マ●ハンに到着する。駐車場にはそれなりの車が止められており大型店の風格が感じられる。まあ、サービスなんてワイにはいらんのですがね、永久機関積んでるロボットやから寝なくてもいいし、飯も食わんでええ。

「マ●ハンでスロットは自殺やからパチンコにしましょうか」

「隣を打つからなんでもいいのだけど」

グルグルとパチンコの島を回って決心した。北斗無双はプレシアはんと相性がいいからシンフォギアにしよう！　サミーと相性がいい人間は基本的にサンキョーと相性が悪い！　ワイは昔からサミーと相性が悪いねん、でもサンキョーさんはワイと相性ベリマッチグーなんや!!

「へへっ、今回はワイが勝ちまつせ……」

「勝たないとパンツが……」

「いい加減にパンツを脳みそからデリートしていただけませんかね？」

サンキョーが偶然にもヒットさせた歴史的名機「CRF・戦姫絶唱シンフォギア」に着席する。流石はマ●ハンと言わんばかりの処女のようにキツキツのへそを見て若干だが心が折れそうになりますわ。でも、優良店は軍団が選挙する時間帯やし、このマ●ハンで勝負するしかないんや！

「これ……なに待ち……？」

「保留変化したらオールレンジチャンスくらいですわ、プレミアもいっぱいありますから」

「どこからでもチャンスなのね……」

「じゃあ、失礼して……さらば諭吉！」

CRF戦姫絶唱シンフォギアの特徴は規制されたとは思えない程の出玉効率の高さ、最終決戦のドキドキ感、一万円で勝負できる199というスペック、どれも絶妙なバランスで設計されとる。一種二種混合機が今の時代に台頭してきた理由になった一台や！こんな楽しい台で負けるわけあらへん！

『夜の九時以降は食事を控えている』

「え？ この子……フェイトとアリシアに声が似てる……」

「知りませんが……」

生粋のパチンカスであるワイが声優のことなんてわかるわけあらへんのでそのまま流す。でも、ご主人は的に言えば中の人が一緒だとかそういう感じなんやろうなあ……。

千円が消えたところで回転数は12……これは客に遊ばせるつもりあらへんと一瞬で気がつく回転数やん……。

パチンコはだいたい千円で18くらい回らないと遊技なんてできまへん。ボーダーライン20超えの台が沢山あるのにホールでは千円12〜15という釘設定が多すぎて頭痛くなりますわ……。

「……青保留か」

「え、青保留消化したんでっか!？」

「え、ええ……青保留だったけど……」

プレシアはんの台が速攻でプレミアアの青保留消化を果たした。何千回転と回して一度も達成したことのない青保留消化とか……。

音量設定を3にしていたのか鳴り響く爆音が島に響き渡る。

「プレシアはん……音量を2にしてください……」

「えっと、このボタンかしら……」

「プレシアはんの豪運はワイにはわからん……でも！ このシンフォギアは319ではなく199なんや!! ワイだって最終決戦を突破できたらイケるはずや!!」

「最終決戦？」

「右打ちして保留を貯めるんやで」

「へえ……」

「プレシアはんが右打ちを開始する。そして一発目に絶唱パネルが出現した。」

「この時、ワイは確実に負けること理解してしもうたんや……」

「あ、扉が閉まったわ！」

「おめでとうございます……」

「プレシアはんは右打ちを続けてV入賞させる。そしてチラリとセグを見たら16Rだった。この人のツキはどこから湧き出てるんやろ……」

「キラクターを選べるのね……フェイトとアリシアに声が似てるこの子で……」

「ワイも熱いのほし——ツ!？」

『そいつが切り札だ!!』

「デュランダル来たー!! ワイも土俵に立つたるわ！」

38回転目にしてデュランダル! こんなの外すわけ無いやん!!

デュランダル保留はそのまま70億人の絶唱に突入していく。

『わたしが束ねるこの歌は……70億の……絶唱だああああああ!!』

「ありがとうございませーす!」

『スカッ』

「へ?」

Vコントローラーを引いた瞬間に響き渡るスカ音、ワイの心が凍りついた。

4

「この台凄いわね……二時間で三万発……」

「また、またでつか……またこのパターンでつか……」

回転数はいつものように600回転、199の三倍の数字が表示されている。パチンコは完全確率のほずなのにワイの台はパーペキに死んだる……。

プレシアはんは右打ちし続けて毎回毎回保留連させて八割が16Rという化け物っぷり、下振れと上振れというのはロボットにしか通用せんのかもな……。

「ワイは諦めないで……打つのを諦めないで……!」

5

「フェイト……アリシア……よく頑張ったわ……」

「……ご主人はんと無理心中しようかな?」

1300回転ハマってるシンフォギアとかはじめて拝見させてもらいますよ、199で1300はヤバイですね、これは逆に神がかつてる何かを感じますわ。

「もう財布が空っぽですわ……パンツ拝借してきます……」

「……倍プツシュ」

「え？」

「二枚よ、一万円貸すから二枚！一枚あたり一万円で買い取らせてもらおうわ……！」

え、ご主人はんのパンツを一枚強奪するだけで一万円!? ええやん!!

6

どうも、輝夫です。

自室でダラダラしているとバルが扉を蹴破つて部屋に侵入してきました。こいつは脳みそが故障したのでしょうか？

「今履いてるパンツを寄越せええええええええええええ!!」

「は??」

「貴様が渡す小遣いが少ないのが悪いんや……貴様が悪いんや……!!」

「ええ……」

この後、ボロボロになるまで破壊してからアセンをフラジールにしました。

29：マツスル

最近のむさしきゆんはぼつくんにすつごく冷たいです。

ミカ、ホノカ、リン、ミク、マミという女性達が今現在のむさしきゆんのセックスフレンドです。ぼつくんは思いました、彼はこの世界の素晴らしさを一身に受けて自分だけが気持ちよくなっているということに……。

もうそろそろ処刑しないと心が折れそうな気がしますが、大親友を殺すことが自分に出来るかと聞かれたらムリとしか言いようがありません。ですから体を動かしてストレスと性欲をシャットダウンしています。

「68……69……70……」

家の庭には簡易的なトレーニンググッズが揃っています。懸垂用の鉄棒、腹筋が出来るベンチ、腕立て伏せをする用の突起物、ランニングは夜九時頃に出ることが多いです。むさしきゆんも毎日ここでトレーニングしているのですが、最近はやを高速で動かすトレーニングに夢中になっておるためにおサボりさんです。殺していいですかね？

「くっそー……どうにか社会的に武蔵を殺せねえかな……」

懸垂百回を終了させて背伸びをする。

腹筋が出来るベンチに移ろうとすると大きめの石を持った八神がリビングのガラスを割ろうとしているのが見えた。家主の目の前でガラスを叩き割ろうとか腐った根性してやがるぜ……。

「——ッ!? は、はだかやん」

「九月でもあちーんだよ、トレーニングの邪魔だから帰れ帰れ!」

上半身裸でトレーニングをしているからか、顔を両手のひらで隠しているが指の隙間からガン見していることがわかる。別に減るようなものでもないし構いはしないのだが、小恥ずかしさが少しだけある。

左腕のG—SHOCKを確認してみると学校が終わって一時間くらいだろうか？

この感じだと、あと四人は確実にゾロゾロとやってくるな……。

「輝夫いた……ッ!」

「どうしたの……ッ!」

「フェイトかおまつか……ッ!」

「よく鍛えてるわねえ……」

はい、テスタロツサ姉妹とお嬢様コンビのご到着。いつものことだから気にも止めませんよ、俺はストレスを運動で発散するのです。君達からのストレスも含まれていますですよ? 十円ハゲになったらどうしてくれるんですか……。

「今日の分のトレーニングが残ってるから適当に寛いどけよ……その窓開いてるから……」

腹筋ができるベンチに足を絡ませて腹筋300回を開始する。小さい頃に筋肉を付けすぎると身長が伸びないと言われてるが、もう俺は170cmあるので身長とかどうでもいい。逆に体重が増えないのが辛い。今現在は68kgと平均値よりは上だが、出来れば80kgくらいになりたい。細マッチョとかゴミだろ、時代逆行かもしれないが、俺はゴリマッチョ派だ。

「……触っていい?」

「なんで腹筋運動の邪魔をしようとするんですかね?」

「……男の人の腹筋って触ってみたいの」

月村が顔を真赤にさせながら俺の腹を撫でる。そんなのお構いなしに腹筋運動を続けるが不意に月村の顔を見てみるとヨダレをダラダラと滝のように流している。これは姉の系譜か? 高町の兄ちゃんと付き合ってる姉の影響で筋肉大好きっ子なのか!?

「ええい、くすぐったいからやめい! 冷蔵庫に麦茶とかあるからそれ飲んで寛げって

……」

「わたしもいいかな……」

「なんでやめろと言う人間の言葉を聞かないのですかね君達は……」

フェイトたんまで俺のシックスパックをサワサワしはじめた。この子達は完璧に病気の類だね、俺が女の子だったとしてもトレーニング中の汗臭い男なんかに触りたくないもん！ 男は臭い生き物なのに！！

「もうしらん……勝手にしろ……」

どんなにやめてくださいと懇願してもムリなことを悟った。腹筋は部屋でやることにしよう。

腹筋運動のできるベンチから避難して壁際でスクワット100回を開始する。流石にスクワットを邪魔できる猛者はこの中にはいないだろう。

「36……37……何してるの？」

「腕も太くなってると思って」

「バニングスさん……俺はトレーニング中だって言ってるでしょ……」

「左腕もーらいー！」

「あ、ずるーい！」

右腕にバニングス、左腕にアリシア、背中には八神という三人を抱えてのトレーニングが開始される。こいつらはただのバラストだ。俺の筋力的負荷を高めるための重りでしかない……。

「フェイトちゃん……どこか取り付く場所あるかな……？」

「足？」

「スクワットしてる人間の足にへばり付くとか脳みそ沸騰してるのかよ？」

ツツコミを入れたところでスクワット100回に到達する。最後の仕上げの腕立て伏せ、これは流石に絡んでこないだろう……。

バラスト三人を振りほどいて腕立て伏せを開始する。すると回数を重ねるごとに背中にかかる負荷が上がっていく……俺はイナバ物置じゃねえぞ……。

「なんで俺の背中に乗ってるんですかね？ 波乗りも空を飛ぶも覚えてませんよ俺は……」

「二人乗っても腕立てできるんだ……すごいね……」

「フェイトたん……最近悪ノリしてない……？」

「こういう椅子が家にほしいなあ」

「俺は椅子じゃねえからな月村」

この子達は俺のことを玩具にしていることに気づかないのでしょうか？ こっちは体を鍛えてる真つ最中なのに遊べ遊べと言わんばかりに絡んでくるし……。

腕立て伏せ78回で力尽きる。流石に女の子でも二人背中に乗せての腕立てとか三桁むりだわ……。

「もう帰ってよ……お風呂入りたから……」

「あ、わたしもお風呂入りたいんよ、汗かいたし」

「うんうん！」

「自分の家に入れ!？」

「この子達が俺のことを嫌っていたと言っても信じてもらえませんか？

30：お姫様

オッス！ オラ輝夫!! リリカルなのはの世界で一番強い登場人物だぞ!! (転生者)

そんなわけで、いつもの「どうも、輝夫です」に飽きが始めてきたのでドラゴンボールの主人公な感じで挨拶したわけですがじっくり来ませんね、次から普通に挨拶します。

そんな訳で今日も今日とて家でゴロゴロしています。引き籠もり不登校ニートは基本的にこうしていなければなりません。やっぱりね、人間の屑、貝塚モグラ並の人間を目指すものは転生者ドリームを目指さないといけないんでね、転生者として美しい顔を生かしてナンパに出かけようかな、なんて妄想したりしています。妄想だけですよ？ 行動に移したら絶対に発見されてしまいますからね、この世界のサーガで。

「あーあ、なんか退屈になつてきたなあ……バルと一緒にモンスターハンターしてこようかな……」

一昔前に俺の自慢の産業廃棄物と一緒に異世界でモンスターハンターしていたのはいい思い出です。ですが、パンツ要求ロボットはパチンコにのめり込んで暇つぶしに付

き合ってくれませんでした。ですが、今のゴミはアルゼブラ社製の赤ゴキブリからア
リーヤになってるので無理くり連れていきます。

「……小遣いください」

「おまえさあ、どんだけ負けこんでんだよ？」

「ご主人はんから貰った三十万がすべて溶けました……」

リビングルームの片隅で正座しているバルの姿を見ると酷く滑稽で笑えてくる。こ
のゴミは俺の大切な特典なんだけど実力が強すぎてゴミだからさあ、こういう風に虐待
した方が使い道あるのかもしれない？ 最初に小遣いを0にして生きる気力を根こそ
ぎ奪い取る拷問でもして楽しむかなあ。

バル虐を考えていると携帯電話が鳴り響く。ド平日の午前中に連絡入れてくる友達
とかいないんだけどな……。

「もちもち、てるをたんでーす」

「……輝夫、少し会える？」

「……どうしたんだよバニングス？ どこに行けばいい」

電話から聞こえるバニングスの枯れた声、鼻を吸る音も聞こえる。これは確実に泣い
ている。誰だ……俺の友達を泣かせた奴は……。

心に鋭い何かが含まれる。

「……………▲公園に来て」

「わかった」

「……………理由、聞かないの？」

「理由は電話で聞くことじゃないって声でわかるよ……………」

通話を終わらせてバルのことを見る。

俺のマジの顔を見てボケる気も無くなったのか壁に寄りかかっていつでも行動できる態度を示している。

ソファアで寝転がっている武蔵はピースサインを見せて自分も臨機応変に対応できるとアピールしている。

不測の事態は絶対に起こらないな……………。

「ちよつとばかり行つてくる」

「ホウレンソウはちゃんとしろよ、暇すぎて死にそうだから」

「小遣いとアセン変更お願いします」

「了解」

振り返らずに駆け出した。

2

●▲公園に到着すると特徴的な金髪の少女がベンチに座っている。ポケットからハ

ンカチを取り出して流れ落ちる涙と鼻水を拭き取ってやる。

「……驚かせないでよ」

「ひどい顔の美少女は見たくねえんだよ」

「……ごめんなさい」

「謝る要素なくね？」

こんなことをしたら確実に肉体言語で会話するバニングスがしおらしい。これはそうとうな事案だな、二三日で解決できたらいいが……。

隣に座る俺に抱きついた。

「……わたしを女にして」

「……理由次第」

バニングスは語った。

自分の父親の友人の資産家が自分のことを気に入っており、その社長の息子との縁談を何度も申し入れてるといふ。資産家は父親の会社の大株主で頭が上がない関係であるとも語った。父親は愛娘である自分は自由に恋愛してほしいと断っているのだが、最近は恐喝紛いのことも平気で言ってきたらいるらしい。

バニングスの会社の規模が大きいから、俺のポケットマネーで売られるだろう株の回収は厳しいか……。

「他の男のモノになる前に……輝夫に抱いてほしいの……」

「……駆け落ちするか」

「え？」

「一回やってみたかったんだよね、駆け落ち」

バニングスのことの頭を撫でる。

あつけらかんとした表情で俺の顔を見ている。

まあ、駆け落ちみたいは口マンティックなことではないが、武蔵とバルが粗探しするまでの時間稼ぎにはなるだろう。でも、バニングスのお父さんに駆け落ちすること説明しないと駆け落ちとは言えないよな？ 電話で済ませるのも悪くないがドラマティックにやりてえなあ……。

「お嬢様」

「鮫島!？」

「お食事会がありますので……」

バニングス家の執事鮫島さんが苦しい表情で俺達のことを見ている。

懐から拳銃を取り出して胴体に向けて照準をあわせる。

元軍人なのか動揺の気配は感じられない。

「会食場所」

「……XYZホテル最上階」

「会食の相手」

「……下洲ホールディングス社長、下洲道長様と御息の下洲晶様です」

拳銃を懐に戻してバニングスの肩を叩く。

「迎えに来る。絶対」

「……ありがとう」

「ロマンティックな駆け落ちしようぜ」

彼女の顔からは涙は消えていた。

さて、粗探しつてのは楽しいよな……。

3

XYZホテルの最上階にあるレストラン、そこを貸し切りになる人間はそうはいない。フロアには客は四人しかおらず小太りな親子と風格のある欧米人とハーフの娘、この場で大きな会談があるのは想像に難くない。

「アリサちゃんは十三歳になったんだよね」

ねつとりと嫌らしい声で尋ねる小太りの男、この男がバニングス家を苦しめている下洲道長である。アリサは気持ち悪さから身を震わせながら「はい」とそう小さく返した。

「うちの息子は今年で二十歳になるから三年後には結婚できるね」

「……いつも言っています、娘には自由に生きて」

「そんなこと言っていないんですかね？ バニングスさんの会社、最近事業で失敗が続いてるみたいですよ」

これまた小太りの若い男が蔑むような目でバニングスの父親を見た。そして嘲笑を開始し、上下関係を見せつけるようにふてぶてしくテーブルの上に足を乗せた。

アリサは「早く来て、輝夫……」と何度も呟く。

「アリサちゃん……本当に可愛いよね……」

「——ッ!？」

「本当に日本はなんで女の子は十六歳から結婚なんだろうね……」

「輝夫……」

扉が蹴破られる炸裂音が響き渡る。

「呼んだ？」

「——輝夫!？」

「ああ、やっぱり呼んだ」

輝夫はズケズケと会食してる四人の前に立って下洲親子の顔を見る。そして腹の底から笑いはじめた。

「ハハハッ!! こりや傑作だ!? もう少し色男で好青年だったら少しだけ考えてたが

……このブタがバニングスに求婚してるわけ？ うっわ、身の程知らずって言葉を辞書で引けよ」

カバンの中から分厚い広辞苑を取り出してテーブルに投げる。

輝夫の罵倒で身を震わせる下洲晶は立ち上がり指をさした。

「貴様は誰だ!?!」

「バニングスと駆け落ちする予定の男」

「「は?」」

真つ直ぐな瞳で語りはしめる。

「私の名前は西風輝夫、アリサ・バニングスさんを奪い去りに来ました。どんなに引き留めようが人員を呼ぼうが構いません。ですが、麗しき姫君をこんな家畜に渡すわけにはいかんです。さあさあさあ! 暴言の限りをぶつけてみせろ!! それでも俺は連れて行く。一人の男として……俺を愛する人間を見捨てることなんて出来はしねえんだよ!!!」

輝夫の踵落としてテーブルは真つ二つになる。

バニングスの父を見た。

「少しだけ娘さんを借ります……絶対に返しますよ……」

「……幸せにしてくれ」

アリサをお姫様抱っこで抱えて蹴破った扉から逃げ出す輝夫、下洲親子は大声でボディーガード達を呼び寄せる。が、誰一人来ることはなかった。

「こういう下処理は俺の仕事なんだよねえ」

ボディーガード達が力なく地面に突っ伏している。それを見つめるのはニンマリと笑った武蔵だった。

「後は……バルの脳みそ次第だな……」

武蔵は窓から飛び降りて逃げ出した。

「……これからどうするの？」

「家用意してるからそこに住む」

「——えっ！ 本当に駆け落ちじゃない!？」

「だから、言っただろ……駆け落ちしてみたいからやろうって……」

余裕の笑みを浮かべる輝夫の顔を見てアリサも微笑んだ。

4

どうも、バニングスと駆け落ちしている輝夫です。

いやはや、女の子の親の前で駆け落ちするからヨロ！ とか普通言えないですよね？
俺は言っちゃいましたよ（笑）。

駆け落ちして隠れる場所がないと色々と不便なので武蔵が住んでいた高層マンション

ンにやってきました。武蔵の奴はズボラなので電気ガス水道は最初から持っていたく
レジットカードで引き落とされています。もったいないと感じるのですが、別荘と考
ると別にそれ程でもないのかな？ なんて思ったりもしているのですよ。

「ふああああ……あの産業廃棄物はまだ仕上げられないのか……」

あくびをしながらゴミが情報を漁ってくるのを待っているのだが、ゴミの脳みそを戦
闘用ではなくハッキング用に改造するのに手間取っているらしい。仕上がるまで二日、
ハッキングに二日と四日間はこのマンションで生活しないといけません。

「だーりん♡」

「誰がだーりんだ!？」

「だって駆け落ちしたんだから夫婦でしょ?」

「ちがいますー! 家畜に美少女を渡す趣味がないだけですー!!」

バニングスはすっかり駆け落ちして夫婦の関係になっていていると思ひ込んでいる精神
障害者なのか、このマンションに着いた瞬間に飼いなされた猫のようにじゃれついて
くる。この甘い香りのする美少女と四日間の閉鎖空間、耐えられるか俺?

彼女は膝の上に乗って無理矢理に唇を重ねてきた。

「わたしだって……独占欲はあるんだから……」

「俺には無いね、この世界の女は一人残らず俺のもの理論持つてるから」

「じゃあ、わたしもその中の一人よね……」

「やめていただけます？ 本当はチェリーボーイの虚言なので」

押し倒されて濃厚なフレンチキッス、こいつアメリカ人だろ？ なんでフレンチのキスをするんですかねえ……。

息が続かなかったのか呼吸が出来るようになる。目をみただけでわかるよ、女の子じゃなくてメスになっていきますねこれは……。

「わたししか考えられないようにしてあげる……」

「ぼっくんは他の事を考える余裕のある男になりたいのですか？」

「その余裕がどこまで続くかしら……」

「やめて！ 乱暴するつもりでしょ!? エロ同人みたいに!!」

バニングスが上着を脱ごうとした瞬間に響き渡る着信音、バニングスの携帯電話は探知されたら困るので普通に破壊した。一応は弁償するつもりではあるが、弁償よりデーとかを要求されそうな気がする。あ、早く出ねえと。

「すいません、電話使つていいですか？」

「……この電話も壊していい？」

「お願いします！ 武蔵との大切な連絡手段なんです!!」

「……五分だけよ」

素敵な駆け落ち相手（絶望）の許しをもらって電話をとる。するといつものように気の抜けた武蔵の声が聞こえた。生活必需品でも買って持ってきてくれるのだろうか？

『輝夫、バルの奴一日でやってくれましたよ』

「え？ まーじ!! どうやったの」

『アクアビットマンになった』

「流石は俺達のヒーローアクアビットマン！ そこにシビれるあこがれるウー！」

説明しよう！

アクアビットマンとはPA整波性能19103&KP出力999を誇る最強のヒーローである！ 全てのパーツを可能な限りアクアビット製、ムリな物は同志レイレナードで構成してみよう！

『で、どうするよ？ 手に入れた情報を警察に流すか』

「あのブタ共の絶望の表情を見てたいから呼び出して逮捕させるわ。警察の隠蔽対策に掲示板に見つけた情報を貼り付ける準備をしてくれ」

『了解。それにしても、やべー情報だぜこれ……日本の闇だわ……』

どんな情報なんだろう？ ちよつと興味がわいてきた。

「どんな情報だったわけ？」

『児童ポルノってやつ？ バニングスに求婚してたブタとその父親のブタが小学校低学

年くらいの女の子を満面の笑みで犯してるぜ……なあ、いつそのこと暗殺しねえ……？」

「Yes ロリーター！ No タッチを土足で踏み荒らして楽しんでるゴミか……：刑務所で
の強姦魔の扱いは酷いらしいから一旦保留、保釈金とかで逃げ出したら行動でいいだ
ろ」

『りよーかい……バル！ ペド野郎の電話番号控えてるか？ ああ、わかった。輝夫、
メールで電話番号送るからセッティングは任せる。セッティングしたら連絡入れてく
れ』

「世話になるな」

『それは言わない約束だろおとつあん』

「『誰が親（娘）だボケ!!』」

通話を終わらせるとバニングスが背中から抱きついた。

「……もう終わっちゃうんだ」

「終わらせないと後々が辛くなるからな」

「……何もしないでいいのよ！ 輝夫がわたしだけのモノに」

「家族と友達を捨てる覚悟がないのによく言うぜ、顔に書いてある……捨てる勇気がな
いってな……」

家族、友達は一度切り離したら二度と手に入れられない存在だ。それを捨てられる覚悟なんて人間そうそう持てるものではない。バニングスは人一倍感情豊かで強がりな性格だが、心の底から二つを愛している。三つ目の恋人まで欲張って手に入れちゃおうとするお茶目さんだ。

抱きしめられていた二つの手が離れていく。

「本当に……そういう時のアンタって本当に……」

「女心は秋の空だが、晴れたら晴れ、雨なら雨、雪なら雪ってね。見ればわかるんだよ……」

「……わたしの心は」

「青空が見えますねえ……」

雲一つないね。

バニングスを抱きしめた。

「いいか、俺はすつごく嬉しい」

「……え？」

「まず最初に俺に頼った。女の子が男に何かを頼む時はだいたいは好きだって……心の底から……」

「輝夫……」

「自分のことを好きな女の子に頼られたら奮い立つのが大和男子ってね」
バニングスの額に口づけをした。

「勇気が持てるおまじない。効果あるかね？」

「……強すぎるわ」

また押し倒される。

ぼつくんのチェリーはあげないからね!?

5

「いらっしやーい」

ふてぶてしい足音を響かせて入ってくるペド野郎二匹、背後には重武装の私兵達がゾロゾロと……日本っていつから民間人の銃火器所持が認められたんでしょうか？ 私気になります。

ここは船着き場の資材置き場、普段は人の気配は感じられないような場所だ。だが、こと今日に限ってはゲロ以下の香りを漂わせるゴミが沢山漂着していますね……。

「アリサちゃんと駆け落ちしてくれてありがとう。これで思う存分に彼女を抱けるよ」

「うっわ、薄汚い金持ちっているんですねえ……権力だけで女の股を開かせるゴミって……」

「アリサちゃんの処女を奪ったのは許せないな……僕は処女が大好きなのに……!」

「キツモ!!」 処女厨が許されるのは高校生までですよ」

まあ、アレだけの猛攻を回避して童貞も処女もキープしているわけだが、これを言ったらこの男が喜びそうだし言わないでおきますか。

——聞き慣れた炸裂音が響き渡る。

「ツ!!? あがあああ」

「ハジキはリボルバーに限るねえ」

俺の愛銃、S & W・M 6 8 6 は今日も命中精度抜群だ。私兵の指を綺麗に吹き飛ばしてくれている。

銃口から上がってくる硝煙の香りが堪らない。今日はオナニーしよう。

「なんで銃を!?!」

「そつちが持つてるなら俺も持つてるに決まってるじゃん。グチョパーできるじゃんけんじゃねえんだぞ……」

「だが、武器はこつちの方が上だ!!」

ペド野郎が叫んだ瞬間に炸裂音が響く……筈もない……!!

私兵達は相棒の拳で次々と気絶させられていく。今日もバトルジャンキーなむさしきゆんは瞳に狂気を含ませていますわ……。

「さーて、裸のブタさんが二匹……どう解体してやろうか……?」

「や、やめろ！ 金なら払う!!」

「父さん！ 早く小切手を!!」

「金で解決つてか……へへっ、汚ねえな……」

拳銃を懐に戻してこの二人の未来をポエミーに語ろうか……。

「三匹の子豚がいました……長男は藁の家、次男は木の家、三男は煉瓦の家、いい家が出
来たらしい、

三匹の子豚は狼に襲われますがどうか狼を殺して三男の家で仲良く暮らしました
とさ、

ある日、三匹の子豚の家に猟師が現れました。三匹の子豚は言葉も言えないまま撃ち
殺されて猟師の一ヶ月の食料になりました、

三匹の子豚の家は猟師の家になり、猟師は結婚して子宝に恵まれました、
猟師は年老いて多くの孫達に囲まれて死にました、

でも、猟師の頭の中に三匹の子豚のことが——あるわけねえよな……」
「何を言っているんだ!?!」

「お前達の末路だよ……ブタはブタらしく生きな……」

武蔵を連れてその場から出ていく。

明日は新聞を買わないとな……。

コンビニで買った新聞を読みながらスクワット、一面に富豪親子少女買春の罪で逮捕とデカデカと書かれている。どんなに金を持っていようと不特定多数が入り乱れている掲示板に犯罪の証拠を流されたら警察は動くしかない。これがブタにお似合いの末路ってやつだよ。

『ご主人はん！ 財布の中にお小遣い入れてるって言ったじゃないですか!? 十万円つてしよっぱいですよ!!』

『アセンの変更料だ』

『くっそー!! アルゼブラ製のパーツはロックされてるから自分で変えられないのをいいことに!』

『まあ、それを増やすんだな』

バルとの念話を終わらせて新聞を投げ捨てる。

「ああ、今日はいいい日だ……」

「「……キスマーク」」

「へ？」

「「……本当にしたんだ」」

「ええ……」

「「死のうか！」」

リンチ落ちとかサイテー！

31：優男

どうも、輝夫です。

今日も今日とて暇な俺は俗に言う放課後？ 不登校にはそんなものありませんがソレと同じくらいの間帯に最愛の人に呼び出されてしまいました。ぼつくんのチエリーを唯一託していいと思っっているその人は——いつものように修一郎様ですわ、捻りがなくてごめんね。

なんか、高町の家の道場で鍛えてくれとか言い出したので来てみたら高町一家（高町なのは不在）さんが手厚くお出迎えしてくれました。帰りにコーヒーを飲んで帰ろうと思います。

「西風すまない……急に呼び出して……」

「もう！ 修一郎様のご命令は絶対ですワン♡」

「おまえはどうして俺にそういう態度出来て、他の子には出来ないんだよ……」

「だって、中学生じゃんか、性犯罪じゃんか」

修一郎様は何故か頭を下げて強くしてくださいと懇願してきた。もしかしてチンチンが弱々で早漏を治したいから俺を呼んだのだろうか？ それだったらホモビデオと

オナホを持ってきたら良かった。

「定期的に……」「SEX!」俺の話しを聞いてくれませんかね?!

「だつてさあ、ギャグ専門のぼつくんにギャグを言うなというのは喉が渴いてるのにお水を飲むなど言つてるようなものですよ、修一郎様の前だけでもボケさせて、ボケキャンセル持ちの知り合いが多いから」

「……俺は、友達を守れないような人間になりたくない。西風みたいな強い人間になりたい!」

「無理だよ……修一郎様は割り切れるタイプの人間じゃない……」

うっわ、このオリ主物凄く面倒くさいこと言い出しましたよ! 俺と同じくらい強くなりたいたとか三百年くらいかかりますよ? それに時空管理局の生温い規則を馬鹿正直に守つてるような奴がアウトローをマジでやつてる気狂いと同じになるとか無理無理之助。

でも、言つてることはわかる。前の賢者の石だとかいうロストロギアを持つてた奴の使い魔一匹倒せない情けない自分に何か思うことがあつたのだろう。俺が修一郎様の立場でも思ひ悩んでしまうさ、だがしかし、俺と修一郎様とは正反対な部分がある。それは幼少期に無茶をしたかしていかないかだ……。

俺と武蔵は小さい頃に深く考えずに人の生死を語っている。そして今現在は深く考

えて人の生死を思っている。似ている言葉だが、これは正反対。人の命というものは一つしかなく奪ったら戻ってこない。それを理解するのは幼稚園児でも出来る。でも、俺と武蔵はそれを理解できなかった。だから、人を殺して深い罪悪感を体中に受けることがなかった……。

それが染み付いて命が尊いものだと思っても人の命を奪つてもケロツとしている。割り切り方を理解してしまっている。これが何を意味するか？ オン・オフの切り替えに時間がかからないということさ……。

— そう、殺していいと思つたら殺してしまう。これが俺と武蔵だ……。

「……まあ、心は無理でも体は少しだけなら変えられるか」

「指南してくれるのか！」

「うん、別にいいよ。でも……そこにある木刀だと修一郎様が怪我する可能性があるからこいつを……」

「ピコピコハンマー!？」

修一郎様をバカにするグッズの中で一番どうでもいいと思っていた物が今日の主役になるとは思わなかった。こいつは五年前くらいにノリと勢いだけで百均から購入したピコピコハンマー、メイドインチャイナ、最近のチャイナ製品は品質上がって日本より上だわ……。

木刀は鈍器、つまりは人を殺せる道具。こいつはジョークグッズ、つまりは人を殺せない道具。オン・オフの切り替えが早いぼつくんはノンタイムで本気になることがあるからマジでこういうの使わないと危険なんよね……。

「二つだけ言うけど……武器が不真面目でも攻撃は真面目だからな……」

「……わかった」

「じゃあ、そっちが試合開始の合図して」

「……スタート……」

——ピコツと鳴り響く音が小さく木霊した。

修一郎様の首に当たるピコピコハンマー、この時点で鈍器だろうが刃物だろうが人間は死んでいる。

目を見開いて驚愕している。

「……目を慣らせ、そうしないと永遠に俺の速度について行けないぞ」

バックステップで間合いを離して修一郎様が木刀を構える時間をくれてやる。それにしてもノロノロと亀さんのような動きですわ、さっきの攻撃で動揺したか？ これくらい実戦で出来ないと十年も生きていけないぞ……。

修一郎様の木刀が迫る。

——振り下ろされた木刀を足で押さえつけて頭にポンとピコピコハンマーを叩きつ

ける。

「頭蓋骨が割られて死亡」

「まだまだ!!」

「足の大動脈を切られて出血多量」

「俺は生きてる!!」

「心臓に強打で心停止」

「うおおおお!!」

「右肩脱臼でほぼ戦闘不能」

約一分間の攻防で四回の戦闘不能とは、本当に高町達と一緒に戦ってきたのかと思ってしまう。修羅場を多く切り抜けてきた人間は基本的に野生の直感みたいなモノが備わっていると長年の経験で思っていたが、こと修一郎様に限ってはそれが無い。

まず、俺のピコピコハンマーを見て自分は死なないからセーフだと思っているところが駄目だ。これがナイフや棍棒なら確実に死んでしまう。想像力というのかな？俺が持っているピコピコハンマーを凶器だと思って対応していない。大丈夫だからチャンスを見極めよう、これが駄目ならこつちを試してみよう、そんなのは実戦では意味をなさない。それは受験勉強とかで必要になる思考だ。

「ハアハア……どうして……」

「……駄目だこりや、全然わかってない」

「何がだよ……!」

「……俺の攻撃をどう思った？　なあ、冷静になって考えてみる」

「へ……ッ!」

「全部人を殺す一撃なんだよ……で、君の攻撃は全部——人が死なない場所に向けられていた」

逆に奇跡とも言えるね、修一郎様の攻撃は全部戦闘不能には出来るが人の命を奪わないような場所に向けられていた。まず最初に手足は関節以外の場所、これは後々の障害が残らないようにという配慮なのだろうか？　胴体は臓器が集中する肋骨の部分より下の腹部と呼ばれる場所、手は武器に集中し過ぎて攻撃できる場所だとすら思っていない、首と顔なんて論外、狙いすらしていない。

生温い。

「初歩から行こう。どうせ非殺傷設定で武器を使うなら人を殺せる部分を狙ってもいいんだよ」

ピコピコハンマーで動かなくなった修一郎様の体をポンポンと叩いていく。頭、首、肩、手足の関節、踏みつけて行動させない爪先、この部分を攻撃しないと相手は痛みを気にしないで突進してくる。戦闘中は脳内麻薬で痛みが緩和されるわけだから……

だからこそ、急所を狙わないとダウンが取れない……。

「相手を一撃で屠る一撃は相手を一撃で戦闘不能にする一撃だ。使い勝手のいい人を殺せない武器を使ってるのにそれに気が付かないとかバカじゃないの？」

「——そのくらいにしてくれないか」

「あら、高町のお父さん」

高町のお父さんが心配を戻して修一郎様の肩を叩く。修一郎様は自分の弱さを実感したのか涙を流して崩れていく。レベル30の勇者がやりこみ勢のレベル99の勇者と対峙してるようなものだからな。

「君は……それだけの実力をどこで……？」

「ストリートの我流ですよ。ストリートでは適応出来ない人間から死んでいく」

「……君も辛いな」

「さあ？ 自分らしく生きるには力がいるので」

高町のお父さんは慈しむ目で見つめた。わかりますよ、多分、俺も同じような目で貴方を見ていますから。戦い方が違って同じようなことをしているのだからわかり会える。理解できてしまう。それが「筋者」の感覚だ。

「よし、修一郎くんの仇は僕がとってあげよう！」

「へ？」

32：誕生日会

どうも、輝夫です。

今日は大切なお友達の誕生日会なんで中野くん……じゃなかった、高町の両親が経営している喫茶店、たしか名前を翠屋とか言う場所に来ています。この場所に来るのははじめてなので少しだけ私ドキドキしますが、まあ、高町のお兄ちゃんくらいしかキツイ眼差しを向けていないので大丈夫でしょう。

「にしても、貸し切りとかええのかね」

「娘の友達、それに付け加えて息子の奥さんの妹の誕生日会なんだ！ パーツとやらな
いとね」

カウンター席でコーヒーを飲みながら高町のお父さんと世間話をしている。俺と武蔵は不登校が許されている（諦められている）ので一時間くらい早く入店しています。武蔵の方を見るとコーヒーの苦さにまだまだ舌が慣れていないのか渋い顔で砂糖を投入しています。

「てるをたん……こーひーにがおい……」

「しーらなーい」

「ぼつくんがセフレと遊び回って、てるをたんと遊べないからって冷たくすることないじゃないですかあ〜」

「ぼつくんはむさしきゆんから修一郎様に鞍替えしたんだお！　むさしきゆんのことなんてしーらな〜い！」

「でも、ぼつくんのこと忘れられないんでしょ！」

「もう！　修一郎様が忘れさせてくれるんだから」

「キヤツキヤ」

武蔵と久しぶりに乳繰り合っていると店の扉が開かれた。さて、誰が一番乗りだろうか？　ああ、高町の姉ちゃんじゃん……。

「あれ、輝夫くんは武蔵くんもすずかちゃんの誕生日会に来てくれてたんだ」

「ええ、友達の誕生日会ですから」キリツ

「一人でも多くの友達が来たほうが楽しいですからね」キリツ

「うっわ、学校で色目使ってくる男達の目してるう〜」

「バレたかあ!?!」

ちくせう！　高町のお姉ちゃんは俺達の守備範囲に存在する希少な存在なのに!!
美人だから相手の視線に敏感になってやがる……付け入る隙間はねえのか……?!

「色目使わないので付き合ってください！　婿養子でいいので!!」

「あ、ずるーい！ ぼっくんなんて浮気したらパイプカットしますから!!」

「「「へえ……」」」

「あの、ガラス代弁償するんで割って逃げていいですか?」

「駄目だよ」

武蔵は高町の姉ちゃんを口説き落とす準備に入るが俺の方はハイライトの消えた瞳の美少女（中学生）達に迫られて黄金小水を漏らしそうになっている。これは確実に殺されるぞ?! やべー殺され方で殺されるぞ!!

「輝夫くん……わたしの誕生日に他の子と浮気するんだ……」

「いえ、ぼっくんは月村とお付き合いなんでしていませんので浮気という言葉は似つかわしくないと思うのですがそれは」

「駆け落ちした仲の女の子の前で堂々と浮気とか……」

「二日で終わる駆け落ちとか駆け落ちに入らないから」

「責任とって」

「この姉妹に至っては意味不明なんですが!？」

「ファーストキスはわたしが奪ったんやから輝夫はわたしのモノやろ……?」

「むさしきゆんとしたような気がするから俺のファーストキスはむさしきゆんです」

むさしきゆんがトイレ借りていいですかと高町のお父さんに聞いてそのままゲロを

吐きに行った。想像で吐き気を催すとかどんだけ俺のことを気持ち悪いと思ってるんだよ!! 部屋に隠してるエロ本全部B L本にすり替えてやる!!

「どうどうどう! 今日には月村の誕生日会だろ? 暴力はいけない……みんなで楽しい誕生日会! それを目指すなら暴力はいけない!!」

「あ、蚊が!」

「あべし!」

ああ、季節外れのスカイフィッシュが俺の顔の周辺に飛んでいたのか八神とバニングスがグーで殴ってきましたよ! 蚊だったらパーですもんね! スカイフィッシュだからグーなんですよね!?

久しぶりに女性恐怖症という設定を活かして店の片隅で体育座り、女の子怖いよおと呟いてこの誕生日会を乗り切る準備に入ります。絶対に通常モードで接していたら顔面崩壊不可避です。だから治ってる病気を駆使して難を逃れてやりますよ!!

「輝夫……最近冷たいから……」

「なんで片隅で震えてるぼっくんにすり寄ってくるんですか Fayette たん……」

「抜け駆け禁止!」

バニングスに襟を掴まれて行動キャンセルされる Fayette たん! よっしやー!!

流星は俺と駆け落ちした女だけあるぞ! このまま全員の行動キャンセルを頼む!!

「駆け落ちしたんだから奥さんはわたしなの!!」

「やめて! 駆け落ちじゃないから!? アレは駆け落ちっぽいお泊り会だから!!」

「むうー! 輝夫くん……今日はわたしの誕生日会なんだよ……」

「話題を広げて楽しんでるのは君達じゃないですかやだー」

怖いよお、この子達の行動力が怖いよお……。

高町のお父さんが間に入ってくれた。もしかして救いの手を差し伸べてくれるのだろうか? いや、このパターンは確実に悪化するような選択肢を選ぶだろう、そして俺は死ぬのさ……。

「桃子の手伝いをしてやってくれないか?」

「サーイエツサー!!」

流石は高町のお父さん! 俺を助けてくれる選択肢を取ってくれるなんて!? 期待していなくてごめんなさい!! 抱いて!!

頬を膨らませるヒロインズ達をあざ笑いながら調理室に入ってく! ああ、これで自由だ!!

2

「やっぱりお店の設備は凄いな……料理人として久しぶりに興奮したよ……」

「……えろう大量に作ったね」

「ああ、和食以上じゃないけど和風の菓子は得意分野でござす」

ぼた餅、まんじゅう、羊羹と高町のお母さんが事前に用意してくれていたのか食材が揃っていたのでパパッと仕上げることができた。高町のお母さんに和菓子屋さんの息子のねと言われて違いますと言えなかつた自分が恥ずかしい。

「月村、誕生日だから最初の一個は君に捧げよう」

「いいの？」

「ああ、誕生日だから最初の一口は月村が食べねえと」

月村はまんじゅうを手にとって一口、そしてほっぺたがオチたと言わんばかりの惚けた顔になる。

「こんなお饅頭はじめて……皮がいつもだべるお饅頭とぜんぜん違う……」

「ああ、こいつは薄めと厚めのちようど中間くらいを見極めて作った俺のオリジナルだ。薄すぎず、厚すぎずであんこの甘さをギリギリまで引き立てるようになってるんだ」

蒸し加減の調整やあんこの量にも気を使って最高のバランスを作り出すのさ、俺は料理人、舌と胃袋を満足させなければいけない存在なのだ！

高町のお父さんがお疲れと言ってコーヒーを振る舞ってくれる。キンキンに冷えたアイスコーヒー、ガムシロップを二つ入れてストローで飲む。ほろ苦いが奥にある深みのよく効いた良いコーヒーだ……。

「ああ、生き返るわあ……」

「桃子が輝夫くんのお菓子を食べてみたいと言っていたからね」

「手捌きに驚いていましたよ、和菓子は洋菓子と違った部分がありますからね」

「僕も一つ食べに行こうかな」

高町のお父さんはエプロンを脱いで和菓子コーナーに向かった。

少しだけ疲れたので背伸びをしてコーヒを一口。

「輝夫！ 誕生日ケーキが出来たみたいよ」

「おお、厨房で見てた時は飾り付けがまだだったからわからなかったけど、これは凝った飾り付けだあ……」

「早くハッピーバースデーを歌わないといけないから来なさい！」

「了解」

月村の年齢に合わせた十三本のロウソクに火が灯る。

全員で合唱するハッピーバースデー、月村の表情は非常に明るなものになっている。

月村がロウソクの火を消して大きい拍手が響き渡る。

「みんな……ありがとう……！」

「よし、誕生日ケーキを食べ終わったらプレゼント交換よ！」

全員で雑談をしながら食べる誕生日ケーキというのはいいものだね、どこか温かみが

あつて風情もある。それになによりケーキが美味い!

ものの数分で誕生日ケーキは食べ終わり個々が誕生日プレゼントを持ち寄る。

「わたしからコレ! 可愛いネコのハンカチがあつたから」

「ありがとう、大切にするね!」

バニングスは猫が描かれた高そうなハンカチ。

「俺は紅茶が好きだつて聞いたから」

「ちよ、ちよつと量が多いかな……」

「好きな種類わからなかつたから、とりあえず全部買ったんだよ」

「でも、嬉しいよ……」

武蔵は箱いっぱい紅茶。

「わたし達のは……家に帰つて開けてね……」

「な、なんだろう? うん、わかつた」

テスタロッサ姉妹は怪しい小包、何が入つてるんだろ?

「わたしは高いものじゃないけど……手作りのミサンガ……」

「なのはちゃんの手作り!?! 上手にできてるね」

高町は手作りのミサンガ。

「八神一家からはフルーツゼリー詰め合わせ、仕事が忙しかったからごめんね」

「はやてちゃんが忙しいのは知ってるから大丈夫だよ」

八神一家はフルーツゼリーの詰め合わせかあ。

「俺からは可愛い人形があつたからこいつを」

「わー、くまさんだー」

修一郎様はクマの人形か。

おっと、俺の番だな……。

「月村……これを……」

「何かなこれ……え……」

月村が箱を開けると肩たたき券と書かれた紙切れが一枚。

「うんうん、肩こりひどそ——ごぼが!？」

「死ね、ゴミクズが……」

こうして月村の誕生日会は楽しく終わったのだ。

3

「……輝夫くんのプレゼント、期待してたんだけどな」

すずかは輝夫の誕生日プレゼントの箱を手に取り中身を確認する。肩たたき券と書かれた紙切れが一枚、それを拾い上げようとするとゼロハンテープで付けられた手紙が

一緒についてきた。

彼女はその手紙を急いで読んでみると、

【輝夫より】

俺には月村が欲しいものがわからなかったから、誕生日の一日後になってしまいうけど、買いたい物に行かないか？ その時になんでも欲しいもの買ってやる。あ！ お金で買えるものだけだぞ!?

放課後に駅前のコーヒーショップで待っています。本当に遠慮せずに欲しい物を好きだけ言いな。

輝夫より。

「輝夫くん……らしいね……」

すずかは手紙を抱きしめて自分が輝夫のこういうサプライヤーなところが好きなんだと実感する。彼は奇をてらった行為が大好きで、落としてから上げるテクニシャンだ。

そしてテスタロッサ姉妹からの誕生日プレゼントも開けてみる。

【輝夫の使用済みパンツ（無洗濯）】

「……家宝にしないと」

こうして月村すずかの誕生日は終わる。

4

どうも、輝夫です。

月村へのプレゼントで送った肩たたき券の後ろにある手紙に気がついていたらもうそろそろこのコーヒーショップに来てくれる筈なんです、気づいてもらえなかったかな？ まあ、その時は殴られ損で終わるだけだからいいのだけど。

目の周りに少しだけ冷たい感触が……。

「だーれだ」

「月村」

「むうー……だーれだ」

「月村すずか」

「ギリギリ正解にしてあげる」

手が離れていき振り返ると制服姿の月村がニッコリと笑って俺の手紙をヒラヒラと見せつけている。

とりあえず、銀行から百万おろしてきたから買えないものそうそうないだろう。

「というか、月村で正解じゃないですかやだー」

「どうして輝夫くんは下の名前で読んでくれないの？ フェイトちゃんとアリシアちゃんはその名前で呼んでるのに……」

「うーん、まあ、小さい頃に繋がりが深かったとしか言いようがないね」

「……あんなに好きだつて追いかけてたのに」

「過去は捨てたんだ。かつこいいだろ?」

月村の表情が悪くなる。だつて、フェイトとアリシアは踏み台行為してない状態での付き合いだから名前呼びになつちやつたんだもの、君達みたいに踏み台だった頃からの付き合ひの子は必然的に名字呼びになりますよ普通。悪いこといっぱいしちゃつたら……。

「本当になんでも買つてくれるの?」

「ああ、俺は誕生日プレゼントと一緒に買いに行く主義なんだが、誕生日会を開かれたらどうすることも出来ないからな。一日遅れてるがプレゼント買っていいか?」

「……ありがとう」

席を立つて歩き出そうとすると腕を組まれた。もうツツコミを入れても無駄だろうからエスコートしてもらいましょうか。それが一番早い。

色々な場所を回った。

駅の中にある大きなデパートの中でブランド品やお人形屋さん、でも、月村は欲しいとは一回も言わない。ただ、俺という存在を独占出来る時間が一番の宝物のような顔をしている。

時刻はどんどんと過ぎ去っていき、そらは暗くなっている。

最後に訪れたのはゲームセンター、そのプリクラの機械。

「……二人で撮った写真ないから」

「こんな安いのでいいのかよ……可愛らしいもんだぜ……」

二人で撮った写真を抱きしめて月村はまたね、そう告げて帰っていった。

「さて、俺も帰りますか」

後日、ヒロイン達がいる前で肩たたき券が使われて殴られました。

33：風邪

どうも、輝夫です。

今日はよく晴れた一日でお洗濯物がよく乾きそうな感じがするのですが、緊急の用事が出来てそれが出来ません。緊急の用事というのは、フェイトさんが熱を出したらしいのですよ。フェイトたんも人の子、最近は書類仕事が多くて知恵熱も頻発していたらしいのでプレシアママンとアルフが管理局の仕事を代行して、アリシアは心配ながらも俺が来るなら安心できると学校に行きました。

そんなわけで、朝の十一時、もうお昼と言った方がいい時間帯ですね！ 完璧に起きる時間を間違えました。おはようは九時まで、こんにちはは十時からと昔聞いたことがあります。

「おっじゃましませーす」

プレシアから借りた鍵を使ってテストロッサ家に許可侵入します。不法侵入ではありません！ 許可を貰って侵入していますから！！

フェイトたんは自室で眠っていると云っていたような気がしたのでアリシア&フェイトと名前が書かれた掛札の部屋に入ってみると咳き込んでるフェイトたんが熱冷ま

シートを付けて眠っています。

「おろろ、これは重症みたいだ」

「……………てるを？」

「おお、すまん。寝過ぎした」

フエイトは辛そうな顔しながら微笑みを見せた。

あらまあ、こう見ると寝込みを襲いたくなるくらい的美少女ですわねえ…………でも、ぼつくんの守備範囲は十八（高校卒業済）歳から二九歳まで!! どんなに美少女でも手を出したら負け、九回裏の四番のホームラン王相手にど真ん中の直球を投げるような暴挙! 美少女なんか絶対に負けない!!

「何か食べたいものあるか? ササツと作ってやるよ」

「……………食欲はないかな」

「そうか……………何かしてもらいたいことないか?」

「……………汗かいたから、拭いてくれたら嬉しいな」

アウトー! この子完璧に策に出ましたね……………わかりますよ…………。

年齢は中学生でも体はグラマーな美少女の体を拭くだど? この娘、完全に狙っているな…………いや、いやい、いや! フエイトさんは策なんて考えない純粋な美少女! この前、誕生日会でドス黒い笑みを浮かべていた月村とは違うタイプの人間であると願

たい。

【中学校】

「はくちゅん！」

「どうしてのよすずか、風邪？」

「うーん、輝夫くんにバカにされたような気がする……」

「帰りにしばきに行きましようか！」

「うん！」

【戻る】

なんかヒロインの誰かが俺のことを殴る算段をしているような気がするが今はフェイトさんの体に劣情を抱かないような鋼の心を持たなければならぬ。俺は男だが紳士だ！ 中学一年生の女の子に劣情を持つなんて絶対にしてはいけない！ 父親が娘を見るような目で……。

「……お願いしていい？」

「……恥ずかしくなったら言えよ」

テスタロッサ家からタオルと桶を探して体を拭く準備をする。

大丈夫、フェイトさんは時折大胆な行動をするタイプの美少女だが、こういう時にまで大胆な行動をするわけがない！ それに風邪をひいて体力が落ちてる、押し倒すなん

てことは出来はしないさ!!

生睡を飲み込んで姉妹の部屋に入る。上着を脱いでタワワに実った果実を見せつけてくる無論ブラジャーはしていない……やっべ、理性が吹っ飛びそう……。

「フェイトたん……ごめんだけど胸は手で隠してね……」

「胸も……拭いてもらおうと思ったんだけど……」

「そこは自分でしなさい」

大丈夫だ。まだセーフ! 俺のてるをたんは暴走モードに突入していない!! このままこの子の体を拭いて終了! その後はアリシアが来るまで看病してやればすべてが終わる!! さあ、俺は紳士、ロリには手を出さない紳士なのさ!!

「背中から拭くか……冷たかったら言えよ……」

「大丈夫、ひんやりしてて気持ちいいよ……」

背中を吹き拭き終わって流石に女の子の胸は拭けないのでフェイトにタオルを渡すと少しだけ拗ねた表情になった。

無理ですよ、だって中学生とは言えど日本の平均的なバストサイズを上回る巨乳の胸を拭くなんて……グラマラス大好き輝夫の理性で歯止めが効かなくなる可能性があるんです!! Yes ロリータ! No タッチ!!

「上着……着せて……」

「はい……」

よく耐えたぞ息子！ このままTシャツを着せたら君が奮い立つ可能性は極限まで低くなる!! 今日の夜は存分に気持ちよくしてやるから許してくれえ……。

服を着せてから勉強机の椅子を引っ張ってきて腰掛ける。

「フェイトたん、本当に食欲ないの？ 軽く食べた方が気分も良くなると思うけどなあ」

「……スープだったら」

「スープか……ポトフでも作るか！ 少し待っててくれ」

人の家の冷蔵庫を開けるといのは物凄く罪悪感を感じるのはなんででしょうか？

ポトフを作る素材は揃っているな、ご丁寧に圧力鍋まで揃ってる。これはプレスアがちゃんとママをしている証拠だろう。

2

圧力鍋などの最新鋭の調理器具を駆使して作り上げたポトフ、ポトフって本当に簡単にできるのに洋食だからか難易度高いと思われがちだよな、本当は味噌汁と同じくらい簡単な料理なのにさ、海外の味噌汁だぜ？

鍋いっぱいについたポトフだが、病人が大量に食べるわけがないのでコーヒーカーップに適量を入れてから部屋に戻る。

「出来ましたよお嬢様、輝夫たん特製の普通のポトフです」

「いい匂い……輝夫は本当に料理得意だよね……」

「自分が美味しいと思えるものは自分でしか作れないって師匠に教わったんだよ」

人それぞれ好みがあつて自分の好みの味付けを理解できるのは自分だけ、店を持ったら自分の味付けが好きなのが集まるようなそんな店になればいい。いやはや、料亭で働いてた頃の大將には色々と教わりましたわあ……懐かしい……。

「食べさせて……」

「本当に君達姉妹は俺に対しては甘えん坊過ぎるぜ……」

「輝夫だからだよ」

「ノーコメントで」

スプーンを使って口を開けているフェイトにポトフを食べさせてやる。こう見ると親鳥から餌を貰うひな鳥みたいだ。

フェイトは俺の味付けが気に入ったのか悪かった顔色が少しずつ回復していつてるように見える。

「完食。少しずつ食欲は戻していけよ？ 女の子だからってダイエットとかしたらお兄

さん怒りますからね」

「輝夫は痩せてる女の子は嫌いな……？」

「ああ、俺は健康的にふくよかな女性が好みだぜ。俺の周りは痩せ過ぎてる」

全員が全員貧弱な体してるから心配になってくる。身長に対する平均的な体重の＋10kgくらいなら女性として太っているとは言われなと思うんだよなあ、俺なんて平均体重より15kgくらい上だけど全然見える体つきしてるわけだし。

「フェイト……最近頑張り過ぎだぜ……」

カッツを勉強机に置いてフェイトの頭を撫でてやる。すると嬉しそうに笑みを見せる。

こうしてみると普通の女の子って感じだよな、この子が色々な場所で魔法を使って問題を解決してるなんて普通の人間だと想像もつかないだろう。誰かの為に行動できる優しい子、俺にはそういう生き方は無理だね……自己中心的な俺には絶対できない……。

「輝夫……自分で自分を卑下したら駄目だよ……」

「あーら、顔でわかっちゃおう?」

「長い付き合いだから……」

「じゃあ、俺もフェイトが考えてること当ててやろう……唇を見るなよ……」

フェイトはカッツと顔を真赤にして布団にうずくまる。キス魔なフェイトたんはてるをたんの唇に夢中ってか、色々と方向性を間違ってると思うんだよなあ……。

「布団で顔を隠すのをやめて潤んだ瞳で見つめてくる。ペットシヨップの犬猫みたいな目で見ないでおくれよ……。」

「輝夫が悪いんだよ……色々な女の子達と仲良くなるから……」

「君達姉妹は責任転嫁好きですねえ……別に好きになられるようなことをやった覚えはないんだがなあ……」

「十六話から読み返してきて（メタ発言）」

露骨なメタ発言は好きな人は大好きだけど大嫌いな人は大嫌いだからやめていただけませんか？

フエイトが俺の手を取って強く握りしめる。

「人を好きになるって不思議な気持ち……だからどうしたらいいかわからないの……」
「それはわかるよ」

「輝夫……わたしじゃだめ……？」

「……だーめ」

フエイトのおでこ俺のおでこを重ね合わせる。

なーんで、俺みたいなゴミを好きになるんだろうね？ この子達の将来が心配になりますね。

静かに握った手を離して背中にも手を回して……またですか……。

「んっ」

この子は風邪を俺にうつしたいのですかね？

唇と唇が離れていく。

「女の子は最初に好きになった人を基準に新しい好きな人を選ぶって母さんが言ってた……だから、輝夫以上の男の人は絶対に現れないんだよ……」

「プレシアも変なこと吹き込みやがって……」

俺って色男ですかね？

34：喫茶店

どうも、輝夫です。

今日は放課後と呼ばれるような時間帯に高町の両親が経営している喫茶店、翠屋にやってきました。

奥のカウンター席に腰掛けてメニュー表を眺めます。

「むさしきゆんさあ、最近トレーニングサボりすぎじゃね？ 体が中年太りしますよ」「てるをたん、中学生は代謝が高いから減多なことで太らないのよ」

気だるい表情の武蔵がカウンター席に突っ伏す。今朝の五時頃に帰ってきたのでセフレと腰振りダンスを楽しんでいたのでしょうか。ぼつくんには出来ない運動ですね。

「決まったかい？」

「ストロベリーパフェ特盛」

高町のお父さんに裏メニューのストロベリーパフェ特盛を頼んでくだらない話しに戻る。

「むさしきゆんさあ……もう少し真面目に生きたら？ 性病になりますよ」

「コンドームはちゃんとしてる。基本的に三箱は携帯してる」

「中学一年生がコンドームとか……おまえは病気だよ……」

こいつは本当にどうしてこうなった？ 俺と一緒に原作ヒロイン達のサンドバッグにされていた男とは思えない言動で脳みそが壊れそうですよ。言うならばNTR系作品を寝取り側ではなく、寝取られ側に感情移入して見ているような脳みそが壊れる感覚がね、するんですよね。

あれ、もしかしてNTRって正しい愛の形なのかな？ つまり夫婦になったら他の男に奥さんを奪われるのが正しい夫婦の形……いや、そんなわけねえよ！ 目の前でグラス磨いてる高町のお父さんは絶対に浮気されてねえだろ!!

「おまえさあ、セフレ作り過ぎたら修羅場になるぞ？ セフレでもないヒロイン達と修羅場をしている俺を見て思うことないのですかね……」

「バカ言うなよ！ あんな小便臭いガキ共じゃなくて俺は大人のレディーとエロエロしてんだ。理解してくれてんだよ、ホレホレ」

武蔵がにんまり笑顔で三人の女性と行為をしている写真を見せてニマニマしている。

頭にゲンコツを落として自分の相棒の墮落っぷりに目から汗ですわ……。

別に俺は武蔵の保護者でもないし親友というだけで女性関係をとやかく言う権利は無いのだが、ここまで来ると中学生でパパになってしまう可能性があるからマジで怖

い。武蔵が成人してるなら別にいいのだが、この場合は中学生の武蔵とチョメチョメしてる女性達が逮捕案件になるのよね、日本の法律的に。

もし、このゴミクズのせいで人生を駄目にされる人が現れたら俺は懺悔しても懺悔しきれねえよ、唯一このバカを止められる立場なのに……。

「むさしきゆんね、ぼつくんはむさしきゆんのことを心配はいつさいしてないのよ。でもね、セフレの人達のこととは心配してるのよね」

「大丈夫！ 厚めのコンドーム使ってるから!!」

「そういう問題じゃねえんだよ!？」

「こいつ……猿より頭悪いんじゃないのか……?」

自分の親友で相棒がここまで墮落して男としてゴミになつてしまふとは、俺は、保护的な立ち位置の俺はどうしたらいいのでしょうか？ この男を改心させる方法があつたら教えて下さい。割とマジで切実にこいつをどうにかしないと未来がヤバイことになるから絶対に。

「いいか、君は中学生」

「ああ、俺は中学生だ」

「で、セフレは成人してる」

「ああ、全員成人してるぞ」

「もし警察が来て逮捕するならどっちを逮捕する？」

「……いや、逮捕されねえだろ」

「駄目だこりゃ……」

ああ、神様……こいつの脳みそを猿にしないでください……。

こいつの理性というものはどこにルーラしたのだろうか？ バトルジャンキーでSEXジャンキーとか男としてカツコイイけど人間としては最高に格好悪いぞゴラ……。

万年発情期で三人相手でも萎えない息子を持つてゐるこいつはマジで人間じゃなくて雄だぞ、動物ならキングだけど人間だから犯罪者予備軍だ。強いてマシなのは幼女に手を出してないところくらいだわ。

「むさしきゆん……君は人生楽しんでるね……」

「人生は楽しいものだろ！ 楽しんでなんぼだろ」

「うん、そうだね」

俺はこの男を人間としての最低限の道徳的思想を持たせることをやめた。

この世界には救えないバカがいるのです。

十月十日後がすごく怖いですね。

「はい、ストロベリーパフェ特盛」

「ありがとうございます」

「裏メニューすげー」

ボールの中に溢れんばかりに盛られている生クリームやアイス、紅白のグラデーションが最高に食欲をそそる。男の子ならこれくらい食べないと元気でないからね。

パフェ用の細いスプーンではなく普通のスプーンで生クリームとアイスをすくい取って口の中に入れる。ああ、甘い物は最高だぜ……。

「で、輝夫は誰とゴールインするつもりなんだよ?」

「藪からステイックやめてくださいよ」

「気になるんだよなあ、輝夫は結局のところ誰を選ぼうと考えてるのかって」

「聴いてどうする……壁に耳あり障子に目ありだぞ……」

別にヒロイン勢の中で一番好きだと思ってる子はいる。でも、それを口にしてどうするよ? 色々な紆余曲折があつて、今現在の関係性をギリギリ保てるが、一人を選んだら他が暴走する可能性がある。NTRを模索する程度ならいいのだが、最悪の場合は拉致監禁もありえるしなあ、あいつら行動力の化身だし。

「俺にだけ教えろよ」

「……耳かせ」

小声で誰にも聞こえないように告げた。

「……まあ、妥当だな。おまえらしいと言えばおまえらしいか」

「はあ、言いふらすなよ」

「言うわけないだろ。墓場まで持っていくさ」

武蔵の表情はそれもそうだな、そう考えているようだ。

「よく考えるとこうやって二人で会話するの家以外だと久しぶりだな」

「いや、夜になるとおまえはセフレの家に行くから超久しぶりだぞゴラ」

「え、何連続で行ってるっけ？」

「えーっと、今のところは六日連続だな」

俺と武蔵のダラダラ生活がグダグダ生活になってますね。俺はヒロイン達の暴力、武蔵はフリーダム、昔は二人ともフリーダムだったのに武蔵だけがフリーダム&ジャスティスになってますよ。デステイニーは俺のことをどうしたのでしょうか？

「この数ヶ月で色々と劇的に変わってるからなあ。もしかしたら俺がおまえの立場で、おまえが俺の立場になってたかもしれないよな」

「それは無いよ……俺は頭が悪いからさ……」

「さいですか」

武蔵の表情は優しい温かみを含んでいる。

結局のところは俺と武蔵は相棒で親友だ。一番理解し合ってる同性の友人、人生でここまで仲のいい友達というのは安々と作れないだろう。時にバカをして、時に喧嘩し

て、時に共闘して、こうなったら一生の友情だ。絶対に切れない関係性ってやつなんだ
ろうな。

35：一日

西風輝夫の朝は遅い。

平均的に人間が最も行動的になる八時頃から二時間過ぎて十時頃にだいたい目を覚ます。

そして、必ずと言っていい程に口に出す一つの言葉、それは。

「どうも、輝夫です」

誰も部屋にいないのにこの言葉だけは必ず忘れない。自分という存在を西風輝夫だということを提言することが快感になっているのだろうか？ 理由は未だにわからない。

彼はパジャマ姿のまま洗面所に行きイケメンフェイスと白い歯を維持するためキツチリと洗顔、ブラッシングをする。マメな清潔感は非常にイケメンらしいと言える。

「あら、ヴィータ来てたのか」

「今日は休みだからな」

リビングルームに入るとソファーに腰掛けてテレビを眺めている。

彼は隣に座ってヴィータを抱き上げて自分の膝の上に乗せて頭を撫でる。可愛らしいお人形を愛でるような行為だが、彼女は嫌がる素振りは見せずいつものことだという顔で二人でテレビを眺める。傍から見たら非常に仲のいい兄妹にも見えなくはない。

「昼飯なにがいい？」

「うーん……和食……」

「納豆は」

「あれは嫌いだからやめろ」

ヴィータの頭を一通り撫でて彼女を抱き上げて隣に移動させる。

立ち上がってキッチンに到着すると冷蔵庫の中身を確認する。和食と言われたのでオーソドックスな和食系の朝食に近い感じの料理を作ることを決める。

まず欠かせないのは味噌汁、彼は赤味噌より白味噌のまろやかな味わいが好きなので八割程度の割合で白味噌を使用した味噌汁を作る。変化を求める時に限って鯉節を濃ゆく抽出したダシの白米が進む味噌汁を作ることもある。

「あ、米が夕飯分ないわ……買い物行かねえと……」

大型の米びつには昼食分程度の米しか入っておらず補充するために買い物に行かなければならない。

とりあえず残っている三合分の米を取り出して米研ぎ、冷蔵庫からミネラルウォーター

ターを取り出して少しだけ水の量を多めに調整する。これも彼の趣味だ。硬めの白米も悪くないのだが、米の甘みと風味を口に入れた瞬間に感じられるのは柔らかめの調整だ。

「ああ……腰が……」

「おはようございます」

「湿布ある？」

「熱冷まシートしかねえよ」

顔色の悪い武蔵が冷蔵庫から栄養ドリンクを取り出して一気飲みする。その後の渋い表情は栄養ドリンクの類があまり好きではないという現れだ。輝夫に至っては栄養ドリンクは一滴も飲めない。飲んでるのはビタミン剤くらいだろう。

「味噌汁の具は豆腐がいいのですが」

「今日は玉ねぎと溶き卵だ」

「それに豆腐入れて、出来ればワカメも」

「春雨スープに豆腐入れてやるよ」

味噌汁に豆腐を入れないのは非国民だと罵る武蔵にローキックを放って台所に立ち直す。

味噌汁の味付けは満足がいくものになったので他の食材の準備にとりかかる。

冷蔵庫を見回してみると鮭のパックが転がっているので適量の塩をふりかけてグリルに打ち込む。

「魚って切り身の状態で泳いでるよな」

「ペットが死んだら電池入れろってか」

一昔前の定番ジョークを互いに言い放って無言の時間が続く。

炊飯完了の音が鳴り響いたと同時にしゃもじを取り出して米を混ぜる。

「卵焼きと目玉焼きどっち」

「目玉焼き」

「卵焼き」

「はいはい、どっちも作りますよ」

乱入してきたヴィータの鶴の一声で二つの卵料理の支度に入る。

卵焼きはオーソドックスに砂糖で仕上げた甘めの味付けで調整を入れる。実際、輝夫は甘い卵焼きは好きではないのだが、日本人が作る卵焼きはスウィーティーでないと叩かれるので基本的にゲロ甘に近い味付けをしている。

「なんで卵焼きって甘いのがいいのでしょうかね？」

「え、卵焼きって甘いものだろ？」

「固定概念って怖いねえ……」

キッチンペーパーに油を染み込ませてフライパンに塗り、卵を流し込む。その後は油を塗りながら少しずつ焼いていく、最後には綺麗な卵焼きが出来上がってまな板の上で適量に切り分けられて皿の上だ。

目玉焼きは卵4つを普通のフライパンに乗せて出来合いの塩コショウをふりかけていい感じに焼けたところで水を少量入れて蓋をする。

「ああ、朝ごはん作るのしんどい」

「俺の得意料理はカップラーメンだ！」

「おまえのカップ麺はお湯の量が足りないんだよ」

「濃ゆいほうが美味しいだろうが!？」

「これが若さか……」

鮭を取り出して朝食のおかずは出揃った。

リビングルームに並ぶ質素だが和風の朝食、簡単に見えるが作り手の手腕が試される食事だ。

「「いただきます」」

こうして一日がはじまる。

2

輝夫は冷蔵庫の貯蔵量を確認してメモ帳に不足している食材を書き記してリュック

サックを背負う。地方ではからうと言うらしい。

「買い出し行つてくる」

「寝ます」

「ハーゲン」

「君達は自立という言葉を辞書で調べなさいよ」

この二人は自分という存在が消えたら確実に自滅すること革新する。長生きをするつもりは一切ないのだが、自分が死んだら二人を道連れにしてしまうと考えると死ねないと思つてしまう。

ダメ人間を見る目で二人を眺めるが開き直つてる二人に効果はないようだ。

溜息を吐き出して家を出た。

扉を開くと地面にパンツと手紙が置かれていた。

「……またか」

輝夫は。パンツと手紙を拾い上げて確認する。

【手紙】

輝夫、ごめんなさい。

深夜に輝夫の部屋に入りました。窓の鍵も壊しました。

輝夫の寝顔凄く可愛かつたよ♡

パンツを盗んだけど、わたしのパンツを渡したら許してくれるよね？

『フェイト・テストロツサ』

「窓の鍵壊したのフェイトだったか……」

手紙とパンツを庭仕事のゴミ箱に捨ててスーパーマーケットに足をすすめる。

——刹那、ニュータイプの閃き音が響き渡る。

輝夫は玄関の上に設置されてある監視カメラを引き抜いた。

「月村の野郎……また仕掛けてやがったか……」

輝夫の行動を監視するためだけに付けられた監視カメラ、これで三台目になる。これもゴミ箱に投げ捨てる。が、まだ視線を感じるのはなぜだろうか？ 周辺を注意深く確認してみると黒塗りの高級車が家の前に停まっている。

「輝夫様、メガネを着用してください」

「鮫島さん……お嬢様の躰をちゃんとしてください……」

「これも仕事なので」

手渡されたメガネを着用した瞬間に大量のシャッター音が響き渡る。

メガネを返して助手席に座る。

「米買うんで付き合ってください」

「わかりました」

ストーリーカー怖いなあ、とつまりしとこ。

3

一週間分くらいの食材を鮫島さんと一緒に運び込んでコーヒーブレイク、鮫島さんが帰った後は庭に出てトレーニングを開始する。

「飽きねえな……輝夫って三日坊主体質なのに……」

「ヴィータさん？ ぼつくんはステータス高くしないと変態に捕食される立場なんですよ、察せ」

「男って女に食われるのが最高の幸せじゃねえのかよ」

「俺にだって選ぶ権利がある」

「100人が一瞬でお願いしますと言うような奴しか侍らせてないくせによく言うな……」

汗だくのTシャツを脱ぎ捨てて懸垂を開始する。が、三十回目到達した瞬間に携帯電話が鳴り響いた。輝夫は溜息を吐き出して電話を取ると優しい声色だが、奥底に冷たい何かを含ませた何かを感じさせる。電話の相手は月村すずかだ。

「また……監視カメラ壊したよね……」

「他人の家に監視カメラ設置していい法律あるんですかね？」

「恭也さんが頑張って設置してくれてるんだよ……」

「義理の兄貴に何させてんだよ君は!？」

戦闘民族高町の長男さんがこんな雑務に従事しているという事実には項垂れる。あの
人、プライドの塊的な性格していると思っていたが、案外、頼られたら断れない性格し
てるのかもしれない。そう思う共この頃である。

「君はもう少し年上を敬いなさいよ……」

「じゃあ壊さないで♪」

「いやです」

「なんで（マジギレ）」

通話を終わらせて電源を消す。学校が終わって二十分くらいだから、到着までの時間
を逆計算すると追加で二十分くらいだろうか。彼はトレーニングを早めに切り上げて
風呂場に向かう。

「風呂入って逃げよ」

「おまえも忙しいなあ」

「運命のいたずらに翻弄されてるんだよ、悲しいねえ」

4

硝煙の香りが漂う薄暗い部屋、ここは輝夫&武蔵ハウスの地下室。3レーンの射撃訓
練用の的が用意されており、輝夫の網膜認証で入ることが出来るこの家で最大のセキユ

リテイーを誇る部屋だ。

部屋には輝夫が今まで集めてきた銃火器類が几帳面に並べられておりハンドガンから無反動砲まで多種多様なラインナップとなっている。

「油差しは三日前にやったからなあ……」

ガンロッカーに並べられている中の一丁、輝夫にしては珍しいオートマチックの拳銃、ベレッタM9A1を取り出して段ボール箱に入っておりある9mmパラ弾を取り出してマガジンの中に六発込める。そして装填、レーンの前に立って人形のペーパーターゲットに向けて引き金を引くと玉は発射されることなく撃鉄を叩く音だけが木霊する。

M9A1はダブルアクション拳銃であるため、何度も引き金を引くが弾薬は飛び出すことがない。

スライドを引いて不良品の弾薬を取り出して新しい球でトリガーを引くと一応は球は弾けたがペーパーターゲットに銃痕は残っていない。

「はあ……オートマチックに嫌われてんだよなあ……」

マガジンを抜き取って薬室に球が残っていないことを確認してからM9A1をばらして。そしてバレルの中身を確認すると銃口の中に弾頭が詰まっていた。

チープアーモというのを聴いたことがあるだろうか？ 日本のような国では闇の間でも拳銃弾の入手は非常に厳しいものになっている。弾薬の形状が変形していたり、

炸薬が液化していたり、弾頭と薬莖の噛み合わせが緩いなどの要因で銃に異常は無くても、球に問題が出ることである。

「武蔵が弾くと普通に球が出るんだがなあ……」

M9A1を置いて撃ち慣れたM686を取り出してペーパーターゲットに向けて引き金を引く。

下腹部に着弾しているが輝夫の表情は渋い。

「なんでだろうな……人が殺せる場所ばかり狙うようになってしまったんだろうな……」

ペーパーターゲットに残る銃痕は下腹部、臓器で言えば肝臓に着弾している。一撃で死ぬことはないが、治療をおこなわなければ確実に死ぬ臓器だ。

「だめだな……弾薬の無駄だし上がるか……」

M686に新しいマグナム弾を装填して階段を登っていく。

網膜認証を通して押入れの隠し戸を開けてリビングに戻るとヒロイン達がお茶会を繰り広げている。こいつらは他人の家をファミレスか何かと勘違いしているのではないかという表情になっている。

「あー……ランニングに行くんで勝手に寛いで……」

「サンドバッグとうちやーく……!」

「地獄に落ちろクソ女共……」

まず最初にアリサの炎を纏う拳が輝夫の顔を抉る。

「あべし!？」

次ははやての闇のパワーを纏う蹴りを放つ。

「おぼば!？」

その後はモザイク必須な絵面になる。

「俺は……なんでこんな辛い思いをしないとイケないのか……」

「十六話から読み返してきて」

「フエイトさん……そのネタは駄目だって……」

こうしてヒロイン達が気が済むまでリンチされた。

36：ヤンデレ

どうも、輝夫です。

今日は早朝から目が覚めてNHKのニュースを眺めています。

『昨夜、○△川で三十人の二十代男性の変死体が放棄されていると通報がありました』

『三十人!? 三人の間違いではないのですか?』

『いえ、警察の調べによると発見されていないだけで変死体の数はまだある可能性があるとのことです』

三十人殺されるとか日本も危険になってるなあ……。

「怖いなあ……とづまりしと……」

「あの……すいません……無視しないでください……」

腹部に包丁が突き刺さってソファアで青白くなっている武蔵に目をやる。セフレのミカちゃんに包丁で刺されて慌てて逃げ帰ったらしい。それも刃の位置が逆で刺さっているので殺意は相当なものだろう。

大量の女性を誑かして天罰が落ちたと思えば慈悲の心も消えてしまう。

——隣の家から鼓膜が破れんくらいの爆発音が響き渡った。

確か、隣の里中さん夫婦は結婚歴十年、夫婦共に顔は整いまくっていて近所でも有名なオシドリ夫婦だったんだが、喧嘩か？庭に出て隣の家を確認するとドス黒い黒煙が空に向かって一直線に上がっている。ガスの残り香がするのでガス管が爆発したのだろうか？

「……………近所さんだし救出に行きますか」

「……………すいません、それより俺の救出を」

ソファーに血痕がついたら嫌なので腹部に突き刺さる包丁を抜き取って下手くそな回復魔法で傷を塞いでやる。元々痛みには強いタイプの武蔵なので違和感はあるだろうが顔のアンパンを変えてもらったように元気になった。

押入れから二つのガスマスクを取り出して一つを武蔵に投げる。武蔵はそれを慣れた手付きで装着して里中さん救出に出かける。

「アナタが悪いのよ……………娘に淫らな目を向けて……………」

「娘って！ひなたはまだ二歳だぞ!」

「ゆるせない……………ゆるせない……………」

車一台がギリギリ通れる狭い路地で包丁をもった奥さんが旦那さんを刺し殺そうとしてる。

どうにもおかしい……………奥さんは絶対に怒らない仏のような人で暴力なんてもつての

他、それも最愛の旦那に刃物突きつけるなんてまずない。

隣で唾然としている武蔵もセフレとニヤンニヤンしてたらいきなり豹変して刺されたって言うてたし、これはもしや……。

「輝夫？ 誰に連絡入れてるんだ」

「高町のお父さん」

「え、ええ？」

状況把握ができていない武蔵を後目に高町のお父さんに電話を入れてみる。すると女性が何かを振り回しているような息遣いとバックステップを連発しているのだろうか、地面に着地する音が混じっている。この時点で確信した。これは闇の書事件くらいのヤバい事案だと。

『もしもし、輝夫くん？ 取り込み中だから後でいいかな』

「いや、安全な場所に移動しようと思ってるんですが一緒にどうですか？」

『本当かい!? どこで落ち合おうか』

「とりあえず△○公園で待ってますんで。あ、あと、携帯電話は捨てた方がいいですよ」
俺はそのまま携帯電話を地面に投げ捨てて探知されないように木っ端微塵に踏み潰した。

「すまないが、バカな俺でも理解できるように説明してくれないか？」

「簡単に説明すると海鳴で何回目かの事件が発生している。多分だが、女性の心理状態を混乱させるような、そんなウイルスが散布されたんじゃないかねえの？」

「……それ、おまえが一番やばくね？」

「あ、そうか（池沼）」

武蔵を小脇に抱えて電信柱に隠れる。電信柱は真つ二つになりハイライトの消えたフェイトたんがニッコリ笑みを浮かべてバルディッシュを引き抜く。うーんむ、状況判断がワンテンポ早かったら回避できたかもしれないが、発見されたならしかたがない。

「輝夫……なんでわたしのモノになってくれないの……」

「フェイトさん、人間には基本的人ツ——あぶつえ!？」

問答無用で切りかかってくるフェイトに1ミリの躊躇いなんて存在しない。ただ、自分の思い通りにならない俺のことを殺して自分も死ぬみたいになちよーこえーこと考える目してますわあ……。

うーんむ、地球では魔法より鉄砲の方が便利だと思ってデバイス携帯してないのが裏目に出たな、デバイスあったら気絶させて高町のお父さんとの合流ポイントに急げるのだが……。

「フェイトちゃん……人の持ち物になにしてるん……?？」

「はやて……輝夫はわたしのモノだよ……」

「うっわ、フェイトより面倒くさい奴が現れましたよマジで」

フェイトと同じようにバリアジャケットに身を包んだ八神が満面の笑みで俺の顔を見るが、フェイトの方に向ける視線は酷く冷たい。よくわからないが、二人が衝突するのなら逃げるが勝ちだよな！

ドンパチのコマンドーがはじまったと同時に戦線離脱する。あの二人はマジで実力拮抗してるから小一時間はバトつてくれるだろう。

2

高町のお父さんと高町のお父さんの話を聞いた修一郎様と高町のお兄さん、それに付け加えて八神の生活が順調か確認しに来た新婚クロノクソ野郎が秘密基地に集結した。

ここは転生者が原作に関わることなく生活する場合にと全員に用意されている車庫だ。ちなみに修一郎様は車庫と家族仲のいい両親の選択肢で両親を選んでるので月の30万と家、車庫は貰えていない。逆に考えると親とかいらんのか思ってる俺と武蔵の方が狂ってるような気もするな……。

「輝夫くん、これはどうなってるんだろっうね？　うちの家内も目が覚めたと同時に包丁で襲いかかってくるし」

「多分、地球外の何かがウィルスを散布したのかと」

「なのはの働いているところの世界か……？」

「多分ですけど」

武蔵の方を見るとガタガタと震える修一郎様とクロノをなだめている。女の子にガチでマジの殺意を向けられたことのないタイプの人間だからな、本当に信頼してる女の子に殺されかけるとか永遠のトラウマになりそう。

「……散布している機械があるのかもしれないな」

「散布してる機械ですか？ うーん、この街は広いですしね……風潰し戦術で探し回っても見つけられる可能性は……」

「すずかちゃんに頼んだらどうだい？」

「……それを言いますか？ 俺に」

高町親子は顔をそむけた。

車庫に置いてあるラジオを取り出してニュースを確認してみる。

『人気アイドルグループ・SAPSの木崎タクヤさんとご家族が三千人の女性に殺されるという事件が発生しました』

『殺害した三千人の殆どが自分が結婚する筈だったキザタクを奪った女も、選んだキザタクも許せないと供述しており、犯行を認めています——竹下アナ!?』

『愛しています！ 一緒に死んでください!!』

放送事故の時に流れる音楽。

「……やはりやばい（名推理）」

「どうすればいいんだ……」

「二人は夫婦仲良好ですからね」

「ああ、まあ……」

どうしようもない、うちのゴミクズに頼むしかないか……。

『バル、俺の駐車場に来てくれないか？ できる限り知り合いに会わないように』

『何言ってるんでつか!? ワイは今北斗無双で20連中なんですよ!! もっともつと球を増やしまっせ!!』

『本当にお願いだ。二百万払ってもいい』

『お金より球でっせ——なんや?』

『どうしたよ』

『なんか……ホスト風の兄ちゃんをキャバ嬢みたいな嬢ちゃんが刺しました……』

『……来れそうになったら駐車場な』

念話を終われせる。流石に殺人事件が起きたら営業出来ないだろ。

3

ドンと暗い雰囲気を漂わせるバルが体育座りで地面のホコリを指でこねくり回している。事件が起きたから連チャン中にも関わらず、持ち玉を交換させられて車庫に来

た。一応、知り合いに遭遇していないかを確認すると命令に従って人氣のない道を通って来たと聞いた瞬間に全員が胸をなでおろす。

「来る道中で多くの男女が殺し合い……いや、一方的に女の方が男を殺そうとしてる場面に何度も出くわしたんやけど、これ、どうなってるんでっか？」

「多分だが、地球外から何かしらのウィルスを持ち込んで散布した人間がいるみたいだ」
「……散布というとワイに散布してる装置の発見を手伝えってことであらうか？」

「ああ、ここの全員結構ヤバメの状態だから頼めるか」

「とりあえず、地球の外の機械をサーチしてみるんで、時間ください」

バルは即座に索敵を開始する。これで第一の関門は突破と言ったところだろうか？

「輝夫くん、少し気になることがあるんだけど」

「どうしたんですか高町のお父さん？」

「実を言うと美由紀は他の子達みたいに攻撃的じゃなくて、部屋でブツブツ独り言を言ってたんだ。これもウィルスなのかな？」

「……まさか、これってヤンデレってやつなのか」

「「ヤンデレ？」」

転がっていたノートにヤンデレの特徴を書き記していく。

【1 : 依存型】

対象の男性がいないと生きている意味がないと思うタイプ。

【2：独占型】

対象の男性を外の世界に出さず監禁しようとするタイプ。

【3：排除型】

対象の男性に近寄る女性を積極的に排除しようとするタイプ。

【4：攻撃型】

対象の男性が自分の思い通りにならない場合に攻撃してくるタイプ。

【5：ストーカー型】

対象の男性のすべてを把握したいタイプ。

【6：無害型】

特に何もしないが対象を思うがあまり自らの体を傷つけることもあるタイプ。

【7：崇拜型】

対象の男性を神に等しい存在だと崇め自らを男性のために使用してもらいたいタイプ。

プ。

【8：妄想型】

対象の男性との架空のエピソードを生み出して現実とのズレを生じさせるタイプ。

【9：孤立誘発型】

対象の男性の悪評を流し自分以外の存在に嫌われるように仕向けるタイプ。

ざつくりと書き終わつたと同時に遭遇した女性の名前を書いていく。

【1 : 依存型】

対象の男性がいないと生きている意味がないと思うタイプ。

【2 : 独占型】

対象の男性を外の世界に出さず監禁しようとするタイプ。

【3 : 排除型】（八神はやて 可能性：中）

対象の男性に近寄る女性を積極的に排除しようとするタイプ。

【4 : 攻撃型】（フェイト・テストロツサ 可能性：大）

対象の男性が自分の思い通りにならない場合に攻撃してくるタイプ。

【5 : ストーカー型】

対象の男性のすべてを把握したいタイプ。

【6 : 無害型】

特に何もしないが対象を思うがあまり自らの体を傷つけることもあるタイプ。

【7 : 崇拜型】

対象の男性を神に等しい存在だと崇め自らを男性のために使用してもらいたいタイプ。

【8：妄想型】

対象の男性との架空のエピソードを生み出して現実とのズレを生じさせるタイプ。

【9：孤立誘発型】

対象の男性の悪評を流し自分以外の存在に嫌われるように仕向けるタイプ。

「なんというか、詳しいな……」

「見た目以外はキモオタなんで」

「つまり、桃子は四番目に該当するのか」

「……忍は2で美由紀は6か8か」

武蔵も確認しようとするがこいつは数が多すぎて考えることをやめた。

遭遇したヒロイン達は二人、残りのタイプが気になる。もし6の無害型だった場合、綺麗な体に刃物を突きつける可能性が多少なりある。今、安全圏からヒロイン達を確認できる存在は……。

「誰か携帯電話を所持してる奴いる？」

「ワイの飾りの電話ならありませ」

「ちよつと貸してくれ」

バルから携帯電話を借りて鮫島さんの番号にコールする。すると1コールで着信に応じた。

「もしもしドナルドで……輝夫です」

「輝夫様、何度もご連絡をさせてもらったのですが……」

「やっぱりバニングスがおかしくなってるか？」

「ええ……自分は輝夫様にはふさわしくないと泣きながら体育座りを……」

「鮫島さん……刃物の類いを全部取り上げてください。マジで危ないので」

「何か情報が掴めたのですか？」

「ええ、まあ。でも、時間がかかるので刃物を取り上げることだけに専念を」

「わかりました」

次はアリシアの状態を確認するためにプレシアファーストママンに電話をかけてみる。すると鮫島さんと同じくらいの速度で電話に出た。

「もしもしドナルドです」

「輝夫！ アリシアが危険な薬を使ったようにトリップしてるんだけど!？」

「ああ、それは無害だから放置しといて」

「ちよ!?! どうなってるのよ!?!」

通話を終わらせてバルに携帯電話を返す。アリシアは妄想型でバニングスが無害型か、バニングスは絶対に攻撃型だと思ってたんだが、人の心はなんとやらのだろうか？

さて、二人のタイプが確定したが……確定したからと言ってどうするよ？　でも、怪我されたら心が痛いからいいのか……。

「おつ、1つ目発見ですわ……でも、セキリティーが堅くて他の個体の情報にクラックに時間がかかりそうです……」

「クラック？」

「ああ、機械に疎いんですね。ハッキングみたいなものです」

「なるほど」

ハッキングって本当は機械の動作の調整をしたりする意味で、ハッカーって大企業に努めてる技術屋さんみたいな人のことなんだよね。その反対がクラッカー、こっちは不正に機械に侵入して情報を抜き取ったり改ざんしたりする奴らなのさ。

「クラックにどれくらいかかる？」

「うーん、とりあえず三十分は見ててくださいいな」

「逆にクラックされるなよ」

「ワイにはマ●ファイ入ってるから大丈夫ですわ」

「マカ●イーかよ……少し不安だわ……」

バルの作業を眺めてる暇はないのでラジオの電源をもう一度入れて情報収集を開始する。だが、ニユース系のチャンネルには眠気を誘うような音楽しか流れていない。駐

車場だからテレビとか設置してないからな……。

「うーんむ、アリシアと月村が少し心配だよな……でも、外に出るのも危険なわけだし……」

「輝夫、こいつ使っていいぞ」

「あ、これってメカニカルソード（安直）じゃねえか」

「とりあえずこいつを非殺傷設定にして繰り出してこいよ。魔道士組に出会ってもおまえならどうにかなるでしょ」

「じゃあ、バルが終わる頃には戻るわ」

4

バイオハザードRe3が出てアウトブレイクが発売されるとは思わなかったわあ……でも、なんでラクーンシティじゃなくて海鳴が舞台になってるんだろ？ いやはや、最近のCAPCOMさんはよくわからんわ。俺、生粋のセガ派だし。バーチャファイターまーだ時間かかりそうですかね？

「お兄ちゃんどいて！ そいつ殺せない!!」

うっわ、久々に聞いたよその名言、永遠に語り継がれるだろうね。

「それにしても……ラクーンシティよりやべーな……」

町中には包丁を握りしめた女性が大量に溢れかえっており男性側はキモオタフエイ

ス以外は基本的に物陰に隠れている。というか、この緊急事態でも美少女フィギュアを買いに来る奴っているんですね、俺はキモオタレベル2くらいですわ、この人達は絶対にブルーアイズホワイトドラゴンのレベル8ですわ。

「どうするかな、月村の様子見に行くのも悪くないが……あいつが一番ヤバそうだからこえーな」

月村は絶対に監禁型だよ、真つ先に拘束具を取り出すのアイツだもん……。

もうね、断定したから月村は放置しますか！

手首に伝わるプレスレットのように付け慣れた手錠の冷たさ……やだもー（武部沙織）。

「月村さん……それを外してください……」

「だーめ♡」

「俺を飼いならそうとする女子が多すぎて草ですわ……」

「でも、輝夫くんはネコちゃんだよね？」

「どつちの意味?! ヤバイ方の意味だったらマジで怖いんですけど!!」

手首をこねくり回して手錠を外して即座に逃げる。だが、月村って運動神経抜群でお昼でも化け物レベルの速度出せるんだよね……。

「あの、鍛えてる男と並走しないでいただけですか？」

「輝夫くんが逃げるからだだよ♡」

「逃げてないんです、現実逃避してるんです」

「現実楽しいよ!」

「現実苦しいんだよお!」

一筋の殺意を感じ取って月村を抱えて路地に隠れる。すると地面に極太の砲撃魔法が突き刺さっている。あ、でも……この魔力の色は高町だよな？

「シユウくんを誑かす変態男は殺すしかないよね☆」

「……高町は排除型かあ」

「輝夫くん強引だよ……でもいいよ……」

「よくねーよ……現実はずらたんピーナッツだわ……」

高町まで敵対勢力に回ったなら魔導師組は全員俺の敵じゃねえか、詰みだわ、どうか優しく殺して……。

『ご主人はん、クラック終わりましたよー』

「銀行行けそうにないからスイス銀行に預けるわ」

『ご主人はん!!? ワイはゴルゴ13じゃねえからスイス銀行に口座なんてありまへんで!!』

「冗談だよ、ちよつとヒロイン達に絡まれてるから少し時間かかる」

『驚いたあ、ワイの二百万は保証されてるんやなつて』

チツ、具体的な金額覚えてやがる……知らんぷり通じるかな……？

「輝夫くん……しよ……」

「しませ——ツ!？」

「てーるーおー……!？」

フェイトと八神、ああ、これはもう駄目だわ、今日が命日です。第三部完。

5

「ぜえぜえ……どうも輝夫です……」

「ちよつと遅かったとちやう？」

「高町なのはさんとフェイト、八神の相手して一時間で生還した俺を褒めろよマジで

……」

「でも、牛丼買ってくるくらいの余裕あるじゃん」

武蔵のメカニカルソード（安直）は高性能だから牛丼買えるくらいの時間が作れた。

これ売つてもらおうかな？ いや、でも、俺は量産品の性能を限界まで引き上げるとい

う趣味があるからなあ……。

「す●家？ マ●家？」

「吉●屋です」

「うーん……合格！」

「何がだよ……」

全員分の牛井特盛と緑茶を行き渡らせて作戦会議を開始する。

「牛井はどこ派ですか？」

「僕は昔から吉●家だね」

「味が濃いからす●屋だ……」

「恭也さんわかつてますね、俺もす●家派ですわ」

「なのは怖い……す●家が好き……」

「僕はマ●屋だな……」

「なんで率直に牛井屋の好み答えてるの？ ていうか、す●家派多いなおい……」

す●家を選ぶのって若干少数派だと思ってたんだがコアなファンいるんだね、あ、俺は吉●家です。出汁の旨味が段違いです。

空腹を解消してバルの方を見るとノートに座標を書き記している途中だった。

「うーん、これは転送装置使わんと難しい距離ですなあ……」

「転送装置とか費用対効果低すぎて家に設置してねえからな」

転送装置という……パニングスの家に設置されてあるな、管理局認定の。一応、パニングスは無害型だから移動さえ出来れば安全に座標位置まで到着できるだろう。

じゃあ、いつものように輝夫&武蔵無双で終わらせますか。

「ついて行つていいかな?」

「え?」

高町のお父さんがとんでもない爆弾発言を投下しましたよマジで……。

「いや、なのはの職場に挨拶に行こうと思つても許してくれないんだよね。一応、親としては娘の職場の環境というのも見てみたいし、それになのは未成年なわけだし」

「まあ、いいですけど……素手で大丈夫ですか? 死なないでくださいね」

「僕と恭也はライフルの弾を避けられるし大丈夫だよ」

「うーん、まあ、その戦力外通告一步手前よりはマシですね」

「泣いていいですか?」

さて、ドラクエ的な四人パーティーになったところで駐車場に潜伏している最大の利点を発揮しようと思う。なぜ、俺がこの駐車場を隠れ家にしたんだのか、それは一つ。逃げる手段があるからだ。

「高町のお兄さんって免許持ってます?」

「ああ、車もバイクもある」

「じゃあ、大丈夫ですね」

「おつ、あの二台つてここに置いてたんだ」

かかってあるカバーを外すとフェアレディZ33とマツダロードスターNCが姿を見せる。武蔵は俺に隠れてこんな代物を買ったのかという呆れた表情になっているが、俺は前世からのメカオタクでこういうスポーツカーが大好物なんだよ。

「輝夫くんのZとロードスターってここに置いてあつたんだ。いやはや、桃子とのデートに使わせてもらって悪いね」

「いえいえ、サーキットまで送ってもらってるんで悪くないですよ」

「輝夫……おまえ、高町のお父さんと仲良すぎね?」

「なんか、波長的なものがすごくマッチしてるんだよね」

とりあえず俺と高町のお父さんがZで武蔵と高町のお兄さんがロードスターに乗り込んで戦力外通告組には三万を渡してバニングスの家に向かった。早く18歳になりてえな……。

6

黒煙が広がる町中を回避して人気のない道を選んでバニングスの家に到着する。恭也さんはロードスターのことを見つめて俺の顔を見た。

「……定期的に貸して貰えないか?」

「いいですよ。保険の手続きとか面倒くさいですけど」

「ありがとう」

バニングスの家に車をつけて門の前に向かうと鮫島さんが綺麗なお辞儀をして迎え入れてくれた。

「地球外の存在が悪さしてるみたいなんで、転送装置貸してください」

「そうだったんですか……どうぞご自由にご使用ください」

すんなりと転送装置まで案内される。転送装置ってマジで近未来的な構造してるよね、いや、これ近未来の技術だから近未来的な構造してるのは当たり前なだけどさ。

「さーて、えっと、座標入力……あ、魔力の量が足りない。とりあえず管理局に飛ぶか」

「お、なのはが働いてるところかい」

「そうなりますね。腐った大人が多いんで……気に食わなかったら殴り潰していいですよ」

「大丈夫！ OHANASSIするだけさ☆!!」

こうして管理局と地球の危機が相互にやってきたわけです（俺が悪い）。

7

管理局に到着したと同時にクロノクソ野郎のお母さんであるリンデイさんがなんとなく出迎えてくれた。今は高町の直近の上司ではないのだが、旧上司だから現在の上司のことはよく知っているだろうし、高町親子を上司のところ案内くらいできるだろう。

「リンディさん久しぶりですね」

「ええ、輝夫くんと武蔵くん久しぶり。地球ですごいことが起こってるみたいね」

「というわけで俺達が勝手に片付けるんで二人を高町の上司のところに案内してください」

「……あの人死にそうね」

あから、セクハラしてたのかもしれないな、南無。

「じゃあ、高町のお父さんとお兄さん。三人で出どころに行くから見学楽しんでくださいね」

「いいのかい？ 僕達が来た方が早いんじゃない」

「多分、10分くらいだから誤差ですよ。コーヒー飲みながらOHANASI☆ 楽しんでくださいー！」

「うんー！」

自分の父親の満面の笑みに凍りついている恭也さんの顔が非常に印象に残る。これは確実に流血沙汰で最終的に史上最強の親子喧嘩になるな（確信）。

「じゃあ、いつもの三人で行きますか！」

「今回素手だからなあ、バル、おまえが一番危ないから気をつけるよ」

「なんででつしやる……ワイが見た目一番強いのに中身一番弱いんやろか……」

人気がない廃墟と化した研究所、入り口のガラスは割られており機能しているとは思えない。だが、バルの演算によると99.999%ここがウイルスの発信源だということだ。テロリストの潜伏先と考えると似合っているような、似合っていないような。

懐から拳銃を取り出してクリアリングをしながら室内を散策する。後ろに武蔵、後方にバル、まるで訓練された軍人のような移動で室内を探索する。

「電源回路が行きでる……バル、電圧を調べられるか？」

「ちよつとまっつてくださいね……そんなに大量の電気は流れてまへん……」
「行き先は？」

「地下ですわ……多分地下二階くらいでっしやる」

階段を探す階段が存在しない。だが、エレベーターは存在している。とりあえずエレベーターが活着しているかどうかを確認する。

「エレベーターは死んでるな……こじ開けるか……」
「片方まかせろ」

二人でエレベーターを開いて地下二階が存在するかを確認してみると地下一階までしかボタンは存在していない。となると地下二階は隠し部屋と言ったところだろうか？ 地下に続く階段は存在しないわけだし、本当ならエレベーターのボタンの隠しコマ

ンド的なのを駆使して移動するんだろうが……。

「しゃーね、このエレベーター破壊するか」

「アナザーっていうアニメ見たことある？」

「俺達飛べるのに何言ってるんですかね」

「そうだった」

武蔵がエレベーターの天井を切り裂いて埃が舞い踊る内部に侵入する。その後は簡単、エレベーターのワイヤーを切り裂いて落下する。

響き渡る炸裂音、老朽化していたエレベーターはひしゃげて地面にめり込んでいる。

「地下二階発見、ここに誰がいるんだろうな」

薄暗いが地面に少量の光源が点滅している室内。動力パイプのようなものが引き込まれており、その先には朽ちて半分だけ空いている扉がある。銃を構えてその中に入ると虚ろな瞳の老人がパイプ椅子に座って天井を眺めていた。

「アンタが地球にウィルスを散布した人間か」

「坊や達……人の愛をなんと表現する……」

「爺さん、それは人間の永遠のテーマだけ」

「この人ポエム語り始めましたよ。」

「私は人を愛した」

「うん」

「私は人に愛されたと思っていた」

「うん？」

「寝取られた」

「ええ……」

「これが世界的大流行病を作り出した男の言葉だった。

「寝取られるって具体的にどういうことさね……」

「私は四十の時に遅く結婚した。だが、子宝にも恵まれて今では孫までいる」

「うん、まあ、普通に幸せそうではあるけど」

「家内が私に嫁いできた時の年齢は二十歳と若かった」

爺さんはどこか達観した瞳で天井を眺める。悲壮感漂うその風貌は自分という存在

に少しだけ似ていて心なしか数分前まで持っていた感情が消えていた。

「年の差はあったが、家内は明るく多くの友がいた」

「まあ、若い女つて友達が男の三倍はいるからね」

「その時に気がついておけばよかったのだ……女は裏切る生き物だということに……」

「なんか、すげーグロッキーな話聞かされそう……」

俺と武蔵、バルは色々な意味で身構える。

「私と家内の関係は良好だった。年の差はあっても愛は存在すると周りにはやしてくれた」

「うんうん」

「二人の子宝にも恵まれて、長女は孫をよく連れてきてくれた……」

「オチがわかりはじめてきて心が痛い」

「私は最近になってわかったのだが、子供が作れない体なのだ」

「泣いていい？」

俺達三人は円陣を組んで作戦会議を開始する。

「ご主人はん……ワイ、この人恨めまへんわ……」

「ああ、なんか、この世界の不幸の中で結構な悲惨さを持つNTRされた人を処すとかマジで心が痛いんだけど……」

「とりあえず最後まで話を聞こうぜ」

円陣を終わらせて爺さんが語りだすのを待つ。

「私は受け入れていた。家内の浮気によつて生まれた子供だとしても、自分の子として愛している。だからこそ、自分の心に楔を打ち込んで我慢ができた……」

「……………」

「だが、私の体は病に蝕まれ……明日も生きられないようなものになったとき……妻に

愛していると言つてほしかつた……」

「……それで、地球に散布しているウィルスを使ったのか？」

「ああ、そして……彼女の本心を聞いたよ——私は、最愛の人に金を渡すだけの機械だった……彼女が本当に愛しているのは幼馴染で、二人の娘もそいつの子供だ。娘達も本当の父親のことを知つていて、本当の父親と関係を持つている」

言葉に出来ない。この人は男としての尊厳を他人に奪われ、最終的に金のなる木として扱われていたことを妻と娘達に突きつけられた事実によつて暴走してしまつたのだ。

「坊や達……私は間違つたことをしているという自覚は誰よりも持つている。殺されても文句は言えない立場であることも理解している。だが、一時の気の狂いで行動を起こしてしまつた」

「……罪の意識が強すぎる」

「ミッドチルダでの散布を計画していたが、私の家内は……地球出身でな、地球の人間に復讐してしまえと思ひ立ち、行動した。君達は地球から来たのだろうか？ 家内は日本という国の出身でな、君達の顔立ち、日本人そのものだ」

「……はい、日本人です」

「すまなかつた。謝つても許してはもらえないだろう」

いや!? もうマジで99%許しはじめてるよマジで!!

この人不憫すぎ!! なに? 奥さんが奥さんの幼馴染に寝取られて、幼馴染の子供を自分の子供にされて、その子供達も奥さんの幼馴染と関係もつてるとかマジで不憫すぎるだろうが!?

ああ、なんか、目から出汁が出るう……。

「その箱の中に設置された機械の制御装置が置かれてある。もう足が動かなくなって……6741と入力したらワクチンが散布される。お願いしていいか……」

「バル……入力してくれ……」

「わ、わかりました……」

バルは制御装置にコードを入力した。

さて、俺達はこの人をどうしたらいいのだろうか……。

「爺さん……俺は、俺達はアンタのやったことを肯定は出来ないが……話を聞いたら否定も出来ない。アンタは裏切られていても、信頼して愛してもらえていると思つて家族を愛していたわけだ。でも、それを否定され、心が壊れた。行動が出来る立場なら——誰だつて行動するだろうさ、愛があるなら」

「……坊や」

「愛してるから、愛しているからこそ、裏切られて……自暴自棄になつてしまう。でも、自分が自暴自棄になったということをもつ先に理解して、懺悔して、悔いている。だか

「……坊や達、俺達はアナタを裁くことができない……」

「……武蔵は爺さんの手を握った。」

「お爺ちゃん」

「……ありがとう」

手を離して祈りを捧げた。この人が生まれ変わったらもつと幸せな人生を……。

「……帰ろう。もう、心が壊れる」

9

地球に戻ったらピタリとヤンデレウイルスは機能しておらず、男性の死者は日本人の男女の比率を塗り替えた程度だろうか？ 男性アイドルとイケメン俳優は結構殺されて女性刑務所はパンク寸前らしい。

付け加えて、高町のお父さんとお兄さんは高町の上司を半殺しにしたらしい。なんか、セクハラしてたみたいだ。

「……めんなさい……ゆるしてください……」

「土下座やめて、別に殺されてないし」

八神、フェイト、月村がリビングで綺麗な土下座をしている。記憶は残っているようで、自分がやったことに色々な罪悪感を持っているようだ。

「許してくれるの?」

「別に、ウィルス散布が原因だし不可抗力ってやつだし——ブボヴァ!」

「ふう……土下座して損したわ。さーて、どうやって料理したろうか……」

「……結局暴力オチかよ」

ああ、もうメチャクチャだよ……。

【おまけ】

ミッドチルダの霊園、そこでこじんまりとした葬式が執り行われていた。

集まっているのは老人ばかりで一番若い存在が俺達という歪な構図になっている。それでも、それでも……安らかな表情を見るに後悔は無いと思いたい。

「……坊や達が弟を見つけてくれた人かい?」

「はい。花程度は送らないといけないと思って」

喪服を着込んだお婆さんがハンカチで瞳を拭いながら俺と武蔵に挨拶をしてくれた。

「……若いのに古風だね。この子の嫁や娘達は行方をくらまして最後の姿さえ見ようとしないうちに」

「……そっちの方が幸せかもしれませんよ。我慢強い人だったみたいなので」

姉のお婆さんが懐から吸っていた銘柄のタバコを取り出して棺桶の中に収める。

俺達も花束を棺桶の中に収めた。

エイデン・カルノア、享年68歳、安らかに眠る。

棺桶の蓋を閉じようとした時、幼い少年の声が響いた。

「お爺ちゃん！」

喪服も何も着ていない少年は爺さんの遺体の手を握りしめて大粒の涙を大量に流した。

集まった遺族達は驚きの表情を見せた。

「この子が爺さんの孫か……。」

「ライノ！ 戻ってきなさい!!」

まだ二十代ぐらいの母親が爺さんに抱きつく息子を無理矢理に引き剥がそうとする。

それを止めようと踏み出そうとしたところで先に婆さんが母親の顔を引つ叩いた。

「祖父と孫の最後の別れに水を差すな！ 姪っ子でも許さないよ!!」

「この人はこの子の祖父ではありません！ もう親子の縁は切りました。赤の他人です」

「父親の前でそれを言うか！」

「これ以上の攻撃をするならこっちにも方法が——」

俺と武蔵はデバイスを展開しようとしている母親に獲物を構えた。

「葬式で喧嘩はいいが、口喧嘩で終わらせな」

「誰です貴方達は！」

「死体の第一発見者だ。それ以上でもそれ以外でもない」

母親はニヤリと笑って大声をあげた。

「貴方達がこの人を殺したんでしょ！ 第一発見者が取調べも受けずに葬式に来れるわけがありませんものね!!」

「やめなさい！ せつかく来てくれたお方に!!」

「この男のデバイス、数年前の管理局採用の旧式、テロリストがよく使う横流し品じゃないですか！ この男が殺したんですよ!!」

ヒステリックな女というのはどうしてこうも自分勝手な考えをペーペーと吐けるのだろうか？ 自分の考えがあなたも大多数の正論のように立ち振る舞うのは殺意以外の感情をいだけなくなる。数年前の俺達なら躊躇わずに頭と胴体を別になっているだろう。

「……帰ろう。こんな虚しい葬式になるとは思わなかった」

「逃げるのですか!?! やはり貴方達がちち——ッ」

爺さんのことを父親と呼ぼうとした時、堪忍袋の糸が切れかけた。拳銃を引き抜こうとした手をバルが押さえつけていた。バルの左手を見ると武蔵の拳も止めている。

「ご主人はん……武蔵はん……こんなゴミに手を下しても無意味やから収めてくだはい

……」

「……すまない」

女は一步、二歩と後退る。

こんな女を娘だと思っていた爺さんは天から見放された存在なのだろうか。せめて、土に還る時くらい……静かに安らかに眠ることを願っていたのだが……。

「時空管理局だ！ 貴様達は包囲されている!!」

空を見上げてみると管理局の羽虫達が俺達に向けて杖を構えている。女はこの瞬間を待っていたとばかりに立ち上がって自分も杖を構えた。

後方から白服を着込んだ偉そうなおっさんが歩み寄ってくる。

「時空管理局の者だが、君達が事情聴取も受けずに消えたという報告を受けてね。カルノアくんは優秀な研究者だったわけで、こちらとしても十分な聴取を終わらせないと仕事が終わらない」

「……仕事で人の葬式をぶっ壊すのか」

「ん？」

「……仕事のために人の葬式をぶっ壊すのかと聞いている。答えろ、有象無象共が」

「いやはや、これは事情聴取の必要がないようだ。カルノアくんも可哀想な人だよ、奥さんと娘さんに愛想つかされて、葬式もテロリストに邪魔されるなんて」

最初に殴り飛ばそうと思つて拳を握りしめた瞬間にはバルの拳が男の腹部に突き刺さつていた。

「……ゴミ共が、こつちが我慢してやつてるのにピークパークうるさいんや。人が花買つて葬式に来てんのに貴様達は物騒なモン向けて、ワイ達のメンツを何やと思つてるん?」

「は、こはつ……早くこうつらを!!」

「事情聴取ならアンタが一番最初に受けんとならんのか?」

喪服のポケットからボイスレコーダーを取り出して地面に投げる。

『あの男は本当にバカで頭の悪い奴だ。俺の子供を産んだ女を妻といい、本当の父親に股を開く娘を見たらどう思うだろうな』

『パ。パ……今度は私に入れて……』

『いい子だ。だが、奴はそれなりに優秀だったからな……当て馬を使わないと上が納得しないだろう。まあ、いつものように殺して第一発見者を犯人にすればいい……ッ』

『あの人の名前を言わないで、気持ち悪くて吐き気がするわ』
『すまないすまない、愛の営みにゴミの存在は不要だな』

男と女の喘ぎ声が響いている。

「バル、こんな代物どうやって手に入れたんだ?」

「ワイも昔は人やったんですわ」

「で、どうする？ こっちは罪を擦り付けられそうになったわけだし、多少の反撃は許されるんじゃない」

「いえ、この男の悪事は全部収集しとりますからお引取りだけでええですわ。腐つとる人間は個人の私刑より裁判所で下された刑の方がお似合いですから」

バルは孫の肩を叩く。

「坊や、このお爺はんは君の本当のお爺ちゃんやない。本当のお爺ちゃんはそこで放心しとる偉そうなおっさんや、はようお爺ちゃん大丈夫って言っておやり」

「違うー！ あんな人お爺ちゃんじゃない!!」

「坊や、どうしてそこのおっさんをお爺ちゃんと言えないんや？」

「あの人は今日始めて会った人だもん！ はじめて会った人がお爺ちゃんなわけないもん!!」

血の繋がりよりも絆の繋がりが……。

「坊や、あっちのおっさんをお爺ちゃんと呼ばんと後悔するで。死んだる人間より生きとる人間を大切にせんと寂しい思いするのは自分なんやで」

「絶対にやだ!」

「……坊や、ごめんな。おじちゃん意地悪やったわ」

バルは胸ポケットにさしてある一輪を棺桶の中に入れて立ち上がった。

「ご主人はん、帰りまひよう」

「ああ、後は好きにしてくれ」

満足そうに笑っていた。



人間は偉くなったらどんなに高等な学をもつても馬鹿になるとは言うが、どうにも俺達が出会う偉い人間はあの爺さんを除いてほとんど欲の塊だ。珍しくバルが自発的に集めた情報は公職追放なんて鼻で笑えるレベルのスキヤンダルをハリポッター一冊分くらいでまとめている。それ以外にもデータ記録も大量に漁っているらしく、武蔵が素人3P動画は堪らないとか言っていてイカ臭くなっていた。

「バル、おまえが人に熱くなるってのは珍しいよな」

「なんちゆうーか、ワイが人間やった頃の恩人に少しだけ似ていたんですわ……汚い世界でも希望はあるとか夢語るバカやったんやけど」

「……どんな死に方したんだ？」

「食い物を野垂れ死ぬガキに与えて餓死ですわ。親に捨てられた子供なんぞ生きてはいけない世界で子供を育てる聖人……なんつーたら笑われますな……」

「笑わねえよ、その人がおまえの親なら笑える筈がない」

37：G動物園

どうも、輝夫です。

今日は暇潰しにゲームセンターに遊びに来たのですが珍しくこの世界の正当な主人公である修一郎様とぼったりと遭遇したのでなんとなくガンダム動物園のコーナーに着席しているところですよ。

「それにしても、修一郎様もガンダム動物園するんだね」

「まあ、台パン奇声してる人は嫌いだけどエクバシリーズは面白いゲームだし」

「このゲームを面白いと思ってる人はじめてみた……」

「じゃあなんで西風はプレイしてんだよ……」

「え、厨機体に乗ってる奴らをクソ雑魚機体で倒すのに爽快感があるから」

「……これがDSってやつか」

ヒロイン達との遭遇の割合の中に修一郎様も入ってきたということは確実に修一郎様もぼっくんのヒロインになったってことだな、よっしや、初っ端から裏ヒロイン攻略をこなしてやるぜ！

「なんか悪寒がするのだが……」

「えへへ」

「その笑みの真相は何?！」

というわけで互いに百円を投入して店内固定、俺の機体はこのゲームで一番乗ってはいけないと言われている1500コスト帯のマラサイ、色々な上方修正は受け取っているのだがやっぱりコストの関係上でクソザコナメクジでしかない。だからこそ、こいつで厨機体をぶっ潰すのが最高に面白いのよね……!」

「西風はマラサイか……」

「あ、大丈夫。絶対に先落ちしないから3000乗っていいよ」

「……じゃあ、最近勉強してるストフリで」

「似合いすぎて困る」

「また優男いじりしてる……」

修一郎様の行動すべてを弄り倒せる自信がある。

さて、マツチングが終わってマラサイとストフリ、相手はヒーローガンダムとトライバーニングガンダム、うん! 並のマラサイ乗りなら泣きたくなくなる機体だね! エピオンよりマシだけど!!

「……なあ、大丈夫?」

「全然、こいつらを何機屠ってきたことか……」

「本当かなあ……」

開幕ゲロビ（照射ビーム）でとりあえず牽制、そのままトラバに突っ込む。相手の二機もコストオーバーを狙って柔らかいマラサイにターゲットするが俺のマラサイはジェリドが乗ってんだから負けるわけ無いだろ（説得力皆無）

「うっわ、【無類の量産機好き】さんが厨機体狩りしてる」

「おお、今日、【無類の量産機好き】さん来てたんだ」

「え、無類の量産機好きさんって？」

「ああ、基本的にマラサイしか乗らない変態で、H i ーレガンダムとエピオンが大好物の化け物だよ」

「でも、マラサイって1500のギリギリ使える機体だろ？ どうやってそういう機体に勝つんだよ」

「まあ、見てたらわかるさ」

厨機体二機に囲まれているが相手の考えていることが全部わかる。華麗にステップを重ねてトラバの甘い着地にビームサーベルを投げてライダーキック、修一郎様がH i ーレガンダムを抑えているのでそのまま二回目のライダーキック、そして前格、ブーストを回復してH i ーレガンダムにビームライフル4連射、二発命中、そのまま接近して回復したゲロビをブツパ。

「……ねえ、それ本当にマラサイ?」

「マラサイ以外のなんだよ」

「……色んな意味で西風って規格外なんだな」

後方からトラバが火柱を立てるがステップでそれを回避してリロードしたビームライフルで牽制、そのままビームサーベル投擲、キックは我慢してH i i r gガンダムに接近、N格闘で無難にダウンを取る。

修一郎様も結構捌くの上手いじゃないの、シャツフルの人達よりかは厨機体狩りがやりやすいわ。

「どつちから落とす?」

「トラバからでいいんじゃないの」

「じゃあ、修一郎様はH i i r gよろしく」

「了解」

修一郎様がH i i r gガンダムと疑似タイマンしてくれている間にトラバの攻撃を掻い潜りビームサーベル投擲&ライダーキック、ダウンしたトラバの前に立ち起き攻め、起きた瞬間に前格、そのまま間合いをとってビームライフルを連打、トラバの人もトサカ来たのか果敢に攻め立てるがそれをすべて受け流して甘い着地にゲロビ。

「……なにこれ?」

「これが無類の量産機好きさんなんだよ。圧倒的な実力で相手をゴツ倒す人なんだよ」
「マラサイ以外には乗らないの？」

「マラサイ以外に乗ったところは見たこと無いな……」

そのまま華麗にトラバを完封してH i ーレガンダムにターゲットを移すと修一郎様が多少のダメージを受けて入るが落としてくれていた。さてはて、コストオーバーのH i ーレガンダムを落としてフィニッシュにしますか。

「修一郎様上手いね」

「ストフリは結構バランス型だから……まあ、マラサイで爆弾やってる西風には勝てないと思うけど」

「リアルでも言えることなんだけど、攻撃の選択肢って大量より少量の方が機能するところが多いのよね。このマラサイという機体は武装のバリエーションが少ないわけけどそのすべてに無駄がないから理解するとすっごく強いよ。機能美ってやつさ」

「……西風は戦う時そういうの理解してるのか」

「当たり前じゃん、考えて使う武器より考えないで使う武器の方が実戦では強いだよ」

一戦目は互いに落ちることなくほぼ完封勝利で終わった。いい相方と戦えばこのゲームはある一定のラインまで連勝出来るからなあ。

「二戦目はH i ーレとヤークトアルケーか……相手事故ってるなあ……」

「なあ、リアルの俺を見て無駄だと思うところってあるか」

カチャカチャとレバーとボタンの音が鳴り響いている。ゲームと世間話を並行するのは脳みその回転が遅くなるが、まあ、二戦目なら戦力差はイーブンだから多少の被弾はどうでもいい。

「修一郎様は多様性を重んじてる部分があるんだよね。自分はこういう手を何個も用意しているからどんな状況でも切り抜かれるみたいな風に見えるのよ、実を言うとそれは現実世界では必要のないものなのさ」

「とぅとぅ?」

「どんな状況でも切り抜かれるようにエースカードを大量にデツキに組み込んでるわけよ、でもね、手札にエースカードばかり来ると使い勝手のいい汎用カードを見落とすわけさ」

「汎用カード……」

「戦いにおいて切り札は一番効果が出る場合に使ってこそ意味がある。その切り札を確実に出せるように汎用カードを場に出して場を繋ぐのよ、そうすると必然的に無駄な行動が減って生存率が高くなる。生き残る為には綺羅びやかな一手より泥臭い三手の方が相手から見るとすっぱー嫌らしいのよ」

コンボを気持ちよく決めてぱぱと終わらせようと執念深く張り付いてくるヤー

クトアルケーを華麗に捌いてライダーキック、トサカにきたのか尚更に粘着してきている。格闘機つてホント単純だわすなあ。

「西風はどう風に自分をまとめてきたんだ？」

「最初に自分がギリギリ勝てる相手を想像して脳内で戦ってみる。その勝率が100%になるまで戦い続けて、最終的に自分がどういう戦い方をしたのかを注意深く考察するのさ、そのファイトスタイルが汎用性の高い戦い方だ」

「……それ、何年かかるの？」

「人それぞれとしかね」

「十年かかりそうで萎えるぜ……」

多分、天才じゃないと五十年かかるよ。

2

「君達、中学生だよな？ もうお家に帰る時間だよ」

「最高連勝記録更新！ 帰りましょ、帰りましょ」

「……化け物つて怖い」

中学生がゲーセンに入れない時間になったので今日の動物園は終了、ゲーセンの椅子つて安っぽいから腰が痛くなりますわ。

ゲーセンの外に出た時に力強い声で呼び止められる。

「西風、俺……強くなるよ……」

「ふーん、がんばー!」

「がんばって……おまえなあ……」

「強くなるうとしてる時点で二流って気づけよ。主人公さん」

家に帰ると窓ガラスがすべて割られていた。多分、武蔵がセフレの家に行っていたからヒロイン達が夜逃げしたと勘違いして破壊の限りを尽くしたのだろう。

「被害届……出しちゃダメだよな……」

ガラスで指を切りました。痛かったです（小学生）。

38. こたつ

どうも輝夫です。

最近はお日様が顔を見せてくれる時間が減ってどんどんお月様が下剋上の準備をしている今日この頃ですね。そんな寒がりなぼつくんは日本人の心であるこたつを引っ張り出してリビングに設置してあります。もちろんこたつの上には若干青いみかんも完備していますよ！ 甘いみかんも美味しいのですが、この季節だけの酸味の効いたみかんも格別ですよ。

「ああ、こたつっていいなあ……輝夫、ジャンプ買ってこいよ」

「殺されてえのか？ 自分のフットで買いに行け」

「ワンピース読みたいんだよ……」

みかんを手にとつて手の中で転がす。そして皮を剥いて一口。

「あれ、輝夫ってみかんの白い部分も食べられるタイプ？」

「いや、普通に食べるよ？ もしかして食べないタイプ」

「いや、食うよ」

「なぜに質問したし……」

もぞもぞとこたつの中から這い出てきた美少女が俺の膝に腰掛ける。そして剥いたみかんを略奪して甘酸っぱいと言わんばかりの表情で貪り喰っている。

「ヴィータなんか久しぶり」

「この一年の八割をお前達クズと一緒に過ごしてのになぜ久しぶりだ……」

「クズ言うなよ……間違つてねえけど……」

こたつでぬくぬくしていると強烈な眠気が襲ってくる。食料の備蓄も布団の天日干しも昨日やっっているわけだし、今日やることは夕食の準備まではない。そうなってくる和本でも読んで静かに時間を過ごそう。

——聞き慣れた炸裂音。

携帯電話を取り出していつものガラス屋さん連絡を入れる。

「もしもし、いつものようにガラスをお願いします。え？ 新製品の防弾ワイヤーガラスですか……リビングの窓ガラス全部でいくらかですか。ああ、百二十万ですか、保証とありますか？ 二年無料取り替えですね、わかりましたカードで」

「二年無料取り替えとか超良心的だな」

「ああ、普通のガラスよりトータルで安くなりそうだな」

「外の風が……さむっ……」

窓から侵入してくる八神、今日は珍しく一人で侵入しているし平日の真つ昼間だ。こ

の場合は仕事に行つてみたらやることなくて直帰したというパターンだろう。

八神は寒い寒いと連呼しながらこたつの中に入ってくる。清々しいくらいのマツチポンプで尊敬できますよマジで……。

とりあえずこたつから抜け出して雨戸を閉めに肌寒い庭に出る。本当に何なんですかねヒロインつて……。

「おかえりー」

「ただいま……」

こたつの上のみかんを笑顔で食べている八神を睨んでみるが効果は無いようだ。こいつの性格という毒を解毒する毒消し草ありませんかね？

とりあえず家のこたつは長方形の四角形なので上限は四人、俺のスペースはある。

「ヴィータは俺の妹的存在だから許すけどさ、八神さんよお……君はもう少し他人との距離をね」

「だって暇やもん、そんな遠慮する関係やないやん」

「ありますね、大いにありますね。君は年に一回会うか会わないかの従兄妹か再従兄妹くらいの距離だからね、マジで窓を破壊して侵入して許されるくらいの関係なんてないからねー！」

「従兄妹でも結婚できるよ?」

「その無駄なポジティブやめーや」

初期状態の輝夫キライキライモードがマジで懐かしいぜ、こいつも今やガチで俺の童貞を奪おうとしている一人だからな……。

もう住居侵入されたので逃れる術が存在しないのでこたつに潜り込む。

——股間に伸びる腕を防ぐ。

「こたつという死角でなにしようとしてんだよおめえー」

「なんとなく」

「なんとなくで股間を触ろうとするな！ エッチな本じゃねえんだぞ!!」

八神は渋い顔で手を引っ込める。

これが俗に言うガッツリスケベという存在なのでしようか？

「まあ、ヴィータが最近暇そうにしてるから仕事が少ないとは薄々感づいていたわけだけど……」

「平和やかならな、書類仕事も少なくて労働者としては楽でええわあ」

「ニートとしては絡まれたくない存在に大量のお仕事を降らせたいですね……」

お昼の昼ドラが始まったので全員の視線がドロドロとした愛憎劇に釘付けになる。この時間帯のドラマって本当に人間の醜さが出てて最高に……この感情を言葉で言い表すことができない。

唐突に頭の中から声が聞こえる。

『ご主人はん……種銭くだはい……』

「また負けたのかよ、最近の勝率悪いなおい……」

『だって、だって！ プレシアはんがおるんやもん!!』

「テストタロツサママンと勝敗になんの因果関係が……？」

自称パチプロの言ってることがわからん。でも、あの爺さんの葬式で色々と手助けしてもらったわけだし……小遣い分くらいは渡しておくか……。

「取りに戻ってこい。8万だけだな」

『マジでつか!? うっわ、ご主人はんが優しいとかめつちやキシヨイ!!』

「殺すぞテメエ……」

『ワイの場合は壊すの方が正しいでっせ』

「揚げ足とるなよ……」

テーブルの上にある財布を手に取り中身を確認する。二つ折り財布に十万円以上入れるとポケットにいれにくいのよね、でも長財布はギャル男っぽくて使いたくないのよ。あ、武蔵は100万くらい入る長財布使ってるよ！

「ご主人はん！ お金!!」

「早いなオイ……」

「空飛んで来ました!!」

「八神さん、この機械を逮捕していただけませんか？ この世界で空を飛ぶ使おうと犯罪ですよね」

「魔道士限定やから、機械はノーカン」

仕事しろよ管理局と心の底で叫んでバルに8万円を渡す。するとぴよんぴよんと飛び跳ねてから窓を開けて飛び立っていった。嵐のように来て嵐のように去る粗大ごみだな、SNSでバズりそう。

心を無にして静かに本を読みすすめる。読書少女である八神は本を読んでいる人間の邪魔なんてできないだろう。本さえ読めば絶対に安全だ。

「お、あの先生の最新刊やん！」

「ナチュラルに俺の膝に乗るなバカ、座高低い方なんだよ……」

「最初のページから……」

「せめて栞入れさせてよお……」

読書少女なら邪魔してこないと思っていたのだが、俺の予想なんて絶対に外れるのがこの世界ですからね。受け入れますよ。

妙に股間に響く女の子の香りで頭がクラクラする。

「あ、マミちゃん？ 今夜暇。え、ミホちゃんとお茶してんの！ じゃあ、今夜ごはん食

べに行くよw え？ 夕飯の後は何するって……わかってるくせにいw 二人とも食べちやうぞお!!」

「なあ、輝夫。あのゴミってよく殺されへんな」

「わたしにもわからん」

武蔵のセフレ達は本当に寛容だな、普通の女なら独占欲で2Pなんて絶対に許さないだろ……。

子狸の頭を眺める。俺が同じことしたら嫉妬で殺されるより酷いことされるだろうなあ……。

「同じことしたら手足切り落として、目玉を刳り……舌を引っこ抜くよ……」

「……未来の彼氏可愛そうだね」

「未来の旦那様が何言うとるん？」

「ノーコメントで」

ヒロイン武力派の一派であるこいつに拒絶なんてしたら……ああ！ 恐ろし!!

武蔵の暴走とみかんを米のように食うヴィータ、俺の本を強奪して普段どおりのかわいい顔で物語に熱中する八神……俺だけ暇つぶしができてないのですが……。

まあ、こういう日もあるよね——雨戸が取り外され地面に着地する音。

「はやて……抜け駆け禁止だよね……」

「こたつ温かいよー」

「輝夫に座るなんて……」

「ねえ、君達？ 君達の敵はこの八神さんだよね！ なんでぼつくんに武器を向けるのかな!?!」

もう嫌だこんな生活……渡米してやる……。

39：絶対に笑ってはいけない（前編）

「おはようございまーす」

「おっはー」

どうも、輝夫&武蔵です。

鮫島さんの親戚が危篤で仕事ができないということでバニングスの執事仕事のなものを変わりに引き受けたのですが、なぜだか集合場所が彼女の家の反対側に存在する大規模な運動公園に集合させられているのですよ。どうして彼女の家に現地集合したらいけないのでしょうか？

「おはよう。今日から執事の仕事頑張るんやで」

「……いや、なんでバニングスに雇われているのに一番最初に顔合わせるのが君なの？」

似合わないレディーススーツ姿の八神がドヤ顔で俺達に手をふる。いや、なんで開幕早々に君の顔を見ないといけないのですかね？ 今回は君の顔を見ずに済むと気分が良かったのですが……。

「じゃあ、早速着替えてもらおうか！」

「いや、それは……大晦日特番みたいなボックスがあるんですが……」

「輝夫……久々に理不尽な暴力が降り注ぎそうでオラワクワクすつぞー！」

「稀にしか暴力が降り注がないからワクワクしてるぞ……」

ヒロイン達から暴力が降り注がない絶対安全圏で生温いお茶を飲んでいる立場だから久しぶりの登板で若干の高揚を見せているむさしきゆん！ 正直お前だけがすべての暴力を受けてくれたら俺も喜々としてなんでも突っ込んでやりたいさ、でもね、平等に降り注ぐから理不尽な暴力なんだよ？

「で、てるおたん？ どっちのボックスに入るよ」

「家でカレー仕込むからお前だけ入れよ」

「早くはいり」

不満はあるが仕事に遅刻してしまったら多方面から肉体言語を使われそうだから右側のボックスに入る。大晦日特番特有の女装ではなく普通の執事服で一安心。

久しぶりのキチツとした格好で外に出る。隣には女装美少年が神妙な表情で立ち尽くしている。

「……お股がスースーするですわ」

「左が女装枠だったかあ……」

武蔵って中学生らしく身長低くて女顔だから非常に美少女ですね、この姿でヤリチンという事実があるのだから世界は不思議ですわ。

「二人とも準備できたみたいやな！　じゃあ、バスに乗ってもらおうか」

「……バス移動、マジで大晦日特番だなオイ」

「セフレにこの姿見られたら確実にそういうプレイされそうで怖いんですけどー」

やる気のない足取りで八神の後ろをついていくと普通の路線バスが停車している。こいつらの財力ってどうなってるの？　なんでバス一台をこんな無駄なことのために借りれるの……。

武蔵は女装させられて萎えているのか常時レイプ目でトテトテと歩いている。なんだろう……めっちゃソル。

劣情を催している中でバスが発車する。何が起こるかわからないから身構えないとな……。

「ああ、どうしよう……ああ！　どうしよう!!」

バスが停車して思い切りド知り合いが乗車して意味不明なことを言い始めている。

——高町のお父さん何してるの!?

「輝夫……俺達とんでもないことに巻き込まれてねえか？」

「絶対にそうだよ」

「僕はどうしたらいいんだ!! 早くどうにかしないと!?!」

「……何があつたんですか」

なんとなく動揺している高町のお父さんに理由を聞いてみる。

「娘達が一緒にお風呂に入ってくれないんだ!!」

「グフツッ!」

『輝夫・武蔵アウトー』

「デーン」という音が響いてバスにしなやかな棒を持った高町とウィータが乗車する。

もちろん満面の笑みだ。

まさかね、本当に大晦日特番スタイルとかやめてよねまじで!!

「あの、えつと……」

「尻だせ尻、叩けねえだろ」

「マジすか……」

「顔でもいいんだぜ」

俺と武蔵は顔よりはマシ理論で二人に尻を差し出す。

「パシッ!」という乾いた音と形容詞し難い鋭い痛み。ああ、あの芸人さん達って頑

張ってるんですね……。

「いつつつ……帰りたい……」

「お前はまだいいだろ……俺なんて女装させられてるんだぞゴラ……」
もう絶対に笑わねえ、俺は鉄仮面だ……。

「僕はお父さんなんだ……娘とお風呂に入りたい年頃なんだ……」

「さつき娘さん居ましたよ……」

「僕は娘に背中を洗ってほしいんだよ!!」

「……お父さんは辛いですね」

「それに恭也も入ってくれないんだ!!」

「ゴフツ!!」

『全員アウトー』

早いなという表情のヴィータと俺達を合法的に引つ叩ける喜びで微笑んでる高町が再び現われて尻を引つ叩いて下車していく。

高町のお父さんもそれに合わせて下車していった。これは強敵揃いだぞ……。

「輝夫、さつき笑ったのはお前が笑ったから誘われたんだぞ」

「嘘こけ、俺より0.1秒お前の方が早かったぞ」

不毛な言い争いを終わらせて外の風景を眺める。

流石に高町のお父さん以外の猛者は流石に現われないだろう。初っ端から最終兵器を出して失敗したな主催者！俺達の笑いの沸点はそんなに低くねえぞ。

次のバス停に到着してまたまた顔見知りが乗車する。

クロノの嫁とリンディーさん？ これまた俺達と会わないタイプを連れてきたものだ。

「お義母さん……クロノくんってすこし……」

「わかるわ、自分の息子ながら酷いところが目立つのよね」

「はい……一人で風呂に入りたいのに乱入してきて……」

「フツ……あ」

『輝夫アウト』

お風呂ネタを引っ張られて笑ってしまった!?

満面の笑みで高町が登場して颯爽と尻を叩いて降りていく。どれだけ俺のこと嫌いなんだよ……。

「ああ、それはお父さんの血ね」

「クロノくんのお父さんってどんな人だったんですか？」

「そうね、最初に出会ったのは下着泥棒を捕まえた時ね」

「ああ、クロノくんのお父さんが管理局の職員として下着泥棒を捕まえていたんですか」

「いえ、彼が私の下着を盗んでいたのよ」

「……笑うな俺、絶対に、ふふっぜった……」

「武蔵アウトー」

颯爽と高町が現われて武蔵の尻を叩いていく。だが、俺を叩く時よりは笑顔ではない、俺をそんなに叩きたいのかよ……。

それにしても出会いが下着盗まれそうとか異次元だな、流行ってたのかな。

「下着泥棒だったんですね……でもどうして結婚を？」

「土下座して結婚してくださいって言われたのよね」

「普通しませんよね？」

「書類偽造されたのよねー顔はソコソコ良かったし受け入れちゃったよ」

この程度で笑わねえぞ、絶対に……。

「やっぱり顔ですね！」

「ふふっ」

『全員アウトー』

「あひん！」

「やはん！」

顔ですべてを判断するんじゃないやねえよ、武蔵じゃねえんだから！

互いに柔らかいくせに軋やかにアタックするからピンタレベルの痛みが色んな意味でじんじんするぜ……。

人妻と未亡人が下車して地面のシミを数える。冷静になれば絶対に笑わない。俺は鉄仮面なんだ、鋼の心持つてるだろ！

「なあ、俺達の笑いの沸点って低かったんだな……」

「何諦めてるんだよ、まだバスだぞ……」

繰り返しになるが芸人さんの根性って凄まじいのね……。

「にーらめっこしーましよ！ あっぶっぶ!!」

「へっ？ ぐふっ……!!」

『輝夫アウトー』

バスが停車して高町が乗車、俺の尻を叩いて颯爽と去っていく。

「てめえ……」

「いや、走ってる最中に笑ったらどうなるんだろうって」

「絶対にタイキックはお前に擦り付けてやる」

「女装枠はタイキックとガチピンタはキャンセルされんだよ」

ぐぬぬと呻いて次の刺客の到着を待つ。大晦日特番的にバスの刺客の数は平均5〜7、俺達の知り合いの数を考えるにその半分の3〜4くらいだ。次が最後か、それとも次の次か。

バスが止まって新しい刺客が乗車する。

「……シグナムの姉御だ」

「……シグナムの姉御って笑いを取るタイプだったか？」

「……輝夫、武蔵。一つ聞きたいのだが」

「なんですかね」

「私は巨乳なのか？」

「ゴハッ!」

「全員アウトー」

互いに尻を引っ叩かれて円陣を組む。

「なあ、これ映像化されてたらこのシーンだけループしていいかな？ マジでシグナム

の姉御が可愛すぎる!!」

「ああ、お願いします神様！ 撮影していますように!! 一生のお願いです!」

顔を両手で隠しているシグナムの姉御を彼岸島よろしくハアハアしながら眺める。

やっぱり気高い女騎士タイプが恥ずかしがる姿ってマジ興奮するぜえ……。

シグナムの姉御は顔を隠したまま逃げるように下車していく。ああ、最高だったぜ

……。

「こういうのあるなら尻を叩かれるくらい許容範囲やな」

「ああ、シグナムの姉御は俺達の大好物だからな!」

久しぶりの眼福を得た俺達はしたり顔で椅子に腰掛ける。もう何も怖くない。

もうそろそろ目的地に到着するな、刺客全部に笑わされたよ……。

「運転手からお願ひがあります。お客様に変態はいらっしゃいませんか」

「ぶっ!？」

最後の最後の攻撃は攻撃力が高かった……。

2

ようやくバニングス邸に到着した俺達だが結構な疲労が蓄積されている。これ以上の攻撃は人間性やSAN値が削られそうです。

「ようやく到着したな！　じゃあ、雇い主のアリサちゃんに挨拶しに行くよ!!」

「テンションたかいなーおい……」

「本当に怖いわこれ、久しぶりの理不尽な暴力は体より心に来るぞ……」

先回りしていた八神に引き連れられて屋敷に入っていく。そして豪華な部屋に案内され雇い主のバニングスとようやく会えた。

「あんた達が新しく入った執事ね！」

「……メイド服着てるんですがそれは」

初対面の体を保ったバニングスが俺達のことをマジマジと眺める。どこまでも大晦日特番なのです……。

『この執事めっちゃタイプ！ 鮫島クビにして本採用しようかしら？』

「ゴフツ!？」

『全員アウトー』

「ありがとうございます!」

お尻を擦りながらバニングスの話しに戻る。

「あんた！ 名前なんていうの」

「……西風輝夫です」

「西風輝夫ね！ うーん、呼びにくいからサウザーね!!」

「さうざー……ふふっ……」

『武蔵アウトー』

武蔵の尻を叩かれる様を見て特番が待ち遠しくなります。

『引かぬ！ 媚びぬ！ 省みぬ!』

「ググツ……せーふ……」

どうにかサウザーの名言を回避してお仕置きを回避する。

次は武蔵の方に歩み寄ってマジマジと眺める。

「あんた！ 名前は」

「……枚方武蔵です」

「枚方武蔵ね！ うーん、呼びにくいから大和ね!!」

「ぶぐぐつ!!」

それは反則！ お姉ちゃんの方だから!?

尻をシバかれて心の声が攻撃力が高くないことを祈る。

『わたしより美人なんですけどーマジでテンサゲー!』

唐突なギャル語!?! まあ、俺と武蔵は結構な頻度でギャル語会話してるから慣れてるか。

「辛いことあるかもしれないけど頑張って仕事しなさいよね!」

「はい」

「わかりました」

八神がしたり顔で俺達の肩を叩く。

「お嬢様に気に入られたようやな！ 執事たるもの信頼第一や!!」

「テンションたけーなおい……」

「じゃあ、わたしピアノの稽古があるから九時頃に帰るわね!」

「ええ……」

颯爽とピアノの稽古に向かうバニングスの背中を呆然と眺めた。

「ここが控室や！ 軽食や飲料は完備してるから好きに飲み食いしてええよ」

特番お決まりの机のある休憩室……引き出しトラップが絶対に仕掛けられてるよお

……。

「輝夫……引き出しどうするよ……」

「いや、本当は引き出しなんて見たくねえけどさ……アイツ達在必死こいて何かしら作ってるなら触らないとかなって……」

「でもさ、高町の打撃は全盛期のイチロー超えてるぞ、見事な神主打法だぞ」

「でもさ、流石に物程度で俺達を笑わせられるわけねえじゃん！ 見るだけ見ようぜ」

最初はグーと掛け声を発してパーを出すと武蔵は平然とチョキで迎撃しやがった……。

「ジャンケンで初手チョキは性格悪いって昔から言われてるから」

「はよあけろや」

上段、中段、下段……最初は上段から行くか……。

上段の引き出しを開けるとDVDが一枚、それ以外は何も無い。タイキツク系のDV

Dだな……。

中段の引き出しには何も入ってない。これ確実に後々何か入れるパターンだわ……。

下段は怪しげなボタン、もちろん輝夫という名前が書かれてある。

「DVDとボタンね……王道過ぎるぜ……」

「王道すぎるな、どっちがタイキックなのやら」

武蔵は腕を組んで物思いにふける。何を考えているのやら、早く自分の机を開けろや……。

「あ、天井に何か貼ってある」

「ああ？ そういう仕掛けも——」

「正解は越○製菓!!」

「ちよ!? ま!!」

武蔵は鏡餅のCMのように机から出てきたボタンを押しやがった……。

『輝夫の黒歴史』

「え?」

『なのは! すぐか! アリサ! 一緒に帰ろうぜえ』

「ゴハツ!? ゴホゴホツ!!」

小学生時代の馴れ馴れしい俺の肉声がスピーカーから流れる。どうやって入手したんだよ!?

「越○製菓!」

「ちよ! 本当にやめて!!」

『なのはちやくん、オレっち子供は三人ほしいなあ〜』

「オゴゴゴ!? グゲゲ……」

「おお、悶てる悶てる」

ボタンをひったくって電池を抜き取ってゴミ箱に投げ捨てる。俺の黒歴史なんか使
うんじゃねえよ！俺の心がダークサイドに落ちちまうだろうが!!

武蔵の方を見ると絶妙に物惜しそうにゴミ箱を眺めている。

「テメーの机には何が入ってたんだよ……今度は俺が押してやるよ……」

「へいへい、何があるかなあー」

武蔵も淡々と机を開けていく。中身は大きな封筒と小包が一つ……チツ！ボタン
入れろや企画者……。

「うーん、どっちも危険度高そうだなあ……」

「とりあえず小包気になるな、ボタンの可能性があるし」

「どんだけボタン欲してんだよ」

小包を開けて中身を確認する。中身は……男性器を模した大人の玩具だった……。

「いや、俺達男子だからこの程度で笑わねえよ」

「そうだよな、笑うわけなッ——ググッはははは!? ははは」

「お、おい……どうしたよ……」

武蔵が笑い転げてデ○ルドを指差す。それを凝らして見てみる——ああ、これは笑うわ……。

【名前：ザファイラ】

『全員アウト』

互いに椅子に座って深呼吸を繰り返す。ヴィータの打撃は短時間が収まるのに高町の打撃は長時間続くから高町があてがわれる確率が高い俺のお尻はレッドゾーン寸前だぜ……。

「これ企画してる奴さあ、脳みそのネジ二三本吹っ飛んでるだろうな」

「俺は四本だと予想するね」

互いに視線は封筒とDVDだ。ここまで痛い思いしてるのなら突き進んだ方がスツキリするような謎の感覚に襲われる。

互いに頷いて封筒を指差す。

「DVDは十中八九タイキック、最後の花にしようぜ」

「ああ、DVDのタイキックがどっちでも恨みなしだ」

「じゃあ、封筒開けるか……」

生唾を飲み込んで封筒の中身を確認する。

「ぶはっー！」

【修一郎様の合成写真（輝夫&武蔵作）】

『全員アウト』

乾いた炸裂音に近い打撃音の果てにもう一度椅子に腰掛ける。

こんな昔に作った代物をよくもまあ……。

破り捨ててゴミ箱に投げる。

「たいきつく！　たいきつく……」

「おねがいます……むさしでありますように……」

考えることをやめてDVDをプレイヤーにセットしてどんな映像が流れるかを待つ。

映ったと思ったら椅子に座ったヴィータが悲しそうな表情をしている。なんだよこれ？

『輝夫……黙ってたことがるんだ……』

「……………」

『偶にさ……一緒に寝てただろ……』

「……………」

『その時に……まあ、アレだ！　そういうことしたんだよ……』

「童貞卒業おめでとう」

「うるせえ！　見入ってんだよ黙ってる!!」

武蔵に鳩尾を決めて集中して内容を確認する。

『それで……出来たんだ……』

「あ、ああ……」

『でも、輝夫に迷惑がかかるから……黙ってて……』

「早く言えよ!?! てか、まさか、やめるよな? おい、やめるよな!」

『ギリギリ間に合うから産婦人科で……』

「バカ言うな! いや、ウィータは尻叩きしてたしまだ産婦人科に行っていない……武蔵

! 早く笑え!! わははははははは!!」

「あ、ああ……ははは」

『全員アウトー』

入ってくるウィータを抱きしめる。

「おまえと間の子供を疎ましいと思うかよ! まだお腹の子はいるんだよな!」 大丈夫

夫だ……色々とすれ違いがあったかもしれないけど二人を絶対に守るから!! お父さ

んになるから……ウィータ……」

「いや、妊娠してねえよ」

「へ?」

『産婦人科で……輝夫タイキックらしいぞ』

タイ人が入ってきてお辞儀をした。

——ごめん、君に俺の怒りをぶつけるよ。

「オニイサン！ ボクのウデオレチャウ!!」

「ああ、医療費出すから折らせろよ……」

「ボク格闘家！ ウデオワレタラ試合デレナイ!!」

アームロックでタイ人くんのウデをへし折ろうとするが武蔵に羽交い締めになされてロックが外れて彼は部屋から逃げ出してしまった。

笑顔だった高町が流石にこの演出には思い当たる節があったらしく軽く叩いて退出していった。ヴィータの方は容赦なく武蔵を引っ叩いて出ていく。

「……いつそのことヴィータ犯して子供こさえるか」

「復讐は新たな復讐を生むだけだぞ」

「RPGの主人公みたいなこと言うな……」

互いに前半戦はまだまだ続いているのに疲労困憊だ。何よりDVDの破壊力がヤバかった。俺の妹分のヴィータに何させてやがるよ……。

カタンと扉が開いて満面の笑みで八神が入ってくる。

「今日は全日本執事連盟の会長さんが講習会してるんや！ なんとなんとこのお屋敷で」

「全日本執事連盟ってなんですかね……」

「俺はメイド連盟の講習に行きたいんですが、メイド服ですから」

俺は長男だから我慢できたけど次男だったら我慢できなかった。

——前世では次男でしたけどね。

3

骨は折れてないけど心は折れてる俺は無表情に八神の後ろをついていく。全日本執事連盟の会長ってどんな人なのやら？ 予想できないし罊が仕掛けられてそうで怖いわ……。

屋敷の中の大広間には大勢の執事服を着た老若男女がパイプ椅子に座っている。見た感じはまともそうだな。

「全日本執事連盟の会長さんのありがたいお言葉が始まるからはよ座り」

何故か特等席と言わんばかりの最前列に着席させられる。やっぱり嫌な予感するわ。

奥の方からヨボヨボの爺さんとスーツ姿の司会？ がひな壇に立つ。

「こちらが全日本執事連盟会長の島崎様です。そして私が司会担当の島崎です。孫です」

後方と左右からスタンディングオベーションが響く……カルト教団かな？

「……婆さん、飯はまだかい」

「皆様、会長も執事の皆様が持つ勤勉さに喜んでいますよ」

「お刺身食べたいなア」

「パチンコやめたら?」

「(´Д`)はっ!?!」

唐突なウシジマくんで笑ってしまった。

あれ? 高町とヴィータが来ない……ああ、講習が終わるまで叩かれないパターンか……。

「では皆様、執事とは何かを会長から聞いてみましょう! 会長、執事とはなんですか?」

「ロールケーキ」

「そう! ロールケーキなのです!!」

「ロールケーキってなんだよ……」

大口を開けながら認知症が入った会長さんとお孫さんのパフォーマンスを眺める。

「会長、執事になるための修行はなんですか」

「飯食ってパチンコ打って寝る。執事の鍛錬はそいつで十分よ」

「なあ、輝夫……この人さあ、執事じゃなくて認知症の入ったパチンカスじゃね?」

「言うな、言ってやるな……」

同じような存在を飼ってる俺に効く。

「では、執事としての心構えを」

「二万円札を躊躇わないこと」

「二万円札は紙切れです！ 多少粗末に扱いましたよう!!」

またスタンディングオベーションが響き渡る。なんだこれ……。

——扉が蹴破られる炸裂音と共に機動隊みたいな格好をした集団がなだれ込んでくる。

「るうばあん！ きさまをたいふおすうう!!」

「銭形警部！ 入れ歯を忘れていきます!!」

「うむ」

「ぜーにんがたのとつつあん!? いきとつたんかわれ!」

「唐突なルパン!」

結構な高齢化したルパンと銭形が現われて講習会が騒然となる。高齢銭形は杖をつきながら会長？ それともルパン？ よくわからないが逮捕しようとしている。あ、捕まった。

「とつつあん……長く逃げてきたけど俺も年だから……」

「ああ、もうゴールしていい」

二人が抱きしめ合うと同時に流れる【鳥の歌】。
なにこれ？

その摩訶不思議な光景を眺めていると司会をしていた奴が大声で笑いはじめた。

「貴方が爺様のライバルだった銭形警部でしたか！　ですが、爺様が逮捕されてもルパン五世である私が大泥棒として君臨します!!」

「あ、おまえも学校の大きな三角定規を盗んだ罪で逮捕だ」

「……ボクもまた、大きな三角定規に踊らされた被害者の一人なのさ」

頭の中がこんがらがって笑えない。

もちろん終わった後の尻叩きは強烈でした。

4

控室に戻り冷蔵庫から水を取り出す。

「俺は本当に現実世界に存在してるのか？　これ絶対に夢だろ」

「夢だったら尻は痛くねえよ」

武蔵の正論で現実世界であることを再確認する。現実世界って怖いですね。

キャップを開けて中身の匂いを確認して安全を確認してから口をつける。

「大福とか入ってないよな、入ったら高町のお父さんの汗使われてそうだし」

「とりあえず水は大丈夫そうぞ」

武蔵に水を渡して互いに席につく。そして何気なく引き出しを開けてみるとDVDが一枚入っていた。

「……入ってた？」

「……うん」

武蔵も無表情に引き出しを確認する。中から俺の人形が出てきた。

「うっわ、完成度高いな……」

「特番特有の完成度の高いフィギュアか……」

「お、ボタンがついてる」

「えー、またろくでもない機能だろうな」

武蔵は無表情でボタンを押してみた。

『輝夫の黒歴史』

『おっれのよめー!!』

「ボタンは危険ですね!？」

【次回予告】

唐突に始まった大晦日特番ポイ企画！ 撮影はだいたい秋頃にされるらしい。

二人の美少年を陥れる笑いの刺客達、二人の精神とお尻の耐久値は残るのだろうか？
次回に続く。

39. 5 : 絶対に笑ってはいけない (前編 2)

フィギアと箱に入っていたデ○ルドをガムテープでぐるぐる巻きにして冷蔵庫の冷凍庫に隠して椅子に座る。もう嫌だ。絶対にメインターゲット俺だよ……。

武蔵の方を見ると姿鏡に映る自分を凝視していた。

「……俺さあ、ナルシストじゃねえけど結構な美少女だな」

「ぶっ……あ!？」

『輝夫アウトー』

高町が颯爽と現われて尻をシバいて帰っていく。

【笑うとお尻を叩かれる】

「いつつつ……自画自賛は反則だろうが……」

「いや、おまえも男の俺からしたらイケメンだぜ」

「はは、褒めるな……あ」

高町が見事なスイングで骨盤を刺激して帰っていく。ソフトSなのにい……。

武蔵はドヤ顔で口元を隠している。こいつ……嵌めたな……。

指差して口元を隠している武蔵を指摘する。だがアウトの声は響かず監視カメラに

手を振るが全然反応しない。

「ねえ、俺だけ判定広くない？ むさしきゅんも微笑んでるじゃん……叩かれろよ……」

「微笑みはセーフなんじゃね」

「まじ？ にひー」

「にひー」

『全員アウトー』

振り向くと高町とヴィータが靱やかな棒を持って入ってくる。

「あへっ!？」

「おしりがオ○ンコになっちゃうう!!」

『輝夫！ 言動的にアウトー』

え？ 言動的にアウトつてなによ……？

高町が靱やかな棒からプラスチック製の子ども用バッドで武装して戻ってくる。

「あの、えつと……靱やかな棒三回で許していただけませんか……」

壁に背を向けてバッド攻撃を回避しようとするがニッコリ笑顔の高町は見事なスイングで腹部を振り抜いて腹筋破壊して帰っていく。

蹲って靱やかな棒がいかに人道的な武器なのかを再確認する。

「うーん、あのスイングは全盛期の巨人阿部を連想させるな」

「ぼんぼんいたいでち……」

「輝夫、おかえりんこ」

「ただいま〇コ」

『輝夫！ 言動的にアウトー』

スキップしながら入室した高町がプラスチック製バッドで尻を振り抜いて帰っていく。

むさしきゆんは完璧に俺を嵌めに来たな……。

「綺麗なバレンティン！ 俺じゃなきや見逃しちゃうね」

「……おかえりんこ」

「ただいま」

「なんでだよ!? オマ〇コ言えや!!」

『輝夫！ 言動的にアウトー』

二度あることは三度ある。

高町の打撃の評価を考えている武蔵と冷蔵庫の水で尻を冷やす俺。

「あのスイングはなあ……誰だろ……」

「もうさ、その選手に例えるのやめろや……高町が野球少女だと勘違いされるだろうが……」

「強いて言うならラミレスだな」

「ふっ……ハマの監督じゃねえか……」

武蔵が俺のことを指差す。そして監視カメラに手を振るが反応しない。

おお、特番特有のちよつとしたミス！ 一回セーフだったぜ。

不服そうな武蔵が椅子に椅子に座る。

「不毛な貶め合いはやめようよ、平和が一番！ LOVE&PEACE!!」

「でもさ、人が理不尽な暴力に苛まれるのって最高だぜ」

「小生も見たいんですけどお!?」

武蔵の手のひらの上でコロコロされていることを悟り深呼吸を繰り返す。もう武蔵の罠に引っかからないぞ……。

カタンという扉が開かれる音が響いて誰かが入ってくる。

……執事服を着た修一郎様？

「ミーは君達に執事としての心得を持ってい——ッ!？」

「コシヨコシヨ」

「あはははははは！ ギブギブ!!」

『修一郎アウトー』

思った通りに修一郎様は刺客だと思い込んだこちら側の存在だ。

高町が颯爽と現われて修一郎様の前に立つ。

「え、ええ!! 俺はお笑わせる立場でしょ!!」

「おう、はよ尻出してやれよ」

「ちよちよ! なのはの持つてるの棒じゃなくてバッドじゃん!」

「間違えちゃった……まあいいか!」

久々の高町の肉声で田村さんを感じながら修一郎様の醜態を眺める。武蔵はガード性能高いけど修一郎様はヨワヨワだから俺も積極的に攻撃するゾイ!

修一郎様は許してくださいのポーズをするが高町は容赦なく腹部にスイング!

「これは紛うことなく筒香!! 左でこのスイングはすげーや」

「ああ、日本の野球は明るいぜ——!」

「いったいよもお!!」

高町はスツキリという表情で部屋から出ていく。

修一郎様は見事なスイングでノックダウンしているがそんなの関係ねえ! 片隅に置かれていた机とパイプ椅子を二人で設置して三人目を確保する。被害は大きい方が楽しいからね!!

「お、修一郎くんようやく到着したな! 輝夫に武蔵、三人目の執事やから優しくしてやり」

「は〜い」

「え、ええ!? 俺やなんだけど!! 叩かれたくないんだけど……」

「男の子でしょ! 根性出せよ!!」

「メイド服着せられる奴に言われたくないよ!!」

修一郎様はどうか逃亡しようと思ふと扉を開けるがその瞬間に音が響く。

『修一郎! 逃亡罪でアウト』

竹刀を持った高町が現われて修一郎様に満面の笑みを見せる。

修一郎様はプルプルと震えながら机に両腕を置いて静かに処される。

「あがつこつこあぎぎぎげつつ?!?!」

「逃亡したら竹刀かあ……俺達逃げなくてよかったなあ……」

「バッドの方がよかったなあ……」

修一郎様は諦めたのか持つてきてあげた机に座って顔を隠す。一方俺達の方はオモチャが現われて喜びの絶頂に達していた。

武蔵は冷蔵庫からとある物を取り出して修一郎様の前にパツと出す。

「ちよつ!? そんな汚いの見せるなよ!」

「()見ろよ」

「え、え? ……ゴフツ!」

『修一郎アウト』

ザッフィーデ○ルドを見せられて吹き出した修一郎様を颯爽とシバいていく高町。

「もうやめてよ！　なんで仲間割れしてるのさ!？」

「…………え？　この空間に仲間とかいるの!？」

「仲間意識持てよ!!」

仲間という表現に驚いて仲間を探すがどうにも見つからない。ここにいるのは企画で笑うと尻を叩かれる奴らというだけで仲間意識なんて皆無に等しい。強いて言うなら俺と武蔵は修一郎様で遊ぼうという気がムンムンというところだけは一致している。

「うーん、ちよつちトイレ」

「お、俺も行くわ」

「……………いつてらっしやい」

修一郎様を置いてトイレに向かう。

「修一郎様という緩衝材が現われたから俺の被害がさがっていいわあ」

「いや、俺はおまえも攻撃するけどな」

「性格悪いなあオイ」

他愛もない会話をしながらトイレに入るが一つ問題が出てくる。

「スカートで小便ってどうするんだ?」

「個室行けよ」

「いやさ、小便程度で大便秘つかいたくねえじゃん」

「女装させられてるんだから許されるから」

武蔵は渋々個室に入り俺は小便器に発砲する。

「ふー……気持ちよかつたあ……」

「小便しただけだろうが……なに手を洗わないで出ていこうとしてんだよ。早く洗え」

武蔵はトイレの後に手を洗わないタイプらしく渋い顔をしながら手を洗った。俺はどっちした時でもお手でキレイキレイです！

談笑しながら待機室に戻ると聞きたくない天の声が何度も何度も木霊していた……。

『なのはってガード固いよなあ〜でも、俺は挫けないぜ!』

『すずかあくお茶して帰ろうぜえ!』

『お、アリサじゃん! おいおい、嫌な顔するなよく俺は世界で一番お前を愛してるのにさあ!!』

『ゴハッ!?!』

修一郎様が高橋名人並みの連射で俺の黒歴史ボタンを押している。どうしてだよ!? アレの電池は俺のポケットの中に封印していただろ!! ま、まさか!?

部屋の時計を確認すると動いていない。つまり、あのボタンを使用する為だけに電池

を抜き取ったとでも言うのか!?

「……西風? 俺が言いたいことわかるよな」

「……はい、私めは絶対に修一郎様を笑わせません」

「……笑え」

「……それは流石に」

「押す「はははは!」」

『輝夫アウトー』

高町が小走りで入ってきて俺の尻を引っぱたいて帰っていく……ように見えたが修一郎様からボタンを奪ってそのまま退室してくれた!? やったぜ。

「修一郎様……俺が悪かったよ、互いに尻を叩かれる仲間なんだから攻撃は控えよう……」

「ああ、不毛だからな。西風が理解してくれて嬉しいよ」

「こつち見て……勃起!」

「ん? ブツ!」

武蔵がザツファイーデールドを自分の股間に生やして勃起と叫んだ。流石にこれは笑うよ!?

二人が三人になって二人は結託して一人は被害者なのに被害者を攻撃する死神と化したこの空間、もうどうにでもなれという自暴自棄感漂う。でも、止まない雨はない！俺は絶対に生きる!!

重い雰囲気の流れる。どうにか反吐が出そうな空気を飲み込む為に水を飲む。

——扉が開く。

「ザ・テストアロツサです！」

「……………」

フェイトとアリシアが入ってきて双子芸人のような芸名を使ってコントを披露するのだろうか？ いや、あの双子芸人そこまで面白くないような？ でもなあ、武蔵が便乗して攻撃してきそうなんだよなあ…………。

「フェイト！ あのネタをするよ!!」

「わかった！」

フェイトが寝転がってアリシアがその上に乗る。そして定番の…………。

「ゆーたいりだつー」

「……………」

「えつとえつと…………ゆーたいりだつー！」

「いや、おもしろくないよ。ほんまに芸人なんか？」

「ぶっ!?!」

『輝夫・修一郎アウト』

武蔵!? おまえやめろよな!! 本心言っちゃダメだろ!!

高町とヴィータがやってきてシバいて帰っていく。やっぱり武蔵が一番の敵だったのかよお!?

「えっと、お姉ちゃん……あの芸なら笑ってくれるかも……」

「そ、そうね!」

二人は深呼吸をして芸を披露する。

「ボクは世界を救う勇者! 魔王!! 貴様を倒そうぞ!!」

「ハッハッハ! 我を倒したところでこの世界はどうにもならんよ」

「うおー!!」

「やめろ」

「どうしてだ」

「私は神だ」

「私もだ」

「お前だったのか」

「暇を持て余した神々の遊び」

「……………」

笑えねえよ……笑ってあげたいけど笑えねえ……。

「いや、確かに一昔の芸だから思い出し笑いするかもしれないけどさ、それ面白くないから。衣装が面白いだけだから」

「ぶっ?! 武蔵（枚方）！ 可愛そうだからやめて!!」

『輝夫・修一郎アウト』

高町とヴィータがいつものように尻を叩いて帰っていく。

もうそろそろ武蔵に猿づくわ付ける頃合いだぞゴラ……。

「……輝夫も面白くないと思ってる？」

「え……」

「……輝夫に笑ってもらいたくて来たんだよ」

「ええ……」

二人の期待の眼差しが痛い……。

「あははは！ 二人の芸は本当に最高だぜ!! あはははは!!」

『輝夫アウト』

高町の一撃が研ぎ澄まされてきたなあ……。

二人が帰った後に自分の弱さを思い知る。どうしてだろう？ 俺は踏み台やめたの

になんで突き放せなかったのかな……。

「古いネタ引つ張ってきたな」

「むさしきゆん？ 修一郎様を攻撃するのはいいけどさあ、俺にとぼっちりやめろや……」

「俺も攻撃されたくないよ……」

水を飲んでDVDを取り出してケースを眺めるが文字一つ書いていない。どうせさっきのビデオと同じようなタイキック物だろうなあ……。

DVDを見るかを考えていると扉が開く音がする。

「おうおまえら！ もうお昼やからな、昼食の準備してあるから少しゲームをしておかずを奪い合ってもらおうか!!」

「……いや、もう笑いたくないからお昼いらなです」

「じゃあ、おかずを選ぶくじ引きをしてもらおうよ!!」

「……いらなです」

『拒否は許されないので全員アウト』

俺達には自由選択という言葉は存在しない。体の隅々まで染み渡りました。

40：絶対に笑ってはいけない（中編）

八神が当たり前のようにおかずボックスと書かれた箱を机に置いて引けと言わんばかりの顔をしている。俺達の方は全員アウトの弊害で尻にダメージが入って集中できないんだよなあ……。

武蔵と修一郎様も絶対に食べ物じゃない何かが入っているだろうなあ、なんて表情でボックスを眺めている。あんまり悩んでいたらまた尻を叩かれる可能性があるからなあ……一番槍は自分で行くか……。

ボックスに入れて中身を確認する。ドッキリグッズの類は入っていないように紙が底の方にあるという感じだ。

「これでいいや」

『18番』

「いや、番号制かよ!?!」

「ぷっ……ああ!?!」

え、こんなツツコミで笑うのか二人!?

『武蔵・修一郎アウト』

二人はシバかれた後に即座に危険性が無いと思ってくじを引いた。さて、この番号で何が出てくるのやら……。

「輝夫が18番で武蔵が5番、修一郎くんが10番やね」

八神がそそくさと番号のおかず？ それを出前とか入れる鉄製の入れ物から取り出して手渡す。

『コミックL0』

『快樂天』

『ペンギンクラブ』

「「ぶぐっ!! エロ本じゃねえか!?!」」

『全員アウトー』

よくよく考えるところはじめての三人同時アウトなので叩く担当が追加されるのかどうなのか気になる。

——高町とヴァイターに混じって……誰？

「ミホちゃん！　なんでミホちゃんがいるの!?!」

「……え、誰よ西風」

「武蔵のセフレだと思う」

「この企画の企画者どんだけ顔広いんだよ……。」

武蔵のセフレまで加わって俺達のお尻を攻撃して出ていく。

武蔵は妙にソソルレイ。目で蛍光灯を眺めはじめた。

「じゃあ、おかずとお弁当を美味しく食べてな」

普通の幕の内弁当を置いて八神が帰っていく。おかずいらねえじゃん……。

とりあえず有名過ぎるエロ本三冊をゴミ箱に捨ててため息を一つ。

このままだと会話なく食事することになりそうなので無言でDVDをセットして再生してみる。

「——何やってんの!?!」

「俺、飯ってテレビ見ながらしか食えないのよね」

武蔵と修一郎様の強烈な拒絶反応にほくそ笑んで（アウトにならない程度）内容を確かめる。

映像が映し出されるがバニングスと犬が戯れる動画が垂れ流されるだけだ。どんな仕掛けをしているのかわからないが……あ、次は月村か……月村は猫だな……。

あれ？　なんかBGMが不穏な雰囲気……。

『猫派のドンはおメエか月村組の頭あ!』

『ナンジャボケ！　犬派風情がじゃああかしいのお!!』

「「唐突なヤクザ物!?!　ぶぐつ……ああ」」

『全員アウトー』

尻を叩かれた後に再度抗争をはじめたバニングスと月村の動画を眺める。この二人のぎこちない広島弁がすげー笑いを誘うのやめてもらえませんかね……。

『死ねおや！ 猫派ああ!!』

『ぐぐっ!!』

デアーンという音と共に月村が射殺される。いや、虫の息ではあるが何か言い残そうとしてるな……。

『……もし、ワシの願いが叶うなら！ 修一郎……タイキック……!』

「おれえ!？」

「ぶっ！ ふふっ」

修一郎様の渾身のツツコミで笑ってしまった……やはりツツコミ担当のキレは違うぜ……。

ヴィータと武蔵のセフレと同時にさつき腕を折りかけたタイ人くんが入ってくる。

俺達は早々にお仕置きを受けてタイキック炸裂を心待ちにする。

「ちよつと待ってよ！ 俺って仕掛け人だったんだよお!!」

「男なら、背負わないかんやろ！ タイキック!!」

「だって怖いもん!!」

『修一郎逃亡』

「わかったから！ 逃亡罪なしで!!」

修一郎様は菌を食いしばってタイ人くんにお尻を向けて強烈な一撃を受ける。そして地面で強力な殺虫剤を直撃させられたゴキブリのようにもがいている。これは撮れ高すぎや。

2

幕の内弁当を食べ終えて少しだけ思い当たる節がある。よくよく考えるに修一郎様の机も部屋の片隅に置かれていたとはいえ仕掛けが設置されている可能性は高い。そうなると見てみたくなるのが企画モノの引き出しというものだ。

「修一郎様……中身見ようぜ……」

「食えない物が入った闇鍋に箸を伸ばす理由がありません」

「でもよお、修一郎様の机に俺達に対する攻撃符があるかもじゃん」

修一郎様は少し考えて俺のことを覗き込んだ。いや、どうして俺に対する攻撃符があると仮定しているのかな？ 俺にだけの攻撃できるアイテムって結構出揃ってるからなあ……。

修一郎様は静かに上段の引き出しを開けて中身を確認する。

【週間少年マガジン】

「マガジンだ……俺ジャンプ派なのよね……」

「ぷっ……ああ!？」

またもや武蔵のクロスカウンターによつて陥落された俺と修一郎様はお尻イタイイタイなのだ……。

それ以外の引き出しには何も仕組まれておらずコンビニや書店に普通に売つてあるマガジンが机の上に置かれるだけだった。

「おうおまえら！ お昼ごはんを食べて腹ごなししたいところやろ!!」

「……嘘だよ、流石に鬼ごっこは無しだよね!!」

「おう！ 知つてたならよかつたわ」

「『のおー!! ん!』」

3

無駄にだだっ広い中庭、金持ちの家つて凄いやね！ 普通に中規模の公園レベルの庭があるんだからさ!! 鬼ごっこやりやすいね!?

「今から鬼ごっこしてもらうんやけどただの鬼ごっこやったら面白くないから謎解きゲームを取り入れてみたんや!」

「いや、ただの鬼ごっこでいいです……逃げ足には自信あるんで……」

「なんとなんと！ 鬼に捕まったら罰ゲーム!! 捕まつた後は開放されてまたまた鬼

「(っ)や!!」

「「お決まりじゃないですかやだー」」

特番鬼ごつこのルールなんて常識、そんなの今更説明されてもなあ……。

「謎解き頑張つてな、じゃあ——」

八神がスタートと言った瞬間にとんでもない殺意を感じた俺と武蔵は速攻でローリング回避、殺意に鈍感な修一郎様はどうしたという表情で背後に立っている鬼（高町のお兄さん）に肩をトントンンされている。確認した後に全力疾走で逃げたのだが、恐怖しながら絶命している何かのような声がコダマしたのだけは……何も言わないほうがいいか……。

「で、謎解きつて何なんだろうな」

「わからん。鍵でも探すんだろうさ」

自身の脚力で庭を駆け巡っているのだがどうにも三人から殺意の波動、つまりは鬼三人？ 三匹？ それらに追われていることだけは感じる。俺達の脚力についてこれるのって高町一家の父と息子、娘さんだけだよな？ 殺意高いなあ……。

壁を駆け追ってきてる鬼を見るに予想は的中していて高町武闘派が獲物を見つけた猟犬のように追いつがっている。

おーこえー……。

「輝夫……スカートつって走りにくいね……」

「しらねえーよ」

そのまま屋敷の中に入って宝箱的な物が無いか確認するがどうにも安直な場所に隠す良心は奴らには無いらしい。

到底人間の出せないスピードで迫ってくる高町武闘派を避ける為に空いている扉の縁に捕まって減速、そのままスピードを殺せない鬼を避けて窓から庭に戻ろうとするが右足が何かに掴まれた。そして武蔵は悲しそうな瞳で飛び降りていくのだ……。

「……死ぬなよ」

「……多分死ぬ」

鬼（高町お父さん）に捕まった俺は今日は腐るほどに見たしなやかな棒、それを振り抜こうとする鬼にお尻を向ける！

——表現し難い炸裂音と体が浮き上がる感覚、

「いつてえ!? ヴィータの30倍くらいいてえ!!」

悶絶していると鬼（高町お兄さん）が攻撃を仕掛けてきた！ なんで!? クールタイム無しなのかよー!!

タッチをローリングで回避して突き進んだ階段を転がり落ちてそのまま逃走する。

「……もうやだ……この親子」

そのまま庭に出ると段ボール箱が設置されていることに気づく。企画的に宝箱に入っているのが普通だろうがダンボールは気になる。後方を確認すると修一郎様が二度目の高町フルボッコに苛まれているのでダンボールの中身を確認してみる。

「……拾ってくれ」

「いらぬです」

ダンボールに入っていたのは悲しい瞳をしたザツファイだった。アルフだったら少々考えたがザツファイはいらん。ダンボールをそつ閉じして謎解き（条件不明）の探索を再開する。

3

「おう、おまえら謎解き準備したのに解かないってどういうことやー！」

ボロ雑巾のようになった俺達を蔑んだ目で眺めている八神をジト目で眺める。

戦闘民族に一時間も追いかけて回されて服はボロボロ、武蔵に至ってはスカートが破れ落ちてトランクスパッツをさらけ出している。修一郎様は地面に刺さっている。

「……なんとなくだけどき、おまえのポケットに鍵入ってたりしねえ？」

「え……？」

八神はスーツのポケットをモソモソとしている間に鍵と小さな箱が出てきた。中身は案の定【終了】と書かれた紙切れだった。

俺と武蔵は地面に埋まっている修一郎様を掘り起こして事務所に戻る。

「……植物になりたい」

「二分前までなつてたよ」

笑いの地獄はまだまだ続く。

未定：リインフォース

どうも、輝夫です。

今日はとても寒い一日で本当に日本の冬が大嫌いになります。

そんな今日はクリスマス、つまりはキリスト誕生祭、ジーザス誕生祭というわけです。意味は一緒ですね！ そんなクリスマスという基本どこかしらの仏教に入っている筈の日本人はなぜだかお祝いをするので、キリスト先生も困惑するでしょうね、現代日本を見たら。

「ご主人はん……負けるとわかっていても男には戦わないといけないときがあるんでっせ……」

「バルさあ？ クリスマスにパチ屋行くとか負け犬の血統書みたいなもんだぜ、それでも血統書貰いに行くならホレ」

うちの飼いロボのバルバロイがクリスマスパチ屋に行くかどうか、それを必死に悩んでいる。それもそうだ、こいつは機械という特性上でパチ屋に行っている以外の時間はだいたいネット掲示板を眺めている。流石にレスバトルなんかはしていないようだが、クリスマスにパチンコ屋に行くという行為がどれだけ悲惨で悲しいものか理解してい

る。

「……わい、人間やないもん！ 機械やもん!!」

「おう、敗北者として負けてこい」

「うわーん！ ご主人はんが生暖かい目でみてくるう!!」

クリスマスプレゼントという名の現金10万円を受け取ってパチンコ屋に走っていった。本当に訳のわからない存在だよ、本当にマジで。

「ふあー……あら、バルはパチ屋か」

「いま出たところだよ。武蔵はセフレとクリパか？ 死ね」

「そっだよ、おまえこそ殺されるなよ」

「いや、ちよつとばかり行かないといけない行事があるから襲撃はその後で」

俺の苦い顔を見たせいか武蔵は何も言わないで朝シャンしに行った。

クリスマス、この日はどうにもアノ日を思い出させる。

0

「急に呼び出してどうしたよ？ おまえさんが俺を呼び出すなんて珍しい……いや、はじめてだよな？」

銀色の髪をなびかせた美女が人気のない早朝、それも高台にある公園で空を仰いでいた。

なんとなくだが、呼び出された理由はわかる。だが、俺はそれを拒否して速攻で帰る腹積もりだ。この世界の間人達は俺や武蔵に大量の業を背負わせている。偶には他の奴に肩代わりくらいいいだろう。

「……その顔を見る限り、私の願いは聞いてくれないか」

「ああ、おまえさんの願いなんで叶えねえよ。他の奴頼れば？　俺は知り合いを手に掛けるほど落ちぶれてはいない」

「……ふつ、それが本来の形なのかもしれない」

ラインフォース、彼女はまた空を見上げた。

彼女の願いなんで唯一つ、俺という存在に自分という存在を始末してくれ。つまりは汚れてくれと願っているのだ。

確かに女兒に命を奪う行為をさせるのは間違っている。俺みたいな存在のせいで決意や覚悟がヒロイン達には備わっていない。転生者という存在が入り混じっているこの世界でその定を背負えるヒロインはいない。

「……輝夫——おまえなら背負える」

「——背負わない」

「おまえしかない」

「——絶対に嫌だ」

結界が張られて自分を殺さないとオマエを殺すという雰囲気を漂わせている。別にいい、この矮小な命を捧げること、後味の悪い殺しをしないで済むと言うのなら命を捧げる。

それで自分という存在が比較的到高潔であるのであれば。

たた立っているだけ、掠めていく攻撃で鮮血が滴る。

「……おまえは、おまえは！ どうして」

「俺は、俺だけのために生きているわけじゃない。誰かのために生きるという責任を負っている。リインフォース！ おまえの願いを聞き届けた先にあるのは——責任の放棄なんだよ……」

「……それでも！ 背負ってくれ」

「……やめてくれ、俺だっておまえのマスターと同じ年の少年。男と女の差くらいしかない。確かにおまえさんを始末しても罪悪感を感じるだけで済む程度には達観しているが——罪悪感を感じたくないという確固たる意思はある」

リインフォース、彼女は泣いている。

すべてを背負った彼女は終わりを告げる使者を探している。

でも、俺が使者になる必要はない。

「リインフォース!!? なにしとるんや!!」

車椅子を必死に動かして俺達を止めようとする少女、流石に自分の主が現れたんだ……俺を利用することなんて――

即座に八神を抱きしめてリインフォースの攻撃を回避する、バリアジャケットも身につけていない状態であれだけの攻撃を……本気つてわけか……！

「……車椅子がグチャグチャじゃねえか？ 飼い主に噛み付くなよ」

「リインフォース！ ……なんで」

「はやて……彼しか、彼だけしか！ 私を、私の罪を消してくれる人はいないのです」

「勝って気ままに俺を利用するんじゃないやねえ！ 死にたいなら他人の手を借りるんじゃないやねえ!! 俺を、俺達を巻き込むな!!」

攻撃はやまない、俺は八神を抱きしめてすべての攻撃を受ける。

震えている、まるで雨に打たれた小動物のように……。

それもそうだ、理解しているからだ。

親友は跡を濁さないように消えようとしてる。それを止める権利は自分にはない、だが、それを止めたいという自分勝手さはある。

「ガハツ……ああ、いてえ……」

「輝夫!?! 血、血が!」

「いいんだよ、俺が悪いんだ。後味が悪くないようにアイツの願いを突っぱねて、こう

やって不可抗力を狙ってるアイツにも無視決め込んでる」

抱きしめた体が離れた。

——俺は引き金を引いた。

炸裂音が響いた、リインフォースは躊躇いなく八神に攻撃しようとしていた。コンマ数秒遅れただけで八神が死ぬ程度の攻撃だ。

やるしか方法はなかった。

「……………これでいい」

「……………後味悪いことさせやがって!! おまえ!! 俺は……………俺は!! なんで友達を撃たせるんだよ……………」

咄嗟の射撃、何発も魔法を受けて気力だけで引き金を引いた。着弾点は肺、咳き込みながら彼女は語る。

「はやて……………絶対に輝夫を恨まないでください……………ゴホツゴホツ……………」

「リインフォース! ……ああ」

「わたしは……………悪い存在ですから……………」

「……………本当に、本当に、本当に」

「輝夫、お願い……………リインフォースを……………」

楽にしてくれ、そんな言葉——聞きたくなかったよ!

——心臓を撃ち抜いた。

「どうしてだろうな、俺は——もう汚れたくないのにさ……」

八神はリインフォースの手を握りしめて泣いている。

決意、リインフォースの決意は堅かった。それを理解できる年齢だ、八神も理解している。終わらせる存在を俺にした理由も。

——俺だったら、背負える。

そんな身勝手な理由だ。

「……なあ、八神。俺を恨んでくれ。おまえの大切な友達を殺した人殺しだ。恨まれた方が気分が楽なんだよ」

「……リインフォースが輝夫を選んだ理由がわかるんよ。だからそれはできひん」

「じゃあ、おまえも俺に背負えつての!? 嫌なんだよ、嫌なんだ……殺しを正当化するの……」

消えていく、消えていくリインフォースの体を二人で眺めた。

「……運命って残酷やん。受け入れるしか、受け入れることができるなら」

——受け入れるしかない。

こいつも身勝手だよ、恨まないという選択肢を取りやがって……。

「俺は抵抗したかったよ、運命に」

リインフォースの願いを半ば無理やりに聞かされた数年前のこの日、俺は花束を持って彼女を撃ち抜いた場所に花を捧げる。

運命は残酷だ。そして、その運命を残酷にしたのは俺だ。

本当は他の奴に丸投げして、俺は知らないフリをしたかった。

でも、リインフォースという業の存在を、その業の清算を出来る存在が俺だけしかいなかった。

誰も俺を恨まない。

それが俺を苛める。

俺は、恨まれた方がしつくりと来る。

「嫌われた方が静かに消えていける……おまえみたいにさ……」

おまえが取った手段で俺は多くを背負わされた。

それは人生一回を棒に振るくらいに重たい罪、それでもリインフォースは俺を選んだ。

誇るべきか？ いや、恨むべきだろう。

俺はリインフォースという存在を恨んでいる。

「おまえの罪、業、涙……全部重いんだよ……！」

でも、これは逆恨みなのさ、俺が気ままに恨んでる。

本当に、自分勝手だよな……どつちも……。

「あーあ、どうしてだろうね……おまえさんは俺に行動しないという選択肢をくれなかつたのやら……」

手を握られた。

暖かくて、少しだけ震えている手だ。

「輝夫……そんな顔してたらリインフォースが怒るよ？」

「へいへい」

この日の午前八時とここに来るのは毎年恒例なのさ。